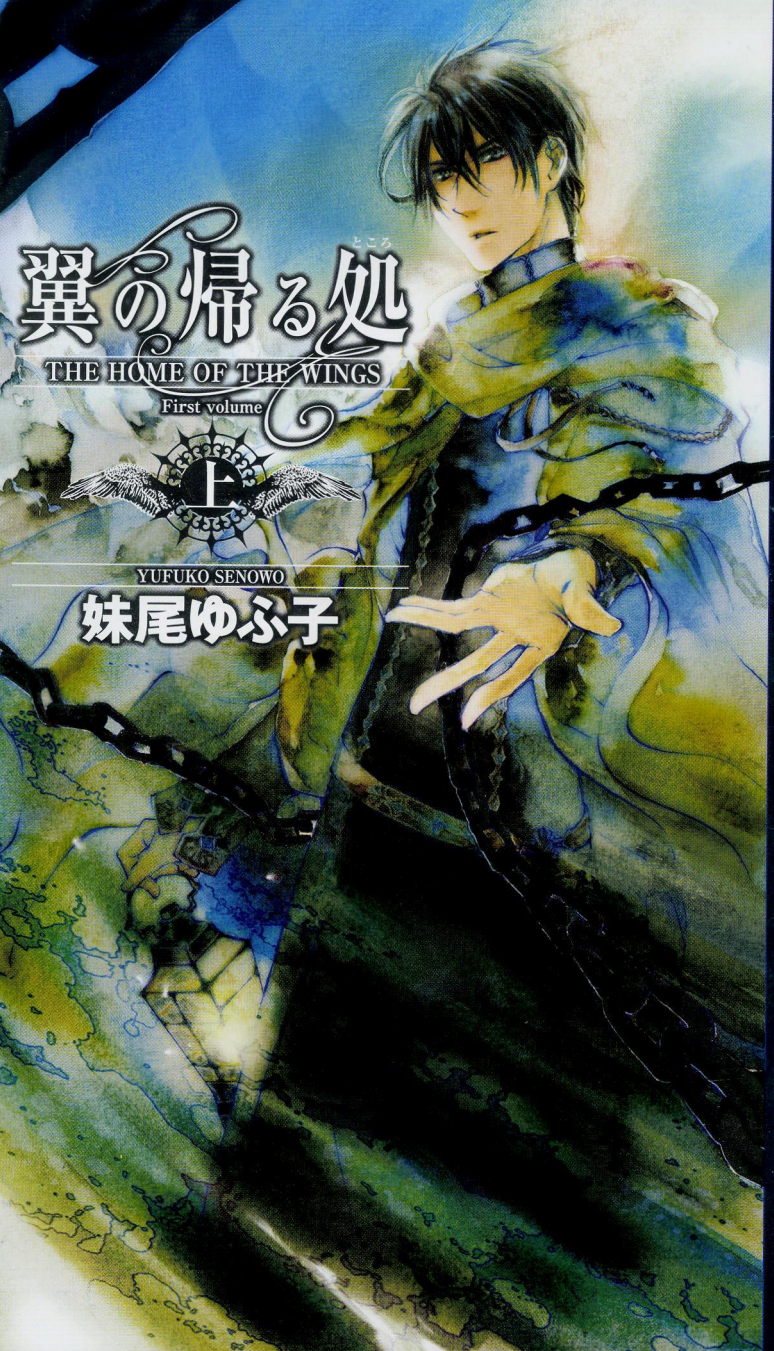

翼の帰る処
THE HOME OF THE WINGS
First volume
上
YUFUKO SENOWO
妹尾ゆふ子

THE HOME OF THE WINGS
First volume

翼の帰る処［ところ］

上



妹尾ゆふ子
YUFUKO SENOWO

Illustration
ことき

GENTOSHA COMICS



翼の帰る処［ところ］——上

妹尾ゆふ子

THE HOME OF WINGS

First volume



YUFUKO SENOWO

Illustration

ことき——KOTOKI

GENTOSHA COMICS

THE HOME OF THE WINGS
First volume



翼の帰る処 ——— 11

第 一 章 ——— 21

第 二 章 ——— 117

第 三 章 ——— 203

あ と が き ——— 274

人物紹介



ヤエト

「過去視」の力を持つ帝国の尚書官。病弱な身。



皇女

皇帝の娘であり、北嶺群の太守として着任する。



セルク

北嶺群の民。



ルーギン

皇女の騎士団長。



グランダク

北嶺群の民。



皇妹

皇帝の妹。



イスヤーム

北嶺群の民。



ウィーシャ

帝国の伝達官。



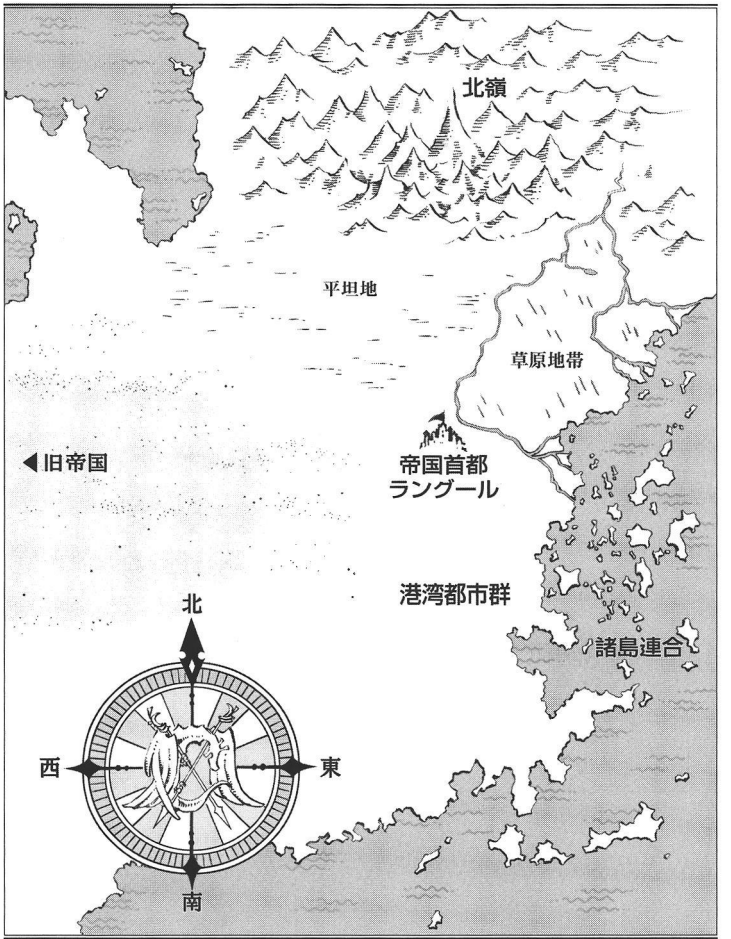
ジェイサルド

皇妹の騎士団長。



ナオ

皇女の女官。



THE HOME OF THE WINGS



翼の帰る処

†

手を引かれ、彼は階段を上っていた。

塔が建てられたのは、この街が栄えていた時代のことだという。今はうち捨てられた廃墟のひとつに過ぎない。

天井はとうに抜け落ちているのに、空気は淀み、黴臭い。窓がないのだ。

父が掲げる灯火が揺れるたび、行く手を鎖していた闇が後ずさる。ふり返れば、長く伸びた影の先は黒く塗りつぶされ、彼のくるぶしを摑んで夜の底に引きずりこもうと待ちかまえているかに思われた。

けれど、すくんでいる暇はない。

父に引きずられるまま、子どもの足には高過ぎる段を上っていく。

終わりがないかに思われた階段もついには尽きて、その行き止まりに扉が見えた。

金具のあちこちに錆が浮き、腐食が進んでいる。

彼の頭よりはるかに高い位置に、朽ちかけた枠に縁どられた円い覗き窓があった。用心深くはめられていた鉄の格子は欠け落ちて、根元を残すばかりである。

ひとつ息をついてから、父が告げた。

「ここのようだ」

疲れた声が、塔をつらぬく螺旋階段を渡っていく。

ここのようだ、ようだ、ようだ……。

高く伸びた壁の上に、夜がのしかかる。黒く、重く。

父が扉の引き輪に手をかけた瞬間、やめて、と彼は叫んだ。

そのつもりだった。

だが、声は喉もとで凍りつき、扉は開いた——何の抵抗もなく。

蝶番が軋む音が、水のしたたる音に変わった。湿り気を帯びた空気が、どっと押し寄せる。

暗い。

明るさを求め、彼は必死に目を凝らす。

鏡があった。映っているのは、おぼろな人影だ。うっすらと、白い輪郭が見えてくる。長く垂らした髪、その向こうにかすかに覗く鼻梁と頬骨。

そこへ、光が差した。弱々しい、父が手にしていた灯火よりさらに貧弱な。

光源は、小さな手燭だった。掲げた手が揺れるたび、室内に百も千もの影が踊る。かさなる影は闇を深め、淡い光をさらにたよりなく見せた。

そのわずかな光をとらえて、黄金が鈍くかがやいている。額を飾る、重たげな金の環。手燭の柄にからめた指にも、幅広の指輪。腕もまた然り。肩から足先までを覆う豪奢な衣服も、金糸のきらめきをはらんでいる。

まるで黄金で身を鎧っているようだ。

「暗殺をたくらんだ者の名を――」

水音が、男の言葉を途切れさせる。雨漏りでもしているのだろうか。だが、水滴の来しかたも行く末も、どちらも闇に溶けて見えはしない。

その音の切れ目を埋めるように、かすれた声が答えた。

「ネストル」

男の眉が上がった。額にかかる巻き毛は、装身具に劣らぬ黄金のかがやき。灯火の炎を映して、眼の色まで金に染まって見える。

「誰だ、それは」

「アリスト、エキュレ、トル、ラベスト――すべて、暗殺者の名です。もっと必要ですか」

「百年も二百年も前に死んだ者の名などに、興味はない」

吐き捨てると、黄金の男は落ち着きなく室内を歩き回った。

衣服の裾が床を掃き、空気をかき乱す。香木を焚

きしめたような、強い匂いが鼻をついた。
「それは残念です」
「一昨日だ。刺客の名などいらん。暗殺の首謀者を知りたい。俺を殺したがっているのが誰かを」
ため息のように、鏡の中の影は答える。
「陛下のご不幸を願う者の名ならば、いくらでも」
「塵芥に興味はない。計画し、決意し、実行に移した者がいるはずだ。刺客ではない、暗殺をたくらんだ者の名を明かせ」
水が鳴る。視界の隅に、揺れる水面が見えた。硝子製の器具の中を、ゆっくりと水がしたたり落ちる。雫は波紋を残して溶けていく。
黄金の男は動き回る。彼はなにも見ていない。聞いてもいない。
「皇帝の命を狙う者がどうなるか、見せしめにせねばならん」
「陛下がお手を汚されずとも、いずれ、己が罪につぶされて死ぬでしょう」
はっ、と皇帝は笑った。その声は、鐘の音のように響いた。
「どうして予言めいたことなど。それとも――未来も視えるのか？」
「アリストは剣腕より情報操作に長けた男でした。彼は自身の虚像をつくり上げ、そのために殺されました。エキュレは報酬を受け取る前に雇い主を疑い、それを襲おうとして返り討ちにあいました。ラベストは、王を討って玉座を簒奪しました。依頼したのは、討たれた王の臣下たちです。彼が玉座をあたためたのは、はじめの命令を発しようと口を開いたそのときまで。すぐに冷たい骸となって、うち捨てられました。城壁から吊られた彼の目玉を、大烏がくり抜いた……」
ゆっくりと、白い人影は向きを変えた。
俯いているせいで顔は暗いままだが、口の端がかすかに上がっているのだけは見えた。
笑っている。

「ずいぶん楽しそうだな。俺に逆らうのが、さまで面白いか」
「逆らう？」
まっすぐに伸びた白い髪が、揺れる。華奢な肩先を撫で、胸元へと落ちていく。
重たい音がした。
白銀の髪を割ってあらわれたのは、痩せた腕。その手首には、太い枷がはめられている。床へ垂れ下がる鎖の裾は闇に溶け、行方は見えない。
「陛下のご命令で、わたしはここに繋がれました。この部屋を出ることもかないません。鍵をお持ちなのは、陛下おひとり。どうして逆らうことができましょう？　一族を人質にとられているのに」
鎖を鳴らして、手が動く。顔にかかる髪を、かき上げた。
「俺を見るな」
「お戯れを。わたしの眼がお嫌いだとおっしゃって、潰してしまわれたではないですか。わたしに視えるのは、今の陛下のお姿ではありません。一年前、あるいは十年前、二十年前の陛下のお姿です。お若く、お強くていらした陛下。剣をとってお父君を倒された日、弟君の暗殺を命じて刺客をはなたれたあの夜、その刺客を口封じに始末してしまわれた霧の谷間……おお、皇后陛下のお美しいこと。これは何年前のお姿でしょう。その眼差しが追っていたのは誰でしょう。陛下はお疑いでした、いつも――」
「黙れ」
唸るような叫びより早く、空気が動いていた。白い人影は倒れた。頬に、うっすらと血が滲んでいる。指輪の宝石で切れたのか。
色のないくちびるが動く。
「次はこの舌を切っておしまいになればよい。わたしの声が、陛下のお耳を穢すことがないように」
「それでは、おまえの力が無駄になる」
「過去を視る力など、無駄なものですよ」
半身を起こし、白い人影は告げる。やわらかに、

ひそやかに。世界の秘密を語るかのように。
「そんなはずはない」
「わたしの国は、なぜ滅びたのですか。なぜ、わたしは昼と夜の境界も忘れ、自身の名すら失いながら、命をつないでいるのです？　今ここでこうしてお聞きしている陛下のお声が今のものか、昔のものかもわからない――」
鎖が鳴った。白い手が、打たれた頬をなぞる。
「――この痛みが教えてくれなければ、自分がここにいることさえ忘れてしまう。百年も二百年も昔に滅びた国を想う。王たちの末期の悲鳴を聞く。かれらも皆、若かりし日は強く、強くかがやいていたものを――疑心が心を苛み、裏切りが魂を押しつぶしてしまうのを、ただ眺めることしかできません」
「力は力だ。おまえたちは、その使いかたを誤ったのだろう。今は、その力は俺のものだ」
水がしたたる音が、かすかに響いた。
誰も動いていないのに、あの匂いが強くただよう。
頭の芯がしびれるような芳香。
ふたたび、皇帝が口を開く。
「役に立たないと思わせたいのだろうな。おまえは死にたいのだ。俺の役に立つよりは、死んですべてを終わりにしたい。そうだろう？」
「誤解です。わたしは生きたい……」
ささやく声には、切羽詰まった響きがあった。
「舌を切ればどうか、だと？」
皇帝は相手の顎を摑み、顔を仰向けさせた。両目を覆うように巻いた白い布の上にくちびるを寄せ、ささやく。
「そんな挑発に乗るほど愚かに見えたか。おまえには役立ってもらう……おまえは俺に嘘はつかない」
「御意」
「命じるままに過去を視る」
「御意」
「でなければ、おまえの国の民を滅殺する。誓いは有効か？」

呼吸ひとつの間を置いて、声は答えた。
「……御意」
白い影は床に崩れた。見下ろして口を開いた皇帝の声音は、不吉を感じさせるほどやさしい。
「生まれたことを、呪うのだな。神の恩寵を与えられた、最後のひとりであったことを」
「わたしは必死で生きねばならぬのです。それが、国を滅ぼしてまで生き延びた者の義務。愚か者の末路を、時の流れに刻みつけておくために」
「愚かであることは、ときに幸福なことだ」
「陛下と陛下のご一族は、我が一族を守り育ててくださるお約束です。わたしの忠誠と、この力とを捧げるのと引き換えに――」
「ならば、誓いを守れ」
皇帝は乱暴に言葉を遮った。
血走った目の下には隈が浮き出て、この世の栄華をきわめた男の疲労を物語っている。語勢と眼差しだけが、不自然に強い。
「答えろ。俺の暗殺をたくらんだ者は誰だ」
「お手を」
鎖が鳴った。
ゆるりと上がる白い手、床へと尾を引く黒い鎖。歌うような、ささやくような言葉の流れ。
「わたしの力は陛下のお心のまま。視える限りのものを、ご覧にいれましょう。刺客が訪れたのはいつ？　今日の昼、少し前……視えます……陛下のお姿です。王宮の中庭でしょうか……暗殺者が、し損じたところ。では、ここから巻き戻しましょう」
途切れなく、声は語りつづける。
暗殺者は王宮へ侵入する――侵入する前だ――その朝、最後の食事をとった――目覚めた――眠りに就いた――紙切れに王宮への進入路と警備が手薄になる時間帯が書かれている――紙切れを届けに来たのは薄汚れた子ども――一日が過ぎる――さらに前日、そのまた前日。
皇帝が喘いだ。

ゆっくりと、白い人影は顔を上げる。のけぞらせた顎から喉への線が、たよりなくふるえている。指輪に飾られた指と、華奢な白い指がからまっている。まるで、逃げようとするのを引き止めているように。あるいは、命綱にすがる人のように。どちらがどちらを支えているのか。

皇帝がふるえはじめた。白い人影の向こう、鏡を覗きこんでいる。映るのは、室内に満ちる闇ばかり。揺らめくのは皇帝自身の淡い影にほかならない。

ああ、と皇帝が息を吐いた。それは声にも言葉にもならず、夜にとけていく。

「人の心とは不思議なもの……損得を超越し、いかなる欲得ずくの陰謀をも転覆させる。……ネストルは、女に狂ってその夫を暗殺した。自分を引き立ててくれた上司であり、恩人でもあったものを」

「黙れ！」

ひと声叫んで、皇帝は白い手を引きはがした。

水音が、荒い息づかいを窘めるように響いた。静かに、そして一定の間隔で。

「お望みのものが、視えたはずです。具体的な計画を立て、刺客に払う金を用意した者が。それが誰かを、わたしは知りません。誰に告げることもできません。ご不満であれば、陛下がお心の裡にしまっておかれればよいだけのこと」

鎖が鳴った。白い人影は、ゆっくりと鏡に身を寄せた。そのまま、闇の底へすべり落ちていく。

「嘘だ」

「わたしの力に嘘はありません。真実を知る力は神の力、神は虚妄を許さぬもの」

皇帝は口を開き、なにか答えかけた——だが、その姿は薄れ、闇に紛れて消え失せてしまった。

白い人影だけが、まだおぼろな輪郭を闇に刻んでいる。かすかにもたげた顔は、彼の方を向いていた。

「真実に支払う代償は、あまりに高い。おわかりでしょう、人には嘘が必要なのです、神ほどには強くないゆえに」

ささやくような声は水音に紛れ、そして消えた。
気がつくと、父が彼の名を呼んでいた。
「どうした、なにか見たのか」
答えようとして、彼は咳込んだ。咳がとまらず、息ができなくなった。
その夜、彼は熱をだした。生死の境をさまよい、枕から頭を上げることもできない日が十日以上もつづいた。
父の問いに答える機会は、ついぞ訪れることがなかった。

第



章

1

暇だ、とヤエトは思っていた。

さっきから、暇だ、寒い、くだらない、の三つの言葉が頭のなかをぐるぐるとまわっている。

ヤエトがいるのは石づくりの広間だ。正規の官服の下に、毛織りの下履きをこっそり重ねているのだが、その程度では気休めにしかならない。

同僚たちの誰ひとりとして、くちびるを紫色にしてふるえていないのは、なんの冗談だろうか。

北嶺（ほくれい）の民は、どこかおかしい。

いや、どこかなどというぬるい表現では駄目だ。すべてが、おかしい。

「なんだと！」

叫び声で、円窓にはめられた分厚い硝子（ガラス）がびりびりとふるえた。

まず、この大声がおかしい。

部屋が広いといっても、腹の底から声を出して叫ぶ必要はない。なのに怒鳴る。わめく。絶叫する。

「今、なんといった！」

くり返しを求める回数も多過ぎる。ただでさえ話が進まないというのに。

聞こえなかったから訊き直しているならわかるが、そのはずはない。相手も大声なのだから。

それとも皆が皆、耳でも悪いのか。

「何度でもいってやる！」

いや、やめろ、とヤエトは心の中でたのんだ。意味がない。それに、うるさい。

「減らず口め！」

「誰が減らず口だ！」

「おまえのほかに誰がいる」

「人の悪口をいうしか、能がないようだな」

「なにを！」

「聞こえなかったか？」

それはない、とヤエトは思う。あり得ない。

「そっちこそ聞こえていないようだな。おまえの馬鹿な考えを聞くのは飽き飽きだと、いったはずだ」

そんな発言があっただろうか？

議事録を見直しても確認できないから困る。個人的な罵詈雑言までは、書きとめていないからだ。すべてを書くべきだろうか、と一瞬でも悩んでしまった自分が嫌になる。

そんなものは、尚書官の仕事ではない。

帝国の祿を食む身として、そのぶんの仕事はする。ただし、それ以上のことはしない。望まれていないし、馬鹿らしい——というのがヤエトの持論だ。

働き過ぎは嫌われる。三十路もなかばを越して、その程度は理解できるようになった。いささか遅きに失したが、と議事録を眺めつつ思う。

辺境への更迭人事を食らったときは、気楽で結構と思ったものだが、暇はともかく寒いのとくだらないのは困る。我慢の限界を試されているようだ。

「馬鹿とはなんだ、馬鹿とは」

「では愚か者といおうか？」

さっきからここまで、本来の議題に一切ふれていないのもすごい。なんという才能だ。全員、尚書官など辞めてしまうがいい。絶対に、向いていない。

「愚か者とは自分のことか？」

「誰が愚か者だ！」

「おまえのほかに誰がいる。愚かな思い上がりを捨て、自分を知るがいい！」

貧弱な語彙にたよった口喧嘩が、こんなにつまらないものだとは。せめて新鮮なおどろきでもあれば、我慢のしようもありそうなのだが。

「思い上がってなどいない」

「では、なぜ競弓にこだわる」

やっと本題に戻った。

本日の議題は《夏入りの祭り》における村対抗の競技についてだ。いつ終わるとも知れず怒鳴りあいはつづくが、決まったことなどなにもない。

それも今日だけの話ではない。昨日も、一昨日も——もう五日以上もこの議題を引っ張って、なにひとつ決まらないのだから恐れ入る。

自分が仕切れば一瞬で終わる予感はするが、十日と少し前に赴任したばかりで、神を祀るための名すら知らない他所者が、口出しできる案件ではない。

「そちらこそ、なぜ競弓を嫌がるんだ」

「競弓が問題なのではない。わからんのか。毎年毎年、おまえの村にばかり優勝の栄誉が与えられることを、こころよく思わない者もいることを知れ」

「でもイスヤーム、それはしかたないだろう、セルクがいちばん短弓がうまいんだ。神様は、弓の勇者をお喜びになる。弓が夏を運んでくるんだから」

口をはさんだ男を、イスヤームは睨みつけた。

「おまえがセルクの優勝に賭けて、毎年儲けていることは知っているぞ、グランダク」

「嘘をつくな。儲けなんて爪の先ほどしか——」

「……賭けるなと、あれほどいったのに！」

セルクが頭をかきむしった。

少し考えてから、ヤエトは議事録に『各村の平等を望む声あり』としるした。ついでに、『神事にまつわる賭けごとの是非』と小さく書き添えた。

議場はいつも、二派に分かれる。

その一方を代表するのがイスヤームだ。四十がらみの中背の男で、声が大きい。これが『反帝国派』で、帝国流を嫌ってはばからない。発言自体はかわいいものだ。文句をつけるばかりで実害はない。

もうひとつは、顔を赤くしたり青くしたりしているセルクを代表とする『親帝国派』である。といっても、帝国への憧れをまっすぐに言葉や態度に示すのはセルクひとり、残りは彼で遊んでいるのではないかと思われる仲間たちだ。

セルクは喜怒哀楽が激しい。しかも、馬鹿がつくほど正直であり、真面目でもある。今も、自分の競弓の成績が賭けの対象になっていたと知っただけで、言葉を失うほどの衝撃を受けているようだ。

おかげで議場が少しだけ静かになった。
この真っ正直さゆえか、皆に慕われ、人望もあるようだ。遊ばれてもいるのは、たしかだが。
「……わかった。今年はやめよう」
グランダクがあわてた。グランダクはセルクの友人で、つまり、遊び上手だ。
「セルク、短気はいけないぞ。今年の賭けはもう始まっているんだ、払い戻しなんて面倒なことになってみろ、皆が文句をいう」
「胴元はおまえか」
地の底から響くような声に、グランダクが半歩、下がった。
「いや、そうじゃない」
グランダクの肩を叩いて、仲間が声をかけた。
「気にするなよセルク。どうせ毎年勝つんだし、おまえに賭けても大本命過ぎて儲からないぞ」
「そういう問題じゃない！」
「ようやく自分の愚かさに気づいたか、セルク」
「黙れ！」
「都合が悪くなると黙らせるのか」
「うるさいよイスヤーム。あんたが黙らされる？　誰に？　どうやって？」
「なあグランダク、俺は『セルクが勝つが、イスヤームが祭りを台無しにする』に賭けたんだけど、この場合、俺の勝ち？」
「いや、まだセルク勝ってないし」
セルクが唸るように宣言した。
「俺はやらんぞ、今年は！　競技には出ない！」
「そりゃひどい」
「計算外だ」
「祭りを口実にした金儲けも、今年限りだな」
「払い戻しで大騒ぎになるぞ」
これにはヤエトもつぶやかざるを得なかった。
――もう、大騒ぎだろ。
ついに、彼は立ち上がった。
これが自分の仕事かどうかには疑問が残るが、放

置していたらどうなるかは、この五日間で実証済みだ。限られた人生を、かくもくだらない怒鳴りあいの傍聴で浪費するのもむなしい。

「祭りにあわせての競技を開催すること自体は、既定の事実として問題ないでしょう」

声をはりあげる必要はない。嫌でも目立つのだ。

薄いのから濃いのまで色さまざまな金髪に、どこぞのおめでたい詩人が『奇跡のような』と表現したほど澄んだ青い眸(ひとみ)が特徴的な北嶺の民のあいだで、黒髪に黒い眼のヤエトは異民族である以前にまず異人種であり、異物である。身動きひとつ、咳払いだけでも注目を集める。

お粗末な議事録を確認し、彼は言葉をつづけた。

「しかし、例年通りでは勝ち負けのつりあいが悪いため、村同士の関係が悪化するおそれがあるとし、変更の提案がありました。それが是正(ぜせい)されるのであれば、競技種目の変更もやむなしでしょうが、実際、そのような効果があるのかは不明です。さらに、代案として有効な競技の提示もありません」

案の定、ひととおり語り終えるころには、議場は静まり返っていた。

目線を上げ、イスヤーム殿、と指名する。

「ご意見を」

「なにか文句でもあるのか」

「異義を唱えられたのは貴殿ゆえ、これならばという競技の提案をお願いしたい」

「そんなものは、ない」

これには、周囲がざわついた。

「イスヤーム、祭りに競技なしは誰も許さん」

「そうだそうだ、賭けができなくなる」

「おまえ、賭けから離れろよ」

ようやく復活したセルクがヤエトの方に向き直り、持ち前の大声で尋ねた。

「帝国では、祭りのときにはどんな競技を？」

「北嶺も帝国領です。ここでおこなわれる祭りも、帝国の祭りのひとつに違いはありません」

立場上、そこは指摘しておかねばならなかった。いかにかれらが忘れていようと、そもそも理解もしていなかろうと、ここは帝国の一部だ。

征服と融合をくり返して成立した帝国は、多様な民族の集合体で、被征服民族独自の文化には寛容だ。弾圧よりも、融合。それが帝国の方針である。北嶺の祭りが自由に許されているのもそのためだが、そんなことすら、かれらは意識していない。

「そういう意味じゃない。帝国伝来の祭りはどんなことをするのか、と」

やはり、わかっていない。かすかな苛立ちを押し殺し、ヤエトは答えた。

「さまざまな祭りがある、としかお答えできません。そのあたりは、礼部の管轄になります」

「なんでもいいが、帝国の風を取り入れる競技はどうかな。変更するなら、思いきったものがいい」

発言したのは、またセルクだ。

ヤエトに直接話しかけようという者は彼ひとりだが、セルクの発言に対しては皆が怒鳴りはじめる。

「なんで帝国の真似をしなきゃいけないんだ！」

「帝国かぶれもたいがいにしろ、セルク」

「なんでもいいけど勝ち負けのはっきりするものがいいな。ああ、短い勝負で、何度も――」

「だからおまえは賭けから離れろ！」

「憂慮すべきは」

ヤエトが声をあげると、また皆がぴたりと口を閉じた。

見渡すと、視線を逸らす者が多いのに気づかされる。まるで目を合わせてはいけない化け物のような扱いだが、かれらにとって帝国人は、それくらい異質な存在だということだろう。

――おまえら、十年以上も前に帝国に征服されているんだぞ。

暢気にもほどがある。

「祭りまで、あまり日がないことです。これ以上、決定を先延ばしにはできません。私見を申し述べれ

ば、今年は例年通りの競弓で行くべきでしょう。神事には伝統と意義があり、おろそかにはできぬものと心得ます。異論があれば、お聞きしますが？」

沈黙だけが、ヤエトの問いかけに応えた。

心の中で十数えてから、議長席に座っている老人に話を向ける。

「では、競技は競弓でよろしいでしょうか」

老人は、こっくりとうなずいた。居眠りをして舟を漕いでいるようにも見えるが、気にしない。時間をかけ過ぎると、別の怒鳴りあいが始まってしまいかねないからだ。

「それでは、朝議はこれで終わりとします」

宣言すると、ヤエトは一礼して議場を退出した。

そんな権限があるわけではないが、誰も文句はつけないだろうと踏んでのことだ。案の定、反論どころか咳払いひとつない。静かなものだ。

歩を進めながら、ヤエトの気もちは晴れない。

目先のごたごたをかたづけるために、却って面倒ごとを背負いこんだ予感がする。

――目立たず、静かに余生を送る予定なのに。

今はまだ見慣れない人相風体で人の耳目を集めるばかりだが、言動を慎んでさえいれば、無害な風景くらいに思われる可能性はあっただろうに。

口喧嘩をねじ伏せるなど、論外だ。

――馬鹿か、自分は。

口をひき結び、もう余分なことは喋らないぞとあらためて心に誓う。

せっかく、都に呼び戻される機会もないと噂の北嶺に左遷されたのだ。穏当かつだらけた暮らしを死ぬまで楽しませてもらわねば、損ではないか。

城内に人の気配は薄い。夏も近いはずなのに、通廊の空気は冷え冷えとしている。艶のない黒い石で組まれた山城があたたまるまでには、まだ時間がかかるようだ。

風は冷たく、朝晩の冷えこみは厳しい。これで夏が来たというなら、厳冬期はどうなるのか。半年後

には死んでいるかもしれない。
　ヤエトは身体が弱い。少し無理をすると発熱して倒れ、生死の境をさまよったことも数えきれない。
　北嶺に赴任したときも、引き継ぎが終わったとたんに倒れてしまい、二日も寝込んだ。おかげで、前任者の顔も名前もろくに覚えていない。
　長くは生きられぬだろうといわれながら、すでに三十六の歳を数えてしまった。目覚めるたび、なにか悪いことでもしているような気がする。
　――あと何年あるかわからないが、楽な余生を送りたいものだ。
　あまり明るくない通廊を抜けると、次の階層へつながる階段に出る。元からある斜面を利用して建てられた山城ならではの、高低差の大きいつくりだ。息を切らしながら階段を上る途中で、ヤエトは足を止めた。
　そこからの景色は独特のおもしろさがあった。本来は黒いはずの城の屋根は、日差しをはじいて銀色に見える。その向こうには澄んだ水色の空。そして霊峰《天の槍》が、その神々しい姿を浮かべている。
　我知らずヤエトは足を止め、古い詩の一節を口ずさんでいた。

我は何する者ぞ　何する者ぞ
我は風　高山より吹きおろし
我は詞　人の子の聲に宿りて
我は歌　天地の間を満たさん
我は　現身より解き放たれり

　残酷なほど美しい山だ、とヤエトは思う。まるで神の力そのもののような――なるほど、《天の槍》とはよく名づけたものだ。
　あの高い山は、神授の武具が変じたものと伝えられている。太古の昔、天地を引き裂き、世界を揺るがして暴れた邪竜がいた。その心臓をつらぬいて縫いとめた槍が、そのまま険しい嶺（みね）になったのだと。

北嶺のみで語られている神話ではない。沙漠の東側では、広く信じられている。

沙漠の西とはずいぶん違う、とヤエトは思う。

西の神話には、邪竜などというものは存在しない。竜は神聖な霊獣であり、皇家の象徴だ。皇族の所在をあらわす旗印は黄金の竜だし、皇家の血筋につらなる者を竜種、皇帝の尊顔を竜顔、声を竜声、馬車を竜車と呼び換えているくらいだ。

これだけ竜という生き物の解釈が違うのも、おもしろい。それをあらためさせようともしない帝国の寛大さに、あらためて感心した。

だが、北嶺の民はどうだろうか。竜を仕留めた槍を崇めながら、竜種の支配を受け入れられるのか？別物と切り分けて考えることができるのか。

ヤエトの視線の先で、《天の槍》は陽光をはじいてしらじらとかがやいている。

《夏入りの祭り》とやらも、あの高山を讃えるものなのかもしれない。結局、確認しないまま話を進めてしまった。

――これでいいのか？

いやいや、とヤエトは思い直す。

祭祀儀礼のたぐいは自分の仕事ではない。それを管理したいなら、帝国は礼部の官吏を派遣すべきだ。

これでいいのだ。

――仕事としては、これでいい。

ヤエトは尚書局の中でも史部に所属する史官である。歴史の編纂が本来の仕事だが、実際には書記としての技能を求められることが多い。

積み上げた記録は歴史を編む材料となるのだから、末端の史官の仕事としては順当なものだが、実態は、与えられた仕事を順にかたづけるだけの便利屋だ。

前任者の言葉で唯一覚えているのは、『ここには過去がない。未来もない』というものだけだ。

未来がないのは、北嶺送りが更迭人事であることを意味した言葉だろうが、過去がないとはどういうことか。はじめはわからなかった。

今は理解できる。北嶺には記録というものが一切ないのだ。最古の記録が、帝国傘下におさまった十六年前、帝国の史官の手によるものだ。それ以前は、なにもない。

ヤエトには、気もちが悪くてしかたがない。だが、ないものはない。

――わけがわからん。

識字率は高いのに、記録がないとは。どういう紆余曲折を経て、この奇妙な土地柄が生まれたのか。調べようもないとなると、よけいに気になる。

「尚書官殿！」

呼ばれてふり返りながら、ヤエトは一応、相手をたしなめた。

「貴殿も尚書官には変わりありませんよ。何度申し上げればよいやら」

セルクは恐縮した風に肩をすくめた。背丈はヤエトよりわずかに低いが、肩幅も胸板の厚みもあるので、多少ちぢこまっても無駄にでかい。

「その名にふさわしいはたらきを、しているとは思えないので」

はたらけよ、とつっこみたいところを堪えた。

「ご用件は」

セルクは頭をかいて、言葉を探しはじめた。ほんとうに、気の毒なほど語彙が貧弱だ。

「その、なんだ。祭りの話だが、あれでいいのか」

「あれとは？」

「例年通りの競弓で」

ヤエトは眼をほそめた。

「異論があるなら、議場で発言すべきでしたね」

「そうなんだが……どうしても気になって」

今さら遅い、黙れ――と、はねつけたつもりが通じていない。これだから、とヤエトは息を吐いた。毒気も抜けるというものだ。

「先ほども申しましたが、祭祀の礼式には所以、由来があるもの。先例を遵守するのが筋では？」

「そうだろうか」

セルクの表情は冴えない。金儲けがどうのといわれたのを気に病んでいるのだろう。そういう男だ。
「競弓の由来を調べてみては如何」
「由来？」
「弓は狩猟のために生まれた道具ですが、呪具の一種でもあり、楽器の原型でもあります――北嶺でどうかは知りませんが。昔は神をおろすために弦を弾いていたのが競弓に変化したか……あるいは戦勝の祝宴で戦士たちが腕を競い合ったものが、行事として今に残っているのかも。どんなものにも、由来があります。それが神事と関係が深いか浅いかを調べれば、納得できるのでは？」
セルクはぽかんとしている。
「でも、……どうやって」
「神事を執りおこなう者に訊けばよいのでは？」
「長老だ」
ヤエトはにっこり笑ってみせた。
「よかったですね。すぐにお行きなさい」
「いや、そうではない。違う」
話は終わったとばかり立ち去りかけていたヤエトは、袖を摑まれて足をとめた。官服は袂が長くて逃げづらい。
「なにがです」
「どうやって、あなたはそういうことを知るのだ。つまり、そんな昔の話を」
セルクの表情は真剣だ。しかたなく、ヤエトもまじめに答えた。
「尚書官、という官職名の由来をご存知か」
「……いや？　そういえば、知らん」
「尚書は、もとは古王国の言葉です。正確な発音は、パル＝カカル。古王国語でパルとは《古きまこと》、すなわち歴史の意。カカルは《文字》の複数形、すなわち文章、ここでは書物の意。尚書官とは、史書をしるすために生まれた官職なのですよ」
「歴史……史書？」
単語自体がわからないようだ。無理もない。

「その日、その年に起きたことを記録し、過去を整理することですよ、簡単にいえば」
セルクは眼をしばたたいた。それから、すまなそうにいった。
「よくわからん。その、古王国というのはなんだ」
思わず、ヤエトは声をあげて笑ってしまった。
「古王国三千年もの歴史を、ここで立ったまま説明せよと」
「いや……えっ？　三千年？」
セルクが絶句すると同時に、誰かが彼の名を呼んだ。いつものことながら、なにやら騒がしい。
「せめて真帝国十六年の歴史を学んでから、お尋ねいただきたいものです。しかし、貴殿は尚書官より尚武官に向いているように見えますね」
「それは……俺もそう思うが、尚武官の募集はなかったし」
ああ、とヤエトはうなずいた。帝国は北嶺に軍を駐留させる気がないのだから、無理もない。
「あちらで、あなたを呼んでいますよ」
「はい。いや、……でも俺は、あなたを見て思ったんだ。尚書官というのも立派な仕事なんだ、と」
椅子に座っていたら、ころがり落ちていただろう。立っていても、かるく目眩を感じた。
「それはどうも。しかし、とにかく今はお行きなさい。なにやら切羽詰まった声のようだ」
両手を組んで一礼すると、セルクもあわてて同じ仕草をし、呼ばれた方に走り去った。
――十歳かそこらの子どもと変わりないな。
言動のすべてが、幼い。
尚書官として正式に登用されているのだから、二十歳は過ぎているはずだが、なにしろ過去のない土地のことだ。何歳だという自己申告も、そのまま信じてよいものかどうか。
――尚書官の仕事、か。
ヤエトは《天の槍》を見上げ、ふたたび低くくちずさんだ。

我は何する者ぞ　何する者ぞ
我は風　都市を囲む壁を巡り
我は詞　人の子の聲に宿りて
我は歌　神々の聖音を運ばん
我は　現身より解き放たれり

三千年の昔、人がまだ神と意を通じさせていたころの詩節だ。

昨今、神はその言葉を地上に届けなくなった。だが、神との契約で人が得た力は、完全に失われたわけではない。それは今も地上を席巻し、国境を塗り替える力をそなえている。

沙漠の西では、神は一柱である。

真実の神、叡智の神、偉大なるひとつ神――人にはその全貌を把握し得ぬほど多様な相を持ち、そのひとつひとつの相貌に呼称があり、力を象徴する。数多ある名のどれかを選んで契約をかわせば、契約者の一族は恩寵の力を得るのだ。

皇家も、神より恩寵を与えられた一族だ。その力が今、沙漠の東で試されている。

――それでも、やがて滅びるだろう。

地上のいかなる王国もまぬがれ得なかった運命だ。帝国にも、いずれは訪れる。皇家に与えられた恩寵の力が尽きずとも、運用を過てばそれまでだ。

――古王国も、恩寵が尽きるのを待たず滅びた。

首筋に風を感じ、ヤエトは我に返った。もの思いにふけるのに、こんな吹きさらしの場所を選ぶこともあるまい。寒い寒いと手をこすりあわせながら、彼は自室がある奥へ向かった。

だが、叫び声が彼の足を止めさせた。

声が聞こえること自体は、この城では珍しくもなんともない。問題だったのは、声の響きだ。

都のなまりがあったように聞こえたのだ。

帝国に属するほとんどの地域は、《商用語》と呼ばれる沙漠の隊商都市起源の言葉をもちいている。

北嶺も例外ではない。ただし、ひとくちに同じ言葉といっても、発音には土地ごとの癖がある。

今のは北嶺のなまりではない。南方低地地帯、大雑把にいえば都のあたりの抑揚だ。

門の方から聞こえた気がする、とヤエトは耳をすました。声以外の音も聞こえるようだ。なんだろう——足音かもしれない。馬のいななきも聞こえた。それも、厩の方角ではない。

第一、この城の厩舎にいるのは馬ではないのだ。

「断じて断る！」

答えた声は、どう聞いてもセルクのものだ。それも、激昂寸前の響きである。

しまった、聞かないことにすればよかったと思ったが、もう遅い。寒さにふるえ、自分を呪いながら、ヤエトは踵を返して門へ向かった。

2

北嶺自治区は、別名を放置区という。

帝国領の北端に位置する高地で、旨味のない土地柄ゆえ搾取もされず、弾圧も受けず、今に至る。

もっとも富裕な南の低地、つねに目を光らせねばならぬ西の沙漠、独立の気風が高い東の海沿いの諸都市、そして河を挟んで広がる高地の草原地帯——放置したら帝国の存続そのものがあやうくなる地域ばかりだが、北嶺は違う。

あってもなくても、どうでもよい。

優先順位の低さから後回しにされて、そのまま順調に放置の一途を辿っている。

さらに北方には、未だ帝国の威光にまつろわぬ蛮族が住むという。だが、尚武局からは武官の派遣もなく、駐留軍もない。とりあえずの緩衝地帯になればよし、という程度にしか思われていないのだ。

さすがに尚書局からは尚書官が派遣されているが、これもたったの一名。今はヤエトがその任にあたっている。あとは現地登用でなんとかせよ、というの

が、尚書局からのありがたいお達しだ。
おかげで、政庁は尚書官ごっこに興じる無邪気な大人たちの集まりになっている。
その北嶺に都から使者が来たのなら、異常事態だ。
門に辿り着いたヤエトが見たのは、どうしろというんだ、と叫びたくなるような場面だった。
手前には緊張した同僚たちの背中。つまり、さっきまで、広間で同席していた北嶺人たちである。
その向こうに、十はくだらぬ槍の穂先を突き付けられたセルク。とりひしがれている。
さらにその奥には、日を照り返してきらめく武装に身を固めた騎士と馬の一団が控え、門の外には馬車の影がちらりと見えた。
ヤエトはイスヤームをみつけ、袖を引いた。
「どういうことです」
「わからん。来客らしいが」
役に立たない。
さらば穏やかな余生よ——心の中でつぶやいて、前に出た。同僚たちは彼の姿を認めると場所を開けて通してくれ、しまいには人垣から押し出されるように、剣呑な一場の舞台に立たされていた。
しかたなく、ヤエトはまず一礼する。
「ようこそ北嶺へおいでくださいました。帝国騎士の皆様には、お怒りのご様子。我が同輩が、なにか不調法をいたしましたでしょうか」
「何者だ」
「尚書局より、先の五の月に当地に赴任しました尚書官でございます」
顔を上げると、馬上の騎士と視線が合った。
南方人だ。年齢はヤエトより上に見える。正式の帝国騎士位を得ているなら、かなりの名家の出身のはずだが、純血の帝国貴族と比べたら格段に落ちる。そういう位置にいる人物だ。
「教化が進んでおらず、礼儀を知らぬところもございます。なにとぞ、寛大なご処分を」
「ものには、許せぬことというのがある」

騎士の返答を聞いて、ヤエトは姿勢を正した。
「では問いましょう。まず、貴殿のご所属は。そして、お許しいただけぬこととはなんでしょう」
「わたしは畏れ多くも皇女殿下の騎士団員である」
は、と漏らした息が、そのまま声になった。
――皇女の騎士団が北嶺に？
騎士は、北嶺の民に負けない大声でつづけた。
「そこの男は、我々の馬を入れるために厩を空けよ、との命令に従わなかったのだ。こともあろうに、厩は鳥でいっぱいだと」
「なるほど……厩の件は、ご説明がたりなかったようで――」
そこへ、斜め後ろから大声が割り込んだ。
「こいつらは門番を殴り倒して入って来たんだ！」
ヤエトはセルクの方をふり向いた。両腕をとられ、地面に膝をついた姿勢だ。こうなる前に、ひと暴れしたに違いない。
――馬鹿が。
だから、尚書官には向いていないというのだ。
「失礼」
槍と槍のあいだに割り込むと、ヤエトは官服の裾をからげ、セルクの胸を蹴りとばした。
蹴られたセルクより蹴ったヤエトの方がよろけたくらいだが、おどろいた兵たちが包囲を崩し、ヤエトが中に入りこむだけの余裕ができた。
この機を逃さず、ヤエトは正面の槍とセルクのあいだにすべりこんだ。
「帝国騎士は、帝国の槍であり楯である。尚書官は、しかるべく敬意を払うべし。無礼は許されぬ」
セルクに声をあげる隙を与えず、ヤエトはくるりと向き直って、騎士を見上げた。
「教導が行き届かず、ご不快を招いたこと、深くお詫び申し上げます。責めはどうか我が身に」
最前の騎士がなにか口にしかけたとき、騎馬の列が動いた。
「なんと、耳に覚えのある声だと思えば……おなつ

かしい。我が師ではありませんか」
顔を見るより早く、声の主はひらりと下馬した。
白っぽい金の髪がその背を撫で、腰に佩いた長剣がりんと鳴った。聞き覚えがあるといえば、ヤエトもこの鈴の音を知っている。
「控えよ」
南方人は素早く後ろに下がり、膝をついた。
会うのは何年ぶりだろうか。しかし、見間違えようのないその美貌。
「部下の無礼は、ひとえに主君大事のためとご勘案を。ラダヤーン、入城するだけのことでなぜ揉める。姫様が外でお待ちだ、拙速をもって尊しとせよ」
前半は蜜のように甘い声。部下に向かっては厳しい声と使い分けて、騎士はふたたびヤエトを見た。
この男が笑みを向けると、それだけで乙女がばたばた倒れたという伝説がある。そういう胡散臭い笑顔を向けられても困る。
「ルーギン殿……」
「我が名を覚えていてくださったとは、望外の喜び。……先生も、どうかご勘気をおさめてください」
周囲はルーギンの一挙手一投足、その吐息や視線の方向まで、一心に見守っている。
そうさせるだけの華がある人物だ。
ヤエトは両手を身体の前で組み、頭を下げた。
「とんでもありません。勘気など」
答えながら、猛烈な勢いで考えていた。皇女の騎士団が、なぜ北嶺にいる。大貴族の若殿であるルーギンまでもが、なぜこの辺地に。
「そこの罪もない青年を蹴り飛ばされたではありませんか。案外痛いのですよ。……よい、離せ」
命じられて、セルクを押さえていた兵も退いた。
「どういう行き違いがあったのかは知らないが、部下がひどい扱いをしたな。許せ」
我に返ったセルクがぐいと顔を上げたので、ヤエトは急いで割って入った。せっかくおさまっている事態を、また波立たせたくない。

「拙速を尊ばれるのではなかったのですか。外でお待ちとは、いずれの姫君がお越しあそばしました」
「ああ……わたしも手間取り過ぎましたね。待ちきれぬとばかり、出ておいでだ」
ほら、と彼が大仰に手をふった。
全員の視線が門の方に向く。
ヤエトも同じく、門に立つ人影を見た。
――子どもだ。
華奢な立ち姿だった。波打つ黄金の髪に、小柄な身体にあわせた美しい鎧。背後には、黄金竜の旗を捧げ持つ侍人。
竜の旗を掲げることができるのは、竜種のみ。しかもあの図柄は皇帝の直系にしか許されない。
つまり、皇帝の娘だ。
――皇女が北嶺に来るはずがない。
しかし、状況はすべて、そこにいる少女が皇女であることを示している。
混乱しながらも、ヤエトは事態の推移を見守っていた同僚たちを叱咤した。
「真上皇帝陛下の姫君だ。頭が高い、平伏せよ！」
皆が当惑する中で、真っ先に従ったのは、意外にもイスヤームだった。
ヤエトも石畳に膝をつき、頭を下げた。
「いつになったら、わたしは城に入れるのだ？」
それが皇女の第一声だった。答えたのは、はじめに揉めていたラダヤーンとかいう騎士だ。
「は。この者らが厩を空けられぬと……」
「鳥でいっぱいだそうですよ」
ルーギンが口を挟んだ。
「鳥？」
「はい。鳥です」
「くだらん騒ぎだ」
一刀両断だ。だが、めげずに声があがった。
「急ぎ仮小屋を用意しますと、申し上げました！」
大声に、ヤエトはあやうく顔を上げるところだった。せっかく埋め戻してやった墓穴を掘り返すな馬

鹿が、とこちらが大声をあげたい。
ラダヤーンが苛立たしげに指摘する。
「鳥を出すのに、仮小屋ができるのを待つ必要はなかろう。さっさと――」
「ですから、ご一行の馬のためのものです。とりあえず中庭に繋いでくださいと」
「くどい。まず馬を厩に入れろ。仮小屋とやらを作るなら、鳥のためのものにすればよい」
「そうはいかん！」
セルクは断言した。今度は皇女が遮った。
「厩は馬を入れるものだ。鳥を出せ、わたしと部下たちの馬を入れろ」
「駄目だ！」
あわてて、ヤエトは顔を上げた。諫めようとしたが、間に合わない。セルクは頭に血がのぼった勢いにまかせて立ち上がり、顔を真っ赤にして怒鳴っている。いつものように。
「前ぶれもなく訪れて、自分たちの都合であだこうだいうのが帝国のやりかたか！」
ルーギンと視線が合った。肩をすくめている。もう手助けはできないよ、という風だ。
まあそうだろう。ヤエトだって、見守るだけで終わらせたい。
「帝国は、万事北嶺のやりかたを重んじるという約束があったはず。それをくつがえすとは、どういうことですか」
「無礼者！」
ラダヤーンが鞭をふり上げた。
セルクは避けない。なにごとにも正面から立ち向かう馬鹿なのだ。
なんでこんなことに、と悩みながらヤエトは前に進み出、あらためて平伏しながら声をあげた。
「お待ちください。先ほども申しましたように、ご説明いたしたきことが、ございます」
「うるさい、そこの造反者の肩を持つなら、帝国尚書官といえどそなたも同罪だぞ」



「お間違いくださいますな。そこの者も、立派に帝国の尚書官です」
「帝国の尚書官が、皇女殿下のお言葉に逆らうか」
「臣たる者、主君のためとあらば一命を賭してもお諫めせねばならぬこともございます」
ヤエトは顔を上げた。
皇女の表情はほとんど変わらない。だが、その珊瑚色のくちびるの両端が、少しだけ上がっている。
――興味は惹いた。
無礼と知りながら、ヤエトは皇女に直接話しかけることにした。
「厩を占拠している鳥を、ご覧になりたくはありませんか。まず一羽、引いて参りましょう」
皇女は鷹揚にうなずいた。
「急げ」
ヤエトが誰と指名するまでもなく、二、三人が厩舎の方に走って行った。
「すぐに参りますが、お時間を無駄にせぬよう、ひとつ昔語りでも如何でしょう。姫様におかれましては《化鳥の騎士団》の伝説はご存じでしょうか？」
貴人の耳には、土俗の伝説はなかなか届かないはずだ。ヤエトの推測通り、皇女は答えた。
「知らぬ。申してみよ」
命じながら、女官が据えた床几に腰を下ろす。
「かつて、この北嶺には最強と呼ばれる傭兵の王国があったといいます。《戦雲を運ぶ者》、《黒き風》などと呼び名はさまざま。ここでは味方、かしこでは敵。弓をあやつっては正確無比、敵陣を襲って将軍を討ち取り、戦局を一気に覆す――報酬次第で」
「さほどに強かったのか」
皇女は興味を持ったようだった。
――戦好きか。
なるほど、それで裾を引くような女装束ではなく、甲冑か。得心して、ヤエトは話を進めた。
「ただし、味方するのは七日まで。七日が過ぎれば引き留めることはできなかったそうです。あらたな

契約を結ぶためには、谷に住まう王のもとへ行かねばならず、その居城こそ、今は谷底に崩れ落ちた城趾である、といわれています」

ここからさほど遠くはございません、とヤエトは言葉を添えた。

だが、皇女の興味は崩れた城にはないようだ。表情でわかる。苦笑をおさえ、話を皇女が好みそうな方向へ戻した。その方が彼にも都合が良い。

「かれらの強さの秘密は、鳥でした。戦士たちを乗せ、千里の彼方へも一日で飛んだとか。さほどの強さを誇った騎士団も滅び、空を舞う化鳥の姿も消えました。ですが、この荒唐無稽な伝説を、あながち嘘ともいいきれぬ証拠が、今も生きているのです」

まるでヤエトの語りにあわせるように、グランダクが端綱を手にあらわれた。

彼が引いて来たのは、黒い鳥だった。

呆れるほどの巨大さだ。体高は乗用馬とほぼ同じ。磨きあげた鉄のように青黒い嘴は猛禽のするどさで、人間の頭などぱっくりいってしまいかねない。舌は太く、子どもの腕ほどもある。

その鳥が一同を見渡し、派手に嘴を鳴らしながら翼を広げ、羽撃いた。

馬たちは異様な生き物の登場におどろき、落ち着かなげに足踏みをしている。

皇女が、ほう、と息を吐いた。悲鳴にならないところが、いかにも気丈だ。

「飛べるのか？」

「いいえ、残念ながら。滑空がせいぜいです。それゆえ、土地では《地走り》と呼ばれております」

巨体を支える脚は長く、よく発達している。平地での走行速度も相当なものだが、荒れ地を走らせれば馬など問題にならない。多少の障害物なら羽撃いて飛び越すし、下り坂はもちろん滑空が効く。

皇女は立ち上がると鳥との距離を詰めた。よほど度胸があるのか、馬鹿なのか。いきなりふれるほど無謀ではないものの、熱心に観察している。

「乗ってみたいものよ」
「乗馬とは別のこつがございます。今すぐお乗りあそばすのはお勧めしません」
「わかっておる。二本足で歩くものに乗るのだからな。均衡のとりかたが、違うであろう」
うなずいて、皇女はヤエトに視線を戻した。その眼は、竜種に特有のあざやかな紫だ。
「そなたは乗れるのか？」
「乗せてくれる、という奇特な鳥の背であれば。どれでも乗りこなすというわけには参りません」
「人より鳥の方が偉そうだ」
皇女は破顔した。あっ、と思わされるほど明るい笑顔であった。
なんということのない言葉ひとつで、皇家の人間は人を動かす。理屈のつかない衝動を与える。
——だから竜種は好かん。
そう思いつつ顔を伏せ、彼は答えた。
「少なくともこの身よりは、鳥どもの方がお役に立ちますことでしょう」
「馬よりも、と申したいのか」
「長年に亘って、この城の厩は鳥たちのものだったのです。染みついた鳥の臭いに、馬たちが怯えずに過ごせるでしょうか？　馬は繊細な生き物と申します。斯様な場所に繋ぎとめることは、かれらを傷めつけることと同義ではありませんか」
ちょうどこのとき馬が嘶き、後ずさろうとして皇女の視線を引いた。
ヤエトは急いでつづきを畳みかけた。
「ご説明がたりぬとは、このことを申し上げていたのです。厩をすぐにご提供できぬのは、馬たちのことを思い遣ればこそ、なのです。そうだな？」
黙って座っているセルクに話をふったが、青年は無言だった。引き結んだ口が開く気配はない。
皇女の眼が、すっとほそまった。
——馬鹿者め。
その通りですと、あの無駄に大きな声で認めてく

れさえすれば、皇女もちょっとした行き違いと裁定し、騎士の名誉もそこなわずに済むのに。

嫌な感じの沈黙が門の周囲に満ちた。

静まっていたからだろう、さらりと衣擦れの音がしたのが、やけにはっきりと耳に届いた。

風が、動いた。

ヤエトの眼にまず入って来たのは、艶やかな紫だった。黒い簡素な衣装の裾を引き、女がひとり、馬車から降りてくる。その右肩にかけられた幅広の布が、紫色なのだ。金糸で縫いとられているのは、図案化された鈎爪と叡智の玉。

不思議なことに、女の全身は光を帯びて見えた。黒衣の布目のあいだから黄金のかがやきが透ける様は、あたかも日月を隠そうとして覆いきれず、光が漏れるのを止められぬ風情。

頭から被った薄布の前を、女の白い手がそっと上げた。淡い色のくちびるが覗き、ほそい顎が動く。

「道理ではないか」

あたりの空気がびりびりとふるえた。

ヤエトは目眩を覚えた。顔を伏せなければと思いながら、凍りついたように動けない。

彼ばかりではなかった。その場に居合わせた全員が身じろぎもできず、呼吸も忘れているようだ。

皇女だけは、女の声に感銘を受けた様子がない。鬱陶しげにふり返り、ため息混じりに答えた。

「まこと、道理です」

「なにが道理か？」

「この城の厩では、馬たちが怯えて休めません」

「それも、道理だな」

女は皇女の横に並んだ。そこで足を留めず、すっと前に出る。

光はますます強まり、女の輪郭がぼやけるほどだ。もう黒衣を纏っているようには見えない。光が人の姿を借りて、その場に揺らめいているようだ。

「これなる伝達官の声を借り、我が言葉を届けよう。わたしはそなたらの皇帝だ」

北嶺の民のあいだに、動揺がはしった。
無理もない。かれらは伝達官という存在を、名前でしか知らない。
ヤエトは頭を下げ、皆が自分に倣ってくれるように祈った。皇帝の声を宿しているときの伝達官は、皇帝自身と同じ、尊貴な存在である。
紫の肩布は伝達官の徴、縫い取りの図案はこの伝達官が皇帝直属であることを示している。
竜種は、神に仕える神官を自分たちの耳目とし、遠くのできごとを見聞きする。その声をもって、言葉を伝えることさえできる。これが帝国の基盤を築いた力の源泉、皇家に与えられた恩寵の力である。
もちろん、皇帝直属の伝達官の言葉は、皇帝本人の言葉とほぼ同じ重みをもつ。
伝達官の声は、よく響く。神がかった、抗しがたい力をはらんでいる——その声が、告げた。
「本日ただ今をもって北嶺自治区を北嶺郡とあらため、我が娘を郡太守として着任させる。皆、心して仕えよ」
——郡太守に、皇女が。
ヤエトは我が耳を疑った。
皇家の姫が官職に就くなど、聞いたことがない。
思わず顔を上げたその先に、伝達官がさしのべた扇の先が見えた。
伝達官の扇は竜の翼と呼ばれ、皇帝の権威をもって遠方のものにふれるための道具であり、象徴だ。
その扇が、ヤエトの額をかるく突いた。
「これなる尚書官を太守の副官に任命する」
ヤエトは硬直した。
おどろくとか、そういう反応ができる範疇をかるがると超越した展開に、へえ、としか思えない。
伝達官は皇女に向き直り、くちもとに笑みをたたえて告げた。
「よく治めるように。約束は約束だ、よいな」
「陛下もお約束をお守りください。ここを治めるのはわたしです」

「主君として、そなたに預けた。忘れぬことだ」
女の手が下がり、ふたたびその顔が隠された。
あたりに満ちていた不可思議な気配が、すうっと消えた。皇帝が去ったのだ。
皇女は立ち上がった。
伝達官を通じて皇帝の威光にふれたあとでは、いかにも幼く見える。ただ、命令をくだす口調の迷いのなさは、なるほど父親譲りかと思わされた。
「厩は別に作れ。急いでな。その鳥たちを見に行く。誰か案内せよ」
皇帝の言葉など、なかったかのようだ。今のがすべて幻覚ならいいのだが、とヤエトは思った。
いや、皇女の到着からすべて夢であってほしい。
だが今、皇女は苛立たしげに案内に立つ者を待っている。あきらかに、ヤエトが指示を出すものと決めつけて。
「グランダク殿、お願いします」
ちょうど巨鳥を連れているし、どうせ厩に戻さねばならないのだから、適任だろう。
皇女と騎士たちが厩舎の方へ消えると、ヤエトはまだ動かないセルクに声をかけた。
「無茶をしないでくれませんか」
垂れた頭がかすかに揺れたが、それだけだ。
ヤエトは声を強めた。
「セルク殿、聞いていますか。陛下が伝達官を通じてうまく裁いてくださったからよかったようなものの、でなければ、皆が窮地に陥っていたのですよ」
顔を上げないまま、セルクは答えた。
「うまく裁いた？　仲間を殴られても頭を下げていろというのか」
声が、ふるえている。
声ばかりではない。肩も、握った手も、みんなふるえている。
「組織に組みこまれるとは、そういうことです」
我ながら嫌な台詞(せりふ)だ。
だが、ごっこ遊びは終わりなのだ。

そのことを、ヤエト以外の何人が気づいているのか……あまり考えたくなかった。
「組織とはなんだ」
「帝国です。そして、帝国の長が皇帝陛下です」
「俺は、……遠くの皇帝より仲間が大切だ」
ヤエトはセルクの顔を覗きこんだ。やはり、泣いている。
「伝達官を通じ、竜声は即座に伝えられるのです。遠い近いはなんの障害にもなりません」
「あんなもの……まやかしだ」
反発しながら、セルクにしては声が弱い。
そうでなくては困る。あれは、皇帝の力を印象づけるための行動だったに違いないのだから。
「正面切って立ち向かうだけが、大切なものを守る方法ではないですよ。さしあたって、馬を繋ぐための仮小屋の手配をお願いします。馬たちに罪はありません。快適な居場所を用意してやってください」
セルクは無言で立ち上がった。仲間が数人、歩み去る彼について行く。
自分がどれほど際どいところにいたか、セルクは気づいていないだろう。ある意味、羨ましい。
「尚書官」
イスヤームに呼ばれて、ヤエトはふり返った。反射的に、考えていたことが口をついて出てしまう。
「セルク殿は大丈夫でしょうか」
「奴が馬鹿なのは今にはじまった話ではない」
たしかに、とヤエトは思った。彼には考える暇を与えず、身体を動かす仕事をさせるべきだ。あとは、問題を起こさないでくれることを祈るしかない。
「あなたは大丈夫そうですね」
「完全武装した集団に、策もなく立ち向かうほど馬鹿だと思われていたなら、心外だ」
ヤエトはため息をついた。根が帝国贔屓ではないこの男は、別の意味で野放しにしたくない。
「同僚に常識を期待できるとは、ありがたい」
「同僚？　名実ともに、貴殿は我々の上官だろう」

答える言葉もなく、ヤエトは視線を馬車の方へやった。おかげで、皇帝の伝達官が放心状態で座りこんでいるのに気がついた。

「来てください」

イスヤームに声をかけると、ヤエトはそちらへ向かった。

薄布越しにも異常がわかる。もとから白い肌は血の気を失って蒼ざめ、眼はうつろである。つくりものめいた美貌のせいで、まるで人形のようだ。

――あやつりの糸が切れたら、こうなるのか。

伝達官が全身をあるじに委ねるのは、非常に負担の大きい術だと聞いたことがある。しかし、実際に目にするのはヤエトもはじめてのことだ。

伝達官のかたわらには小柄な女官が膝をつき、投げ出された手をさすっている。

「必要なものがあれば、おっしゃってください」

女官も宮廷風に頭から薄布をかけていたが、ヤエトが声をかけると、それを取って顔をさらした。

あらわれたのは帝国貴族の白い面貌ではなく、沙漠の民のものだった。編んだ髪は黒々としていたが、染め粉を使っているのだろう。皇女くらいの年頃の孫がいてもおかしくなさそうな年輩だ。

女官は心配そうに、伝達官とヤエトを見比べながら告げた。

「すっかり冷たくなって……」

ヤエトは自分の上着を脱いで、伝達官の肩にかけた。女は動かない。さっきあれほど周囲を圧倒したのと同じ人物とは思えないほど、存在感が希薄だ。

ふるえが、ヤエトの身体を走った。寒さよりも、皇帝を思いだしたせいだった。

「申し遅れました、尚書局のヤエトです。こちらはイスヤーム」

女官はやわらかい笑顔を見せた。

「ナオです。こちらには、女手はありませんの？」

ヤエトとイスヤームは顔を見合わせた。

「なにか問題が？」

「体調を崩した女官たちを、麓に残して来てしまって……伝達官様の世話をする者がいないのです」

それで馬車が一台なのか、とヤエトは思った。それにしても、荷物が少な過ぎる。竜種の姫についてなにを知っているというわけでもないが、鎧を身につけ、はじめて目にする巨鳥に騎乗を望み、女官を置き去りにして先行する——どれをとっても、型破りには違いない。

「近くの村で女手を集めよう」

協力的なことを口にしながら、イスヤームは顔をしかめている。ヤエトも同じ気分だ。

尚書官として各村から選出された男たちが寄り集まって暮らしているのがこの城だ。尚書官以外は、厩舎と厨房に数名がいるが、全員が男だ。あらたに増えた人員も、女性は皇女とこの女官のみ。

——そこに土地の女を集めるのか。

しかも、すべての揉めごとの調停をし、責任をとらされるのは自分のような気がする。左遷されて閑職に就いたはずなのに、どういうことだ。

——詐欺だろう、これは。

ため息を咳払いでごまかし、彼はうなずいた。

「そうですね。まずは、そのかたを中にお連れしましょう」

3

ヤエトは疲れ果てていた。

昇進したのだから、仕事をどんどん周囲に投げて、自分は楽をすればよい。理屈では、そうなる。

問題は、仕事を投げられるような人材がまったく揃っていないことだ。はじめに予感したように、厄介ごとのすべてはヤエトに集まってくる。

右往左往しては怒鳴るばかりの帝国人と北嶺人のあいだに立って諍いを仲裁すること何回か、……もう数えるのも諦めた。まだ一日と経過していないなど考えられないほど疲れ果てていた。

とにかく休ませてくれ、とだけ願いながら部屋へ下がったところで、呼び出された。ほかの誰でも断るつもりだが、皇女の招きではそれも無理だ。迎えに来た兵とともに、ヤエトはよたよたと城の第五層へ向かった。階段を上る途中で根を上げて、少し休ませてもらったほどだ。

五層の入り口では、ルーギンが待っていた。うなずいて兵を下がらせ、皇女の部屋にヤエトを招き入れると、彼は幼いあるじに呼びかけた。

「尚書官ヤエト、参りました」

物置と化していたこの部屋を短時間でよくかたづけたものだと感心しながら、ヤエトは膝をつき、頭を垂れて皇女が声をかけるのを待った。

面(おもて)を上げよと命じられて顔を上げたが、その先、どうしたらよいかわからない。皇女の下問を待つべきなのだろうが、相手は無言なのだ。

相変わらず、皇女の装(よそお)いは姫らしさに欠けていた。さすがに鎧ははずしていたが、着衣は男装に近い。腰の短剣にかるく手をかけ、もの思いにふける風情である。

しかたなく、ヤエトは口を開いた。

「直言をお許しいただけますでしょうか」

さんざん喋っておいて今さらだが、本来は同室すらできない身分だ。皇女は鷹揚にうなずいた。

「許す」

「お呼びにより、まかり越しましたが、……ご用の向きは、なんでしょうか？」

「確認しておきたかったのだ」

皇女は視線をヤエトの後ろに向けた。そこには、ルーギンが立っているはずだ。

空気が動いて、騎士が座をはずしたのがわかった。同時に、皇女のかたわらに控えていた女官も立ち上がり、部屋を出て行った。

これで、ヤエトは皇女とふたりきりである。人払いせねばならないほどの内密の話とは、と身構えているところへ、問われた。

「そなたは、陛下の部下か？」
どういう意味ですかと訊き返しそうになったのを、かろうじて堪えた。
帝国の官吏はすべて帝国の象徴たる皇帝に仕えているわけだが、そんなことをあらためて訊かれるはずもないだろう。慎重に言葉を選んで答えた。
「帝国の、一尚書官に過ぎません」
「陛下より、わたしを観察して報告するよう密命を賜っているのか、と問うたのだが」
「左様なご命令は賜っておりません。ひとこと申し上げてよろしければ――」
「なんだ」
「自分がもし、陛下から密命を賜っていたとしたら、それを口にすることは許されません」
皇女は少し顔をしかめたが、すぐにうなずいた。
「なるほど。そなたの申す通りだ」
なにかを考えるように小首をかしげてから、皇女は窓の縁に腰かけた。鎧戸は閉じられているが、隙間から入りこむ風を完全に遮断することはできない。灯火を受けて琥珀色にかがやく髪がひと筋、ふた筋、たよりなげに揺らめく。
「遠回しの話は好かぬゆえ、直截にいう。そなたも言葉を枉げず、飾らずに答えよ。よいな」
「御意」
「太守の地位を手に入れるため、わたしは陛下の出された条件を呑まねばならなかった。その条件がこれだ――副官は自分が任命する、そしてその副官の進言を、よく容れよ……と」
皇女はヤエトを見た。これも不敬にあたるのだろうと思いながらも、ヤエトはその眼をまっすぐに見返した。今、視線を逸らす愚はおかしたくない。
ゆっくりと瞬きしてから、皇女は言葉を継いだ。
「聞けば、そなたの当地への赴任はわたしに先んじることわずかに十日あまりというではないか。それまでは、都にいたと」
なるほど皇女の立場であれば、ヤエトが皇帝の直

属の部下のひとりで、監視のために寄越されたのだと疑わない方がおかしい。

しかし、いくら率直に答えろと命じられていても、ただの左遷人事です……とは、いえない。皇女殿下の任地は尚書局では左遷先、二度と都に戻れるかもわからぬ遠流も同然にございます、とは。

「皇帝陛下のご意向による転属ではございません」

皇女は眼をほそめた。

「まことであろうな」

「ご懸念が晴れぬようでしたら、副官の職は返上させていただきます」

「陛下が任命されたものを罷免はできぬ。せいぜい仕えてもらうことになろう。わたしが問いたいのは、そのときそなたが仕えるのはわたしなのか、それとも陛下なのか、ということだ」

顔をしかめるのは、ヤエトの番だった。そんなことを問われても困る。

より楽に、なまけて暮らしたいだけだ。

「自分は一介の官吏に過ぎません。帝国を運営するために必要な組織の一員として、おのれがなすべきをなし、なさざるべきは糺します」

皇女はヤエトを見下ろした。寒いせいか、鼻の先が少し赤くなっている。おかげで、表情まであどけなく見えてしまうから困る。故郷の妹を思いだしたほどだ。

別れたとき、妹はまだ十二、三歳だったか。もう正確な歳は忘れてしまった。鼻が赤かったのは、泣いていたせいだ。

だが、妹は郡太守でもなければ竜種でもない。皇女を見て妹を連想するなど、馬鹿げている。

「なすべき、とは」

「副官として、殿下を補佐したてまつることです」

「なさざるべきとは」

「間違いを看過することです」

「間違いとは」

「さあ、……たとえば、若い男とふたりきりになら

れるのは、お諫めすべきではないかと思いますが」
皇女は意外そうに眼をみはり、それから笑った。
「そなたは若いのか？」
皇女の年頃の娘から見たら若くはないだろうと考えて、ヤエトは前言を訂正した。
「失礼しました。男とふたりきりに、と申し上げるべきでした」
「わかった、考慮する。しかし、そなたが異心を起こしても、これがある」
皇女は短剣を引き抜いた。慣れた手つきでくるりと回し、すぐ鞘に戻す。
「左様なものを手ずからお使いになる機会は、少ないに越したことはありません」
「これで、不心得者を斬ったことがある」
さらりと答えて、皇女はヤエトと視線をあわせた。彼という人物を推し量るように、しっかりと眼を覗きこまれた。
ヤエトは静かに目を伏せた。
「それとても、少ないに越したことはありません」
「わたしが凶暴だと噂が広まれば、襲う者も用心するはずだ」
「用心させて如何なさいます。狙うのがお命であれば、敵は手練を用意し、機会や手段を吟味すること怠りないでしょう。返り討ちにしたところで、敵はますます恨みを抱き、報復を望むもの。お心がけいただくべきは、まず襲われぬことです」
皇女は不服げな顔をしたが、口調をあらためると、はじめの問いに戻った。
「まことに、陛下の差し回した者ではないと？」
「お信じいただくしかありません」
「陛下にお目通りしたことは」
「ございます。ですが、皇女殿下がお生まれになるより前のことになります」
意外だったのだろう、詰問が止まった。
酷暑の昼、極寒の夜。水場に走る人や獣、夜空を焦がす炎。赤く照らされた皇帝の横顔——当時を思

い起こしながら、ヤエトは言葉をつづけた。
「自分は西からの沙漠越えを経験しております。身分の高下なく人が入り乱れる機会が多々ありましたので、その折に。ですが、陛下が自分をご記憶とは思いません。直截に話せとの仰せですが――」
ヤエトの躊躇を、皇女が即座に突く。
「なんだ」
「わたしをお信じになれないようでしたら、いつなりと、その短剣をお使いください」
皇女は答えなかった。
自分の心臓の鼓動だけが、ヤエトの耳には異常にはっきりと聞こえている。
皇女がわずかに動いたと思うと、抜き身の短剣がその手の中にあった。氷のような刃だ。
武器の扱いに慣れていると話したのも、血を流したことがあるというのも嘘ではないだろう。
「そなたは、死にたいのか？」
問い質す声は冷たかった。
「できれば痛みを感じる暇もなく、一瞬で」
「死にたいのか、と問うておる」
「死なずに済む者など、この世にはおりません。つねに疑われながらお仕えするより、ひと思いに殺していただいた方が苦しみも少なくて済むはずです。自分にとってはもちろん、皇女殿下にとっても、それは幸せな結末といえるのではありませんか？」
暫し、皇女はヤエトの言葉を吟味するように眼を閉じていたが、やがてうなずいた。
「そなたの申す通りだ。疑えばきりがない。だが、すぐに信じるともいえぬ。当面はそなたがわたしに仕えることを許す。それで、よいな？」
「御意」
短剣を鞘に戻すと、皇女は小さく息をついた。それで、この少女も緊張していたことがわかった。
目の前の臣下を無慈悲に切り裂けるほど、残酷なあるじではないようだ。
「そなたの名は、なんといったか？」

「ヤエトと申します」
「何歳になる」
「三十六になります」
「さほどの歳か？　もっと若く見える」
「先ほどは、若いのかと問われましたが」
皇女は笑った。
「その歳には見えぬな。二十歳そこそこかと」
皇女から見たら二十歳は若くないようだ、とヤエトは心に刻んだ。そういうものかもしれないとは思うが、だったら三十六はどうなんだ、と思う。
すでに、人外魔境といったところか。
「そなたは……見た目もだが、摑みどころがない」
「はぁ……」
「女官たちなら、大河の川縁にたまる泥みたいだというだろう」
――どういう意味だ。
「あれは養分を含んだ良い土です。当地の土とは違います。……ひとつ、うかがいたいのですが」
「なんだ」
「太守の職を望まれたのは、いかなるご事情があってのことでしょう」
直截な話を好むというなら、この程度の質問はかまわないだろう。ずっと気になっていたのだ。
記憶にある限り、皇家の姫が官職に就いたことはない。竜種であるという血筋から尊ばれはしても、政治軍事には手を染めぬのが通例だ――少なくとも、表向きは。
「皇家に生まれた者として、つとめを果たしたいと思ったのだ。なにか、おかしいか？」
喧嘩腰だったが、ヤエトはそれを躱した。
「北嶺を望まれたのでしょうか」
「いや、そうではない」
「当地へは、いつまでご逗留のご予定でしょう」
「郡太守の任をとかれるまでだ」
皇女は窓辺からするりと降り、手を叩いた。すると、即座に女官が部屋に戻って来た。

退出せよというのだろう。ヤエトは立ち上がった。
「ところで、そなたはルーギンの師だったそうだが、なにを教えていたのだ？　剣ではあるまい」
ふと思いだしたというように尋ねた皇女に答えたのは、部屋に戻って来たルーギンだった。
「歴史ですよ、姫様」
とたんに、皇女が顔をしかめた。
「歴史は嫌いだ」
「なりません」
反射的に口にして、しまった、と思ったが遅い。皇女は思いきり不機嫌な声で反駁した。
「なにが、ならぬだ。嫌いなものは嫌いだ」
「為政者になろうというおかたが、歴史を知らぬ、学ばぬでは困ります。お嫌いなのはともかく、学んでいただきます」
しまったと思ったのは皇女も同じようだった。途方に暮れた顔でルーギンを見、ヤエトを見た。
「まさか、わたしに歴史を教えようというのではなかろうな」
一瞬、ヤエトは躊躇した。やらなくてもいい仕事を背負いかけていることに気づいたのだ。だが、ここで引き下がるわけにもいかない。
「お教えいたします。これより毎日、朝議の後、昼食までを殿下の学問の時間にいたしましょう」
皇女の表情が凍りついた。そんなにお嫌いですか、と喉もとまで出かかったほどだ。
「……もうよい、退がれ。ルーギン、そなたも行ってよい。恩師と積もる話もあるだろう」
力ない声で追い払われて、ヤエトはそそくさと退出した。ルーギンも、当然のような顔で同行する。
皇女の部屋からヤエトの私室までは、かなり距離がある。階段は上るのも大変だが、下りるのも難儀なものだ。膝に来る。
歩きながら、沙漠越えのことを思いだしていた。武人として輿望があったとはいえ、いやだからこそ、皇弟が兵を率いると決まったときは、国を分け

ての戦になるという予測もあった。沙漠へ向かうと見せかけ、軍を返して帝都を襲うという噂も。

内乱を避けるため、死地へおもむかれるのだ、ともいわれていた。帝国は沙漠の都市国家群と数度矛を交えたが、決まって手酷く負けていたからだ。

どちらにせよ、皇弟の命は風前の灯だった。もちろん、それに従う部下たちも同じ。

鼻を赤くして見送りに来た妹は、無言だった。兄の前では泣きたくなかったのか、声をかけると身を翻して駆け去ってしまった。素直に泣けばよいのに、と母が苦笑したのを覚えている。

だから妹の最後の記憶は、階段を駆け下りて行く後ろ姿だ。風をはらんで広がった衣が、まるで蝶の鱗翅のようだった。

家族全員が、ヤエトは沙漠で果てるものと思っていた。運良く戦死をしなくとも、健康の問題がある。家に戻ることはないだろう——それは現実になったが、まさか生きて沙漠の東に渡ることになるとは、誰も想像していなかったはずだ。

予測というのは当たらぬものだ。

たとえば、ルーギンだ。暖炉を覗きこむ無防備な背は、昔より少しだけ幅を増したように見える。

この貴族とは、二度と会うこともないだろうと思っていた。だが、現実はこれだ。ともすれば過去にさまよいがちな心を、この場に引き戻す——再会は、偶然のなせるわざと思ってもいい。だが、こうも親しげにふるまわれる理由はなんだろう。

「薪じゃないんだな」

「木は貴重品ですから。燃料は鳥の糞です」

よく干した糞は少量で長時間燃え、無臭で軽い。扱いも容易だ。

——あの鳥抜きでは、この土地は立ち行かぬな。

赴任以来、何度となく去来した想いだが、それを新来者たちにも叩きこんでいかねばならない、と思う。厩争いは、その端緒に過ぎない。

この認識の差を埋めなければ、苦労するのはヤエ

ト自身だ。

「学舎に入れられたばかりのとき、火熾しができなくて困ったことを思いだすな」

ルーギンの髪は、炎を受けて赤っぽくかがやいている。相変わらず伸ばしているのだな、と思った。肩からこぼれ落ちる様は、光の滝のようだ。

ヤエトは炉辺に敷いた毛皮を示し、着座をうながした。北嶺では、私室に椅子を置く習慣はない。

ルーギンは椅子のある生活に慣れているはずだが、躊躇もせずに座った。彼らしく優雅な動きで、なんとなく鼻につく。

「下からいらしたばかりでは、さぞ寒いでしょう」

「先生の顔色の悪さも、寒さのせいですか？　相変わらず、不元気そうでいらっしゃる」

「その呼びかたは、ご遠慮願えませんか。いらぬ誤解を招きます。わたしは舎監だったのですし」

ルーギンとの出会いは、貴族の子弟が叩きこまれる学舎でのことだった。

教師をつとめるのは名をなしている学者や剣士たちで、ほとんどは貴族階級である。対して、舎監は尚書局差し回しの尚書官の職で、学識も地位も必要ない。生徒の不興を買えば貴族に睨まれるかも知れず、へたをすれば首が飛ぶという嫌な仕事だ。取り入って出世の糸口にという大胆な者もいるが、ヤエトは当時から目立つことを望まず、必要最低限の仕事だけこなして、楽に過ごしたいと願っていた。

――今と同じじゃないか。

我ながら進歩がない。苦笑すると、ルーギンがちらりと彼を見て尋ねた。

「なにか、愉快なことでも思いだしました？」

「いえ……学舎に良い思い出はありませんから」

曖昧にうなずいて、ルーギンは暖炉に手をかざした。骨張った手の輪郭が、夕日の色に染まる。

「思い出か……。あのころは、若かったな」

「まだお若いでしょう」

「独身とはいえ、三十過ぎて若いと主張するのは、

なにか間違っているような気がして」

本人はさらりといってのけたが、ヤエトは少なからぬ衝撃を受けた。そういえば、ルーギンとは五歳ほどしか違わないのだ。

自分が歳を重ねることより、若いはずと思っていた他人が老いていくことの方に、いつもおどろかされる。

学舎につとめていたのは、建国後間もなくのことだ。帝国が国の体裁をととのえようと必死だった時期で、見本は沙漠の西の旧帝国、万事がそれ風におこなわれるくせに、旧帝国を模していると指摘してはならないのが不文律という、奇妙な状況だった。

ヤエトのつとめぶりはまさに適当なものだったので、生徒たちには好かれず嫌われず、だった。歴史の教師には嫌われた。生徒の宿題を手伝ったとき、教師の間違いを指摘してしまったからだ。舎監は宿題を手伝わないこと、という細目が規則に追加されたが、それは免職の原因ではない。

舎監を辞めさせられたのは、ルーギンが十八歳のときだ。それは、よく覚えている。

学舎の長は、いかにも賢人然とした白い髭の下から、こんな風に告げたものだ。

――あの子ももう十八、あと一年待ってくれれば我々とは関係のない話になったものを。

十九歳になれば、若者たちは学舎を出される。しかし、ルーギンは十八歳のうちに問題を起こしてしまった。学舎としては、不始末の責任をとったという体裁をととのえねばならない。

――そういうわけだ、わかるね。

有力な縁故もなく地位も低いヤエトが、処分しても問題のない存在として選ばれたわけだ。覚悟はしていたが、実際に学舎を追い出されてみると、なんとも情けない気もちがしたものだ。

あれがもう、十年以上も前のことだとは。

「お若いかどうか、殿下に決めていただきますか」

ルーギンは心外だといわんばかりに眉を上げた。

「聞いていなかったことになっているんですよ」
「それは失礼。ですが、若かろうが若くなかろうが、あまり素性の知れぬ男と殿下をふたりきりにするのは、よろしくない」
「素性は知れていますよ。わたしが保証人だ」
たしかに、大貴族の若殿であるルーギンが保証すれば、それほど確かなものはない。この男が彼を恩師のように扱ったからこそ、門前での騒動もなんとかなったのだ。
そういえば礼もいっていなかったと気がついて、ヤエトは頭を下げた。
「ルーギン殿がいてくださって、助かりました」
「こちらこそ。あなたがいなかったら、わたしが顔を出す前に刃傷沙汰になっていたんじゃないかな。でも、おどろいた」
「は？」
「こちらの意識の中では、あなたは学舎の人だから……官吏だといわれても不思議な感じがするな」
そういうものかと思いながら、ヤエトは棚の奥から瓶と小さな杯を出した。注ぎながら訊く。
「飲みますか」
「杯がひとつなら、そちらがお先に」
「わたしは下戸ですから、お気になさらず」
「ほんとうに？」
問うような眼差しに、微苦笑で答える。
「寒くて寝られないときに、服用するんですよ」
「なるほど、では遠慮なく……しかし、変わってないな、全然。学生かと思うくらい若いし」
「学生は無理でしょう」
「そうかな？　そうかも。でも、わたしより年上には見えないかな。うん、見えない」
断言された。
「古王国の血筋は、若く見えるといいますから」
「尚書官に多いよね、何歳かわからない人たち……。あなたのことだから出世するとは思ってませんでしたが、だからってこんな辺地にいるなんて。でも、

予測ははずれたわけだ。ご出世おめでとうございます。まったく嬉しそうじゃないですね」

失礼なことを次々といってのけたが、本人はまったく悪びれていない。この男も出世は難しいだろうなとヤエトは思った。いや、彼はすでに出世の必要などないのかもしれない。大貴族の若様が、これ以上なにを望むだろう？

――なんでも望むだろうな。

人の欲望に際限はない。

「予測というのは、当たらないものなのです。自分も身に染みて感じているところです」

「なるほどね。そうかもしれない」

ルーギンのかたわらに座り直しながら、さて、とヤエトは告げた。

「昔話はこのへんにしておきましょう。太守がこの北嶺を欲された事情を、お聞かせ願えますか」

さっきも本人に訊いたが、あの態度からいって、かなりの反対を押し切って来たに違いないとヤエトは踏んでいた。ルーギンなら、もう少し違うことを教えてくれるかもしれない。

騎士は酒をわずかに口に含み、ゆっくり味わってから答えた。

「姫様のご気性は、ああですから。正直いって、御しがたい。それがすべてでしょうね」

「女性の扱いはお得意なものと思っていましたが」

「あれは女じゃないな。子どもです」

仮にも皇家の姫を、あっさり断じてのけた。

「皇女殿下は、おいくつなのですか」

「御歳十四、だったかな」

十四といえば、婚約がととのっているべき年頃だ。皇女ともなれば相手の選択も高度に政治的な問題になるのだろうが、とヤエトは首をかしげた。

「年頃の姫の付き添いを、貴殿がつとめておられることも、おどろきましたが」

ひどいな、とルーギンは笑った。

ヤエトが親の立場なら、女たらしと評判の騎士を

娘につけたいとは思わない。もちろん、正式な縁を結びたいと目論んでいるなら別だ。

ルーギンの父は沙漠越えに功績があり、皇帝の信頼も篤いと聞く。三十過ぎてまだ独身なのは、皇女の相手にと望まれているせいかもしれない。

「皇女殿下と、ご婚約を？」

ちら、とルーギンはヤエトを見た。が、すぐにゆらめく炎の方に視線を戻してしまった。

「臣下の結婚相手は、陛下のお心次第です。もちろん、姫様のご結婚のお相手も」

皇女の婿になることは、ルーギンほどの大貴族にとってすら、大きな意味をもつ。帝位の継承権を得ることになるからだ。

「貴殿はそれをお望みなのですか？」

「一介の騎士が気安く口にできることではないですね。たとえ当事者でも」

もちろん、そうだろう。思い浮かんだ疑問をそのまま口にしてしまった自分を、ヤエトは呪った。

「失礼をいたしました」

「いや、全然。ただ、姫様については……子どもでいらっしゃいますからね。女の子ですらない」

「は？」

「女の子なら、まだ扱いようもあるのです。でも、あれではね……。皇子に生まれたかったとお考えでも、おどろかないな。はじめの質問に答えるとしましょうか。姫様が北嶺の太守になられたのは、兄君たちが次々と封土を得られたので、自分も同じように、と陛下に訴え出られたからだという噂ですよ」

「それにしても、異例のことでは？」

「陛下は姫様に甘いですからね。皇子殿下は数多おいでですが、姫はおひとりだ。末のお子ゆえでしょうが……およそ姫様が願い出たことで、陛下がかなえずに済ませた例はない、といわれるほどですよ」

あの皇帝に親馬鹿の一面があるとは知らなかった。印象を、少し修正する必要がありそうだ。

「そこまで愛おしんでおられるなら、都からお出し

になるのも気が気ではなさそうな」
「都にいればいたで、暗殺の危険もありますし」
ヤエトは眼をみはった。
「なぜ？」
ルーギンは華やかな笑みを浮かべただけで、答えない。
――ここにも来るか。
ひやりとしたものに首筋を撫でられた気がした。
彼の表情をどう読んだものか、ルーギンは笑みを消さぬまま言葉を継いだ。
「御継嗣（ごけいし）に関していえば、陛下はまだご存念をあきらかにしておいでない」
「それは存じていますが」
「姫様には、母君を同じくする兄君がおいでです。第三皇子（ウィルト）様ですが、この兄君と姫様は仲うるわしく、姫様の伝達官のひとりは、三の君のところに留め置かれているほど」
皇帝は別にして、皇族が自分の意志を伝えるために持てる伝達官は二名ずつ、とさだめられている。一名は皇帝のもとへ常駐させるのがならわしである。従って、もう一名をどこに置くかは、きわめて重要な問題となる。
皇女はそれを、同腹の兄のところへ置いている。いくら愛娘の口添えがあっても、皇帝がそれだけで世継ぎを決めてしまうようなことはないだろう。
だが、万が一ということがある。愛憎に目が眩（くら）んで判断を間違うのもまた、人の世の倣いだ。
「それから、単なる嫉妬とか」
「嫉妬？」
「姫様のご容貌は、亡き母君に生き写しとか。いつまでも妃殿下を思い起こさせるため、陛下のご寵愛を得るのが困難だと……そんな感じかな」
「かな、ですか」
「断言してほしいですか？」
「いえ、結構」
正妃以外にも、何人かの妃妾がいることは知って

いたが、皇帝の寵愛がどこにあるかなど、ヤエトには関係のない話だった。

だが、事情は一変してしまった。

ルーギンは、状況を把握しようと必死で考えているヤエトの眼を覗きこみ、厳粛に告げた。

「陛下は、姫様に死なれたくないのです」

「子どもを死なせたい親などいないでしょう」

ヤエトがあっさり問題を一般化したせいだろう、ルーギンは眼をしばたたき、少し間を置いてから笑いはじめた。

「正論だな、相変わらず」

「不調法なのも、変わらずといったところですが」

「いや、いや。陛下の人事に間違いはないといわれるのを、目の当たりにしましたね。ともあれ、そういった事情もあることは含んでおいてください」

できれば忘れたい、と思いながらヤエトは机に手をのばし、部屋割りをしたときに使った城の見取り図をルーギンに手渡した。

「見張りをどう配置するかの、ご参考に」

一瞥して、ルーギンはうなずいた。

「いい城ですね。何年くらい前のものでしょう？」

「さあ。いったい誰がなんのために建てたものだか、さっぱり」

「戦のため、かな」

城の構えや立地を見れば、それはわかる。

権勢を誇示するだけが目的なら、石垣を巡らせて防備をかため、城に入るための道が曲がりくねった細いものになるように工夫したりはしない。

山の斜面に拠って建てられた城の上層からは、上につづく経路も、すべてが一望にできる。一層が突破されても二層、三層で防げるつくりだ。矢を射かけるのはもちろん、煮え湯をかけても、土地柄を考えれば氷や雪を投げおろすことも可能だ。

四層の護りを突破するために、寄せ手はかなりの犠牲を払わねばならない。

「もとは戦闘国家です。城にどういう備えをなすべ

きかも、かれらには自明のことだったと見えます」
「空を支配できれば強いな。あの鳥たちが飛べないというのは、ほんとうですか」
「飛べていたら、やすやすと帝国領にはなっていないでしょう」
この城なら、長期間の籠城にも耐えられる。
帝国に従わぬと心を決めていたら、北嶺は何年か戦い抜いただろう。ここまで攻め上がるのは、帝国にとって多大な負担となる。籠城戦が長期に亘るのは必至、しかも兵糧をすべて麓から運び上げねばならないとなれば、戦費はおそろしいものになる。といって、この痩せた土地を急に耕しても、兵馬の食欲を満たすだけの収穫は望めない。その上、冬は風雪が敵となる。
「鳥か……。あの鳥は、なにを食べるのです」
「冬のあいだは、乾燥苔と雪だそうです。夏になったら、そのへんの草を根こそぎにするついでに、虫や小動物のたぐいも。残飯もね。なんでも食べるんです。馬とは違います。正直にいって、ここではあれだけの量の馬は養えませんね」
「秣がたりないと？」
ヤエトはうなずいた。騎士団の馬は、文字通り北嶺を食い潰してしまいかねない。
「最低数を残し、馬は麓に戻すべきです。厩舎は麓に作らせましょう。隣郡との境界の、ちょうどこのあたりに……郡尚武局の駐屯所兼関所にするよう、太守に建白するつもりです」
地図で場所を示すと、騎士は眉根を寄せ、するどく尋ねた。
「本気か？」
「殿下にお口添え願えますか」
「馬は帝国騎士の誇りだぞ」
「北嶺の地形は、馬には向いていません。まず間違いなく機動力、持続力、すべてにおいて鳥に劣ります。馬を養うには道路の整備、秣の買い付け、どちらも巨費を投じる必要がありますが、それに見合う

旨味はありません。鳥を使うべきです。ただし、麓には馬を残しておかねばならないでしょう……おわかりですね」

「鳥は外に持ち出せない、と？」

「気候が合わず、長くは生きられないそうです」

なるほど、とつぶやいたときには、ルーギンはいつもの穏やかな微笑を取り戻していた。

「それで、外では見たことがなかったのか」

「納得してくださったら、騎士団の説得はおまかせします。貴殿が団長でしょうから」

「団長といっても、綺麗なお飾りとしか思われていないんだけどな」

真顔で、さらりといってのけた。ここで鼻白んでいては、この男の相手はできない。

「おや、そうでしたか。眉目秀麗で家柄も申し分なく、剣士としても都で一、二を争う腕前と聞き及んでいますが。帝国貴族の華、騎士の中の騎士との呼び声も高いと」

「……そういうところ、変わってないな」

「変化のない、退屈な男なのですよ。では、そろそろ寝ますので」

ヤエトは退出をうながした。もう体力がもたない。すでに、頭の奥に鈍痛を感じはじめている。

騎士は立ち上がると、杯を返した。

「ずっと、詫びる言葉を探していたんだけどな……その機会も」

「なんの話でしょう」

束の間、視線が合った。騎士の眼は炉火を映して落日のように赤く、訪れる夜を待つ静けさをたたえていた。

「謝らせては、くれないのかな」

「ご自分のなさったことを罪に貶めるおつもりですか。そんなことは望みませんよ」

ルーギンは答えなかった。かすかにくちびるが動いたが、吐息は言葉にはならないまま、騎士は踵を返して立ち去った。

手にした杯を眺めたまま、ヤエトは今の会話を反芻していた。思いだすこともないほど昔の話だ。ずっと気にしていたのなら、ルーギンは誠実な男だ。貴族にしては。

4

太守がはじめて臨席した朝議は、いつも通りに始まった。つまり、怒鳴りあいだ。

あまりの変化のなさに、ヤエトはおどろいた。

――帝国の権威が身に染みていないのだ。

昨日の衝突で、まったく懲りていない。むしろ、挑戦的になっているのではないか。とくにセルクの声の元気さときたら、耳が痛くなるほどだ。

皇女が黙って聞いているうちだ、とヤエトは先手を打つことにした。早めに立ち上がる。

「歓迎式典についてですが」

ヤエトは皇女の左、壇上に席を占めていた。皇女を挟んで反対側に、ルーギンが控えている。尚武官は尚書官の議事に口をはさまないのが通例なので、今の彼は護衛として控えているに過ぎない。

――ここの尚書官ども全員、尚武官にしてしまってはどうだろう。

ひとりで仕事をする方がずっと楽そうだ、と考えながら口を開いた。

「《夏入りの祭り》とあわせて開催する、という意見が大勢を占めているようです。反対意見のある者は、あらためて発言を」

すかさず、セルクが立ち上がった。

「祭りは神のためのもの、太守殿とは関係ない」

「そうでしょうか」

「当たり前だ！」

反射的に耳をふさぎたくなるような大声だ。声の勢いだけでヤエトに勝とうとでもいうのか。

「太守職のなんたるかを、勘違いなさっておいでは？　皇帝陛下の代人として、当地へお運びくださ

ったのです。祭りは神と人との交感のためのもの、ご着任を当地の神に言上する好機ではないですか。これより先、当地の民は太守におまかせあれと」

セルクがなにかいいかけたのを、横に座っていた仲間が押さえた。それでも、言葉が漏れた。

「……治めるとは、誰何した者をいきなり打ち倒すことか」

心中、ヤエトはため息をついた——馬鹿過ぎる。

皇女が身じろぎしたのを視界の片隅でとらえながら、彼は答えた。

「そうした行き違いをなくすためにも、太守着任の報は行き渡らせるべきです。祭りとあわせて祝宴を張れば、より多くにより早く知らせることが可能です。民への負担も軽く、理にかなっています」

今度は、セルクも反論しなかった。できなかったのだろう。彼は正論に弱い。

論破しやすい相手で助かる。正論で押すだけなら、ヤエトは負けたことがない。

「では、祭りにあわせて、ということで決とします。よろしいでしょうか」

皇女はうなずいた。本人は重々しくとでも思っているのだろうが、どう見ても子どもだ。口を開いて声を発すれば、ますます愛らしく見えるばかりだ。

「よい」

「それでは——」

「だがな」

ぎょっとした。皇女は立ち上がっている。なんとなく嫌な予感がした。

皇女はヤエトの方は見ていない。仰々しく手を広げて、はっ、と笑った。

「時間の無駄だな。難癖をつけては罵り合うのが朝議と心得ておるなら、思い違いぞ。帝国は馬鹿を養う金子は持たぬ。官吏として仕える気があるのなら、それに見合う働きをせよ。聴聞する価値がある論議ができるようになってから、呼びに来るがよい」

そのまま、衣の裾をあざやかにさばいて退出して

しまった。ルーギンが無言でそれに従う。
ヤエトは、自分もその後について議場を出たいという衝動に駆られた。副官としては、それも間違った行動ではない。たぶん。……いやどうだろう。
「なんだ、あの小娘」
誰がつぶやいたのか、独り言にしてもやけに大きな声で、しんとしていた議場によく響いた。
すぐには誰も答えない。
――あの小娘は皇帝の娘で、この北嶺の太守だ。
小さな身体に高い矜持。それを支える強大な権力を、当然のものとして育った少女だ。
伝わらないだろうな、とヤエトは思った。かれらの世界は北嶺の中だけで完結している。帝国が象徴するすべての力、あからさまな武力のみならず経済力、そして他を圧倒する知識と文化。すべてが、かれらには摑みがたい大きさなのだ。
「仕える気があるのか、……って、なあ？」
誰かが不安げにつぶやいた。
「村の代表を出せというから、ここにいるだけだ」
「なんだって、あんな小娘に馬鹿にされなきゃならないんだ」
ここで自分が黙っていたら、どうなるだろう。北嶺人の全員が職を返上して姿を消したら？　公然たる叛逆に近い。無自覚に、独立戦争勃発だ。
無論、相手をするのは皇帝の本意ではない。北嶺などに人手を割きたくないだろう。だが、背かれたとなれば、鉄槌をくだす以外に選択肢はない。
先行きを考えるほど暗くなるヤエトの気も知らず、北嶺人たちは大声で文句をいいつづけている。
「虚仮にされて、黙ってるのもな」
「なんであれを歓迎しなきゃならないんだ」
「俺たちが辞めるより、あれを追い返せばいい」
ヤエトは領地を欲した皇女を呪い、それを認めた皇帝を呪い、皇帝の言葉を伝えた伝達官を呪った。そして最後に、左遷のつもりで自分をここに送りこんだ、尚書局の鼻持ちならない馬鹿を呪った。

呪いながら息を吸い、腹を据えた。
「やめておいた方が賢明でしょう」
全員が口をつぐんで彼を見た。
ああ、面倒くさい、とヤエトは思った。なぜ自分はここにいるのだろう。不思議でならない。
沙漠を越えて生き延びてしまったこと自体が、間違いだったのだ。いろいろな意味で。
重たい沈黙を払って、彼は言葉をつづけた。
「正式に任命された太守を追い出せば、北嶺全体が背いたとみなされ、討伐隊が派遣されるでしょう。間違いなく、戦になります。帝国は強いですよ」
「あんたは帝国人だから、帝国が強いと思うんだろう……俺たちだって、弱くはない」
反駁したのはセルクではなかった。珍しい。
――つまり、それだけ異常事態ということだ。
「北嶺はすでに帝国なのです。あなたがたも、帝国人なのですよ」
男たちは顔を見合わせた。
まったく、自覚がない。どうすれば、理解させられるのだろう。
「帝国の傘下に入る気がなければ、あなたがたは十数年前に戦うべきでした。そうではなく、平和的に帝国に従うと決めたのではないのですか」
「俺たちのやりかたを尊重するという約束だった」
誰かが不安げにつぶやくと、そうだ、そうだ、という同意の声が議場に満ちた。
「尊重していますよ。暦は北嶺独自のものを使っているし、祭りにも制限はない。実に寛大です」
「そんなの当たり前のことだ」
唸るように答えたのは、セルクだ。ヤエトは議場に並ぶ人々を見渡した。
各村の代表は、全部で二十一名。昨日まで議長席に座っていた老人も含めての数である。
例の老人だけは、今日も静かに座ったままだ。うるさかろうが、場の雰囲気が張りつめていようが、彼の瞑想の邪魔にはならないようだ。

うらやましい、とヤエトは思った。理想だ。
「当たり前ではありません」
「帝国人のあんたに、なにがわかる？」
「生粋の『帝国人』など、帝国全体の人口からみれば、ひと握りに過ぎません。わたしも、元は帝国に征服された国の民の末裔です」
全員が、口をぽかんと開けた。
あれだけ、皇女やその側近の貴族たちと容貌が違うのに――北嶺の民の方が、見た目はよほど生粋の帝国人に近い――気づかない方が理解に苦しむ。
阿呆面をさらす男たちを見渡し、彼はつづけた。
「皇帝がどこまで容赦のない命令を部下にくだせるか、そして兵たちがそれを実行できるかは、自分が証人となれます。背いた者に、温情は与えられません。あなたがたに、そこまでの覚悟がありますか」
この持っていきかたは、逆にかれらを刺激してしまったらしい。
「おまえが気にする話じゃない」
「そうだ、俺たちは誇りをもって戦うぞ」
――馬鹿ばっかりだ。
どうしても、声が尖った。
「なんのために、戦うのです」
また、返事がなくなった。
静かになった議場に、ヤエトの声だけが響く。
「我が先祖は、平和を選びました。十六年前、あなたがたが選んだように。帝国と争わず、その緩やかな支配を受け入れることを選択した――それを許すだけの度量が、帝国にあったからです。並の戦闘国家であれば、そんなことはできない。降伏を申し出て下げた首を刎ねられ、妻子は犯され、財宝は奪い去られ、街は焼かれて灰燼に帰するのみ。この土地が、そんな辱めを受けましたか？」
誰も答えない。
ヤエトは壇を降りた。いつまでも見下ろしているのも、奇妙な具合だ。
「小娘に馬鹿といわれた？　それだけのことで帝国

に対抗するなら、ほんとうに愚かなことだ。馬鹿といわれてもしかたがない。そもそも、議事進行に無駄な時間がかかり過ぎているのは事実です」

「反論するな、ということか？」

今度は、訊き返したのはイスヤームだった。

「違います。議論は尽くさねばならない。太守の仰せは、無駄な罵り合いをやめよという意味です」

ヤエトは手にしていた紙をイスヤームに見せた。

「なんだこれは」

「自分が赴任して以来の議事録です。本題に関係があると判断したことだけを記録しました――多少は脱線した部分も注記しましたが、その量です」

帝国の議事は年次ごとに綴じる決まりだが、この調子なら、薄い冊子になるだろう。

「たったのこれだけか」

イスヤームは、少なからず衝撃を受けたようだ。

「日程は決まっていますし、競技の件で揉めていただけですから。決定事項だけなら、一行です」

いつの間にか、皆が周囲に集まっている。

セルクまで、覗きこみに来ていた。

「太守のおっしゃりようは少々極端ですが、反論しようもありません」

「だが、あんな小娘にいいようにあしらわれて、黙って従うわけにはいかん」

さっきの大き過ぎる独り言と同じ声だ。目が合うと、相手は反抗的に口を引き結んだ。黙ったというより、文句があるならいってみろ、という感じだ。

「それが『本題と関係ないこと』なのです。太守は我々の上官で、命令には従わねばなりません。年齢や性別は顧慮に値することではない。問題の本質を見てください。太守のご命令は、なんです？」

「……金は払いたくない」

ヤエトは頭を抱えたくなった。これはセルクとは別種の馬鹿だ。

「なぜ、金を払えないといわれたのでしょう」

「馬鹿だから」

「馬鹿だと判断された理由は」
「さあ？　小娘の考えなど、わかるものか」
「『小娘』という言葉を使わず、もういちど」
「……太守の考えなど、わかるものか」
「部下が太守のお考えを汲めぬと？　わかって当然のことがわからない、これを馬鹿といいます」
「なにを――」
「待て、ダニウ」
ヤエトに食ってかかろうとした男をおさえたのは、セルクだった。おかげで、ヤエトは自分の台詞を最後までいうことができた。
「つまり、太守のご判断は正当だということです。ここにいるのは馬鹿ばかりだ」
断言して、ヤエトはおどろいた。今まで我慢をかさねて隠していた本音をそのまま吐きだした、その効果に――馬鹿に馬鹿と遠慮なく指摘するのが、こんなに爽快だとは。
いわれた方も、おどろいただろう。たくさんの顔が彼を見返していた。
誰も、なにもいわない。
ヤエトはイスヤームの手から紙を取り戻した。衣擦れの音がはっきり聞こえ、議場がこれほど静まるのははじめてだ、と思った。
「辞めろというのか」
イスヤームが唸るように尋ね、ヤエトは苦笑して答えた。
「馬鹿は辞めろといわれて辞めますか？　自分は馬鹿だと認めるのですか。頭を冷やし、なにが北嶺のためになるかを考えるべきでしょうね。ですが、それはわたしの仕事ではありません」
「どういう意味だ」
「わたしは帝国の尚書官です。あなたがたとは、立場が違い過ぎる。あなたがたは、北嶺を北嶺として、帝国の一部ではないものと考えたい。そこに帝国の尚書官が立ち入っても、無意味かと存じます」
退出しようとしたところを、呼び止められた。



「しかし尚書官、あなたはどうするんだ」
ヤエトは眼をしばたたいた。
重みを感じて見下ろすと、声の主はヤエトの官服の袖を摑んでいた——太守副官の権限で、官服の袂を短くすることはできないだろうか？
「俺たちを見捨てるのか」
視線を上げると、セルクの目と目が合った。なんだか切羽詰まっているようだ。
しかたなく、ヤエトは適当に答えた。
「自分は郡太守の副官として、与えられたつとめを果たすだけです」
「俺たちではなく、帝国の側につくのか」
ここでようやくヤエトは気がついた。
——また忠誠を問われてるのか。
昨夜も問われたばかりだ。皇帝と皇女、どちらに従うのかと。
——こんな質問は、もううんざりだ。
「どちらにつくもなにも、我々は全員、帝国人ではありませんか。少なくとも、わたしはそう考えています。そのことは、何回もお伝えしたはずです」
「……それはそうだが、言葉にするだけなら簡単だろう。ここは帝国だとか、俺たちは帝国人だとか。それを、どうやって信じろというんだ」
信じるもなにも、それが現実だという話なのだが、どうしてこう伝わらないのだろう。
ヤエトは大きく息を吐き、セルクを見返した。
「あなたがたが北嶺人であると主張するなら、わたしは古王国人であるといいましょうか？　数百年の昔に消え失せましたがね、その政体は。それを名告ることに意味があると、あなたがたは考えているようだ。わたしにいわせれば、滑稽なだけです」
セルクの指を引き剝がすと、彼は今度こそ議場を立ち去った。
——なにが、俺たちを見捨てるのか、だ。
馬鹿らしくて、やっていられない。見捨てるもなにも、はじめから仲間でもなんでもない。

転任を命じられたからここに来て、自分のつとめだと判断したことを、それなりにこなしていただけだ。それは今までも、たぶんこれからもそうだ。

それ以上を求められても、困る。

――ひとりになりたい。

心の底から、ヤエトはそう念じていた。

だが、朝議のあとは皇女に歴史の講義をする予定になっている。しかたなく向かった皇女の部屋で、彼は不機嫌そうなナオに出迎えられた。

「姫様は、尚武官の調練のご観覧に行かれました」

「調練？　中庭でしょうか」

「いえ……馬でお見回りをなさるとか」

逃げたな、とヤエトは思った。昨夜のやりとりを考えれば、予測しておくべき事態だった。やはり、議場の馬鹿どもは放っておけばよかったのだ。

「そうですか。……ところで、なにかご不自由なことはありませんか？　物の不足や不手際がありましたら、おっしゃってください」

「いいえ、とくには」

「臨時に人手を集めはしましたが、どうしても都の女官のようにはいかないでしょう」

イスヤームが連れて来たのは、どうひいき目に見てもナオと同年輩か年上の女ばかりで、年頃の皇女のお付きという雰囲気ではなかった。理由は察しがつくが、それにしても華がない。

聞けば、ナオは皇女の世話は自分ひとりでするといい、手伝いを断ったという。

「都の女官でも、同じことです」

「……は？」

「姫様は、お気に召さない者をお身の回りに置くことはなさいません。ですから手伝いは不要です」

やわらかな口調で、しかし断固として宣言すると、ナオはヤエトを扉の外に閉め出した。

なるほど、彼も皇女のお気に召さない者のひとり、ということだ。

――やっていられるか。

さすがにむっとして、ヤエトはその場を立ち去った。向かったのは厩舎だ。

厩舎長は、議場で居眠りをしている長老と同年輩、ひょっとするとそれより年嵩なのでは、と思える皺深い老人だ。ただし、動きは機敏である。

新しい助手らしい少年をなにか早口に叱っていたが、ヤエトに気づくと笑顔になった。

「なにか面倒ごとは起きていませんか」

「大丈夫。鳥たちも、とても元気だ。シロバを出すかね。少し待ちなさい」

さっと厩舎の中に入って行ってしまったから、少年とふたり、残されてしまった。異人種に慣れていないのだろう、少年は気の毒なほど硬直している。

じきに、老人は鳥を引いて戻って来た。巨鳥は太い脚を折り畳み、地面に腰を落とした。

鞍は分厚い毛織り物で、翼の動きをさまたげないよう、その付け根の前後に余裕をもって回してある。つまり、うっかりするとずれてしまい、落馬ならぬ落鳥の原因となるのだ。

北嶺の民は、鳥の都合を人の都合より優先する。それくらい、鳥を大切にしている。その徹底ぶりには感心させられる。

馬は騎士団の誇りだとルーギンはいいはなったが、だったらこんな土地へ連れてくるな、と思う。馬にとって、北嶺は楽園ではない。鳥にとって、下界が地獄なのと同じくらいに。

「気をつけて」

厩舎長は、ヤエトにではなく鳥に声をかけた。シロバは、その言葉が通じたかのように喉を鳴らし、静かに歩きだした。

《地走り》のほとんどが黒一色、日を浴びると玉虫色に光るほどつやつやとしているのに、シロバは全体に灰色っぽく、見栄えは悪い。おかげで、ヤエトにも見分けられる。ほかの黒々つやつやした鳥たちは、どれがどれだかさっぱりだ。

門へ向かう途中、セルクの声を聞いたように感じ

たが、気のせいだろう。彼がヤエトに用などあるはずがない。正確には、用などあってほしくない。

「行け、シロバ」

今日の勤務は終了、とヤエトは決意した。もう、なにがあっても無視だ。

シロバが速度を上げたのは、きっとセルクの声に危険な匂いを感じたからだろう。いや、声など聞こえていないのだった。そうだ、気のせいだ。

ヤエトはそのまま門をくぐった。門衛の姿はない。どうせなら、昨日持ち場を空けていれば、いきなり帝国騎士に殴り倒されるなどという事件も発生しなくて済んだのに——結局は、どこかで誰かが殴り倒されていただろうから、同じことだが。

シロバはまだ足を緩めない。ふり返りたくなる気もちを抑えて、ヤエトは前を見た。

下り坂とはいえ、このあたりはまだちゃんと道があるし……と安心してはいられない。シロバはあっさり道をはずれた。岩から岩へと跳んでいく。迂闊に口も開けられない。

坂を下りきると、ヤエトは自分で歩くことにした。鳥に乗っている方が疲れてしまいそうだったのだ。

城の周辺の斜面は、かなり厳しい。人為的に造成されたものであることは、一目瞭然だ。馬なら道なりに通るしかなく、人がよじ登るのも大変だ。

城を見上げて、ヤエトは思う。

——鳥ならどうだろう。

高所にこれだけの城を築くのは一大事業だ。この城の縄張りをした人物は、どんな敵を見据えていたのか。かなり興味があるところだ。

ヤエトは頭をふった。ぐずぐずしていては、置いてきた用事につかまってしまう。

「シロバ、こっちだ。城址へ行こう」

できるだけ声をかけてやるようにという厩舎長の教えを、ヤエトは忠実に実行していた。手綱を引いて、鳥と一緒に歩きはじめる。

夏が近いとはいえ、風はまだ冷たい。その風が吹

き寄せる方には、見捨てられた旧城祉があった。
崩れた岩のあいだに、かつては城を支えていたと思しき折れた円柱が覗き、深い亀裂が何本も走った危険な場所だ。幽鬼となった王の怨嗟の声が聞こえるという噂もある。好んで訪れる者はいない。
今の城からそう遠くはないが、主塔の上からでも見下ろせる位置ではない。谷間というには剣呑な地形だ。一帯は激しく陥没し、あるいは砕け、巨人のふるう鉄槌でもくらったかのようだ。
赴任したばかりのときも覗きに来たのだが、雪が残っている箇所が多く、危険だった。暇を見てまた、と思っているうちに今日になってしまったが……今、自分は暇なのだろうか、と自問してしまう。
——まあ、休まないと保たないし。
旧城を見下ろす崖に辿り着くと、ヤエトは手綱を岩にかけた。シロバも心得たもので、おとなしく足を折って地面に腰を落ち着けた。
城は、伝説の竜王が建てたものだという。礎石に名が刻まれていたが、城が崩壊すると同時にその石も砕けたと、もっともらしく伝わっている。
つまり、記録はなにもない、ということだ。記録がない以上、すべては憶測に過ぎない。
だが、《化鳥の騎士団》が事実無根のつくり話とは思えない。ここが、その本拠地だったのだろう。
——史官は存在しなかったのか？
くり返し過ぎてすり切れてしまった問いに、違う答を見出せるのではないかと願った時期もあった。諦めたのは、いつだったろう。
沙漠の東に、史官は存在しなかった。
まとまった文書が残されていないのは、北嶺に限らない。どこに行っても、ヤエトを迎えるのは失望ばかりだ。
——せめて城の縄張りがわかる程度に、地形が残っていればよかったのだが。
文書がなければ土地や遺構を見るしかないが、これでは……この地に暴威がふるわれたと知るだけだ。

神罰だった、と伝えられている。

王は封じられた邪竜の力を利用し、さらなる力を引き出そうとして深淵を覗きこみ、竜にその身をのっとられ、己が王国を破壊し尽くしたのだと。

この伝説が残っているのは、北嶺ではない――もちろん、北嶺にはなにも残っていない。せいぜい、幽鬼の声が聞こえるとか縁起が悪いとか、その程度だ――傭兵王国が盛んだったころ、その脅威に脅かされていた周辺国の方だ。

当然、《化鳥の騎士団》は悪者だ。悪しき力を呼び覚ましたがゆえ、その力で自滅したという展開は、筋が通り過ぎて不自然なほどだ。

ヤエトが気になっているのは、その邪竜を討伐した英雄の伝説が残っていないことだ。

世界を引き裂いたと伝えられるほどの竜だ。退治したと華々しく主張する物語がなければおかしいのに、どこにもみつからなかった。

かろうじて、天上の神がふたたび邪竜を封じた、と結んでいる物語はあるが、神々すらその力をはばかり巨人を遣わして戦わせたという竜を、今度は自力で封じましたというのも、おかしい。

――なにがあったのか……。

どうして誰も書きしるさなかったのかと、ヤエトは首をひねりたくなる。城が崩壊したほどの、なにかがあったのだ。せめて語り伝えようとは思わなかったのか。子や孫に、天翔る騎士の物語を。

――忘れたいのだろうか。

虚空へ消えてほしいと願っているのか。

保温のために膨らんだシロバの羽毛に体重を預けながら、ヤエトは空を見上げた。

吸いこまれてしまいそうだ。あるいは、自分が空の色に染まってしまうように感じる。

北嶺の空は、そんな色だった。

そうしていると、なにもかもが些末なことに思えてくる。

いまの生活にまつわる難題の数々はもちろん、沙

漠の向こうに残してきた故郷や家族のことさえ気にならなくなる。すべてはこの空を過る風のようなものだ。つかのま地上を騒がせて、消え去るばかり。

——北嶺に歴史がないのは、この空のせいか。

空に近く暮らしていると、人は人らしさを失ってしまうのかもしれない。

そびえる山々の古さに比べれば、人の過去など、なにほどのものか。風にさらわれてしまうばかりの曖昧な生命の軌跡に、意味があるのか。

——だが、風に立ち向かっておのれの居場所をつくるのが、人の常道ではないのか……。

儚いことと、わかっていても。失いたくないと思うのも。そして、失われてしまうことも……。

羽毛に埋もれたまま、少し眠ってしまったのかもしれない。

目蓋の裏に、いくつもの情景があらわれては消えた。どこまでが目覚めていた自分の想像で、どこからが夢にみた光景なのか。

空を覆う黒い鳥の群れ、陽光をはじいてきらめく鏃、虹の中に浮かびあがる城。鳥の声が耳を圧し、雷鳴が不安を呼び覚ます。

城の露台に光がさす。あふれる光は線となり、面となり、そのきらめきから人の姿が産み落とされる。その身にまとった光がすべて、手元に集約する——しっかりと握られた長い杖に、その先端に。そして光は破裂する。

場面が変わる。静謐な夜。鳥の声は遠く去り、人の気配もほとんどない。月光に照らされて、城は静かに佇んでいる。だがその底に、おそろしいほどの力が蓄積されているのがわかる。

地面が揺れ、大気がはげしく震動する。天地がくつがえり、光は闇へと転落する。

鳥が啼く。

するどい声に、ヤエトははっとして身を起こした。シロバが首を巡らせ、洒落にならないほど大きな嘴の先で、彼の頭を小突いていた。

「……おまえが起こしたのか？」

琥珀色の眼に、ヤエトの顔が映っている。その表情は、子どもじみて滑稽だった。

ヤエトはシロバの嘴にそっとふれた。この鳥にとって、人の腕を噛み切ることはたやすい。だが、シロバは彼を傷つけない。

――こいつは頭がいい。人が鳥の面倒をみるのではなく、鳥が人の世話をしてやるんだと思っている。たしか、そんな風に紹介された。

厩舎長は、シロバ以外の鳥はヤエトを乗せないとまで断言した。いい子ばかりだが――もちろん鳥のことだ――北嶺の人間以外が近づけば、首を食いちぎってもいいと思っている。

なかばは脅しだろうが、食いちぎられてからでは後悔もできないので、ヤエトは老人の案内なしに厩舎に立ち入ることは避けていた。

シロバは違うのだ、と老人はいった。

――シロバは、あんたのお守りみたいなもんだ。

はじめて鳥を貸してくれたときの、厩舎長の言葉を思い出す。

老人は《地走り》の羽根と小さな彫り物を結びつけた紐を見せてくれた。指先ほどの大きさの彫り物は、剣にからみつく竜の姿をしていた。

あのとき、ヤエトは伝説が真実であることを確信したのだ。

――お守り。わかるかね、帝国のお人。これを持っていれば、かならず帰れる。なにかあっても、魂は翼に乗って家族のところへ戻る。

注意して見れば、北嶺の民は皆これを身につけていた。翼に乗せて魂を帰さねばならないほど遠くへ出かけていた時代があり、その頃の風習が今に伝わっているのだろう。

翼はかれらを外へ運んだ。そして、連れ戻した。戻らぬ者もあった……。

「少し、夢をみたようだ」

シロバはヤエトの手から逃れるように頭をふり、

尊大な目つきで彼を見下ろすと、また頭を小突いた。手加減しているのだろうが、それでも痛い。

顔をしかめると、小首をかしげて見返された。なにか問題でも、という風情だ。

「……わかったよ。もう帰ろうってことだろう」

暦の上ではもうじき夏でも、日が暮れれば殺人的な寒さになる。このまま馬鹿みたいに昼寝をしていたらどうなるか、鳥にでもわかるのだ。

ただし、城に戻ったヤエトがどんな立場に置かれるかは、鳥にはわからない。皇女には信用されず、たぶん嫌われ、北嶺の民にも敵視され。馬を麓へという案を通せば騎士団にも憎まれるはずだ。

このまま逃げだしたいほどだが、シロバは彼を連れ戻すためのお守りだ。以前、帰り道を間違っていたときは、小突かれた上に襟首を嘴でつままれ、正しい方角へ引きずられたこともある。

現実はいつも滑稽で、哀しいものだ。

「面倒くさい」

つぶやいて、ヤエトは立ち上がった。面倒くさいのが人生だ、と諦めるしかなかった。

5

翌朝、議場には誰もいなかった。

城の中、それも自分がいるべき場所にいるだけで、ひとりになれるのだ。大歓迎だ……というのは、さすがに開き直りが過ぎるかもしれない。

実のところ、頭と胃が痛かった。

皇女はともかく、まさか尚書官が誰も姿をあらわさないとまでは思っていなかったのだ。

――まあ、なるようになる。

そう思うしかない。

言葉は尽くした。これ以上は、なにをどう説明しても無駄だろう。あとは待つことしかできない。

ヤエトは手にした議事録の束をぼんやりと眺めた。年次ごとにまとめ直すのに時間がかかり、昨夜はほ

とんど寝ていない。赴任してすぐに確認すべきだったのだが、実際の朝議があのありさまなので、やる気が出なくて放ってあったのだ。

予想に違わず議事録は薄く、まとめてしまえば読み通すのは容易だった。前任者は何年ここにいたのだろう、怒鳴りあいの要点だけを記録することには熟達したようだ。

「おはよう」

声をかけられて我に返った。

議場の入口に、老人が立っていた。杖をつく手がふるえている。

「おはようございます」

手を貸そうと近寄ると、老人は彼を見上げた。

「今日は誰も来んよ。わしは、あんたの顔を見に来ただけだ」

思わず、ヤエトは自分の顎を撫でた。

「おもしろい見物でもないと思いますが」

「いいや、あんたの顔は珍しい顔だ。糞南方人みたいに髪も眼も黒いが、肌の色がもっと薄い」

「沙漠の向こうの出身ですから」

椅子を引き寄せたが、老人は座らなかった。杖にすがったまま、ぽつりといった。

「あんたは正しいと思うよ」

ヤエトはまじまじと相手の顔をみつめた。

金髪は色褪せ、ほぼ白くなっている。何歳くらいなのだろう。深い皺のあいだに埋まったような眼が、ちかりと光った。

「皆はただ、自分より相手の方が正しいということを認めるのに、時間がかかってるだけだろうさ。わかるかね、わしのいうことが」

「……たぶん」

「あんたは正しい。戦うなら、十何年か前、帝国の使者を斬り捨てるところからはじめるべきだった。あのとき、わしは、戦おうといったんだ」

ヤエトは絶句した。老人は彼の顔を眺めて、ほれ、といった。

「おもしろい顔をしてくれたぞ」
「いや……おもしろいというような話では……」
老人は決定権を持っていなかったのか。いや、今でも周囲はこの老人をかろんじているように見える。少なくとも、ヤエトは今まで彼の存在を空気程度にしか感じていなかった。
いろいろと、考え違いをしていたようだ。
「当時は勝ち目があった。今はない。娘を追い出したり殺したりしたら、皇帝を本気にさせるだけだ。人質にとっても同じこと……今になって、帝国の支配は嫌だとぬかしても遅い。馬鹿者どもめが」
口調はのんびりしていたが、眼差しは厳しい。ヤエトを睨んで決めつける。
「あんたもだ、馬鹿に馬鹿といってどうする」
「不調法者で……」
「あのやりかたはない。揉めるだけだ」
「はい」
「素直だな」
「自分は、相手が正しいと思ったらすぐ認めてしまうので。それができない人間のことが、どうもわからないのです」
老人は眼をしばたたき、それから、咳込んだ。それとも笑っているのだろうか。涙目で見上げられ、どうやら笑われたようだと思った。
「まあ、わしは黙って見ているつもりだが。そういう役回りの人間も、必要だからな」
そうですか、とは口にしがたい。ヤエトが返答に困っているあいだに、老人は杖をつき直し、身体に合わない官服の裾を引いて向きを変えた。
「待ってやりなさい」
ひとこと残して、彼は立ち去ってしまった。話は終わり、ということだろう。
まとめてしまえば、「ヤエトは正しいが、助力する気はない」と宣言されたに等しい。それってどうなんだ、と思う。なにか意味があるのか。
とにかく、議場を出る踏ん切りはついた。

ヤエトは無人の部屋を後に、冷える廊下を歩きだした。しっかり着込んでいるが、寒いものは寒い。

どうせ今日も逃げられるのだろうが、約束は約束だ。皇女の部屋へ行かねばならない。

議場は五層あるこの山城の最下層、つまり一層にある。門をくぐると、たいらに造成された石畳の広場があり、これを囲むように平屋が建っている。向かって左手が議場、中央奥は公的な行事に使う広間、右手側はこまかく分割された部屋が並んでいて、今はこれが尚武官の宿舎になっている。

厩舎はその裏手の斜面に二層にまたがって作られている——どう考えても、馬向きのものではない。セルクが作った仮小屋は門前の広場の一隅にあって、騎士団の馬がぎっしり詰まっている。

二層へ上がる正面階段は、ある程度の幅があるが、屋根がない。冬になるとここは埋もれてしまうから、脇の狭い階段を使うらしい。

二層の右側は倉庫、左側は厨房につながっている。右奥は壁をへだてて厩舎の二階になる。

三層は、こまかい部屋に分かれており、今は尚書官の個室にあてられている。ヤエトの部屋があるのも、ここだ。

四層はほとんど飾りのようなものだ。壁に囲まれた殺風景な庭が、そのほとんどを占めている。

それらすべてを見下ろすのが五層だ。険しく切り取られた斜面に守られ、階段はたったひとつ。途中には小部屋があり、尚武官が交替で詰めている。

当然、ヤエトも誰何（すいか）されるが、太守に用がある、と返すだけだ。遮られれば、皇帝陛下の勅命により副官に任じられたゆえ、その任を果たさんがために云々（うんぬん）と答えれば、相手はおとなしくなる。

さすがに、帝国の尚武官は権威に屈することを学んでいる。真上皇帝陛下万歳。帝国に栄光あれ。

奥にはさらに短い廊下があり、最後に五段ある階段を上ると、ようやく主塔の入り口だ。

皇女はこの日も外出してしまったようだった。ナ

オは相変わらずヤエトを部屋に入れない。
なるほど、と納得して退散したものの、それが三日つづくとさすがに捨て置けなくなる。
もちろん朝議の方も滞ったまま、祭りの期日だけが着々と近づいてくる。もう勝手にしろ、といいたいところだが、そうもいかない。
とにかく、馬を麓に下ろす話だけは決めてしまいたい。人の争いに動物を巻きこむのは無意味だ。
三日目、ヤエトは扉を閉めようとしたナオに向かって宣言した。
「では、こちらで待たせていただきます」
「お部屋には――」
「中に入れていただくには及びません。扉の前で、待たせていただきます。どうぞ、おかまいなく」
ナオにもいいたいことはあっただろうが、扉を閉めるまでの時間が少し長かっただけで、結局は無言だった。
短い廊下の幅は狭く、天井もあまり高くない。窓らしい窓も、ない。矢を射るための狭間から光の筋がさしこんでいるが、あまり明るくはなかった。
階段の上に座りこむと、ヤエトは持参した角灯に火を入れた。燃料は例の鳥の糞だが、角灯自体は沙漠の向こうから運んで来た私物だ。
持参したのは、議事録以外の資料だ。倒れてしまって引き継ぎもうやむやだから、時間があるなら読み直そうと思ったのだが、前任者は後任に伝えねばならないことなどないと考えていたかもしれない。
――ここには過去がない。未来もない。
前任者にとって北嶺とは不毛の地、夢みるすべもない最果ての異郷だったのだ。
自分にとっては、とヤエトは薄い冊子をめくりながら考えこんだ。北嶺とは、なんだろう。
――異域だ。
人の住む場所ではない、と思う。
気候が厳しいから、というだけが理由ではない。
視界に飛びこんでくるのは霊峰の威容、夜明けに

あたりを満たす霧は白い海のよう、雲の隙間からさしこむ光は神々しく、晴れれば空の色は格別、谷を渡る風の音はまるで記憶の底に沈んだ音楽。

人の営為が馴染む土地ではない。あらがいようもなく魅了されるが、同時に突き放されもする。おまえはここでは生きられまい、と。

だが、北嶺の民にとっては、この荒れ野こそが故郷なのだ。

――自分の故郷は、どこだろう。

ふとそんな疑問が浮かび、ヤエトは揺れる灯火をみつめた。

――帝国か。

沙漠のこちら側を、故郷と呼べる気はしない。沙漠の向こうであっても、帝国を故国とは思えない。では、何百年の昔に滅びた古王国がそれかというと、そうも思えない。

膝にひろげた杜撰な戸籍に視線を戻し、自分の本質はこんなものだ、と思った。

いいかげんきわまりないそれらの資料は、どことなくヤエト自身に似ている。ぱっと見の体裁はととのっているが、しるされているべき場所に、なにもない。そういう存在なのだ、彼は。

「尚書官殿」

不安げな声に、ヤエトは顔を上げた。暗くて見づらいが、この声は間違えようがない。セルクだ。ずいぶん遠くで立ち止まって、動かない。

「どうしました」

「いや……こちらにいると、聞いたので」

「よく詰め所を突破できましたね」

「尚書官殿に用事があるといったら、通れた」

まったく、権威主義万歳だ。

セルクのように体格のいい男が立っていると、狭い廊下がますます窮屈に見える。妙に不自然な距離をたもったままなので、居心地が悪い。

「それで、なんのご用ですか」

「……なにを見てるんだ」

ヤエトは肩をすくめた。
「資料です。戸籍とか……。これは古過ぎますね。今の状況を反映しているとは思えない」
「戸籍？」
「どの村に誰が住んでいるとか、家族は何人とか、資産はどれくらいとか……そういう資料ですよ」
「ああ、なるほど」
うなずいたが、たぶん理解はしていない。上の空で、適当に答えているだけという風だ。
ヤエトはだんだん苛立ってきた。この数日、忍耐力を試されているのかと思う状況がつづいている。些細なきっかけで自制がきかなくなりそうだ。
つとめておだやかに、声をかける。
「見るなら、こちらへどうぞ」
「いや……べつに」
セルクは拳を握って、ぐいと顎を上げた。なにか決意したようだ。
黙って見守っていると、不意にヤエトの視線に気づいてたじろいだ。
——馬鹿か。
あらためて問うまでもない。馬鹿だった。
しかたなく、ヤエトは戸籍に視線を戻した。帝国領に組み込まれたとき以来、精査されていない——十数年前の情報しかないなど、信じがたい。これで、どうやって適正な税を納めさせるというのか。
「……たのみがある」
ためらっていても、セルクの声は大きい。詰め所の兵士にも、ひょっとすると扉の中のナオにも、聞こえているかもしれない。
妙なことをいいださないといいが、と思いながらヤエトは答えた。
「なんでしょう」
「歴史を教えてくれ」
「……は？」
完全に、ヤエトの予測の範囲外の申し出だ。さすがに、どう返すべきかわからない。

「あなたは自分の故国のことを知っている。つまり、……何百年も昔の話を、昨日のことのように詳しく知っている。俺も、そうなりたいんだ。北嶺の過去を、誰も満足に説明できない。これじゃ駄目だ。そうだろう？」

そんな場合か、まず目先の問題をなんとかしろ、足下に火がついていることに気づけ！　……と、役にも立たない戸籍を投げつけて怒鳴れたら気分がよさそうだ。

だが、実際にヤエトがしたのは、その戸籍をセルクの方にさし出すことだった。

「これをご覧なさい」

しかたなく、セルクは距離を詰めてそれを受け取った。一瞥して、あっ、と声をあげる。

「俺の村だ」

「十四年前のものです」

「俺の名前がある。十四と書いてあるな……十四年前という意味か」

「それはあなたの年齢ですね、当時の」

するとセルクは二十八歳ということになる。この男が二十八？　このあやしい戸籍、そもそも適当なことを書いてあるだけなんじゃないのか？

「なるほど、十四年前なら十四だな。そうか」

セルクはうなずいた。間違っていないようだ。勘弁してくれ、と思いながらヤエトはセルクを見た。熱心に戸籍をめくる彼の表情は、やはり子どもじみている。変な男だ、と思う。

「これが歴史です」

え、とセルクが顔を上げた。口が開いたままになっている。

「これの、どこが？」

「十四年前、どこに誰が住んでいたか、わかります。人の移動や生死の簡単な記録からでも、ある程度のことは読み取れます。こうした記録の積み重ねが、歴史全体を把握するための重要な要素になるのです。でも、……前任者は職務を怠っていたようだ。これ

一冊しかない」
「こんなものが……」
「こんなものの情報で、村ごとにどれだけの租税をおさめるかが決められています。十四年前の人数と今の人数に違いがあっても、反映されない。祭りのための準備も、村ごとの負担はどうやって決めているのですか」
「それは……慣例で」
「昔より富んだ村、貧しくなった村があるのではないですか。慣例で押し通せば、じきに破綻（はたん）します」
セルクは答えなかった。考えてみたこともなかったのだろう。
放置区であった今まではともかく、これからは物流も激しくなる。貧富の差も大きくなるだろう。大きな権力がはたらけば、かならず不公平が起きる。
「戸籍の確認は早急におこなうべきでしょうね」
それよりまず騎士団の馬をなんとかせねばならないのだが、その話をセルクにする気はなかった。なにが起きるかわからない。
「そうか……そうだな。なんとかしよう」
「あなたがたは、文字を読むことができる」
ヤエトのつぶやきは、セルクの耳に届いたらしい。
「もちろんだ。読み書きができなければ、尚書官として採用されない」
「しかし、それは北嶺の文字ではない。あなたがたが使っている文字は、沙漠の言語をあらわすために創案されたものです」
おそらく、北嶺には独自の言語があったはずだ。それは《化鳥の騎士団》崩壊とともに衰えた国力を反映して、消えてしまったのだろう。さほど珍しいことではない。勝者に仕えるためには、その言語を覚えねばならない。子や孫の世代は、父祖の言葉より先に征服者の言葉を覚えるようになる。
文字がなければ、言葉はさらに容易に消え去ってしまう。ほとんど痕跡も残さずに。
へえ、と感心したようにセルクは戸籍を眺めた。

「歴史と文字は、不可分の関係にあります。北嶺には文字の記録がない……すなわち、歴史がない。もっとも古い記録は、この戸籍なのですよ。学びたいのは、わたしの方だ」

なぜ、《化鳥の騎士団》は滅びたのか。崩壊後も、ある程度の統率力は残ったはずだ――でなければ、こんな城を建てられるはずがない。考えれば考えるほど、わけがわからなくなる。

ふと、ヤエトは廊下の奥を見た。

すぐ前にいるはずのセルクの姿を透かしてその向こうが見えることを、はじめは不思議に思わなかった――その時点では気がついていなかった。

あたりは暗い。矢狭間からの光は淡く、とても昼とは思えない。満月の夜より暗いといっていい。闇に包まれた廊下の奥で、なにかが動いていた。

皇女が帰って来たにしては静かだと思いながら目を凝らすと、その深い闇の向こうに、人影が見えた。ちょうど廊下の高さと同じほどの背を、窮屈そうに屈めて歩いて来る。

なにもかもが異様に克明に見えた。こまかな装飾がほどこされた耳飾り、淡くかがやく黄金の髪のひと筋ひと筋、縫い目がわずかに引き攣れた袖の付け根、布を織りなす糸の一本ずつまで。

すべて、見えた。

引き結んだ口の奥、言葉にならない音が渦巻き、眉間には深い皺。

――彼は悩んでいる。

一瞬で、男の姿が五歩ほど前に戻った。廊下の奥。階段との境。はじめに目にした地点から、ふたたび男は歩きはじめる。寸分の狂いもない動作、同じ歩幅でこちらへ歩いてくる。

男の苦悩が手にとるように感じられた。

――この先、どうすべきかを悩んでいる。

あと三歩で手が届く。

束の間、男は足を止める。矢狭間（やざま）の向こうを覗いているのだ。しらじらと夜空に浮かび上がる《天の

槍》を、男は見る。銀河をまとった嶺を吹き過ぎる、風の唸りを聞く。

——神霊にでもすがりたいと念じている。

男が視線を正面に戻した。ヤエトを見ている——いや、違う。彼を突き抜けた、向こう側を見ている。まっすぐに……その青い眼で。

ヤエトは動かない。まばたきすらできない。

あと二歩、そして一歩。

身動きのできないヤエトを、人影は苦もなくすり抜けた。

背後で、扉が閉まる音がした。

大きく喘いでようやく、ヤエトは自分が呼吸をしていなかったことに気づいた。手足の先がしびれて、感覚がなくなっている。

ふり向いてみれば、扉はしっかりと閉まっていた。金属製の、重たい扉だ——その向こうに、見てはいけない幻影が詰まっているような気がして、ヤエトはふたたび喘いだ。息を吸っても、空気が少しも入ってこない。苦しさに、身体を折った。

そんな馬鹿なことがあるか、と思った。

逃げなくては。いや、逃げられない。

「尚書官殿」

彼を呼ぶ声は、遠い。誰だろう——セルクのようだが、あの男はもっと大声のはずだ。

耳もとで叫ばれているのに、分厚い布を通して聞いているようだ。

「尚書官殿！」

全身が冷えていた。汗のせいだ。急速に、意識が闇に呑まれていく。

閉じた目蓋の裏側は、真っ暗に塗りこめられた闇だった。記憶の層を、時の回廊を、彼は遡る。

自分では止められない。奔流に呑まれてすがる場所もなく、底なしの虚無へと吸いこまれる。

はっと気がつくと、あたたかいものを握りしめていた。手だ。誰の手だろう。

ヤエトは自分が握りしめているものを見た。白い

手、その手首にまとわりつく黒い枷。

——嘘だ。

必死に眼を開けると、今度は現実が見えた。握っていたのは、皇女の手だった。指輪もつけていない、小さな手だ。

「……ご無礼を」

喉が詰まって、それ以上、言葉をつづけられない。自分が発熱しているのがわかった。灯火がまぶしくて、長いあいだ眼を開けていられない。頭の奥から首の裏側にかけて、鉄板を入れられたようなこわばりと、金槌で殴られるような痛みを感じる。

「喋るな」

皇女の声は、するどい。鼓膜に突き刺さりそうだ。これだから竜種は困る。

——静かにして、寝かせてくれ……。

頭を動かし、息を呑んだ。痛みが激しい。咳込むヤエトの手を、皇女が握り直す。

苦痛から遁走しよう、すべての感覚を手放そうと、彼は眼を閉じた。現実を捨て去ろうとした。

ふっと気が遠くなったとたん、すぐそばから声が聞こえた。

——おまえは死にたいのだ。

——死んですべてを終わりにしたい。

そうだとも。乾いたくちびるが動きさえすれば、殺してくれと願っただろう。皇女の短剣は、よく研いであるに違いない。

——わたしは必死で生きねばならぬのです。

忘れろ、とヤエトは自身に命じた。あれは自分には関係のない話。何百年も昔に終わったことだ。今、生きてここにいる我が身のことを考えるのだ。

悪寒が胃の底を冷やした。冷や汗が噴き出て、じっとりと手が冷たくなる。皇女に握られたその手だけが、ヤエトに自身の存在を教えていた。

——この痛みが教えてくれなければ、自分がここにいることさえ忘れてしまう。

これは夢のつづきなのか。不安に胸が押し潰され

る。まるで、自制が効かない。調息もできず、あえぐばかりだ。
「手が氷のようだ」
皇女のつぶやきが耳に痛い。大きな声でもないのに、どうしてこんなに響くのだろう。今やヤエトの頭蓋は、苦痛という名の楔を打ち込む工人たちでいっぱいだ。熟練工がふるう鎚は、みごとに一定の間隔と強さをたもっている。もう我慢できない。
苦痛の合間から、ヤエトは言葉を絞り出した。
「太守……お手を引いてください。大丈夫です」
「そなたが握っているのだぞ」
そうだろうか？　ヤエトはこみあげる吐き気を呑みこもうとした。できるか？　いや、無理だ。
「……吐きそうです」
「ナオ、器を」
ヤエトの霞む視界には、皇女の姿しか入っていない。遠景はぼやけてしまい、形にならないのだ。
「吐け」
皇女の面前で吐くのは、不敬にあたるだろうか。少なくとも礼を失していることは間違いない。即座に首が飛んでもおかしくないかも……いや、まず獄に繋がれるだろうか。
考えながら吐いているうちに、多少は呼吸がととのってきた。
「申しわけ、ありません」
「謝るな」
吐瀉物の入った器がかたづけられ、口に水の入った杯が当てられた。
口をすすぐと、汚れた水を吐くための器も出て来た。小さな馬車だったと思ったが、皇女の荷物は思いのほか多かったようだ。焦点のさだまらない今の視力でも、質の良い品だとわかる。
――そんなことを考えている場合じゃないだろう。
立ち上がろうとしたが、足に力が入らない。膝ががくがくとふるえるばかりだ。
「ただごとではないな。なにがあった」

「いえ……」
「あの野蛮人に、なにかされたのか」
誰のことをいっているのか、わからなかった。とことん、頭の働きが鈍っているようだ。
「俺はなにもしていない！」
ああ、とヤエトは納得した。なるほど、セルクのことか。
「信じがたいな」
「そっちこそ、尚書官殿との約束を守らず、毎日出歩いてばかり……俺は尚書官殿を心配して、少しでも心労を減らそうと、ここに来たんだ。あんたに責められるいわれはない！」
――それで代わりに歴史を学ぶという話なのか。
つくづく行動の予想できない男だ。それはそれとして、彼が皇女に歴史を教えることになったというのは、どこから漏れたのだろう。
「馬鹿をいうな」
「人を馬鹿扱いすれば、それで済むと思っているのか。おめでたい娘だな」
「馬鹿に馬鹿といってなにが悪い」
「人を馬鹿という人間こそ馬鹿なんだと、母親に習わなかったのか！」
「あいにく、母上様はわたしが赤子のときに亡くなられたのだ」
皇女の声は冷たかった。だが、セルクはまったく譲らない。
「では、母代わりをつとめた人間がまずかったのだな。人は人を馬鹿にすることでは育たない。人を見上げ、敬うことで育つのだ！」
誰か割って入れよ、とヤエトは思った。ルーギンはいないのか。目を凝らしても、遠くに人影が見えるだけだ。必死に暗い廊下の奥を見ていると、心臓がどくんと大きくうった。
――彼は悩んでいる。
さっきの人影が、ふたたび形をとろうとしていた。皇女とセルクの姿が遠ざかり、あの人物が時の彼

方からヤエトの方へ歩いて来る。
——悩んでいる。
苦悩を背負った男の姿が、少しずつ輪郭をととのえはじめる。せっかくおさまっていた吐き気が、また喉もとまでこみあげて来た。
「おやめください」
ヤエトは手をさしのべ、摑んだ。誰かの服だろう、その布の手触りだけが彼を現実に繋ぎとめていた。
皇女の声が聞こえる。
「ふるえているぞ。すごい熱だ」
セルクがなにか叫んだ。声がした方を見ようとしたが、見えたのはあの男の姿だけだった。
——消えろ。
念じても、無駄だった。制御できていない。
——視えるはずがないんだ。
だが、視えている。現実を押しのけるほど強い幻視の光景に、ヤエトは圧倒されていた。このままでは、呑まれる。
ヤエトは握ったものにしがみついた。
「部屋へ、戻らせて……ください」
「動ける状態ではないぞ」
「俺が運ぶ」
セルクの声が聞こえた。やはり姿は見えない。ヤエトの周囲には、誰もいない——ただ暗い廊下と、その先にたたずむ男の姿が見えるだけだ。
男は窓の外を見る、そしてこちらに向き直る。
「早く、……でないと、また、恩寵に……」
「恩寵？」
男が歩きはじめる。一歩、二歩。
あと一歩でヤエトに届く。
男の苦悩が彼にふれた。黒い翼が、視界を覆い尽くす。
——このままでは、この世は滅びてしまう。
ヤエトの意識は果てのない深淵に向け、転落した。

6

ひどい後悔と絶望を覚えながら、目が覚めた。
真っ先に目に入ったのは、皇女の手だった。額にあてられたその手は、ひんやりとしていた。
反射的に、ヤエトは息を呑んだ。視線が合うと、皇女はわずかに表情をやわらげて手を引いた。
「気がついたか」
状況が把握できず、ヤエトは当惑した。声を出そうとしたが、くちびるがひび割れて、するどく痛むことがわかっただけだった。
皇女は背後になにか命じている。広い部屋の隅々までは灯火の光が届かず、室内は暗い。
身体を起こそうとすると同時に、額にあてた手で押し戻された。
「起きるな、馬鹿者」
「しかし……お手をわずらわせるわけには」
「いいから寝ていろ。早く治ってもらわねば困る。そなたが倒れたのはわたしのせいだと、野蛮人どもがいいふらしておるのだ。わたしは、むしろ彼奴らがそなたに心労を与えたのだと思っているが」
両方です、とは答えられない。
「生まれつき、虚弱なもので」
「尋常の苦しみようではなかったぞ」
「慣れておりますので、お気遣いなく」
「恩寵のせいか？」
自制したつもりだったが、表情が動いてしまったらしい。
皇女の眼がきらめいた。
「なるほど」
「……病人の、譫言（うわごと）です」
自分がなにを口走ったか、わからない。こみあげてきた生唾を呑みこんだ。
――まずい。
汗が出て、手足の感覚が希薄になる。
「ごまかせるつもりか？　さっさと吐いてしまえ」
「ここで、ですか？」

ヤエトが蒼白な顔で必死に身を起こすと、皇女は彼の意図に気づいたらしい。
「待て、そういう意味ではないぞ」
「でも吐きそうです」
「待て、待て。ナオ、器だ！」
この器と対面するのははじめてではないな、とヤエトは空の器を見下ろして考えた。我慢できるだろうか。皇女の面前である。どう考えてもまずい。しかし、今さらという気もする。
ついに我慢しきれなくなり、ヤエトは吐いた。胃の中は空なのだろう、出てくるのは苦い胃液ばかりだ。血が混ざっていないだけ、ありがたい。
水で口をすすぐと、ヤエトはまた同じ場所に寝かされた。全身の力が抜けてしまって、動く元気もない。皇女の背後で扉が開き、また閉まる音がした。女官が、器の中を始末しに行ったのだろう。
「大丈夫か」
皇女の声が、はじめて不安そうになった。
「はい」
正直なところ、どこもまったく大丈夫ではなかった。こんなにひどいのは、久しぶりだ。
「では、恩寵の話をしてもらおうか」
容赦がない。とはいえ、頭痛のほかに注意を集中すべきことがあるのは、助かる。
「古い話です……神話の御代（みよ）まで遡る」
「長い話になりそうだな」
「寿命の方が、先に、尽きるでしょう」
皇女は真面目な顔で命じた。
「わたしの部屋で、死ぬな」
しばらく、ヤエトは黙って横たわっていた。皇女は動かない。それでも、その気配は感じる。
――竜種だな。
皇家の人間は大なり小なり覇気を発するものだ。久しぶりに竜気にあてられ、少しのぼせたせいもあったのかもしれない。それで幻視の力がはたらいてしまった……ということは、考えられる。

吐息に、かろうじて言葉が乗った。
「運び出してください」
「場所の問題ではない。とにかく、死ぬな」
「劫初の王の、真似をなさるおつもりですか」
「劫初の王？」
「……この世ではじめて、全智の神より王権を授かりし者。劫初の王……言葉をつくりたまいし者。世界の理を明かせし者」
ならべた名前のどれも、皇女には心当たりがなかったらしい。
「知らぬな」
「命じるだけで病人を癒し、死者をも起き上がらせたと伝わります」
「ああ、……《死者の軍団》の話なら知っている。子どもを怖がらせるための、つくり話だ」
「事実ですよ。かの王の末路をご存じですか。起き上がらせた死者たちに、殺されたのです」
「死者に裏切りはなかろう？」
詳しいじゃないか、とヤエトは思った。この姫はきっと、戦の話がほんとうに好きなのだ。
「死者との暮らしは、生身の王や臣民の健康を害し……病が流行し、死者は増えました」
「死者が増えたのなら、兵も増えていいだろう」
「ええ、皆がそう考えました。兵を増やすために王は……病を蔓延させるまま手をこまねき、民を殺しているのだと。そういう、噂がたちました」
皇女は黙った。聞かされた話について、考えこんでいるようだ。
ヤエトは眼を閉じ、少し休んだ。妙なことになっているな、と思う。
扉の前で倒れたからといって、皇女の部屋に運びこませるとは。女官はいい顔をしないだろうし、警護の騎士も本来は諫止すべきだ。セルクは……抗議しただろうなと考えて、ヤエトは笑いたくなった。変な男だ。皇女も、変な皇女だ。
——たいせつに、育てられたのだろうな。

甘やかされたといっても、無軌道にすべてを許されたわけではなさそうだ。たとえば、北嶺を与えるのと引き換えに、副官人事を皇帝が握ったように。

気取りがないし、判断も早い。思いやりもある。子どもなのはしかたのないこととして、仕える立場でいえば、そう悪い主君でもなさそうだ。

「噂というのは、ひとり歩きが好きなものだ。それは昔も同じことだったのだな」

皇女は、つづきをうながすようにヤエトを見た。

「民は去り、王は腐敗した死者に囲まれて孤独に死にました……」

「わたしには、死者に命じる力はないぞ」

「生者に命じる力をお持ちではありませんか。命令を発される前に、よくお考えください。飛びたった言葉を捕らえる網は、どこにもありません」

皇女は少し口をつぐんだが、結局は、自分の望む方に話を戻した。

「教訓臭い話はもうよい。わたしが知りたいのは恩寵のことだ」

「恩寵とは、神より与えられし力。太守もご存じでしょう、皇家のかたがたはその力をお持ちです」

伝達官を通して遠隔地のできごとを見聞きし、また言葉を伝え得るその力は、神与のものだ。

沙漠の西の初代皇帝は、全智の神から統治する権利を授けられた、もっとも新しい家系の根にあたる人物である。ヤエトが知る限り、それが神と人との最新の契約で、以後、あらたに契約を結んだ者はあらわれていない。

「この帝国に、皇家以外に恩寵を授かった一族があるという話は聞いたことがない」

「誰も知りません。使っていませんでしたし……制御することができないのです。暴走したらどうなるかは、もうご存じのはず。役立たずの古い力です」

「わたしは力を使うたびに倒れたりしないぞ」

「皇家のかたがたは、力の制御法をご存じです。神官に分与し、支えあう。全体がひとつとなって動く

よう考え尽くされた、見事な設計と運用です」
皇女は顔をしかめた。
「設計と運用？　規則と規律のことか」
「神の力を、人が使うのです。必要なことです」
竜種の一族以外を、つまり神官をも巻きこんだ機構を考案したのは、初代の皇帝だったという。頭の切れる人物だったのだろう。恩寵の力が強いほど、それがはらむ危険性も強いことを悟っていた。だから、一族以外に力を分け与え、利用した。
――古王国は、恩寵を崇めてしまった。
神を崇めるかのように。そして自滅した。
「そなたの一族は皆、そうなのか？」
「我が一族の契約は古く、恩寵の力は消えたと考えられておりました。力を制御する知識も失われて久しく、わたしもそのすべを知りません。……太守、すみません、吐きそうです」
今度は皇女も心の準備ができていたようだ。即座に器が出てきた。
「真っ青だ。寝た方がいい」
誰が喋らせてたんだ、と訊き返したかったが、これだけいうのがやっとだった。
「自室に、戻りたいのですが」
嫌な匂いのする器を平然と室外へ持ち出すと、皇女はふらふらしているヤエトを見下ろして尋ねた。
「もう吐きたいだけ吐いたのか？」
「おそらく」
「ならば寝ていろ。案ずるな、うつる病でないなら、そなたがここにいても誰も文句はいわぬ」
「……うつるかもしれません」
「嘘をつけ」
「仮にも姫君のお部屋に、男を寝かせるのは」
「去勢してやれば満足するか？」
「今の体力で去勢されたら、まず死にますが」
皇女は呆れたように彼を見下ろした。
「つまり、不届きなことをする元気もないということではないか」

「人の噂というものが、ございます」
「事実にもとづかぬ噂であれば、もういろいろと取り返しがつかぬであろう。今さら小さいことにこだわっても無駄だ」
　そうですか、と口の中でつぶやいた。いったい、どんな噂がひろまることやら。当然、皇女を溺愛している皇帝の耳にも入るわけだ。
「このまま死んでもよいでしょうか」
「死ぬなと命じたはずだ」
　しかたなく、ヤエトは枕に頭を戻した。
　皇女は彼の肩まで掛布を引き上げると、寒くはないかと尋ねた。畏れ多いことだ。病人の世話に慣れているのだろうか、とふと思った。
「熱が下がったら、部屋に戻してやる。それより、ナオが帰ってくる前に教えよ。口外せぬと約束しよう。そなたに与えられた恩寵とは、なんだ？」
　これは拷問だ。寝かせてくれるなら、なんでも喋る。ヤエトは観念した。もう無理だ。隠せない。
「……過去を視る力です」
　皇女は首をかしげた。
「なにか役に立つのか？」
「役に立てば、古王国も滅びることはなかったでしょう」
　大きく息を吐くと、喉が痛んだ。
　恩寵のことを考えたくない。へたに想念をそちらに向けて、また暴走したらと思うと怖いのだ。
　――そう、怖いのだ。
　子どものころに刷りこまれた恐怖が抜けない。
「古王国とはなんだ？」
「何百年も前に、西の帝国の一部となった国です。もはや存在しない国……与えられた神の恩寵がなんであったかは、歴史を学べば知れることです」
「秘密でもなんでもなさそうだな」
　だが、今の時代にその力を持つ者はヤエトしかいない。故郷の家族以外、誰も知らないことだ。
　つまらぬ、とつぶやいた皇女に、念を押した。

「お約束、いただきました。誰にもお話しになりませぬよう」
「わかっておる」
皇女は機嫌をそこねたらしく、立ち上がりかけたが、不意に気を変えたように動きを止めた。あたりをはばかるように見回してから、ヤエトの上に身を屈めてささやいた。
「ひとつ、訊いておこう」
ヤエトがぼんやりと見返していると、皇女はさらに顔を寄せて来た。
「陛下はご存じなのか。そなたの力を」
「いいえ、ご存じないと思います」
その問いの意味を考えるゆとりもなく、ヤエトは答えざるを得なかった。皇女の眸は、竜種の力をもっていた——人の心と心を繋ぎ、空間を飛び越えるほどの力を、まともに向けられたのだ。
即答以外の選択肢は、与えられていなかった。
皇女は大きな眼をますます大きくしたかと思うと、次の瞬間には笑みを浮かべ、うなずいていた。
「わかった。では復調するまで休むがよい」
踵を返して立ち去った皇女の後ろ姿を見送る暇もなく、やれやれ、と吐息をひとつ、そのままヤエトは寝入ってしまった。
長く混乱した夢の中に、あの男が姿をあらわした。それが夢なのか幻視なのか、もし後者だとしたらもう自分の命はないな、とヤエトは考えていた。
男の双眸はあざやかな青だが、その奥には黄金の光輝が宿っている。ただならぬ力が渦を巻いているのが、わかる。彼は剣を手にしている。長い剣には鞘がない。剣にも、黄金の光が見える。
——魔剣だ。
ただの剣ではない。男もだ。双方ともに、尋常の存在ではなかった。
男の輪郭が白い炎に包まれる。直視することもできないほど、まばゆく光る。炎は虹色の破片となって飛散した。きらめき、回転し、大気を燃やす。

熱に焼かれ、ヤエトは全身に痛みを感じた。
——ああ、これは夢だ。
幻視ならば、痛みは感じない。
安堵とともに、ヤエトは墜落した。燃え上がる熱さから、一転して極寒の暗闇へ。
次に目覚めると、また皇女の顔が間近にあった。
「はい、ただいま……」
無意識に答えながら、彼は自分を目覚めさせた声を思いだした。
起きよ、と命じられていたのだ。
夢の名残りか、視界はやけに白っぽく、明るい。皇女の頬の輪郭も、まとめきれずに襟足に落ちた黄金の髪にも、淡い光が宿っている。
「野蛮人どもが来た。どうしても、そなたに見せたいものがあるそうだ」
なにか返事をしようとしたが、うまく声にならなかった。痛む喉の奥で、痰が自己主張をしている。
向こうの方からセルクの声が聞こえる。例によって大声だから、声自体ははっきり聞こえるのだが、ヤエトの目が覚めきっていないせいか、なにをいっているのかはわからない。
応じているのはナオだろうか、女性の声だ。つられるように、だんだん声が大きくなっていく。
「ナオ！」
皇女は女官の名を呼びながら立ち上がった。
まだ霞む目をしばたたく。窓からさしこむ日差しから、まだ朝早くだろうと予測がついた。一晩寝てしまったのか、と息をついた。かすかに痛むこめかみを揉みながら、曖昧な記憶を整理しようと努力する。薬湯を呑まされ、これで痛みが遠ざかって眠れるからと説明されたのを、思いだした。それからずっと寝ていたのだろう。
「……どれくらい？」
疑念がそのまま声になって、自分でぎょっとした。その上、思いもよらぬところからゆらりと立ち上がる人影を目にし、声も出ないほどおどろかされた。

伝達官だ。相変わらず、等身大の人形にしか見えない。だが、今は手足を投げ出して座っているわけではない。動いている。女はヤエトの方を見もせず、皇女たちのいる方へ、ふらりと行ってしまった。

——個人の意識というものは、あるのだろうか。

ヤエトが伝達官という存在について考えているあいだに、会話の調子はさっきと同じくらいの騒がしさにまで回復した。

少しやりとりがつづいて、セルクがやって来た。

「尚書官殿」

ほっとしたような表情だ。ヤエトが生きているかどうか、不安だったに違いない。

「太守の部屋に、押しかけるなど」

「これを見せたかったんだ」

手にしたものを、さっと広げて見せた。

霞む目を凝らせば、それはどうやら戸籍のようだった。ヤエトが倒れる前に見ていたものとは違う——もっと新しい紙に書かれている。

「全員、朝議に戻って来た。これで、尚書官殿さえ元気になれば、祭りのための各村の負担の割り振りも、現状に応じてやり直せる」

セルクがなにをいっているのか、理解するまでに少々時間が必要だった。

倒れる前、自分が見ていたのが戸籍であったこと、それについて不満をいったことを思いだして、ようやく話がつながった。

——本気にしたのか。

もちろん、戸籍が古いままであることは問題だ。だが、すぐに調べ直すとは思わなかった。セルクが、そこまで深刻に受け取るとは。それに、馬鹿呼ばわりされていた全員が、戻って来るとは。

——待ってやりなさい。

老人の言葉が耳によみがえった。

ヤエトがぼうっとしていると、セルクの表情から安堵の色が消えた。

「大丈夫なのか」

「何日、寝ていたのかわからなくて」
「四日だ」
絶句した。一晩ではなかったのか。
「今は、まだ昼前ですか」
「そうだが」
「皆はまだ議場に？」
「ああ、俺が戻るのを待っている」
「わかりました、参りましょう」
えっ、とセルクが声をあげた。衝立の向こうにいた皇女が、覗きこんだほどの大声だ。
「動けるのか？」
「動きます」
ヤエトは起き上がった。萎えた足に力を入れるのは難しかったが、無理というほどでもない。見かねて、セルクが手を貸してくれた。
「なにをしている」
皇女に対しても、ヤエトは同じことを告げた。
「これより、議場に赴きます。太守にも、ご臨席いただきましょう」
皇女とセルクが顔を見合わせた。
「まだ無理だろう？」
尋ねたのはセルクだが、視線の先で、皇女もまったく同意見だという表情だった。だが、ヤエトは平然と見返して告げた。
「太守のおつとめを果たしていただくべき時です」
皇女の顔を、笑いの影がかすめた。
「聞くに値するものになるのか？」
「そう信じます」
「わかった、では行こう」
どうやって議場に辿り着いたか、よくわからない。体重のほとんどをセルクに預けていたようだが、彼は不平をいわなかった。
議場は静まり返っていた。皇女が壇上に着席し、ヤエトはその横に座った。
「太守がご聴聞くださいます。各村の戸籍をあらためたそうですが……祭りの準備に必要な金銭や物を

どう分担するか、慣例を見直し、負担が平等になるよう皆の意見を申し述べてください。また、これを機に各村の人口と特色を太守にご理解いただけるよう、各々代表している土地について、説明を。それから……自分は病み上がりで書記役がつとめられないので、どなたかお願いできますか」

「それなら、俺が」

セルクに向かって、ヤエトはうなずいた。

「進行も、どなたかにお願いしたいのですが――」

怒鳴りあいになったら止めてください、といいかけて、なんとかヤエトは堪え、言葉を選んだ。

「――紛糾しそうになったら、制止する役目を」

「俺がやろう」

当然のようにイスヤームが声をあげた。視線が合うと、イスヤームは眉を上げ、文句があるか？　といわんばかりの顔をした。

「では、始めましょう」

正直なところ、ヤエトは座っているだけで精一杯だった。少しでも気を抜くと、意識が遠くなる。

尚書官たちが順々に自分の村がどういうところか話している、その表情を見きわめるのがせいぜいだ。どの顔も真剣だ。その程度のことは、伝わる。

帝国の支配下に入っても、放置区だった北嶺は、そう大きくは変わっていない。だが、よく調べれば、変化は確実にその山裾を洗いはじめている。

麓の村に近いあたりは、不均衡な交易のせいで貧しくなっていた。豊かになってもおかしくない立地のはずなのに、なぜ、と思うがそれが現実だ。

不条理に背負わされた借金の返済のため出稼ぎに行き、消息を絶った者も出はじめているらしい。

対策が必要だ、とぼんやり考えた。だが、そこから先には考えが進まない。体調が戻るときに名案を引き連れて来てくれることを祈るばかりだ。

そのままの流れで、祭りの話になった。

ここを「例年通り」にしては不公平だ、とは全員がわかったらしい。こうなると、やはり怒鳴りあい

が勃発しかけたが、いつもは先頭に立って争いあうセルクが書記に必死で無言、イスヤームが火消し役にまわっているのでは、大きな騒ぎにもならない。

途中、どういう話の展開だったかはわからないが、顔に血をのぼらせてセルクが立ち上がったので、ヤエトは椅子からころがり落ちてみた。

効果は絶大で——失敗だったかもしれない、と思った。椅子から落ちたら這い上がるのも難儀、立ち上がるのも拷問、しかも全員が大騒ぎで、誰がなにをいっているのかわからない。

「お黙りなさい！」

叱りとばした相手に皇女も含まれていたような気がしたが、かまっていられない。

——なんでこんな難儀なことを。

なんとか椅子に戻りながら、自分でも不思議になった。寝ていろといわれているのだから、素直に休めばいいのだ。

だが、彼が寝てしまったら、誰が立ち上がったセルクを止められる？　皇女がまた鼻先で笑い、議場を後にしたら？　この先、苦労するのは誰だ。

もちろん、ヤエトだ。

そんな地獄に生きて戻りたくはない。死んだ方が、ずっと楽だ。

「つづけてください」

そのあとは、とくに騒がしくなることもなく、話は終わった。たぶん、だ。ヤエトはもう聞いたことを理解するのを諦めていた。

「尚書官殿」

イスヤームに呼ばれ、ヤエトは目をしばたたいた。自分は眠っていただろうか？　いや、大丈夫だ。

「なにか？」

「本日はこれまで、……で、よろしいかな」

うっかり首をふって、ヤエトは襲ってきた頭痛に顔をしかめることになった。

「太守にお言葉を賜りましょう」

皇女はうなずいた。霞む視界のなかで、皇女の姿

は群を抜いてあざやかだ。光をまとっているかのように、明るい。だが、まぶしくない。
「皆、ご苦労。本日の朝議はこれまでとする」
固唾を呑んで見上げる一同に、皇女は笑顔を見せた。
「短期間に、よくやった。今後も、励め」
そのままくるりと向きを変えると、警護の騎士を従えて議場を出て行った。
――終わった。
議事の内容をぼんやりとしか把握できないのは残念だが、とにかく、一歩前進だ。
息をついて、彼は立ち上がった。議場はざわついていたが、知ったことではない。もう部屋に戻る。戻って寝ないと、もたない。
「部屋まで送ろう」
セルクはヤエトの腕をとり、有無をいわせなかった。反対の腕はグランダクにとられている。
ふと、気になったことが、口をついて出た。
「儲かりましたか？」
「えっ？」
「なにか賭けをしたでしょう、わたしのことで」
「なん……っ、お……おまえ……！」
いきなり沸点を突破したセルクを宥めながら、ヤエトはグランダクに尋ねた。
「かまいませんよ。それで、儲かりましたか？」
「……儲かったよ」
「それはなによりです」
「なにで賭けをしたかは、知らなくていいのか？」
「それは、セルク殿が一緒じゃないときにでも」
「尚書官殿を無事に部屋まで送り届けたらすぐに、白状させる！」
「いや、無理だ。その前に逃げるから」
「騎士から巻き上げるのは、ほどほどにした方が」
グランダクが気味悪そうにヤエトを見た。
「なんでわかるんだ？」
「さあ、病人は勘がするどくなるといいませんか、

北嶺では」

「聞いたことないよ、そんなの……」

部屋に着くまでのあいだに、同行者が何名か増えていた。いつの間に一緒になったのか。階段を上がるころにはほとんど担がれていて、自分の足では歩かせてもらえなかった。

気を失う前に寝台に辿り着き、ひとりで平気だからと全員を追い出し、念願かなって布団に潜りこんだところで、今度はルーギンが姿をあらわした。

「姫様のお心づかいです」

薬湯を入れた椀と、見覚えのある空の器を枕元に置かれて、ヤエトは苦笑した。こんな豪勢な器に吐くとしたら、ふたたび死にそうになったときだ。当面、そこまで悪くなる予定はない。横になっただけで、もうずいぶん呼吸も楽だ。

「かたじけない」

上体を起こし、椀を両手で包みこんだ。薬湯の爽やかな香気が鼻孔を満たす。湯気だけでも、救われる心地がするほどだ。

「鎮痛と催眠効果があるそうです。……無理をし過ぎだという自覚はあるのかな？」

ヤエトは薬湯をすすり、息を吐いた。

「なんとかなるでしょう。なんともならず、死んだら死んだでそういうものです」

「その後どうなるかは知ったことじゃないと？」

ルーギンにしては厳しい口調だ。意外に思って見上げると、視線が合った。騎士の眼差しは、ほとんど怒っているといってもよかった。

「まあ……そうですね。死ねば楽になれる、というのが自分の人生哲学ですし」

「少しは周囲のことを考えたりは、しないのかな」

「考えていますよ。だから、無理にでもまとめようとしたのです。うっかり死んでしまう前にね」

少なくとも、土地の民と支配者のあいだにできた間隙を、早期に埋めることはできた。どうせまた亀裂は走るだろうが、そのたびに埋め戻せばいい。自

分の役目は、それだろう。
　ルーギンは空になった椀をヤエトの手からとりあげ、静かに告げた。
「そんな達観したような顔をして。あとを全部まかされるのは、勘弁してほしいな」
「まかせっきりにしてよければ、いくらでも元気になろうと思えるのですが。……そうだ、誰にも訊く機会がなかったのですが、厩の件は？」
　ルーギンは、その形の良い眉をわずかに上げた。
「覚えてない？」
「なにをです」
　ヤエトは不安になった。どうやら記憶にないことがあるようだ。
「姫様にしがみついて、秣が不足する、馬が死ぬ、世界が終わってしまう、とくり返していたのに？」
　絶句した。
「それで、……どうなりました？」
「あなたがうるさかったので、とりあえず麓の村に――つまり、北嶺の外ですね、半分くらいは戻しましたよ。姫様がお命じになりました。秣が乏しいのも事実ですからね。麓で多少は買い入れましたが、長くはもたないな。徴発隊を出そうかという案も出ているくらいで」
「徴発もなにも、秣の備蓄など……」
　馬を飼うという習慣がないのだ。鳥の飼料ならあるだろうが、それでは馬は養えない。
　唸っていると、ルーギンに笑われた。
「明日、考えればいい。明日か、そのまた明日」
「それが貴殿の哲学ですか」
「難しいことは考えず、早くお休みなさい。夢のない眠りと爽やかな目覚めの君にあらんことを」
　古びた決まり文句を残して、ルーギンは退室した。
　ヤエトは布団に潜り、眼を閉じた。
　部屋に満たされた静寂の奥から、それは静かによみがえった。あのときの苦悩、手触りがあるかと思われるほど明確な、絶望。

――このままでは、この世は滅びてしまう。

幻視した男が背負っていた、破滅の予感。それを、ヤエトは無意識に口走っていたということか。

背筋を襲う寒気をうち消したくて、彼は寝返りを打った。

――あれは昔のできごとだ。

あの男が予測した暗い未来は、訪れなかったはずだ。世界は終わらなかった。

――何年前かは知らないが、すべては遠い昔の話。めでたしめでたし、で閉じた物語のはずだ。

呪文を唱えるようにくり返しながら、彼は眠りに落ちていった。

第



章

1

《夏入りの祭り》は、五日間にわたる。

五日の由来は、祭りの会場になる平坦な――北嶺（ほくれい）にしては、ということだが――草地を囲む岩から来ていると、厩舎長（きゅうしゃちょう）が教えてくれた。

岩にはそれぞれが象徴する季節があるという。夏入り、夏、秋、冬、そして眠りの五つだ。

眠りの季節というのは厳冬期のことだろうかとヤエトは思ったが、厩舎長は笑ってそれを否定した。

――死だ、そして終わりだよ。

夏入りは誕生、生命のはじまりだが、冬はかれらの生活の大部分を占める日常に過ぎない。それに反して死は、四季の巡りを抜け出した先にある。

四つの岩は北嶺の代表的な嶺に呼応し、眠りの岩だけは嶺（ね）ではなく、例の邪竜の心臓をあらわす。

天与の槍につらぬかれたその心臓は、はたして死の象徴だろうか、とヤエトは思う。眠りとは不死か、死後の永遠性を暗喩（あんゆ）するのではないか。

だが、厩舎長の説明は単純だった。死を言葉にするのはよくないことだから、と彼は語った。

――だから、言葉を替える。眠りの岩、とね。

言葉を避ける以外に、禁忌はないという。

――ふれるのは自由だ。眠ってしまった知人に語りかける者もいる。答はないがね。

あっさりと断言され、ヤエトは面食らった。魂魄（こんぱく）となっても故郷へ戻る護符があるくらいだから、死者との交感も当然のことかと思っていたのだ。

――死者は生者に地上を明け渡さねばならん。死んだ者が地上に声を届け、言葉を語り、いつまでも影響をおよぼすのか？　それは、悪い考えだ。

逆に、問われた。

――あんたがたは、死者の声を聞くのかね？

今、ヤエトはその眠りの岩の前に立っていた。想

像していたより、ずっと小さな岩だ。
すぐわかる、と厩舎長は教えてくれた。花綱（はなづな）がいちばん多く捧げられている岩だ、と。
たしかに、花綱の数は呆れるほどだった。
花などどこに咲いているのかと当惑したものだが、祭りに先立つわずか三日ばかりのあいだに花々は一斉に咲きそろって、地面を埋め尽くした。
色は白が多い。次が黄、そして青。美しいのは紫の花だ。花房にふれながら、暮れ方の空の色だとヤエトは思った——あるいは竜種の眼のようだと。
太守としての着任と祭りの開催を宣言する短い挨拶を終えると、皇女は城へ引き上げてしまった。
集まった領民には酒と料理がふるまわれている。
もっと親しんでほしいと思わなくもなかったが、馬鹿だの野蛮人だのと暴言を飛ばされたら、仲裁しきれる自信がない。おかげで多少は気楽になった。
——あまり不穏なことがなければいいが。
儀式ばったことの少ない祭りだ。北嶺の各地に散って出会う機会もない人々が、一斉に集まるのが眼目の行事なのだろう。若者にとっては、連れ合いをみつける好機でもあるはずだ。
騎士たちをおとなしくさせるよう、ルーギンには伝えてある。当のルーギンが悶着の種になりかねないのが、頭の痛いところだ。彼の魅力が北嶺の乙女たちに通じることを、ヤエトは疑っていなかった。
ともあれ、根回しは済んでいる。あとは各人の善意と幸運を——この岩にでも祈るべきか。
ヤエトは眠りの岩の前にそっと膝をついた。
過去を重んじない北嶺の民にとって、死はすべての終わりなのか。異界とこの世を結ぶのは、いかにも儚（はかな）い花綱のみだ。呼びかけても、答はない。
「なにをお考えです？」
ふり返ると、恰幅（かっぷく）のいい男が立っていた。沙漠の民が着る風通しの良い上着を羽織り、南方人のように布で頭をぐるぐる巻いている。眼は砂の色だ。
人なつこい笑顔に、見覚えがあった。

これは、とヤエトが立ち上がるあいだ、男は笑みを崩さず喋りつづけていた。

「ご健勝そうでなによりです。倒れたんですって、聞きましたよ。いや、それよりまずは、ご出世の方をお祝いしないと。一杯、奢らせてください。ここだけの話、薄めた酒瓶があるんですよ。特別にね」

男は行商人で、名をナグウィンという。都と北嶺のあいだの地域を広く巡回しているとかで、ヤエトが赴任するときに道案内として同行し、道中彼の質問に応じて、土地の伝説だの噂話だのを尽きることなく語ってくれた。

そういえば、祭りのときにまた、といっていた。

「酔っぱらって味がわからなくなった輩に売りつけるための、ですか」

「とんでもない。酒呑みにつきあわされる気の毒な下戸の皆様の救済策として、ご用意したんですよ。人聞きの悪いことをおっしゃらないでください」

さあこちらへと誘われて、ヤエトは歩きだした。

草地を囲む天幕は、色鮮やかな花のようだ。

祭りにあわせて、ナグウィン以外にも行商人が北嶺を訪れている。道すがら、今まで見なかった顔がいますよ、とナグウィンは二人ほどを示した。

「あの男はたしか、北方とも交易をしているとか話していたと思いますよ」

ナグウィンがそれとなく示したのは、赤味がかった金髪を彼と同じように布で巻いた男だ。

「北方ですか。あなたは行ったことが？」

「わたしはここが北限です。話に聞いたところでは、北方の酒はそりゃ美味しいそうですよ」

「商売になりそうではないですか」

「売り買いの相手がいないことにはね。同族としか取り引きをしないという話ですから」

「ではあの商人は？」

「あいつは北方混じりなんです。三代前に北方の血が入っているとか。わたしもそういう珍しい血が混ざっていればよかったんですがね、いやはや」

頭を左右にふりながら、ナグゥィンは杯を手渡してくれた。彼自身は沙漠と南方の混血だという。

杯の中身は、なんとなく酒のような匂いはするが、それだけの水だった。泥酔していても酒と間違いはしないだろうが、たしかに下戸でも飲める。

「都と比べて寂しいでしょう。人も物も少なくて」

「寒いですね、とにかく」

「餞別にさしあげた一本は、お役に立ちましたか」

ヤエトが部屋に常備している酒瓶は、この行商人が餞別にくれたものだ。

「ええ、とても。もう一本、買えますか」

「一本とおっしゃらず、二本でも。まだまだ寒の戻りはありますよ」

顔をしかめたヤエトを見て、行商人は笑った。

「北嶺には年に何度も来られるんですか」

「前は二度か三度でしたが、増やそうと思ってます。行程を縮められないか、実験中でね。どうです、わたし少し痩せてませんか、胴回りとか」

腹の肉を持ち上げて見せる。

「どうでしょう……都まで、何日かかりました？」

「途中の商いを諦めても、これだけ荷を積んでると四、五十日ですね。早馬の真似は無理ですな。手伝いを解雇して軽くしても、縮まりはしませんよ」

視線が合うと、ナグゥィンが使っている小僧が一礼した。浅黒い肌に砂のような褪せた色の髪をした、痩せた少年だ。たいした重さはなさそうだ。

馬は持久力と頑丈さが取り柄の種で、早馬と比較すること自体が間違っている。それにしても四十日とは、大袈裟だ。そんなにかかっていたら、ヤエトの赴任から祭りまでに往復できるはずがない。商人特有の大風呂敷にしても、信憑性がなさ過ぎると思いながら、適当に相槌を打った。

「商売にならないといけませんし、大変ですね」

「体力がねぇ。もう若くないんですな。真冬の北嶺越えなんてやらかした時分もあったんですが」

「それはすごいですね」

「自慢じゃないですが、あんなことができるのはわたしだけですね。いや自慢ですか。若いからできたんですな。もう無理です、北嶺の冬どころか夏前でも寒くてね……っと、それで思いだしました」

小さな馬車から次々と物が出る。まるで魔法だ。

「温湿布です。沼地の方でしか採れない薬草を使ったものです。冬までは保ちませんが、まだ寒さの戻りがあるでしょうから、惜しまずお使いください。服を一枚重ねる程度、あたたかくなりますよ」

欲しい。手もなく魔法にかけられてしまった。

「おいくらですか」

「お代なんて、とんでもない。お金を受け取るわけには参りません。ご就任祝いですよ」

ヤエトは眉を上げた。こういうのは困る。

「代金を支払う相手とは、つきあえないとでも？」

「もちろん、お得意様を粗略には扱いませんよ。……弱ったな、お気を悪くなさいましたか？」

「売り買いがあなたの仕事だということはわかっていますが、世の中には、容易には売りに出せないものがあるのですよ。わたしにとって、良心とはそういうものです。そんなに安いものではありません」

ここまで話が進んでようやく、ナグウィンは少し恥じるような顔を見せた。

「しかし、悪いことをお願いするわけでは――」

その先をいわせず、ヤエトはうなずいた。

「それを聞いて、安心しました。これからも、そのように願います」

「……かなわないなあ」

「湿布は売っていただけますか」

「いいですよ。ただ、勉強させてもらったということで、お安めでかまいませんね？」

少し考えて、ヤエトはにっこりした。

「安くしていただいたぶん、ひとつ助言をさしあげてもよろしいでしょうか」

「いくらでも」

「この性格です、自分は投資には向きません。むし

ろ厄介なことに巻きこまれるかもしれないですよ」
「そこまでおっしゃいますか。ふられたからには他所で商売をするとします……ああ、そうそう」
「なにか？」
「ほら、伝説のたぐいに詳しい者がいないかと、おっしゃっていたじゃないですか。わたしは会ったことがないんですが、祭りの時期には詩人が姿を見せるらしいですよ。自分が聞かせたい相手にしか歌わないという、偏屈な詩人だとか」
「雲を摑むような話ですね」
「風を捕まえるより難しいとか。でも、その詩人なら、ほかでは聞けないような話をいくつも知っているそうですよ。会えるといいですね」
それでは、とナグウィンは馬車の番を小僧にまかせ、ほかの顧客を探しに行ってしまった。
やれやれと息を吐き、酒っぽい水がまだたっぷり残った杯を眺めていると、視線を感じた。
顔を上げると、馬車の向こうにセルクが立っていた。目が合っても挨拶もせず、無言である。なにか用かと尋ねかけ、ヤエトは途中で気を変えた。
「楽しんでいますか」
「えっ？　ああ、もちろんだ。尚書官殿は、その……どうだ？」
ヤエトは酒杯を掲げて見せた。
「さっそく、一杯ふるまわれました」
「それは無料でも受け取るのか」
商人とのやりとりを聞かれていたようだ。
「ふるまい酒に支払いは、野暮でしょう」
「そうか」
会話が途切れた。
ヤエトは見るともなくあたりの人波を眺めた。
騎士団は、そろいのお仕着せで非常に目立つ。対する北嶺の民は、色あざやかな晴れ着で身を飾っていた。女性のかぶりものには、きらきら光る鎖や模様を打ち出した金属片や硝子の飾り玉が縫い留められて、動くとちりちりと音がした。

お互い、それぞれの陣地を設定してでもいるかのように、まじわろうとしない。

だが、北嶺の民が騎士団に向ける視線は、それほど険悪なものではなかった。憧れの眼差しもある。

——酔っぱらいが増えてからが勝負だな。

馬車が到着して、歓声があがった。料理の追加が、城から届けられたのだ。

「太守様からの、お祝いだ！」

都にいた頃に嗅ぎ慣れた香辛料の匂いが、風に乗ってヤエトのところにまで届いた。皇女が呼び寄せた料理人が作ったものだろう。給金や食材の支払いは皇家に回せと命じられ、ヤエトは処置に困った。郡の財源が乏しいのは事実だが、如何なものか。

——皇家の姫君に貧乏官僚の経済感覚を叩きこむ役など、期待されていないだろう。

なんとなく釈然としない感は残ったが、珍しい料理を前に喜ぶ民の顔を見れば、皇女の判断は悪くないのだろう、と思わなくもない。

「詩人だが、来ないと思うぞ」

セルクの発言は唐突過ぎて、ヤエトはとっさに意味を摑みそこねた。

「詩人？　……ああ、祭りに来ないのですか」

「もう何年も見てないからな」

「そうですか。残念ですね。あなたは話を聞いたことがあるのですか」

「二十年くらい前かな。翌年から、来なくなった」

そんなに長く姿を見せていないとなると、その詩人はもうこの世の人ではないのかもしれない。

——すべては失われていく。

死者は忘れられ、過去は流される。それのどこが悪い。北嶺の民とて、眠りの岩に花綱を捧げ、死者に語りかけもするのだ——答を要求しないだけで。

それも悪くないな、とヤエトは思った。

墓に入ってまで、やれ太守のご意向をどう思う、今日の朝議の怒鳴りあいはこうではないかと尋ねられ、答を強要されたらうんざりではないか。

「俺も子どもだったから、よく覚えてはいないが……竜王の話を語っていたな」
「竜王、ですか？　おもしろそうですね」
それでもつい、古い話と聞くと無条件に興味を抱いてしまう自分は、変なのかもしれない。
「うーん……よく覚えてないんだが、竜王が命と引き換えに魔王を退けて、その子孫は鳥に乗って遠くへ逃れたみたいな話じゃなかったかな」
セルクは首をひねっているが、それ以上は思いだせないらしい。
竜王とは《化鳥の騎士団》滅亡時の君主である。北嶺を悪者にしない展開だから、これが本来、土地に残っているべき物語なのだろう。本人には会えなくても、詩人の出身地には同様の伝説が残っているかもしれない。
「その詩人というのは、北嶺の民ですか？」
「いや、南方人だ。黒髪だったからな」
――妙だな。
無意識に、ヤエトは顔をしかめていた。南方では職能集団が神話の伝承を独占していて、それ以外が昔語りを伝えることを禁じていたはずだ。
今ではその掟も崩壊して久しいが、おかげで古い時代の話も消え去った、というのが定説だ。
だから、昔語りが得意な詩人などという概念は、南方人の中には存在しない。沙漠の民であれば納得がいくのだが、南方人とは珍しい。
「幽閉された姫君を助けて逃げたとか……。すまない、よくは覚えていなくて」
渋面を誤解したらしく、セルクが残念そうに頭を下げた。いや、とヤエトは彼の頭を上げさせた。
「二十年も前では、しかたがないでしょう」
「そうなんだが……自分でも悔しいな。いわれるまで、そんな話を聞いたこともすっかり忘れていた。もっと注意深くしていれば、自分たちの過去に手が届いていたかもしれないのに」
「今からでも、注意を怠らずにいればよいのです」

歴史を学びたいと口走ったことを、セルク自身はもう忘れているのではないかと思っていたが。

——そうでもなかったか。

口の端に笑みが浮かんでしまう。

死者がこの世に口出しをできなくとも、今を形作る土台はかれらが積み重ねた営為にあるのだ。

足もとに落ちた影は、はるかな過去へとつづく紐帯だ。切り落とそうにも手段がない。望まなくても、その本性が見定められなくても、ずっとついて来る——人が現身を失う眠りに就くまでは。

ふとヤエトは疲れを感じ、自分がどれだけ立ちつづけているかを自覚した。そろそろ引き揚げた方がいいかもしれない。

「ルーギン殿を見かけませんでしたか？」

「さっき、あちらの方にいたと思うが」

ヤエトはナグウィンの小僧を呼び、杯におかわりをもらうと、セルクに差し出した。

「これはお礼です。わたしが呑んでいたのと同じものですよ」

小僧に小銭を握らせると、彼はセルクの返事も聞かずに歩きだした。

思った通り、ルーギンは地元の娘たちに遠巻きにされて、部下と談笑していた。声をかけるより早く騎士はヤエトに気づき、目線で部下を黙らせた。

「これはこれは、我が師ではありませんか」

ルーギンがヤエトを恩師扱いするおかげで、太守の副官だが平の尚書官であるヤエトの方が、大貴族で騎士団長であるルーギンより社会的地位が上、という奇妙な状況になってしまった。

平の尚書官が太守の副官とは、いくら皇帝の勅命でも無理がある。ルーギンの存在がなければ、いらぬ苦労が増えていたはずだ。感謝すべきなのだろうが、皇女の補佐役を全面的にヤエトに押し付けようという魂胆ではないかという気もする。

「お話ししたいことが」

「これはお召し上がりになりましたか？　土地の者

が用意した料理だそうですが、なかなかです。下界のように泥臭くない。いわば天界の味だ。おひとつどうぞ」

ルーギンが示したのは、穀物をひいた粉を練った生地でなにかを包んで焼いた料理らしい。見た目でわかるのはそれだけだ。

実をいうと、ヤエトは偏食である。吐くほど嫌いなものがたくさんあるのだ。茸は無理だし、貝も駄目だ。それ以外にも食べられないものは数多あり、得体の知れない料理を口にするのは勇気がいる。

それを知ってか知らずか、ルーギンは彼が食べるのをじっと待っている。

「あまり空腹ではありませんので」

「ひと口で食べられますよ。これを食べないなんて、人生における大きな損失です。是非」

しかたなく、ヤエトはさし出された食べ物を受け取り、口に入れた。

包み焼きの中身は、肉団子だった。なんの肉かはわからない。香料や香り野菜を刻んで混ぜてあるようで、臭みは感じない。吐き気を堪えて呑みこむという拷問は避けられたようで、ほっとした。

「美味ですね」

「そうでしょう！」

ルーギンはまるで自分の手柄のように喜んで、さて、と部下たちを見回した。

「わたしは暫し、恩師の護衛の任に就く。君らはしっかり飲み食いし、騎士の本分を忘れないように」

ルーギンはヤエトの背をかるく押し、歩くようにうながした。少し離れてから、ヤエトは抗議した。

「護衛の必要などありませんよ」

「そうかな。今日もすてきな顔色だ。倒れたまま草むらで一晩過ごして凍死とか……怖い怖い。いかにも、ありそうだ」

遠くから娘たちが見守っている。もっとも、ここからでは話し声は聞こえないだろう。

「そろそろ引き揚げますから、ご心配なく」

「ちょうどいい、城までお送りしましょう。わたしも疲れていたからね」
「それは困ります。後をたのみたいのに」
「わたしでは抑止力にはなりませんよ。むしろ、部下たちといっしょに騒ぐ方だ」
「ルーギン殿」
ヤエトがうんざりした声を出すと、ルーギンは肩をすくめて笑った。
「わかりました、部下たちが良い子にしているよう、ちゃんと見張ります。でも、ひとりで城まで帰らせるのは不安だな。送りましょう、馬ならすぐだ」
「いえ、結構。さすがにここから城へ行くあいだに遭難したりはしません」
いかにも信用ならないという風に、ルーギンはヤエトを見ていった。
「どうかな？」
「どうかもこうかも、一本道ですよ。……そんなにご不安なら、あの馬車が戻るのに便乗します」
ヤエトは黄金竜の徽章をつけた馬車を指さした。空いた器を集めているし、長居はしないだろう。
「荷台にお乗せするよう申しつけましょう」
自分の顔色はそんなに悪いのだろうか、と無意識に頬をさすりながら、ヤエトは答えた。
「自分でやります」
「まかせておくと歩いて帰るでしょう。そしてまた倒れて、姫様の面倒をわたしがひとりで……」
「問題は、そこですか」
ヤエトはつい笑ってしまったが、笑い事じゃありませんよ、とむくれられてしまった。
「大変だったんですよ……姫様の部屋に押しかけてくる北嶺人をなだめたり、わめく姫様を黙らせたり、部下も放っておくわけにはいかないし」
「それはご苦労をおかけしました。それより、どうです。厄介なことは起きていませんか」
「見た通り、かな。今のところ平穏ですよ。夜が更けてみないとなんともいえないけどね。事前に訓告

はしてあるけど、酒が入るとわからない。何人かには、酒を呑むなと命じたくらいで。かわいそうに」
「酒風味の水を用意している商人がいますよ」
「いや、それは逆にせつなくなるから」
「そういうものですか」
話しながら、いつのまにか草地の端まで来ていた。
ヤエトはまた城を見上げた。夜が近い。空は濃い藍色に染まり、星が姿をあらわしつつある。
「姫様に、よろしく。久しぶりの都の料理で、兵たちも喜んでおります、と」
かがり火を背に、ルーギンの顔は陰になってしまって、表情が見えない。
「ご自分でお伝えになった方がよいのでは？」
「ここに残って見張っていろという命令を撤回してくださるなら、喜んで。いいですね、ちゃんと馬車に乗って帰るんですよ」
笑いながらルーギンは踵を返し、もと来た方に戻って行った。
ため息をついて馬車に向き直ったヤエトは、その陰に隠れるように立つ人影に気づき、おどろいた。
――伝達官？
紫の肩衣もつけていないし、頭から薄布をかぶっている上に距離もあるが、目を凝らすほど、皇帝の伝達官に違いないという確信は強まる。
――なぜ、こんなところに。
仕事を果たしているとき以外、伝達官がなにをしているのか。そもそも、どの程度「自分」という意識を保持できているのか。ヤエトにはわからないが、とにかく、護衛もつけずに出歩かれては困る。
ヤエトは意を決して歩み寄った。
「祭りを、お楽しみですか」
ゆっくりと、人影はヤエトに顔を向けた。薄布の向こうに見える美貌はやはり、皇帝の伝達官だ。
夢みるような眸が揺れ、ヤエトの姿を認めた――と思うと、すぐに力を失った。
伝達官は、ゆらりと馬車から身を離した。

ヤエトは急いで周囲を見回した。連れはいない。皇女が伝達官に目もくれていないのは承知しているが、部屋から出すときくらい気を回してほしい。

——勝手に出て来たのでは？

ふと思いついて、ぎょっとした。衛兵の目もかいくぐったのだとしたら、洒落にならない。

「警護の者を呼んで参ります」

声をかけると、伝達官の動きが止まった。ふり返ったその顔に、不安と困惑が入り交じったような表情を浮かべ、彼女はささやいた。

「いいえ」

まさか返事があるとは。思いがけない反応に戸惑っていると、伝達官の視線が揺れ、さまよって離れていくのを感じた。あわてて、言葉を返す。

「では、自分がお供つかまつります」

護衛としては無意味な人選だが、ひとりでふらふらさせるわけにはいかない。

だが、これにも伝達官は首を左右にふった。

「いけません」

「なぜです？」

伝達官は肩を落として俯いた。

「ごめんなさい」

「謝るとしたら、お楽しみに水を差した自分の方でしょう」

「いいの」

なにが、と問い返してよいものかどうか。

さっきから、伝達官の言葉は意味不明なものばかりだ。単語ひとつで否定、否定、謝罪、肯定。なにを否定し、肯定しているのか。どれも曖昧で、よくわからない。

ルーギンがまだそのへんにいればよいのだが、と思う。彼ほど、女性の意味不明な反応を読みとることに長けている男もいるまい。

そうだ、ルーギンにまかせよう、とヤエトは思いついた。それが最善だ。

「騎士団長を探して参ります」



女の手が空を泳いだ。かと思うと、ヤエトの袖を、きつく摑んできた。最近、この袖は大人気だ。

——まさか、ルーギンとなにかあるんじゃないだろうな。

ちらりと疑ったが、今はそこを追求している場合でもなさそうだ。

「では、城へ戻られますか」

ほっとしたように、女の肩から力が抜けたのがわかった。うなずく動作は、まるで子どもだ。

ヤエトは顔を上げ、馬車の上で作業をつづけている男に声をかけた。

「この馬車は、もう城へ戻るか？」

「はい、尚書官殿。じき出発します」

「乗せてもらえるか」

「お召し物が汚れてしまいます」

「かまわん。助かる」

相手は荷物を積み直して隙間を捻出(ねんしゅつ)してくれた。ヤエトは先に乗り込むと、伝達官の手をとって引き上げた。女は逆らわず、馬車に乗った。

——なぜ、ここにいたんだろう。

尋ねてみたかったが、彼の問いに意味のある答が返ってくるとは思えなかった。

「この馬車は、いつ頃ここへ来たのか」

「さあ。俺は昼からずっとここにいたんで」

ようやく帰れる、というところか。ヤエトと同じ黒い髪に黒い眼をしているが、人種は違う。これは南方人だ。皇女が手配した手伝いだろう。

南方人にとって、北嶺で働くのは嬉しくないはずだ。北嶺人とはあまり折り合いがよくないらしく、互いを鳥野郎、糞南方人などと呼び合うほどだ。

「そうか。苦労をかけるな。おかげで宴(うたげ)はうまくいっているようだ、ありがとう」

「いや、とんでもない……」

男は語尾を濁(にご)すと、馬車を出した。

城に着くと、女は先に立って皇女の部屋へ向かった。五層まで上ることを考えると腰が引けたが、放

置するわけにもいかない。しかたなく、ヤエトは伝達者の後を追った。

暗くなってから長い階段を上るのは、好きではない。昔のことを思いだすからだ。

ほかのことを考えよう――この城の階段は細切れだから、助かる。螺旋階段もない。助かる。

階段以外のことは考えられないのか、と自分に呆れているあいだに、なんとか目的地に辿り着いた。扉を開けてくれたのは、いつものようにナオだ。

宴のための食材や人手と一緒に、例の途中で脱落したという若い女官たちも到着した。だが、皇女の部屋で仕えているのは今もナオひとりだ。

「ご用件は？」

ナオの横をすり抜けて、伝達官はさっさと中に入ってしまう。別れの言葉もない。馬車に同乗しているあいだに、かたわらに座る伝達官がどんどん非人間的な存在に変わっていくのを感じていたから、それについてはおどろかなかった。

むしろ、草地で会ったときに見せた表情や動作、言葉のすべてが伝達官らしくなかったのだ。

――人間くさかった。

どう判断すべきか、ヤエトにはわからない。伝達官が外にいた件も含めて、皇女に問う必要がある。

「伝達官殿を祭りの会場でお見かけしたので、お連れいたしました。太守とお話をしたいのですが」

「姫様はおやすみです。お疲れのご様子で――あなたもですけれど」

じろりと睨む視線は好意的なものではない。どうもナオには嫌われているようだ。

「太守にお取り次ぎを」

「明朝お越しください。あなたも、早くおやすみになるといいわ」

鼻先で扉を閉められ、ヤエトは少し考えた。このままここに座りこんだらどうなるだろう？　きっと倒れることになる――あの豪勢な器は今もヤエトの部屋にある。今度は別の器が犠牲になるのだろう。

ヤエトはため息をついた。
なんにせよ、ナオの防御を突破して皇女と対峙するほどの体力は、すでにない。
這いずるように部屋に戻ると、彼は寝台に潜りこみ、寒さにふるえながら眠りに就いた。

2

祭りの第二日は、紛争解決の日とされている。膠着しがちな身内の問題を晒し、第三者の判断を仰ぐのだ。周囲の意見に従う義務もないが、あまり反発していると見識のない者と看做されるという仕組みだ。家長の横暴に耐えかねた者が申し立てをして村を移ったり、家を分けたりといったこともあると聞いていた。
一応、今年は太守の裁可を得るという形式をとった方がよいだろうと考え、事前に尚書官たちに根回しもしてあったのだが、太守は欠席した。
ナオは、姫様はお疲れのご様子でというばかりで、取り次ぎすらしないのだ。
しかたなく、副官であるヤエトがあるじのいない椅子の横に座り、すべての訴えを聞くことになった。
ここに至って、ヤエトは北嶺人の大声の元がわかった気がした。
怒鳴りあいが、始まったのだ。
司会進行役もいない、ただの自己主張の場だ。自分の訴えを聞いてもらうため、皆が大声を張り上げる。当然、答える側も声が大きくなる。どうということのない混ぜっ返しも、真摯な意見も、もちろん本気の口喧嘩も、みんな大声だ。
なるほど、ものにはなんでも原因があるものだ。
今やヤエトもこの程度ではおどろかない。これが土地の流儀なのだと理解できる。赴任してすぐだったら、仰天していただろう。
離れて暮らしているからこその大声だ。次の祭りまで会わない相手も多く、多少揉めてもかまわない。

求められるのは自重ではない。自己主張なのだ。

持ち出される問題も、他愛のない競い合いがほとんどだった。笑いが上がることも多い。

だが、中にはいくつか深刻な問題もあった。麓の村との経済格差がもたらす、絶望的な借金の話だ。

はじめに叫んだのは、ひとりの女性だった。いわく、彼女の夫が病にかかったため、麓の医師から薬を買い求めた、夫は一命をとりとめたが未だ寝たきり、女性は夫の介護で手一杯。息子夫婦が必死で働いたが、借財はふくれ上がるばかり。ついに北嶺を出て働きに行くことになってしまった。彼女ひとりでは、残された家畜の面倒もみることができない。このままでは、自分たちはどうなるのか……。

なにかの裁定を求める発言ではない。ただ、自分の苦境を聞いてほしい、というたぐいの叫びだ。

同情の声があがったが、我が家はもっとひどい、という不幸自慢のような反応も少なくなかった。

――まずいな。

麓の村というのは、北嶺郡ではない。隣の郡だ。郡太守は帝国貴族ではなく、地元の豪族がとりたてられていたはずだ。

都と北嶺のあいだの物流は、ここで塞き止められる。物によっては、通行税という名の賄賂も要求されているようだ。本来、帝国内の物流に税がかかるべきではない。都に訴え出ればこちらが勝つが、事を荒立てては遺恨のもとになる。

なにより、他郡に駆け込まなくても済む医療の充実をはかるのが先決だろう。

心の中で重要案件を積み上げながら、ヤエトは息を吐いた。

――どこが閑職だ。

次に派閥争いに巻きこまれることがあったら、余分なことは喋らず、徹底的に日和見を決めこもう。絶対に、と心に誓いながら口を開いた。

「都から医師を招くよう、太守に具申しましょう」

「それがいい、尚書官殿のためにも」

グランダクの声だ。ヤエトが虚弱であることを知らない者はいないらしく、どっと笑い声が漏れた。
「気遣っていただいて、かたじけない」
「尚書官殿には、儲けさせてもらってるからな」
「ご自分の才覚で儲けておいでなのですから、わたしは関係ありませんよ。賭け事の種について、なんの提案もした覚えはありませんし」
にっこり笑いながら、ヤエトはグランダクの発言の意味をきっちり限定しておいた。儲けさせてもらう、などと曖昧なことをいわれるのは困る。
「じゃあ、たまには賭けましょうや、尚書官殿も」
「賭け事はしない質で」
「そうおっしゃらず。せっかくの祭りの席です、なにか賭けてくださいよ」
固辞するのも場の雰囲気をこわしそうだ。ヤエトは少し案ずるように首をかしげてから、ちらりとセルクを見た。
「競弓でセルク殿が勝利をおさめる方に賭ければ、かならず勝てると聞いたことがあります」
「尚書官殿！」
セルクの声が裏返っていた。よほど、おどろいたのだろう。
――これはちょっと愉快かもしれない。
「セルクに？　へぇ、それはおもしろい」
「いや、俺は出ないぞ……」
「出るしかないだろ、尚書官殿がおまえに賭けるとおっしゃったんだ。出るよな？」
逃げ場を失ったセルクの顔は、みるみる青ざめていく。賭けられるために出るとは本末転倒だが、セルクの思考はそういう方向には回らないらしい。
「胴元は貴殿ですか？」
「そうですよ。出場するかどうかわからなかったし、今年はわりと倍率がいいですよ」
「あとで賭け金をお渡しします。期待していますよ、セルク殿」
「あ……ああ」

セルクはグランダクに摑みかかりそうな形相をしていたが、ヤエトが声をかけると急にしおらしくなった。変な男だ。

午後は雨になり、怒鳴りあいのつづきは、お流れになった。

若者たちは、雨にうたれながら踊りはじめている。歌は方言が多くて意味がとりづらい。

――あれが、北嶺の本来の言葉なのだろうな。

聞き取って書き写したいところだったが、ヤエトは雨にうたれて平気な身体ではない。過保護ぶりを発揮したルーギンが回してくれた馬車に乗り、彼は城へ戻った。

城に戻るのには、もうひとつ理由があった。皇女に面会したかったのだ。

昨夜から、皇女はまったく顔を見せていない。訪ねて行っても応対に出るのはナオばかりで、声を聞くこともできないのだ。

詰め所の衛兵を通じてルーギンが把握している限りでは、皇女のもとに運ばれたのは通常の食事と香草茶、それに薬湯である。厨房で調べたところ、以前、ヤエトが倒れたときに出された薬湯よりはるかに効能の弱いものだ。

不調は不調なのかもしれないが、かたくなに扉を鎖すには、別に事情があるのかもしれない。

「女性がこういう反応を見せるのは、男にはわからない理由でかんかんに怒ってるとき……かな」

ルーギンはそう評したが、彼自身、皇女の部屋には入れてもらえないのだという。

「ふたりとも、怒られているということですか」

「いや、その相手もあなたやわたしに限らず、ね。誰かひとりに怒っているだけで、全世界を敵に回すということもあり得るから」

「わけがわからないな……」

「そのへんだけは、子どもというより女ですかね」

淡く笑って、ルーギンは髪をかき上げた。彼の口から皇女を女性と認める言葉が出るのは、はじめて

のような気がする。
「女性なら、貴殿の得意とするところでしょう。攻略してくださいよ」
「心当たりがないしなぁ。相手が姫様じゃ、なんで怒ってるかはわからないけど、とにかく悪かった、と謝るのでは怒りそうだし」
「そんな謝りかたがあるんですか」
「王道ですよ？　とにかく謝って、だからなんで怒ってるのか教えてくれないかな、と泣いている肩を抱き寄せてね……なし崩しにうまくいかせます」
「勉強になります」
ルーギンはにやりと笑った。そういう表情をすると、学生に戻ったようだ。
「実践するときは、見学させてほしいな。……ま、明日はお出ましになると思いますよ」
「なぜです？」
「そこは、姫様ですから。競弓を見物しそびれるなんて、考えられません」
競弓は祭りの三日から四日にかけておこなわれる。最終日には長老が神に捧げる詞を読み上げる儀式があり、勝者の名はそこに組み込まれるそうだ。
訊いてみたが、神の名は教えてくれなかった。誰も知らないのだと長老はいった。王国が崩壊したときに失われた――神の名も、その加護も。
「ああ。短弓を持たせろとか、作らせろとか、うるさかったですからね……」
「でしょう？　大騒ぎでしたよ、騎士団の威信をかけて誰か出場させろとかなんとか」
「代表を出すのですか」
「主命ですからね。わたしが出ます。余所者だし、土地の行事で負けても問題はないでしょうが……」
「威信がかかっているのではないのですか？」
「騎士団の威信なんてものは、どうでもいいんだけどね。みっともないのは嫌だし、毎日練習してます。短弓はあまり扱い慣れなくて。こんなに勤勉な団長殿を見るのははじめてです、といわれましたよ」

ヤエトは吹きだしそうになった。
「案外、負けず嫌いでいらっしゃる」
「そうなのかな。まあ、頑張りますよ。負けてもご愛嬌、でも勝てたら嬉しいな、くらいの心構えで」
「そうか、だったら貴殿に賭ければよかったな」
ルーギンが不審げに眉を上げたので、ヤエトは怒鳴りあいでの一件を話した。
「なるほど、では全力で勝ちに行きましょう」
「なんでそうなりますか」
「力を抜いたら八百長になりますよ？　まずいでしょう、郡の尚武官と尚書官の長が示し合わせて八百長なんて」
ヤエトは笑った。
「貴殿の勇戦を期待しますよ。どちらが勝っても不満はないですね。セルクが勝てばお金が儲かるし、貴殿が勝てば騎士団の威信がたもたれる、と」
「勝てるかな。弓がなんとかなっても、鳥に乗るのはまだ慣れません。落ちないのがやっとだ」
競技二日めは、鳥に乗って的を射るという。
「特例として、馬の使用を許していただいては？」
「それが可能な地形ならね」
「たしかに。では、練習前にもうひとつだけ。気になっていることがあるのですが」
ヤエトはルーギンに、伝達官を祭りの会場で保護した一件を話した。騎士は眉根を寄せ、腕を組んだりほどいたりしてから、それはよくない、といった。
ふたりがいるのは、ルーギンの私室だ。役目柄、部屋は三層、それも上へ通じる階段の近くにある。尚武官の中では例外的な配置だが、ここなら四層より上の奥向きに誰が向かったか、出てきたか、を把握することもたやすい。
彼の部屋の前に立っている衛兵は、ルーギンを守っているというより四層に通じる階段を守っているのだ。そういった機微を理解できる兵を充てている、とはルーギンの弁だ。
「伝達官が抜け出した、という報告は受け取ってい

ません。あの夜、警備が手薄だったことはたしかですが、五層の出入りだけは見逃すはずがない」
「窓から抜け出したとか……想像できませんが」
ルーギンはこめかみを押さえて考えこんでいたが、不意に顔を上げた。
「肩衣は身に着けていなかった、そうですね？」
「ええ」
「女官の出入りだと思われたんじゃないかな」
遅れて辿り着いた女官は全部で八名、これでも皇女の世話係としては少ないだろうと思われる。
だが、ナオはそれを全員追い返そうとした。自分ひとりでできる、と女官たちの奉仕を断ったのだ。五層の部屋に入れることすらしなかった。
聞いた話では、今頃になってようやく到着とは、姫様に顔向けできるつもりか、とひとりごとをいっていたそうだから、よほど怒っているのだろう。
見るからに都育ちで旅慣れない女たちだ、兵士でも愚痴をこぼすほどの強行軍に、ついてこられなくても無理はないが、ナオ自身ができたのだから、できなかった者をあなどるのもまた自然だろう。
姫様のお世話を申し付けられて来たのにこのまま帰れない、と泣きはじめた女官らを都に送り返すこともできず、ヤエトは皇女にたのみこんで、五層への出入りを許してもらった。
奥の部屋へ入ることだけはナオが断じて肯じず、皇女もナオの好きなようにやらせよという。若い女官たちは、水を汲んでくるとか、ごみを出すといった用をまかされた。それと、伝達官の面倒をみることも許されていたはずだ。
それが、この二、三日のことである。
詰め所の兵が、顔を見覚えていなくても無理はない。正直なところ、ヤエトにも見分けがつかない。
「しかし、皇帝陛下からお預かりしている伝達官に、勝手に出歩かれては困る。それが起きてしまったという話が広まるのも、まずい。よくないですね」
ルーギンは眼を閉じ、あらためて一連のできごと

を考え直す素振りを見せた。だが、結論は同じだったようだ。まずいですね、と静かにくり返す。
「昨夜のうちに、お知らせしておくべきでしたね。申しわけない」
「いや、伝達官が部屋を出たのに気づかなかったのは、警備の落ち度です。むしろ、連れ戻してくださったことに感謝しますよ。部下には、女官の出入りにもちゃんと目配りするよう、念を押しておきましょう。伝達官個人に護衛をつける方がいいのかな」
「おまかせします。太守には、自分からお話ししましょう。伝達官の居場所を太守がご存じだったかどうかも気になりますし」
「今日中に？」
少し躊躇したが、ヤエトは首を左右にふった。
「いえ、明日にでも。お出ましがないようなら無理にでも押し入りますので、その節はお力添えをお願いします」
「……姫様のお部屋に押し入る手伝いをせよと？」
「姫様が我々とお会いにならないというのは、ナオ殿の口から伝えられているだけ。真偽を確認するため、立ち入らせていただくのです。筋は通ります」
もちろん、皇女の怒りはまともに食らうだろうが、それがなんだ、と思う。太守の副官という地位など、怒りにまかせて解任してもらえたら、こんなに嬉しいことはない。
北嶺以上の左遷先などヤエトは知らないが、なにごとにも、上には上があるという。彼が知らなくても誰かが知っていて、皇女の勘気にふれた馬鹿者として彼を送り飛ばしてくれるだろう。
今度こそ、待っているのは地味な隠居生活のはずだ。素晴らしい。
ヤエトが理想の左遷先を妄想しているのを知ってか知らずか、ルーギンはなんともいえない微妙な表情で彼を見た。
「それはまあ、そうですがね……。女性に手荒なことはしたくないな」

「中に入る隙間だけなんとかしてもらえれば、あとは自分がやりますから、ご心配なく」
扉を開けてヤエトを送り出しながら、ルーギンはつぶやいた。
「いつも思うんですが、……無駄に勇敢ですよね」
褒められたのか、貶されたのか。どちらにせよ、ヤエトが勇気を示す機会はなかった。
翌日、皇女は祭りの会場に姿をあらわし、用意された席に着いた。ルーギンの予測通り、競弓を見逃す気はさらさらなかったらしい。
公式の行事であることを気にしてか、祭りに入ってから、皇女は姫君らしい衣装を選ぶようになっている。今日は、ほとんど黒に近いほど濃い赤を基調にした装いだった。長く引いた裾のため、鳥はおろか馬にも乗れず、移動に馬車を使ったほどだ。
暗い色の服にこぼれ落ちる金髪が映え、今日の皇女は非常に見栄えがした。初日の挨拶ではすぐ姿を消してしまって、十分にお披露目ができたという状況ではなかったが、その埋め合わせができる。
騎士団が整列して剣を鳴らすと、北嶺の民は眼をまるくしてそれを眺めた。皇女はかるく手を挙げてそれに応え、長い裾をさばいて着座した。
副官として、ヤエトはその右横に座を占めた。といっても、椅子はひとつなので、彼は毛皮の上にじかに座ることになる。皇女より頭が低くなるので、却って都合が良い。
例年はこんなものは用意しないという文句は出たが、太守の地位の高さを知らしめるため、同時にその姿を皆に見覚えてもらうために、ヤエトは観覧用の台を組ませていた。
木材が貴重な北嶺のこと、台といっても木枠に革を張り渡したものだ。椅子を置く場所は補強してあるが、不安定だし、荷重もあまりかけられない。だから台上には皇女とヤエトしかおらず、小声で話せば護衛の耳に届く心配もなかった。
「太守、あとでお時間をいただきたいのですが」

「気分がよくない、後日にせよ」
皇女の顔はたしかに蒼白く、頬の輪郭も少しまるみを失ったようだ。
早速始まった的当ての競技は、三人ずつ前に出て五本の矢を射、その速さと正確さで優劣を競う。三人中一人が勝ち抜けて、次の試合へ進む。子どもから老人まで参加者は多いが、とにかく皆、次の矢をつがえるのが速い。呆れるほどだ。
「できれば今日、お願いしたく存じます」
「加減が悪いというておろう」
「お顔の色を拝見すればわかります」
皇女は、その朝はじめてヤエトの方を見た。
「……そなたに顔色のことをいわれるとはな」
いつもと違い、視線が強くない。それも体調のせいだろうか。
今日まで、彼がこの少女から感じたことのない曖昧さが表情にあらわれている。つねならば、こんな風ではない——皇女はもっと迷いがなく、まっすぐな眼差しを向けてくるはずだ。
我知らず、ヤエトは顔をしかめていた。それが皇女に伝染して、硬い表情をさらにこわばらせてしまったようだ。彼は声をひそめて願い出た。
「脈をとらせていただけますか」
「そなたが？」
「病弱な我が身とのつきあいも長くなりますれば、薬師を自称するに躊躇のない程度には、知識をたくわえました。お手をとらせてくださいますか」
皇女は競技に視線を戻したが、肘掛けからだらりと手を落とした。ヤエトはその華奢な手首に指をまわし、脈を探った。
通常どれくらいのものかはわからないが、武芸が好きで健康そうな少女にしては、少し速めかもしれない。ヤエト自身は常人よりずっと脈が速いのだが、その彼の脈とそう違わないくらいだ。それだけではない。ふれた感じが、熱い。
「少し、お熱がおありですね」

「今朝はずいぶん良かった。寝ていれば治る」
「身体を起こしておいでのようですが」
皇女は素早く手を引くと、ヤエトを睨んだ。
「黙れ。気が散る。さっきの射手の結果を見そびれたではないか」
明日はルーギンがいっていたように騎射なのだが、今日はただ立って射るだけだ。ヤエトにしてみれば、へえ、で終わる催しだが、皇女はそうではないらしい。見物人のほとんどにとっても、どうやら魅力的な競技のようだ。
人々は思い思いの場所に席を占めているが、射手のわざが見事だと、歓声と拍手で会場が沸く。
「申しわけございません。お時間をいただけないほどお悪いのでしたら、見物は切り上げていただこうかと考えておりました」
「話があるなら、今にしろ」
――黙れとか話せとか、お忙しいことだ。
もちろん、ヤエトは最新の命令に従った。
「昨夜も、お加減はお悪かったのですか？」
「さほどでもなかった。心配には及ばん」
「伝達官が出歩くのをお許しになりましたか」
皇女の横顔がかすかに緊張したのを認め、ヤエトは返事をうながした。
「太守」
「気がついたら、姿がなかった」
「この広場で、おみつけしました」
皇女はおどろいて、ヤエトを見下ろした。
「城の外に出ていたのか」
「太守のご命令ではなかったのですね」
少し、返事までに間があった。皇女は顔を的の方に戻して、世間話でもするような口調で告げた。
「あの伝達官は新人で、経験が浅いそうな。まだ、自分の心を取り戻しておらぬ。陛下よりお預かりしたときに、そのように聞いた」
ヤエトは耳にした言葉を口の中で反復した。
――自分の心を取り戻していない……。

伝達官の能力は、皇家に与えられた神の恩寵と深く関連しているため、存在は広く知らされているものの、その力の詳細は秘されている。

皇女の言葉から推測すると、正式に採用されたばかりの伝達官は、自分の心を持たないようだ。人形めいて見えたのも、そのせいだろうか。

「放っておけば、飲み食いもままならぬ。陛下から預かった以上、あれの身に危険が及ばぬよう配慮するのは、わたしの責任だ」

「わかりました。今後は気をつけます」

「なぜ、そなたが気をつける。わたしの責任だといっているだろう」

「太守のお手助けをすることが、副官たる自分の責務です。太守が責任をもたれることは、万事、わたしの責任でもあります」

「そういう問題では――おお、素晴らしい！」

苛立たしげな言葉を不意に断ち切ると、皇女は歓声をあげ、手を叩いた。

なにかと思えば、射手が的の中央を射抜いたらしい。射たのはセルクのようだ。

「見事だ。あの距離で、あの精度。見たか、五本連続だぞ。とても人間業とは思えぬな！」

「あの者は、弓の上手と聞いております」

「そうか。あとで引見したい」

「お加減が悪かったのではないのですか？」

皇女はヤエトをにらんだ。

「そなたと口論して勝てる気がしない。なぜだ」

「畏れ多くも、太守の倍以上の歳を重ねておりますゆえ」

「宮廷では、そなたのさらに倍も歳を取った老人ともやりあったが、わたしが勝ったぞ」

皇帝の手前、遠慮したのだろう――という言葉は心にしまっておくことにして、違う答を探した。

「お相手は、きっと耄碌なさっていたのでしょう」

「言葉に容赦がなさ過ぎる。愉快なやつめ」

皇女は笑うが、ヤエトとしては複雑なところだ。

これでも、言葉を控えている。
「恐縮です。太守もご立派でいらっしゃいます」
「なにがだ」
「潔く負けを認めるのは、なかなか難しいことです。太守のように高貴なお生まれのかたには、殊に。稀に見る美質と申し上げてよろしいでしょう」
「すらすらぺらぺら、そなたの口はよく回るな」
呆れたような口調だったが、ヤエトは気にせず、話題を元に戻した。
「とにかく、引見は明日、勝者が決まってからということで、今日はお休みください」
「なにをいう。ルーギンが勝ってしまったら、つまらぬではないか」
騎士団の威信をかけて出場させられているルーギンの心境を思うと、涙がこぼれそうな台詞だ。
「準優勝者もお呼びになればよろしいかと。それに、あの者にはすでにお会いになっておいでです。北嶺にお着きあそばした日に、門前で。それから……自分が不調法をいたしましたときにも」
それだけで、皇女にはわかったらしい。
「そなたが倒れたとき、一緒にいた男だな？」
「御意。怖いもの知らずの男です」
「そうか？　そなたほどではないと思うが」
「おっしゃる通りかもしれません。自分は武芸をたしなみませんので」
「なんの話だ」
「昔の人の言葉です。小心で怖いものが多いほど、武芸者には向いている。恐れることは恥ではない。それは自身を磨くための鏡である、と」
「……皇祖か」
歴史嫌いでも、さすがに皇祖の逸話は知っているらしい。皇祖が武人だからだろう。きっとそうだ。
「そなたには、怖いものがないのか？」
「左様なことはございません」
「なにが怖い。そなたの弱みを知りたい。教えよ」
適当に受け流すつもりが、言葉が勝手にこぼれ出



た。
「夢です」
「夢？　夢とは、眠っているときの、あの夢か」
「ご快癒あそばしたら、お話しします。ですから、早めにお部屋にお戻りください。寝ていれば治るとおっしゃるのなら、お休みくださらねば困ります」
「競技を最後まで見てからだ」
皇女はつんと顎を上げ、前を向いてしまった。
――まあ、いいか。
心底具合が悪いという風ではない。
ひょっとすると、気の病かもしれない。生まれ育った土地を後にして、異郷へ来たのだ。みずから望んだこととはいえ、負担に感じないはずがない。今になって疲れが出たと考えれば、筋は通る。
到着するなり倒れた自分より、ずっと優秀ではないか、とヤエトは思った。

3

祭りが終わると、城はずいぶん静かになった。
尚書官も半分以上が一族とともに帰郷した。働き手は、ひとりでも多い方がよいからだ。鳥で一両日も走れば着く程度の距離に村がある者は、夏のあいだも暇を見て城に通ってくる。セルクは近くの村の出身だといって城に住みつづけていたが、それでも姿が見えないことが数日に一回はある。
北嶺の民のみならず、騎士団に所属する尚武官たちも、半分以上が麓に下ろされていた。馬もだ。
秣を麓から補給すればという騎士もいたが、買い付けた秣のどれだけを馬車馬自身が消費するか、必要な秣の購入に要する費用はこれくらい、その捻出のために騎士団の給与から天引きするのがこれほど、と計算していくと、最後には全員が静かになった。
半分は寝ていたんじゃないかな、とルーギンは笑ったが、とにかく話はついた。
馬はごく少数を除いてすべて麓へ下ろし、砦を作

ることになった。鳥と相性の悪い兵をその守備隊に配属し、南麓鎮と名をつけたものの、南麓もなにも砦は城以外にこれひとつだ。

帝国の北辺を守るという意識をもてば、あまりに脆弱な備えだ。

「北征の気配はありますか」

「まだ無理じゃないかな。あなたも直前まで都にいたのだから、わかるでしょう」

「自分のような末端の官吏には、雲上人のお考えが伝わることはありません」

「今はこちらが雲の上に住んでいる。下界の事情など知ったことか、と考えるのはどうです」

ふたりは城の四層にある庭に地図を広げ、各村落間の連絡を確認しているところだった。巡回医師の派遣を計画しているのだ。

今の季節、男たちのほとんどは鳥を追い、狩りの獲物を探して山中を移動しているが、老人や女、子どもは村に残っている。病人や怪我人も然り。

急がねばならなかった。北嶺の夏は短い。そして、冬に北嶺を移動するのは賢明なことではない。

あらためて、ヤエトは地図を眺めた。

北嶺郡の北西を走る山脈は高く、これを踏破するのはまず無理だといわれている。霊峰《天の槍》も、その山脈をなす嶺のひとつだ。

人が住めて通行ができる範囲が北嶺郡となるわけだが、そのほとんどを岩が露出する山地が占める。郡境の外はといえば、南部は都へとつながる平坦地、東部は乾燥した草原地帯、そして北東部は帝国の威光の及ばぬ地へとつづいている。

ここにも備えが必要なはずだが、険しい峡谷がそのまま国境の護りになっている。川幅は狭いが流れはきわめて速く、落差が激しい滝も多い。その上、谷が深いとあっては、容易には渡れない。

――それでも北から攻めてくることがあるのだ。

川の向こうは、北嶺よりもさらに貧しいのだろう。生産力が、人口を支えられないに違いない。

「任を退くまでは、平和であってほしいものです」
「まったくです。姫様は、許されるならご自身で軍を指揮してみたいとお考えでしょうが」
「太守は騎鳥の方もかなり上達されたそうですね」
「それはもう。護衛の者が置き去りにされる日も遠くはないでしょうね」
ルーギンも最近ではかなり達者な乗り手といえるが、都から来た誰より上達したのは、皇女である。
鳥に乗れるのが嬉しくてたまらないらしく、とにかく出かけてばかりいる。おかげで、歴史の勉強は停滞中だ。
「最近では、セルクに短弓を習っておられるとか」
「それはもう熱心に。来年の祭りはご自分も競技に出ると主張なさるに違いないです、賭けてもいい」
「そうしたら、貴殿は出場しなくて済みますね」
「特別参加として馬で出ますよ、来年こそ」
初日はセルクに劣らない成績をおさめたルーギンだったが、次の騎射は草原に面した急斜面を鳥で滑空しながら弓を射ると聞いて、皇女が棄権を命じたのだ。馬でできないこともないですが、と後でルーギンはさらりといってのけたものだ。
結局、優勝したのは大本命のセルクだった。それがきっかけで、皇女はセルクに一目置くようになり、今ではすっかり親しくなっていた。
セルクの年齢は皇女の倍だが、とてもそうは見えない。子どもがふたり、おもちゃで遊んでいるような感じだ。艶(つや)めいた雰囲気は微塵(みじん)もなく、怖くなるほど清々(すがすが)しいから困る。
――いや、困りはしないが……。
朝議ごっこに興じていた大人たちは姿を消したが、今では太守ごっこをする皇女がいる。それにまた、帝国かぶれの臣民ごっこをしている男がつきあっている……と、そんな風に見えてしまうのだ。
あやういと感じる反面、かれらの友情が長くつづいてほしいとも思う。
「セルクを尚武官にして、太守の護衛に任じてはど

うかと思うのですが」
「ああ、それは本人が嫌がるんじゃないかな」
言下に否定され、ヤエトは眉根を寄せた。
「なぜです？」
ルーギンは地図から顔を上げ、例の蕩けるような笑みを浮かべて答えた。
「少しも意外なことじゃないけどな。彼も負けず嫌いだから」
「意味がわかりませんが」
「彼にとって、尚書官であることの意味は大きい。それを辞めさせるとなると、彼は『負けた』という気分になるでしょう。無理、無理」
「……負ける対象がわからない」
「どうしても配属を替えたければ、命じればどうかな？　あの男が従うかどうかは知らないけど」
「それでは意味がないでしょう」
ヤエトが弱りきった声を出すと、ルーギンは笑いながら答えた。
「かまわないじゃないですか。姫様の相手をしてくれるなら、尚書官でも尚武官でも」
暢気なものだ。地図に視線を戻し、わたしもちょっと遊びに行きたいな、などとさらに緊迫感のないことを口走る。
「姫様を焚き付けようかな。領地視察の旅、とか」
「それはかまいませんが」
「おや、反対されるかと思ったのに」
「太守に視察していただくのは悪くない考えです。ただ、同行できるのは鳥に乗れる者に限られますし、護衛の数がたりないのでは、と思います」
ふうん、とルーギンは上目遣いにヤエトを見た。
「北嶺の者はまだ信用できないと？」
馬と騎士を籠に下ろしたのにあわせ、北嶺人から尚武官の登用もおこなった。鳥に乗れる尚武官も数を揃えることはできる。北嶺人を主体にすれば。
「貴殿の命令に絶対服従するか、という面ではまったく信用していません。セルクが辞令を受け入れる

かどうか、あやぶまれるのと同様ですね」
「ああ、そういうことか。なるほどね。でも面従腹背よりはいいよ、わかりやすい」
　少し考えてから、ヤエトは尋ねた。
「具体的に検討しますか？」
「遠慮しますよ。あなたに計画してもらうと、遊びにならない。だいたい、誰が姫様の面倒をみるんですか。わたしがひとりで？」
「セルクを連れて行けばいいでしょう」
「勘弁してください。あんなのが来たら、よけい大変になるだけじゃないか」
　本気で嫌がっているその声の調子に、ヤエトは少々おどろいた。
「あの男が、お嫌いですか」
「べつに嫌いじゃないですよ。好きでもないけど。ただ、お子様な主君と命令をきかない部下ばっかり連れて、なにをしろっていうの？」
「視察ですね、やるべきことは」
「無理です、無理」
「では、遊びに行く話はなかったことに」
「その話は別に計画します、先生を通さずにね」
　ヤエトは話題を変えた。
「麓の開墾は進んでいますか」
「……あまり芳しい報告は上がって来ないな。掘っても土より石が多いとか、侘しい話ばかりで」
「種子の手配は済んでいます。早急に、耕作できる場所を選定、確保してください」
「尚武官の仕事か？　という不満の声もあがっていますよ」
「上官の命令に服従するのが尚武官の仕事ですよ。兵糧を輸送や強奪にたよらず現地生産するのも、古典的な戦略のひとつです。たとえば――」
「歴史の講義は姫様にお願いしますよ、先生」
「上に立つ者として、あなたは学んでおかれた方がよいと思いますが。学舎での授業を抜け出してばかりで、試験の前に困っておいでだったでしょう。も

う試験では済みません。すべて実践ですよ？」
「おお、肩が凝った。運動でもしてこようかな」
ルーギンは首を回し、わざとらしく背伸びをした。そのまま立ち上がり、あ、と声をあげる。
「どうしました」
「姫様がご帰城だ」
ヤエトも立ち上がり、石壁の狭間から下を覗いた。陽光をはじいて黒光りする巨鳥が、すばらしい速度で駆けてくる。小柄な乗り手は皇女に間違いない。ぴたりと並走しているのはセルクだろう。上体がほとんど揺れていない。後ろをふり返ったセルクの視線を追って、ヤエトは唸った。護衛の姿がない。
「護衛を置き去りにして競争ですか。つい三日ほど前に、ご注意申し上げたばかりですが」
「……様子がおかしい。ちょっと見て来ます」
不意に声音を変えてつぶやくなり、ルーギンは胸壁に手をかけて飛び上がった。呆然と見上げたヤエトに、騎士はうなずいた。
「失礼、お先に」
そのまま一層下にひらりと降りると、ふり向きもせず三層の屋根を駆け去った。階段に回る時間が惜しくてのことだろうが、ヤエトには真似ができない。地図を畳み、小走りに階段へ向かった。
息を切らして前庭に着くと、なにやら興奮したセルクが持ち前の大声でわめいているところだった。
「信じられん！　絶対に、許せん！」
皇女は二羽の鳥に挟まれるようにして立っていた。引き結んだくちびるの色は悪く、手綱を握ったままの手がかすかにふるえている。
ルーギンの姿はない。
「落ち着きなさい、鳥が不安がっていますよ」
セルクの興奮につられて、鳥たちは頭を振ったり、足踏みをしたりしている。乗り手との絆が深いのも考えものだ、とヤエトは顔をしかめた。
「これが落ち着いていられるか！　貴殿も貴殿だ、なんだその……その、しれっとした顔は！」

「なにがあったかわかりませんからね。それで、どうしました」
「姫様が、矢を射かけられたんだ」
ヤエトは眉を上げた。その顔前に、セルクが矢を突き出す。北嶺でよく使われる、短弓用の矢だ。矢羽根の色は黒、大きさから見て巨鳥の羽根で作られたものだ。
「太守にお怪我は？」
「ない。俺が払い落とした」
呆れた反射神経だが、セルクなら納得だ。
「射られたのは、一回きりですか。場所は？」
「集会場……祭りの、広場のあたりだ」
「ルーギン殿は？」
「部下を連れて、賊を捜しに行かれた」
なるほど、とヤエトは門の方を見た。道理で、閉めてあるわけだ。
暗殺の危険性を示唆されたことを、今さら思いだす。あまりに平和なので、すっかり忘れていた。
「同行した護衛たちは、どうしたのです」
「皆、矢を射た者を探している。俺は、姫様をお守りして先に帰って来たんだ。……俺は情けなくてならん、こんなことがあるとは。女に矢を射かけるなど、そんな奴は北嶺の人間じゃない！　だいたい、姫様がなにをなさったというんだ！」
激昂するセルクに、ヤエトは重々しくうなずいて見せた。
「なるほど、そういうことでしたか。ルーギン殿は、守兵にも指示を残して行かれましたか？」
「あ、いや……わからん」
「ご自分が出て行かれたのですから、副官は残してあるでしょう。そこに一件の報告が届いていればよし、まだであれば副官を捜し、あなたが事態を説明してください。さあ……急いで！」
セルクは子どものようにうなずいて、城の奥へと駆け去った。
ヤエトは皇女に歩み寄ると、その手から手綱をも

ぎとった。そうされてはじめて、少女は彼の存在に気づいたらしい。
「なにをする」
「厩舎長に叱られます、あんなに駆けさせた鳥の面倒も見ず、そのままにしていたら」
　ヤエトは前庭の端で途方に暮れていた厩舎の少年に、うなずいた。少年は走って来ると、急いで鳥たちを厩舎に連れて行った。
　巨鳥という防護壁を失うと、皇女はいかにもたよりなげに見えた。ヤエトは少女の前に膝をつき、顔を覗きこんだ。
「お怪我はないのですね？」
「ない」
「なによりです。では今のうちに決めてしまいましょう」
「……なにをだ」
「どれくらい、怒っておいでですか？」
　皇女は眼をしばたたいた。ようやく、表情がはっきりする。
「怒る？」
「セルクは北嶺の者が射たと思っているようですが、実際は北嶺の武器と流儀でお命を狙った者がいる、というだけのこと。北嶺の者の仕業と見せかけての外部の凶行であれば根は深い。それを、どこまでたぐってご覧になりますか。都までつづいていたとしても、暴くご覚悟が、おありですか」
　皇女はヤエトを見下ろし、深く息を吐いた。
「そなたは、……誰のしわざだと」
「わかりません。北嶺の者がしたことにしても、どの程度、厳しくあたるべきか。それは、お心を決めておいていただかねばなりません」
「野蛮人どもに、我が命を好きに狙わせよと？」
「よくお考えください、あの矢がお命を狙ったものかどうか。北嶺の射手が本気であれば、セルクに払い落とさせて、それで終わりにするでしょうか」
　鳥に騎乗しての扱いが容易なように、北嶺の弓は

短弓が主流である。生活に密着した技術だから、北嶺の男は、誰もが一流の射手といっていい。

北嶺の民が本気で皇女の命を狙ったなら、こんな半端なことはしない。これは脅しだ。

――外部の暗殺者にしても、事情は同じか。

命を狙ったにしては、あまりに杜撰だ。

皇女は眉根を寄せ、少し考えこむようにしていたが、やがてうなずいた。

「そうだな。そなたの申す通りだ」

「狩りの流れ矢であろうという話にして、よろしいですか。次は、ご自分で払い落とせるように鍛えておこうと、そういう笑い話に」

「そこまでか」

呆れ顔で見下ろされて、ヤエトはほっとした。皇女は落ち着いて見える。冷静な判断が望めそうだ。

「太守のご器量の大きさを示すためです。北嶺の民が、畏れ多くも太守を試すつもりで射かけたという可能性もございます。無論、我々は怒りを見せ、徹底して調査すると申し上げます。太守はそれを、くだらぬとおっしゃれますか？　お怒りを、そこで抑えていただけますか」

皇女はヤエトに笑顔を見せた。まだ若干こわばりが残っていたが、だいたいは、いつもの表情をとり戻したといっていい。

「……珍妙な提案だな」

「その程度のことしか、思いつけませんので」

「気にせぬ、という態度を見せればよいのだな？」

「御意」

「罠か？」

ヤエトは頭を下げた。するどいな、と思う。

「こちらが油断していると見れば、誰とも知れぬ敵もまた、油断をするかと存じます」

「杜撰な手を打つと期待するのか。そこを捕らえられればよいが、わたしはまだ死にたくはない」

「騎士団が、太守をお守りするでしょう」

「そなたではないのか？」

「命と引き換えでも、お守りできるかどうか。自分でしたら、この手にお命は預けません」
皇女は笑った。笑いながら、ヤエトが曖昧に広げたままにしている手をとり、彼を立たせた。
「もうよい、わかった。流れ矢だ」
笑いがとまらない。緊張の糸が切れたのだろう。
命を狙われる気分は、ヤエトにはわからない。愉快ではないだろう。恐怖、不安、怒り、恨み……どれが勝つかは、その人物次第だ。あるいは諦め。
——自分なら、諦めるかな。
だが、皇女にそうあってほしいかと問えば、そうではない。この少女に、暗い諦念は似合わない。
皇女の手を見下ろして、ヤエトは静かに告げた。
「北嶺の民に、不満をつのらせるようなご統治ではありません」
皇女の笑い声が途切れた。
「……うん」
「太守は、よくなさっておいでです。こういう表現はお好きではないかもしれませんが、……お若い、しかも女性の身とあなどられても、無駄に怒りをあらわになさらず、よく堪えられました」
「そうかな」
「皆、太守を慕っております。セルクがあれほど憤慨するのも、心から太守にお仕えしているゆえ」
暫し、皇女は答えなかった。彼の言葉をどこまで信じてくれたのか、ふたたび口を開いたとき、少女は門をみつめていた。外に閉め出したはずの暗殺者の姿を、透かし見ようとでもいうように。
「陛下が、おっしゃったことがある。百人いたら百人に好かれようと思うのは、愚か者の考えだと」
「含蓄のあるお言葉です」
「昔は、よくわからなかった。今はわかる。わかりたくなかったが、……わかる程度には大人になったと、自分では思っている」
ゆっくりと、皇女はヤエトの方に視線を向けた。竜種特有のあざやかな紫の双眸は、わずかにうるん

でいるように見える。
泣かれると困るな、とヤエトは思った。
ヤエトには、女心というものが理解できない。ルーギンが子どもだというから、皇女のことは女と思わないようにしているが、それで大丈夫なのか。
泣かれたらどうするべきか、今度ルーギンに教わっておこう、と思った。
「陛下は、こうもおっしゃった。その百人の何人でもいい、心から従ってくれる者がいれば、百人を率いる長になることは不可能ではない、と。だから、わたしも諦めぬ」
「お見事なご覚悟です」
「わからん奴だな」
「……は？」
「そなたのことだぞ。次はその口に、命と引き換えにしても守るといわせてみたいものよ」
完全に、虚をつかれた。
ヤエトが返す言葉を見失っていると、皇女は彼の手をはなし、奥から駆け戻って来たセルクと、どう見ても多過ぎる兵たちに向かって声をあげた。
「騒がしいぞ！　うろたえるな、流れ矢に過ぎぬ」

4

皇帝から連絡があったのは、流れ矢の一件からわずかに五日後のことだった。
避暑をかねて、皇妹が訪ねて来るという。皇女がうまくやっているかを実地に検分し、あまり状態が悪ければ連れ帰る……と、釘を刺されたらしい。
皇妹の訪問とはまた微妙な、とヤエトは思った。
皇女の郡太守就任が異例の大事件であるように、原則として女性は公職には就かない。皇妹もその例に漏れない。太守の縁者による私的な訪問であるし、皇妹はすでに他家に嫁いだ未亡人だ。尊貴な身分であるのは間違いないにせよ、扱いは難しい。
皇帝にとっては、皇妹は自由に動かせる駒なのだ

ろうが、出迎える側には厄介な客だ。
「何日後にご到着かは、わかりますか」
「さあな。だが案ずるな、おいでになる三日前には直接連絡をくださるそうだ」
「直接、とは？」
「叔母上は伝達官を通す必要がない。皇家の人間なら誰とでも、心を繋ぐことがおできになるのだ」
神の恩寵は、契約から時間を経るほどに薄れていく。最後の契約といわれる帝国ですら、皇祖による契約まで数百年を遡り、往時の力は失われているはずだ。今の世にそこまでの力をあやつる人物がいたとは、想像だにしなかった。
皇女は無邪気な笑顔を見せた。
「おお、鉄面皮の尚書官をもおどろかせたようだ。さすが叔母上だ！」
なあ、と同意を求められたルーギンは、いつもの笑顔でうなずいた。
「ラキニー様は、皇家の誉れであらせられます」
皇帝から見たその妹の利用価値は、便利などという程度の言葉であらわせるものではなかろう。
――それを、北嶺に寄越すのか。
ただの親馬鹿か、それともほかに事情があるのか。
案じつつ、ヤエトの視線はルーギンへと向かった。
「歓迎の宴を開かねばな。叔母上が、ここを気に入ってくださるとよいのだが。……鄙び過ぎて、呆れられるかな。どう思う？」
熱心に語りかける皇女に対し、騎士の笑みはさらに深く、やわらかくなる。
「ご案じめされますな。ラキニー様は、いつも姫様のお味方でした。姫様が統治なさる土地を、ラキニー様がお嫌いになられようはずもございません」
「そうだな」
安心したように皇女はうなずいて、ナオに厨房の者を呼ぶように命じた。
「太守」
控えめに、ヤエトは声をかけた。

「なんだ？」
「北嶺の財源は、けっして潤沢ではありません」
「知っておる。だから、わたし個人の――」
「なりません」
皇女は苛立ちを隠さず、ヤエトを睨んだ。
「なぜだ」
「太守として、立派につとめておいでかの視察を兼ねてと伺いました。太守としてお迎えなされませ。皇女としてのお立場をどうしてもお守りになりたければ、職を返上なさるしかありません」
皇女の顔が歪んだ。頬が真っ赤になる。怒ってるな、と思いながらヤエトは深々と頭を下げた。その頭上へ、突き刺さるように言葉が飛んでくる。
「無礼者！　わたしは立場などのためにいうておるのではない。叔母上に、わたしが心から歓迎しているということをわかっていただきたいだけだ！」
予想通りの理屈だ。
「では、伺います。皇妹殿下は太守が太守とは名ばかり、未だ陛下の庇護をあてにする甘やかされた姫君のふるまいをお見せになっても、それを看過なさるでしょうか？　北嶺の貧しさにもお気づきになれず、都から取り寄せた珍味にお喜びになるような、愚かなおかたにあらせられますか」
皇女は口をぱくぱくさせている。陸にあげられた魚のようだ。そのうち呼吸困難を起こしてひっくり返るのではないだろうか。
ナオが激怒して割って入るのではないかと思ったのだが、意外にも冷静に眺めている。感心した。
「ぶ……無礼者！」
ようやく皇女の口から言葉が出た。かなり怒っているのはわかったが、ヤエトは容赦しない。
「皇妹殿下は、副官の進言を容れるべしという条件はご存じでしょうか。無礼な副官が粗餐を勧めたとでもご説明になれば如何。さすれば皇女殿下の見栄も損なわずに済みましょう」
皇女の髪の毛が逆立ったように見えた。

「見損なうな！」

「見損なってなどおりません。先ほどから太守がおっしゃることすべて、自分の予測の範疇におさまっております。申し上げることは、以上です」

とりあえず、一回は諫めた。義務は果たしたと考え、ヤエトは一礼すると許可も待たずに退室した。

皇帝に任命されたのでなければ、何回か殺されていてもおかしくないかな、と考えてみる。

彼がうまく日和見を決めていれば、ここにはまだ前任者がいて、皇帝の勅命で太守副官になっていただろうか。彼はそれを幸運に思うだろうか？

「待ってください」

皇女の部屋から出てきたルーギンに声をかけられ、ヤエトは足を止めた。

それが、いつか幻視した男が立っていたのと同じ場所だと気づいたのは、矢狭間から垣間見えた景色のせいだ。《天の槍》が、よく見える。

崩れた城址も同じ方角にあるはずだ。一帯が陥没しているので、見えないだけである。

——もしかして、あの城を見ていたのでは？

崩れ落ちる前ならば、ここからでも見えたのではないか。ここは旧城が崩れ落ちた後に建てられたものと考えていたが、違うのかもしれない。

——滅びてしまうというのは、あの城が崩れ落ちるという意味だったのかも。

ルーギンが、彼の横から矢狭間を覗いた。

「どうかしましたか？」

ヤエトは心の中から幻を追い払った。

「空が、青いですね。ここに着いた頃は滅多に晴れなかったので、今でも青空が嘘みたいに思えます」

「こんな狭い空を見ていてもしかたがないでしょう。……どうです、体力作りも兼ねて、たまには外へ行きませんか。お供しますよ。鳥に乗って、遠乗りなどどうですか。きっと気分転換になります」

「かまいませんが……速度は出せませんよ」

「速いのがよければ、北嶺出身の者を連れ出します。

いいからつきあってください。最近、忙しくてろくに鳥に乗っていないせいか、ちょっと腕が落ちてきてね。わたしに自信を持たせるためとでも考えてくだされば結構」

辞退を認めてくれる雰囲気ではない。

「太守のご機嫌は」

「最低ですよ、もちろん」

そこでふと思いだしたというように、ルーギンはヤエトを無遠慮に眺めた。

「なんですか」

「いや、前にもいったと思いますが、ほんとうに、無駄に勇敢だなと」

「無駄だとは思いたくないですね。意味があるつもりで、やっておりますので。貴殿は、太守を宥めてさしあげないのですか？」

「そういう気分じゃないからな、今は」

たまに、ルーギンはとんでもないことをいう。

「皇女殿下の騎士団長が、そのような……」

「騎士団長の任務は、姫様を物理的な危険からお守りすることであって、わがままをいって泣き叫ぶ頭をよしよしと撫でてやったり、あやしてやることじゃないですからね」

「精神的な支えにもなってさしあげるべきでは」

「あなたが叱る役で、わたしが慰める役ですか？嫌ですね、願い下げだ」

辛辣な言葉とは裏腹に、見蕩れるような笑顔だ。どこまで本気なのか。へたをすると皇女の耳に届くのでは、と部屋の方を見たが、扉は閉じたままだ。

行きましょう、と騎士は先に歩きだした。

ふたりは厩舎へ向かった。ルーギンは堂々とした体軀の若鳥を選んだ。ヤエトのように鳥を座らせてからよっこらしょとよじ登るのではなく、土地の若者と同じように、立たせたまま飛び乗っている。

「どこに行こう？」

「誘ったのはそちらじゃないですか」

「城から出たかっただけですし。人がいない場所が

いいな」

やれやれ、とヤエトは心中でため息をついた。あまり気が乗らないが、しかたがない。シロバに声をかけると、鳥は力強く歩きはじめた。

「では勝手に選びますよ、趣味で」

人に出会う可能性が低いといったら、例の古い城址が確実だ。

道中、ルーギンはやけに饒舌だった。暗殺未遂の一件について、その後の調査がどう進んでいるか、都の動静を探った話や土地の者に矢を見せて調べさせたときのようすなど、ヤエトが知っていることも知らないことも、とにかく喋りつづけた。

それが、城址が見える崖に着いたとたん、ぴたりと黙ってしまった。

ヤエトがシロバから降りて岩に綱を回し、こわばった身体を伸ばしていると、ようやくルーギンも鳥の背をすべり降りて来た。

「こういう趣味ですか」

「今さら、なんです」

「地味で暗いですよね」

「自分が派手で明るいと思ったことはないですね」

久しぶりに見る城址は、やはり彼を魅了した。

もっと調べたいと思っていたはずなのに、なかなか来られずにいた。まとまった暇をつくるのが難しいのもあるが、怖かったのだ。崩れた石を見れば過去を想い、また厄介な幻視に悩まされるかも、と。

それでも、来てしまえば怖さなど忘れる。失われた過去に手が届くなら、幻視に身をまかせてもよいとすら思える。どれほど古いのか。誰が生き、死んでいったのか——語り継がれぬまま消え去った人々の会話の欷が、聞こえるのではないか……。

多少は鳥に乗り慣れてきた今でも、この場所には、これ以上は入りこめない。縄梯子でも持って来てはどうだろう……いや、それ以前にまず体力作りか。

ぼんやり考えていると、ルーギンがつぶやいた。

「なにも、いわないんですね」

「気のきいた話し相手をお望みでしたら、ほかをあたってください」
「まさか、ご存じないわけではないですよね？　ラキニー姫のことを」
「拝顔の栄に浴したことはないですが、お名前は存じておりますよ」
「そういう意味じゃなく」
「どういう意味でも、わかっています」
ただ、うまく言葉にできないだけだ。
「どうわかっているのかな」
しつこく問われて、ほとんど衝動的にヤエトは口を開いた。
「自分が免職されたのは、あなたの放埒な不品行の監督不行き届きの責任をとらされたからである、その不品行を喧伝したのはほかならぬあなたのご父君である、そしてご父君がなぜそんなことをなさったかといえば、ラキニー様とあなたが不埒な関係にあるという事実をその中に紛れさせてしまいたいとお考えになったからである――と理解しています」
ルーギンの顔から表情が消えた。
謝罪の言葉を口にしかけ、思いとどまった。ルーギンは、彼に詫びの言葉など望んでいない。
この騎士がヤエトに負い目を感じているなら、そんなものはさっさと捨ててほしいと思う。悪いのは彼ではない。皇妹でもなければ彼の父親でもなく、ヤエトの処分を決めた学長ですらない。
誰も悪くはない。皆それぞれ、自分の立場でなすべきことをした。それだけだ。
それが人の世なのだ。個人の感情や望みなど、容易に砕かれる。皇帝ですら、意を通せるとは限らない。慣例で複雑に編み上げられた共同体の意向こそ、この世で最大の権力だ。
だから、誰にもどうしようもなかった。ヤエトの免職は、妥当な落としどころだろう。
皇妹は、皇帝の腹心《黒狼公》の妻だった。沙漠を渡って後の平定が素晴らしい早さで終わったのは、

彼の周到な根回しによるといわれている。北嶺を傘下に引き入れたのも、彼の仕事だろう。

だが、彼は死んでしまった。真帝国の建国後間もなく、早過ぎる死だった。

その死と前後して、ルーギンは皇妹に恋をした。

ルーギンと皇妹がどうやって出会ったのか、ヤエトは知らない。相手が誰なのかも、当初は知らなかった。若者が激しい、しかし望みのない恋に落ちたことを知っていただけだ。

舎監として、門限を破った若者を捕まえるのはヤエトの役目だった。必然的に優等生以外とのつきあいが多く、ルーギンもそのひとりである。この美貌に家柄だから、当然、目立っていた。

とり巻きは多かったが、親友と呼べるほど親しい仲間はいないように見えた。ルーギンが滅多なことでは人に心を許さないからだろう。そう見えた。

――皇家の女性が再婚しない風習は、いつ頃からのものですか。

ある晩、ルーギンはそんなことを尋ねた。学舎の蔵書は残念ながら貧弱なもので、調べてみても、発端は財産分与問題だろうと見当がつくだけだった。

皇家にはじまり今は貴族ばかりか富裕層の庶民にまで広まった風習は、容易には覆らない。権勢を誇る大貴族の若様であっても、結婚相手として選べるのは初婚の女性に限られるのが現実だった。その上、相手が皇妹では側妾にもできない。

問題は、若者の恋に世間的な許しが得られないことに留まらなかった。ルーギンの胤をラキニー姫に生ませ、死にかけた貴族の家を乗っ取ろうとしているのではないかという噂が流れたのだ。

放っておけば、宮廷を揺るがす大問題になる。

そこで、ルーギンの父親は一計を案じ、息子は途方もない放蕩者だと噂をたてた。真実の恋をまぎれこませてしまったのだ。その上で、不品行の責任を取れと学舎に迫った。大したものだ。

かくして、ヤエトは舎監の職を失った。

「免職だけでは済まなかったはずだ」
「そんなこと、どうだっていいでしょう」
ルーギンは岩の上に足を投げだして座った。長い髪が風に舞うにまかせている。ヤエトの方を見もせずに、静かに告げた。
「誰も教えてくれないとき、どうすればいいか知っていますか。本人に直接尋ねるんですよ」
「しつこいんですね」
「そうですよ。意外に思われる方が、意外かな。身持ちのかたい女性を落とすには、艱難辛苦を乗り越える粘り強さが必要なのに。皆わかっていない」
「負けず嫌いですね、やっぱり」
ヤエトが苦笑すると、ルーギンは首をかしげた。
「そういう問題かな。でも、ここぞというところで負けてもいいと思えるのは、男じゃないでしょう」
「皇女殿下は男前ですね、そういう理屈でいえば」
「話を逸らしても無駄です。教えなさい」
この調子だと、何日でも追い回されそうだ。しかたなく、ヤエトは答えた。
「謹慎を……たしか、百日ほど」
「それから？」
「家名を剝奪されました」
官吏でいると便利なのは、家名などというものを使わないで済むことだ。
尚書官のヤエトです、で話は終わる。公式の場では家名を出してはならない決まりは、家より公務を優先するという精神をあらわすためのものだそうだが、ヤエトにとっては幸いだった。
「……つまり、あなたは正式の結婚ができない」
「もとから結婚する気はなかったので」
ルーギンは、これに衝撃を受けたようだった。おどろきもそのままに問い返してきた。
「なぜ？」
「三十歳まで生きないだろうといわれていたのですよ。結婚した、子ども作った、ではさようなら、……というわけにはいかない」

「そうかな」
「無責任過ぎるでしょう。自分がこの世から歩み去る時期が遠くないと知っていたら、できませんよ」
ルーギンは納得しなかった。
「ふつう逆じゃないですか。期限までに、やりたいことをやっておくものでしょう。そんなことをいったら、尚武官なんて誰も結婚できなくなりますよ」
「戦に行っても死ななければいい」
「先生、いってることが乱暴ですよ？　それに、三十なんかとっくに過ぎているはずだ」
「だから、いつでも死ねるように、身辺の整理は欠かしません」
真面目に答えたのだが、ルーギンはひどく困ったような顔をした。
「ずいぶん寂しい人生だな」
「地味で暗いのが趣味ですからね」
「……しかし、それでよく官吏をつづけられましたね。家名がなければ登用もされないのでは？」
「すでに尚書局に登録されていましたから。謹慎がとけた時点で、なに食わぬ顔で戻ってみました」
「いい根性ですね」
「食うに困っただけですよ」
ルーギンは笑ったが、これがいちばん笑い事ではなかったのだ。
ひもじいのは、つらい。彼は楽に死にたいのだ。食べるためには金が必要だ。沙漠のこちら側には係累のひとりもいないから、自分で稼ぐしかない。だから、彼を雇ってくれている帝国には感謝しているし、相応には働くつもりだ。
「ここへはなぜ？」
「前に説明しませんでしたか。派閥争いを傍観しているつもりが巻きこまれて、左遷されたんです」
「……昔と同じようなことをしてるんだな」
「人は容易には変わらないものです」
そうですね、とうなずいて、ルーギンは尋ねた。
「役者が揃い過ぎる、とは思わないかな。ラキニー

様、わたし、そしてあなた」
その美貌に、今は微笑の影もない。
城を出たのは、この話がしたかったのだろう。
たしかに、偶然にしては出来過ぎている。皇帝が妹とルーギンの一件を知らないはずがない。ルーギンを皇女の騎士に任命したのも皇帝だ。
だが、ヤエトはどうだろう。
「皇帝陛下が、自分のような木っ端役人をご記憶とは思えません」
「陛下がご記憶でなくても、誰かが記録をあさって引っぱり出したのかも」
「わたしの左遷も陛下の思し召しだと？　あり得ませんね。自分がここに飛ばされて、太守の副官に任命されたのは、事故のようなものです。ですが、皇妹殿下が貴殿のおられる土地においでになるのを偶然と考えるほど、おめでたくはないつもりですよ」
ルーギンは眼を閉じた。聞きたくない、という顔をしている。
それで得心がいった。
――まだ惚れてるんだな。
落ち着かない様子を見せているのは、彼が皇妹への慕情を断ち切れていないからだ。
どうも思っていなければ、保身だけを考えればよい。それができないから、参っているのだろう。
「こちらからも、質問してよろしいでしょうか」
「どうぞ」
「陛下はなにを望んでおいでなのでしょう？」
これは不幸な恋人たちへの恵みなのか。それとも、ルーギンを皇女の婿にと考えていて、彼を試そうとしているのか。あるいは、ほかになにか？
「それがわかれば、気が楽になるでしょうね。伝達官にでも、訊いてみようか」
「お得意の、本人直撃作戦ですか？」
「伝達官を通じて陛下に質問するにしても、まず姫様にお願いしなきゃならないからな……」
どこまで本気なのか、顎をしごきながら唸りはじ

めたのを無視して、ヤエトはもう少し現実的な話をふった。
「伝達官はどうですか。勝手にうろつくことは？」
「見た限り、落ち着いているんじゃないかな。ほとんど五層から動かないですね。あの祭りの夜だけかな、ひとりで出歩いたのは」
今日も、伝達官は皇女の部屋の片隅に座っていた。動きもしなければ喋りもしない。あのとき見たのは幻だったのではないか、と思いたくなるほどだ。
それをいえば、はじめに皇帝の言葉を伝えていた姿はさらに別人のようだったのだが。
「皇妹殿下は、貴殿の心にも直接ふれることがおできになるのですか？」
ルーギンは夢みるように答えた。
「わたしの心にふれることができるのは、あのかただけです」
「申しわけありませんが、……そういう乙女心満載の回答ではなく」
よほど苦々しげな顔をしてしまったのだろう、ルーギンは笑って肩をすくめた。
「無理ですよ。貴族といっても、うちの家系はあまり皇家との婚姻が多くない方だから、血が薄い」
「そうでしたか」
「それができたら、と思ったこともあったかな。わたしも、それなりの期間は謹慎させられたので」
「太守は、ご存じなのですか？　当時……太守はもう生まれておいでだったかな？」
「どうだったかな。たしか、まだ人語を解さない謎の生き物だった頃でしょうね。わたしは子どもが嫌いで、ご挨拶に伺わされるのが面倒でならなかったものです。姫様がまた、やんちゃで……」
想像がつく。
「お疲れさまでした」
「過去形にできればなあ。今でもまだ、子どもの相手をさせられているわけだし」
「とにかく、太守は皇妹殿下と貴殿の一件をご存じ

ないのですね？」
「まず間違いなく、ね。知らぬふりができるとも思えないし」
「今回も、隠し通すつもりですか？」
そこを確認しておかねばならなかった。うっかり口をすべらせて、いらぬ恨みを買いたくない。
ルーギンは曖昧に微笑むと、立ち上がった。眼が本気だ。
「あのね。ラキニー様がおいでのあいだ、わたしに良識を期待しては駄目ですよ」
「……いや、それは無理です」
思わず本音で答えてしまう。だが、ルーギンはヤエトとの距離を詰めると、彼の眼を覗きこんだ。
「これは忠告ですよ？　今度こそ巻きこまれないよう、いつでも逃げられる算段を」
「なにをするつもりなんです」
「わたしが計画的な人間かどうかくらい、ご存じでしょう？　なにをするつもりもない。でも、しないつもりもない。自分でも、なにが起きるかわかりません。もし……わたしが姫様を傷つけるようなことをしたら、あなたが慰めてあげるんですよ？」
「ああそうだ、思いだしました」
「なんです、急に」
「泣かせてしまったときの対処法を、教わっておこうと思っていたんです」
一拍置いて、ルーギンは笑いだした。
「いや……すみません、それは無理じゃないかな」
「無理って、なにがです」
「姫様ですよね？　人前でお泣きになったのを、見たことがない」
「それは心強いですね」
「もっとも、涙を流さない人ほど、慰めるのは難しいのだけど」
「そうなのですか」
ルーギンは笑いをおさめると、一転、真面目な口調で告げた。

「人に弱みを見せられない。発散できない。自分をさらけだすのが怖くてたまらないから、泣けないんです。だから、慰められるのも苦手ということになる。まあ……難しい相手ですよね」

「無理そうなので、貴殿にお願いしておきます」

「そうおっしゃらず。でも、姫様はどうかな……わたしの前では、なおさら泣かない気がするかな」

「そうですか」

騎士は不思議そうにヤエトを見た。

「どうして、とは訊かないんですか？」

「理解できそうもないので」

「簡単な話ですよ。つきあいが長過ぎるから、互いに踏みこまない一線が、できあがってしまってね。無理だと思うな」

ふと、ルーギンが語っているのは皇妹のことなのではないか、と感じた。互いに一線を引き合うしかない恋人たちなのだから。

良識を期待するなといいながら、ルーギンは危険な領域に踏みこむことはしないだろう。彼ひとりなら知らず、皇妹の立場をあやうくはするまい。

なんのために、皇帝は妹を派遣するのか。

「人の心とは……損得を超越し、いかなる欲得ずくの陰謀をも転覆させる」

ヤエトのつぶやきに、ルーギンはもの問いたげに眉を上げた。

よい喩えではなかった。この言葉は、恋に狂った挙げ句の暗殺計画を評したものだったのだから。

「昔の人の言葉ですよ。……たしかに、一件に関わりのある人物ばかり、集められるのはおかしい。謀られているのかもしれない。ですが、貴殿は迷わず真情をつらぬかれればよいと、わたしは思います」

そうですね、と騎士のくちびるが動いたが、声にはならなかった。彼の剣につけた鈴が澄んだ音を発したのが、まるで返事のようだった。

5

皇妹ラキニーの訪問は、北嶺に想像を絶する華やぎをもたらした。

皇妹自身は、思いのほか地味な装いだった。

装束は喪である白一色。透きとおる水晶と銀をあわせた装身具を鳴らして馬車から降り立った姿は、印象的だ。崇拝者たちに《朝露の君》とか《月影姫》とか雅な名で呼ばれているらしいが、なるほど、この佳人ならそうした呼び名も似合うだろう。

ヤエトより二つほど年長だそうだが、年齢不詳どころか人間離れした雰囲気の持ち主である。

ほとんど白に近い淡い色の髪が華奢な首や肩を覆う様は、けぶる朝靄のようだ。身動きするたび水晶がちらちらとかがやき、皇妹を清冽な光の化身であるかに見せる。

あざやかな紫色の双眸が、唯一のいろどりである。暮れがたの空にまたたく明星をはらんだようなその眼差しは、あまりにも明るい。

ヤエトは自分が彼女の前では終始頭をたれているべき身分であることを感謝した。

――これは疲れる。

儚げな容貌と裏腹に、その存在感は圧倒的だ。

皇女も竜種の気をまとっているが、皇妹は桁が違う。なかば伏せた目蓋の下、長い睫毛の陰から視線を送られただけで、鼓動が倍速になってしまう。まともに喋ることなどできそうもない。

今さらながらに、ルーギンの鈍感さに呆れる。この女性が平気なら、この世のなんだって平気だろう。怖いものは神くらいだ。

しかし、恩寵の力に過敏なのはヤエトだけらしい。出迎えた面々は皇妹に見惚れるばかりで、冷や汗をかいているのは彼ひとりだ。

「木材が貴重だと聞いたから、いろいろあつらえて来たの。もっと早く来たかったのだけれど、これができるのを待っていたら、遅れてしまったわ」

皇妹が持参したのは、大量の家具だった。それも、

素晴らしい細工のものばかりだ。
「お心遣いに感謝します。ですが、叔母上が来てくださるだけでも、嬉しいです」
皇女は未だかつてヤエトが聞いたことがないほどつつましく、丁寧に喋った。こんな風に話せるのか、とおどろかされたほどだ。
誓ってもいい、伝達官越しに皇帝と話していたときでさえ、こんなに行儀よくはなかった。
「かわいいことを、いってくれるのね。あなたがいなくなった宮廷はね、それはつまらなくて。お顔が見られなくて、とても寂しかったわ」
「わたしもです、叔母上」
皇妹は皇女の頬を手で挟むと、いとおしげに顔を寄せた。
「ぜひ願いをかなえてさしあげて、と陛下に申し上げたのを後悔したほどよ。でも、元気そうでほんとうによかった。ずいぶん生き生きとして見えること！　この土地が合っているようね」
「お力添えは、けっして忘れません。わたしに与えてくださったものを、ご覧いただきたいと思います。そして気に入っていただければ、と」
皇妹は微笑んで姪から手をはなし、ヤエトの方を見た。
「こちらが副官？　陛下が任命なさったという」
視線が向くと同時に、圧迫感が強まった。深々と一礼して、ヤエトは息を吐いた。この調子では、今夜にでも永遠の眠りについてもおかしくない。
「北嶺の門をくぐるなり、あてがわれました。偶然にも、ルーギンの知り合いだったらしいのです」
答えたのは皇女だ。ヤエトが直接言葉をかわせるような相手ではないので当然のことだが、ひたすらありがたい。
「まあ、そうなの？　お久しぶりね、ルーギン」
「わたし風情の名を覚えていてくださって光栄です、ラキニー様」
「謙遜にもほどがあってよ。華の騎士を知らぬ者な

ど都にはいないわ」
「ご不快でしたなら、お許しください」
「相変わらず、大げさな人ね。でも、姪の騎士があなたと聞いて安心しました。あなたなら、この子を安心してまかせられるわ」
「身に余るお言葉です」
皇妹は微笑んで、顔をさっと皇女の方に戻した。
「珍しい鳥がいるのですって？　是非見たいわ」
「ご案内します、叔母上」
「楽しみにしていたの。乗れるようになって？」
「もちろん」
「わたしも乗れるかしら」
「お教えします」
ルーギンはふたりの竜種について厩舎へ向かったが、ヤエトはその場に留まった。正確には、動くことができなかったのだ。
竜気にあてられるとは、こういうことかと思う。視界が白っぽくなり、すべてが滲んで見える。身体は冷や汗にまみれ、手足の先は感覚がなくなりかけている。立つのがやっとだ。
――あれは本物だ。
伝達官が必要ないほどの恩寵の持ち主を、甘く見ていた。近づかないようにしよう、と心に決めた。
幸い、仕事は山積している。空き部屋すべてに皇妹の供回りが入り、厨房にもお抱えの料理人やその助手が席を占め、例によって厩舎と秣のことで揉めた上、どんな些末な問題にも、ヤエトが呼ばれる。尚書官殿、副官殿、と探されていないことはない。
二日が過ぎ、三日が経っても、ヤエトは調整役として忙殺されていた。沸騰しやすいセルクとは、日に何度も顔を合わせることになった。
「これだから糞南方人は！」
「セルク殿」
そして、日に何度も諫めることになるのだ。
南方人と伝統的に仲が悪いことは知っていたが、ここまでとは思っていなかった。

「……わかっていますが」
「わかっていたら、口にする前に考えてください」
「考える暇がなくて」
「違いますね。考える時間を自分で作るのです。口を開く前に考えるのが、義務だと思ってください」
セルクがぐっと詰まったところに、今度は南方人が口汚く反論をはじめた。
「鳥臭い北方人には、つきあってられん」
「誰が――」
「セルク殿！」
掴みかかりそうになったセルクの袖を引っ張って、たしかに袖が長いのは便利だ、と思った。おもに、こちらが縋る側のときに。
「言葉を慎め、この糞泥南方人！」
「同輩に諫められても忘れるか、間抜けの鳥頭！」
「いい加減に――」
「うるさいな」
不快げな声は、上から降って来た。全員がぎょっとして、ふり仰ぐ。
三人が言い争っていたのは、三層と二層をつなぐ階段の途中である。その階段の最上段に座りこみ、呆れ顔で見下ろしているのは皇女だった。
「殿下！」
「姫様！」
「なんの騒ぎだ」
ヤエトは平伏したふたりを見比べて、ため息をついた。説明も自分たちでしてほしい。
「土地の料理が舌に合わない、わざとまずいものを出しているのではないか、あるいは毒でも盛っているのか……との訴えを、皇妹殿下の随員でいらっしゃる、こちらのかたからいただきました。念のために厨房の者を問い質しましたところ、今度は逆に、厨房の施設を殿下の随員の皆様に占拠されてまともに料理ができないといわれ、時間帯によって分担してはどうかという提案をしていたところです」
皇女は口を歪め、咳払いをした。どうやら、笑う

のを堪えているらしい。
「それでうまくいくのか？」
「いかないと、困ったことになりますね」
「そうだな。叔母上にも申し上げねばなるまい。その方、名はなんと申す。叔母上に、その方が土地の者に毒を盛られたかと疑っていると伝えてやる」
南方人は平伏したまま後ずさろうとし、階段を六段ほど転がり落ちた。六段で済んだのはそれしか段がなかったからだ。
「怪我はないか？」
「はっ、たぶん」
「それはよかったな。さて、名を聞こうか」
「……なにとぞ、お忘れください。殿下のような高貴なおかたのお心を煩わすようなことでは」
皇女は肩をすくめた。
「エイギル、あの者と厨房へ行き、一件に始末をつけよ。面倒をかけるようなら、名を聞き出せ。わたしから叔母上にお話ししよう」
「御意」
控えていた騎士が、部下を連れて前に出た。
「殿下、どうかお捨て置きくださいませ」
「わたしは副官と話がしたい。だから、代わりに我が騎士団の副団長を置いて行く。どちらもわたしの大事な部下だ、時間を無駄にさせることは許さん。わかるな、名無し？」
騎士に挟まれ厨房へ連行される南方人を、微妙な表情で見送るセルクにも、皇女は容赦なく告げた。
「そなたもだ、セルク。ヤエトは我が副官。そなたに仕えているわけではない。よく考えよ」
畏まって反論もしないセルクからヤエトに視線を転じると、さあ、と皇女は顎をしゃくった。
「聞こえなかったか。話があるのだ。来い」
「どちらへ参りましょう」
「そうだな、とりあえずそなたの部屋でよい」
さっと踵を返して階段を上りかけ、皇女はふり向いてヤエトを見下ろした。

「どうした？」
「いえ、ちょっと目眩が」
「軟弱な奴だな」
皇女はさっと階段を下りて来ると、ヤエトの腕をとった。目眩がひどくなる。竜種が平民の手助けをするなど、あってはならないことだ。
「大丈夫です、太守。お気遣いなく」
「大丈夫に見えぬから手を貸している。肩を貸してやってもよいくらいだが、そなたは背が高いから無理だな」
肩を借りるなど、さらにあり得ない。
今日はやたらといろんな場所で呼ばれたので、階段の上り下りだけでかるく死ねそうだが、ここは気合いを入れるしかない。皇女の部屋よりは、自室の方が近くて助かる。あと十段で三層だ。
ヤエトの部屋は階段から遠い廊下の奥にある。端なら静かだろうと期待したのだが、静かもなにも、皆が廊下を走って彼のところに来るのだ。歩く距離も無駄に長いし、この配置は失敗だったと思う。
部屋に着くなり、警護の騎士が先に中に入った。皇女の行き先はそうするようにルーギンと話して決めたのだが、いざ目の前でやられると妙な気分だ。
あらため終わった部屋に入ると、皇女は騎士を外に出して扉を閉め、いきなり用件を切り出した。
「不自然だぞ。副官殿はわたしがお嫌いなのではないかしら、と叔母上にいわれた」
――ばれた。
「それは……」
「わたしでも気がついたぞ。このままではまずいと教えに来てやったら、あんなくだらぬ問題で死にそうな顔をして……まったく」
皇女は苛立たしげに彼をにらんだ。さっさと釈明せよということだ。しかたなく、正直に白状した。
「自分は恩寵の力に過敏なようで、皇妹殿下のお近くにいると、息切れ、目眩、頭痛がひどく……」
「叔母上がお聞きになったら、なんという色気も素

っ気もない弁明だと嘆かれそうだ」
　皇女は嘆息混じりにいって、ヤエトが勧めた椅子に腰かけた。皇妹の土産の一部である。
「ご不快に感じられるでしょうか？」
「叔母上の側に寄ると、また吐いて気絶するといっているのだろう？」
　身も蓋もない表現だが、その通りだ。
「御意」
「近寄ると吐いて倒れる、といわれて喜んでくださるとも思えぬ。しかし叔母上は、目の前で吐かれるのもお好きではないだろうしな……」
　ヤエトがまじまじと自分の顔を見ているのに気がついたのか、皇女はあわてて言葉を継いだ。
「無論、わたしもべつに好きではないぞ。そなたも吐いて倒れたくはないだろう」
　変な会話だと思いながら頭を垂れ、肯定した。
「御意」
「では、わたしからうまくいっておこう。叔母上の美貌を間近に拝すると、あまりのまばゆさに眼がつぶれるからとかなんとか」
「いや……それは」
　皇女はなぜか得意げな笑みを浮かべた。
「叔母上のお気に召す表現だと思うぞ」
「左様ですか……」
　ヤエトが肩を落とすのを無視して、皇女は室内に視線をすべらせた。そういえば、とつぶやく。
「そなたの部屋に入るのは、はじめてだな」
　殺風景な部屋である。暖炉と備え付けの家具以外、なんの飾りもない。つられて見渡してみれば、今は乱雑といっていい有様だ。広いはずの机は積み上がった書類や図面で埋まっており、作業をしようと思えばどれかを積み直してかたづけるしかない。
「散らかっておりまして」
「それはよい。そなたも座れ」
「椅子はひとつですが」
「寝台があるではないか。かまわぬ、それに座れ」

皇女の面前で寝台に座るのは無礼だが、かさねて命じられれば断れない。正直なところ立っているのもつらかったので、おとなしく従った。

「そなたの部屋はかたづいていると、ルーギンに聞いていたのだがな」

「この三日、部屋に戻るなり寝てしまったもので」

皇女はヤエトの顔を見た。どうせまた、死にそうな顔色だとでも考えているのだろう。

「まあよい、今夜までの辛抱だ。明日になれば叔母上も、供回りも、半数以上が城を出る」

「……は？」

初耳である。皇女は早口に言葉をつづけた。

「村々の視察をなさりたいそうだ。わたしも実際に民が暮らしている場所を見てみたいし、医師の派遣にも途中までは同道できる。ちょうどよいだろう。そなたは留守居をせよ。ゆっくり休むがよい」

なるほど、これを告げに来たのだろう。ヤエトを呼びつければよいのに自分が出向いたのは、皇妹との折り合いを気にしたのかもしれない。

「何日ほどになりますか」

「十日から二十日の予定だ。天気次第だな。セルクを案内に立てて、奴の村と、あと二つくらい回ってこようと思う。ルーギンも供をさせる」

頭の片隅を、未だかたづいていない暗殺未遂事件のことがかすめた。しかし皇妹の希望とあっては、よほどの事情でもない限りは断れない。皇妹の騎士は鳥に乗れないだろうから、警護は北嶺の人材にたよらざるを得ないが、揉めはしないか。

一気にそこまで考えて、ヤエトは息をついた。

――それはそれで悪くはないか。暗殺者がいるとしたら、都から来るはずだ。

皇妹の随員に紛れて入りこんでいたとしても、北嶺の地形で振り切れる。難路万歳。

問題は、皇妹の移動手段だ。

「皇妹殿下は、どうやって移動なさるおつもりなのでしょう。馬車の通れる道ではありませんが」

「鳥だ」
まさかと思いながらも、確認せざるを得ない。
「鳥を御することがおできになるのですか」
「ああ。馬よりずっとお好きだとおっしゃってな」
――おかしい。
皇妹は、北嶺で暮らした経験があるのか？　いや、そうであれば、厩舎長が教えてくれるはずだ。
門前での一件以来、厩舎長はヤエトを恩人と思いこんでいる。厩舎を馬に明け渡さずに済んだのは、彼のおかげだと。だから、間違いない。
――一朝一夕に乗りこなせるものではない。
これも厩舎長の受け売りだが、巨鳥は誰でも乗せるわけではない。ヤエトを乗せてくれるのがシロバだけ、というのが好例だ。皇女の騎士もかなりが敗退し、馬とともに麓の砦に降りて行った。
ヤエトは悩んだが、皇女が断言していることをしつこく問い直すのも無礼にあたる。
「ルーギン殿は、なんと？」
「叔母上の前では、男はみんな骨抜きだ。自分の意見などあるものか」
辛辣なことをさらりと口にして、ふと気がついたというように皇女はヤエトを見た。
「そなたは違うな。なぜだ？　叔母上は、百人いたら九十九人まではご自身の崇拝者にしてしまわれるおかただ。陛下でさえ、叔母上には甘くなられる」
「竜気が凄まじくて、それどころではありません」
正直に答えると、皇女は吹きだした。
「気の毒にな」
「随員の皆様は、どうなさるのです？」
「一足先に山を降りさせる。ここにおいでになるとき、次はゆっくりご逗留くださいと、隣の郡の太守が挨拶したそうな。帰り道に、早速ゆっくりなさるおつもりらしい。つまり、先遣隊だな。さっきの糞泥南方人や、同類を派遣してやればよい」
「太守、お言葉を慎んでください」
皇女は肩をすくめた。

「あれはほんものの馬鹿だが、わざと入れてあるのだろうな」
「はい？」
「随員の扱いを見るのだ。困った馬鹿をどうあしらうか、観察している者がいる。そのうちに、副官殿は糞がつくほど真面目で細心な仕事ぶりだが体力がない、という報告が陛下のもとに届くだろう」
　ヤエトは頭を抱えたくなった。なるほど、そういうことか。
「よくあることなのですか」
「陛下も、お気になさっておいでのようだからな。そなたを副官に任命するのは、その場の勢いだけで決めてしまわれたことだから」
　その言葉に、ヤエトは笑みが浮かぶのを覚えた。
「たしかに、そうでした」
「……なぜ笑うのだ」
「いえ、……以前、陛下に密命を受けているのではないかと詰問されたことを思いだしまして。もうお信じいただけたのですね」
　これには、皇女も笑った。
「そういえば、そうだったな。そなたのことは、とうに信じておる。命と引き換えに守ってもらえるかどうかはともかくな」
「死ねとおっしゃればいつでも死ねますが、太守は生きよと命じられることが多くて困ります」
　ヤエトが答えると、皇女は真顔になった。
「死ぬだけなら誰にでも、いつでもできる。生きて役に立ってもらわねば、そなたは特にな」
　痛いことをいわれてしまった。
「身に余るお言葉です。とにかく、委細承りました。後のことは、おまかせください」
　視察の一件は、ひょっとするとルーギンが皇妹に入れ知恵をしたのかもしれない。遊びに行きたいといっていたくらいだから、あり得る。皇女とセルクを同行するのは不服だろうが、しかたがない。
「止めないのか？」

なぜか、皇女の声は不満そうだ。予測がはずれて意外、というところか。
「皇妹殿下のご意向にそむくなど、自分に許されることではありません」
「わたしが決めたことには、片端から異を唱えるものかと思っていた。叔母上ならよいのか」
「……さほどに反対した覚えはありませんが」
「そうか？　反対されたことしか覚えていないぞ」
ヤエトは眉根を寄せ、太守が赴任してからこれまで、皇女と意見が対立した例がどれくらいあったかを思い返してみた。いつも賛成とはいかないが、かならず反対というほどでもなかったはずだ。
――珍しいのだろうな。
なにしろ、かなわぬ望みがないとまでいわれている、皇帝の愛娘だ。異を唱えられると、強く印象に残るのだろう。
とりあえず、頭を下げておく。
「それは失礼をいたしました」
皇女はまた不満げな顔をしたが、それ以上は追求せず、当初の問題に戻った。
「今宵は別れの宴がある。出席できるか？」
できれば避けたかったが、無理だろう。しかたなく、ヤエトはうなずいた。
「はい」
「わかった。では、それまで休め。騎士をひとり、番に立たせてやる。誰も入れるなと命じておこう」
気ぜわしく立ち上がった皇女は、扉の前で動きを止めた。黙って俯いている。
ヤエトは、少し迷ってから声をかけた。
「……如何なされましたか？」
「そのようにつらいのであれば、気がつかなかったかもしれぬが……歓迎の宴のことだ」
「は？」
我ながら頭の良さそうな声が出た。皇女は彼の方を見ずにつぶやいた。
「無礼ととがめられてもしかたのない、粗末な正餐

だったが」

そういえば、とヤエトは記憶を掘り返した。

結局、皇女は彼の進言を容れ、北嶺郡の予算の範囲でつつましい宴を催した。皇妹の反応はまったく記憶にない。このまま倒れるの倒れないの、吐くの吐かないのと内的攻防に手一杯だったのだ。

「……叔母上が、褒めてくださった」

「それはなによりです」

「褒められるべきは、そなただと思う」

「それは違います」

「なにが違う」

ヤエトは苦笑して告げた。

「わたしの献策を採られたそのご決断は、太守ご自身が聡明英邁たらんと心がけておいでだからこそのもの。ですから、その結果はすべて太守が背負われるべきで、当然、褒詞も太守のものなのです」

「それでは、そなたはいかにして報われるのだ？」

「帝国より俸祿をいただいております」

ヤエトは真面目に答えたが、皇女は満足しなかったようだ。腕を組み、あらためて彼に向き直った。

「金さえあれば、そなたの献言は買えるのか？」

「そういう表現もできますね」

「良心は、安くないと聞いたが」

ヤエトは顔をしかめた。商人との会話をセルクに聞かれたのは覚えていたが、皇女に教えるとは。お喋りめ、と内心でののしりながら問い返す。

「それが、なにか？」

「つまり……そなたは褒められたくないのか？　褒美をとらせようにも、どうせ北嶺には金がないとか、けちをつけるに決まっている」

「ご明察です」

皇女は足を踏み鳴らした。ついに癇癪を起こしたらしい。

「話が通じていない気分になるのは、なぜだ？」

「申しわけありません」

「はっきりいうぞ。わたしはそなたに褒美をとらせ

たいが、断られるとわかっている。それゆえ、せめて言葉で褒めようとしたが、それも嬉しくないと」
「いや、嬉しくないとまでは――」
「そなたの」
ヤエトの言葉を遮った声は、おそろしく低い。
ゆっくりと、皇女はくり返した。
「そなたの、望みはなんだ」
「隠居です」
思わず、さらりと答えてしまった。
妙なものを呑みこんだような顔をして、皇女はさらに尋ねた。
「なんだそれは」
「仕事を辞めても残りの人生で困らない程度に蓄財し、誰からも忘れ去られた状態で、だらだらとなまけて暮らしたいと願っております」
「……そなたの考えることは、わからん」
十四歳の皇女が隠居を夢想するようでは、帝国も終わりだ。だが、太守はそれで結構ですと教える前に、皇女はすごい勢いで出て行ってしまった。
――おやおや、お怒りか。
おもしろがるかと思ったのだが、駄目だったようだ。追いかけもせず、ヤエトは嘆息した。
ルーギンの言ではないが、頭をよしよしと撫でてやることは、副官のつとめではない。それをいえば、怒らせるのも彼のつとめではなさそうだが、それはそれ、結果的にそうなってしまっただけのことだ。
暫くは放っておいてもらえそうだと、ヤエトは布団をかぶって昼寝をしようとしたが、妙に呼吸が落ち着かず、短時間の浅い眠りが訪れただけだった。

6

夕刻、宴を主催する皇妹から招待状が届いた。辺境の城で招待状もないものだと思うが、そういう流儀なのだろう。皇妹は場所に合わせない。場所を、自分に合わせてしまうのだ。

招待状には、闇夜の宴と書かれていた。手燭の持ち込みを許可するとある。

警備が大変そうだ、と頭の片隅で思った。まさか皇妹がいるときに罠を仕掛けるとは思えない。ルーギンからの連絡もないし、純粋に皇妹の意向に添っただけなのだろう。

ルーギンの良識は、どれくらい残っているのだろう。皇妹を避けていると、自動的に彼とも会わなくなってしまう程度には、いかれているようだが。

会場は四層の中庭だ。出席すると返事した手前、ヤエトは官服の埃を払い、私物の角灯に火を入れると、弱った身体に鞭打って階段を登った。

宴席が設けられているのは、庭の西側だった。

矢狭間からの日差しが描く荘厳な光の柱の合間を、皇妹はすべるように移動していた。訪れた誰にでも、その微笑みを惜しげもなく向けている。髪や首、腕、胸にいくつも垂れた水晶の飾りは夕日を受け、まるで炎をはらんでもいるかのようだ。

ヤエトの眼には、皇妹自身もまばゆくかがやいて見える。彼女は光であり、炎であった。

紫の眸が彼を認める。皇妹は鷹揚にうなずき、手をさしのべた。動悸が静まることを祈りながら、ヤエトは膝をつき、光栄ですとつぶやいて、なめらかな手の甲に形ばかりのくちづけを落とした。

顔を上げれば、皇妹がまとっている光輝が見えた。結い上げた白銀の髪で、水晶が揺れる。長い睫毛は夕日の名残りを宿して淡い紅に色づき、その下に隠された眸は夕暮れの空そのものだった。

深く、遠く、胸が痛くなるほど美しい。

その注視を受けることは、ヤエトにとっては苦痛だが、人によっては快感になるのだろう。皇妹の眼差しは、見られた者を世界の中心に据える。すべてが自分のためにあるような錯覚を引き起こす。

やわらかいはずの声も、彼の耳には強過ぎた。快楽を飛び越えて、痛みになってしまうのだ。

「太守の不在中も、そなたの変わらぬ忠勤を期待し

ます。また帰還後も、怠りない補佐を」
「御意」
風が動き、皇妹は次の客に声をかけていた。
ヤエトの方は、すでに倒れそうだ。暗闇の宴なら目立たず退散できるのではないかと期待しているが、出入り口の近辺は皇妹の持ち場だ。少なくとも今は、もう少し奥へ行った方がよさそうだ。
移動する途中、ルーギンが声をかけてきた。
「大丈夫ですか？」
「生きてます」
「姫様に聞きましたよ。うまいことをおっしゃいますね」
「なんの話です」
「ラキニー様のお顔を間近で拝すると、あまりのまばゆさに眼も胸もつぶれる心地です、と」
――あの小娘！
余分なことをいったのはこの口か、と皇女の口をつまんで引っ張りたい衝動に駆られながら、表向きは平然と答えた。
「体調不良……では風情がないので、太守がお考えになりました。お願いしたわけではないのですが」
ルーギンは微笑んだ。
「体調不良は心配ですが、なるほど、それでわかった。あなたにしてはおかしいと思っていたんだ」
「気がついてくださいよ……」
「皆、あなたの言葉だと信じてますよ。ラキニー姫の美貌は氷の尚書官をも蕩かした、それもべろんべろんに！　と評判です」
楽しげに告げられ、ヤエトはげんなりした。
「誰が氷の尚書官ですか」
「発熱する尚書官の方がよかったかな？」
「もう好きにしてください」
「いわれなくても。……ちょっと待ってください、担架を連れて来ましょう」
担架なのに連れて来るとはどういうことだ、と訊く暇もない。とにかく目立たない場所を探そうとあ



たりを見回していると、セルクがやって来た。
「大丈夫か」
「おおむね無事です」
答えながら、自分でもわけがわからないことをいっていると思う。だが、セルクには通じたようだ。
「それはよかった。ルーギン殿に、尚書官殿が倒れないようにそばで見張っていろといわれて」
——ああ、担架ね。
ヤエトはセルクの頑丈そうな肩や、彼の倍ほど厚みがありそうな胸板を眺め、これくらい元気だったら自分の人生も違ったかと考えて、すぐにやめた。
不毛過ぎる。
「目立たない場所にいたいのです。万が一倒れて、騒ぎになったら困りますし」
「そうだな……ああ、いいことがある！」
セルクは自信をもって断言した。反射的に、ヤエトは身構えた。危険な思いつきに違いない。
案の定、セルクはとんでもないことをいった。
「壁に登るんだ」
ヤエトはルーギンがこの胸壁にひらりと飛び乗ったことを思いだした。同時に、自分が遠回りして階段へ走ったことも思いだす。
「無理です。それに、目立つでしょう」
「大丈夫、案外、上を見る奴は少ない。内側から登れるように刻みがついてる場所がある」
壁に登った状態でも、宴に出席していることになるのだろうか。それくらいならさっさと辞去した方がよいのでは？　と考えているあいだに、セルクは彼を引きずるようにして問題の場所に連行した。
なるほど、石に刻み目がついてはいるが、上りたいとは思えない。しつこく勧められ、ヤエトは少々苛ついてきた。
「上って、上でふらついたらどうなります」
「落ちるかな……大丈夫、俺が支える」
「もう結構。わたしのことはお気になさらず」
「病人を放置できるか」

「この程度で病人なら、わたしはいつも病人です」
「いつも病人で、異論はないぞ！」
力強く断言すると、ちょっと待っていろとセルクは姿を消した。すぐに戻って来たその手には、酒杯と料理を盛った皿を持っている。
「呑めませんよ」
「祭りのときに奢ってもらったお返しだ」
しかたなく、形ばかり口をつけた。料理も勧められたが、正体不明の食べ物ばかりで手が出ない。セルクがなにか食べるたびに、尚書官殿もおひとつ、と飽きずにくり返すのは、嫌がらせだろうか？
「ところで……視察のことですが」
ああ、とセルクは油ぎった指を舐めて答えた。
「俺が姫様に申し上げたんだ。視察に行かれてはどうか、と」
――なんだって？
ヤエトはかるくよろめいたが、うまく壁にもたれてごまかすことができた。彼の動揺を知らず、セルクは得意げに言葉をつづける。
「はじめは、ラキニー様に訊かれたんだ。俺の村はどんなところか、とね。うまくお答えできなくて、実際にご覧にいれた方がいいな、と思って。それで、姫様に申し上げたんだ。ラキニー様もすごく乗り気で、……あっという間に決まったんだ」
「気になっていたのですが、皇妹殿下は大丈夫なのですか？　つまり、……一日の大半を鳥に乗って移動するようなことが、おできになると？」
「できる。尚書官殿より、ずっとお上手だ」
「わたしよりうまくても……」
「ずっと、では不足か？　もっと、とても、お上手だ。尚書官殿とは、全然違う」
そこまでいわなくてもと思うが、実際、ヤエトは良い乗り手ではないのだからしかたがない。
「そうでなくては困ります。しかし、わずか三日で乗りこなすとは、にわかには信じられません」
「安心しろ。鳥に選ばれたから、問題ない」

自明のことだといわんばかりの口調だ。
「選ばれる、とは？」
「尚書官殿だって、シロバの奴に選ばれてるだろう？　あれはまぁ……ちょっと変な鳥だが、ふつうは、乗り手と心が繋がれば、鳥はそれで安心するんだ」
「皇妹殿下は、それがおできになる……と？」
セルクはうなずいた。
彼の視線の先には皇妹の姿があった。西日は力を失いかけていたが、未だ彼女の輪郭を黄金色に縁どっている。長い裳裾が動きにつれ、あるいは風にひるがえっては、波のように皇妹の足もとを飾る。
あんな格好では鳥には乗れない。視察に行くときは、皇女のように動きやすい服を着るのだろうか。
「姫様も、ルーギン殿も、おできになる。騎士団の何人かも……でなければ、鳥には乗れないんだ。尚書官殿が、おかしい。心を繋げないのに鳥に乗るなんて、尋常のことじゃない。……貴殿はすごい」
ヤエトにとっては、三日で乗りこなしたという皇妹の方が、よほどおかしい。だが、セルクはそちらについては心の底から納得しているようだ。
「心が繋がるとは、どういう状態なのです？」
「鳥は乗り手の心を読む。そのためには、繋がっていなければならない。だから、ふつうは北嶺の民しか乗せない。腐れ南方人どもを背に乗せたことなんて、ないんだ。帝国の人は、さすがだな」
感心した、とうなずいているセルクを見て、ヤエトは愕然としていた。
――ちょっと待て。どういうことだ？
セルクの言を信じるなら、ヤエトは例外なのだ。だから、彼自身を除いて考える。
皇女と皇妹は間違いなく皇家の人間だ。ルーギンも、あれだけの家柄だ。薄くても皇家の血は入っている。騎士団の面々で麓に降りずに済んだ者たちの顔を思い浮かべてみる。間違いない。
――生粋の帝国貴族ばかりだ。

異民族の国家を併呑してきた帝国だから、騎士団を構成する人種もさまざまだが、家柄が西に遡る帝国貴族だけが、ことごとく鳥を手なずけた。

なぜ誰も気づかない？　それも自明のこと、どこからどう見ても帝国の血が流れていないヤエトが、苦労しながらも鳥に乗っているからだ。

「おい、どうした。なにをそんなに睨んでるんだ」

セルクに声をかけられ、ヤエトは頭をふった。

皇家の恩寵が、鳥を御する能力に類似のものであるのは間違いない。逆にいえば、北嶺の民は、皇家と非常に近い性質の恩寵を与えられているのでは。

かれらは、それが特別な力だということにすら気づいていない。北嶺では、当たり前のことだからだ。そして、鳥と乗り手の心が繋がる云々という説明がまた、部外者をあっさり納得させてしまう。乗馬の訓練でも、同じような説明は耳にするものだ。

――誰かが気づいたら、どうなる？

実際に鳥を御することに成功した皇女や貴族たちはどう考えているのか。皇妹は？

皇帝が知れば、北嶺の利用価値を考え直すだろう。なにかできることはないか――なさそうだ、とヤエトは思う。焦ることはない。

――なにを動揺しているんだ。

ヤエトは帝国の官吏だ。郡太守の副官に任命されたからといって、任地の便宜だけを一方的にはかれば、本末転倒である。

結果的に、帝国全体の益になればよい。そう考えるべきだ。それが自然にできない方がおかしい。

「尚書官殿、どうかしたのか？」

苛立つ気もちを抑え、彼は視線を逸らした。

「まだ、例の流れ矢の犯人も捕まっていないことですし、いろいろと不安になっているようです」

「姫様のことなら、俺が必ずお守りする。命と引き換えにしても」

ヤエトは少し引いた。

この男は、いつからこんなに皇女贔屓（びいき）になったの

か。皇女に騎乗や弓の技術を教えはじめてから、ずいぶん仲がよくなったとは思っていたし、もともと帝国に抱いていた憧れが、皇女への崇拝に転化したのだろうが……それにしても、おどろかされる。

この傾倒がどこかで変な風に作用しなければよいが、と思いながら、なんとか笑みを浮かべた。

「お願いします。皇妹殿下のことも、です」

「姫様のお客人だからな」

「セルク殿が引き受けてくださるなら、安心です」

少し、会話が途切れた。

もう日は没したのだろう、透きとおるような紫から藍色へ、空は刻々と変化していく。灯火を手に歩きまわる人々の影が入り乱れるのを眺めていると、夢か幻でも見ているような心地がしてきた。

皇妹は、相変わらず優雅に動きまわっている。華奢な見かけとは裏腹に、体力はあるようだ。

「……姫様がおっしゃったことだが」

「なんです？」

「尚書官殿は姫様の副官なのだから、無駄に疲れさせるなという……」

思わず苦笑するヤエトに、セルクは頭を下げた。

「どうしたんです」

「すまない。尚書官殿がお忙しいのも、病人なのも知ってるのに、いつも、ついたよってしまう」

「それも仕事の内ですから。でもそうですね……もう少し、怒りを抑えてくださると助かります」

「それは、俺もそう思う」

真顔で答えるので、吹きだすのを堪えるのに苦労した。

「視察のあいだに、訓練してみてください。わたしを呼ぶわけにもいかないし、ちょうどいい」

「尚書官殿にも来てもらいたかったんだがな」

なんでもないことのようにいわれ、即答した。

「無理です」

「鳥のことなら、俺がなんとかするぞ」

「太守がお留守になさるのですよ。郡の主城に残る

のは、副官である自分のつとめです」
「そうか」
　鳥に乗って十日以上も旅をするなど、ヤエトには到底無理だということが、なぜわからないのか。
「自分が同行した方がよい事情が、なにか？」
「いや……俺の村を、見てほしくてな。尚書官殿は、城からほとんど出ていないだろう。実際の暮らしぶりを見た方がいいんじゃないかと思って」
　真っ当な意見を吐かれた。
　この城は、純粋な政治や軍事のための建物だ。そんな城の中だけで北嶺のことがどれだけわかるのかと問われれば、返答に窮する。だからこそ、皇女が視察に出ることにも、積極的には反対できない。危険はあるが、実りも大きいはずだからだ。
「いっていただろう。どこに誰が住んでいて、何人家族で……そういう積み重ねが歴史になるんだと。尚書官殿は北嶺の歴史に興味があるだろう？」
　ヤエトは苦笑した。間違ってはいないが、微妙にずれている。
「そうですね。機会があったら、行ってみたいと思います。セルク殿の村は、どんなところなのですか？　こういう山の天辺に？」
「いや、俺のところは谷間だよ。わりとゆるい地形でね、近くに湖がある。夏のあいだにものすごく草が茂るから、鳥の餌には困らない。夏の終わりには、その草がいっせいに枯れて、金色になるんだ。小さい子どもだと、頭が隠れるくらいの丈まで伸びててね。その中を走って鬼ごっこをしたもんだ。鬼をはやしたてる歌を、皆で歌ってね……」
　ヤエトは壁にもたれて眼を閉じた。目蓋の裏に、風に波立つ黄金の草原が広がり、それをかき分けて、子どもたちが走り回る。眼を開ければ見えてくる現実の景色よりも、ずっと魅力的だった。
「いい村ですね」
「……わからないだろ、これだけじゃ」
「あなたの声で、わかりますよ」

セルクは、思いきり気味悪いものを見たような顔をした。ヤエトは笑いながら、壁から身を離した。
「……さて、皇妹殿下の騎士団長と、少し話をしてきます。明日から、お世話になるので」
「俺も――」
「遠慮してください。彼から見れば、皇妹殿下をお守りするという、大事なお役目を取り上げた人物になるのですからね」
「え」
まったく意識していなかったようだ。ヤエトは硬直してしまったセルクの肩をかるく叩いた。
「城のことはまかせてください。では、失礼」
皇妹の騎士団長は、年配の騎士だった。五十、いや六十を過ぎているかもしれない。すっかり白くなった総髪が、薄暮の中で淡くかがやいている。この暗さでは正確に判断できないが、顔だちと肌の色からして、沙漠の出身だろう。
ヤエトの推論が当たっていれば、鳥には乗れない。この男は留守居をするしかないのだ。
挨拶のあと、太守が留守中の指揮権は、ヤエトに全面委任ということで確認がとれた。それだけで立ち去るのも非礼かと、少し会話をつづける。
「皇妹殿下にはお仕えになって長いのですか」
「はい。《黒狼公》にお仕えしていた縁で」
《黒狼公》は異民族の慰撫に手腕を発揮した人物だけあって、部下には生粋の帝国人が少ない。公の没後は、皇妹が庇護者をつとめているのだろう。
「降将に過ぎませんが、《黒狼公》がお取り立てくださり、貴族の位をいただきました」
「失礼ながら、もしやアルハンの街あたりのご出身では？」
アルハンは、沙漠越えの中でも激戦地として有名だ。帝国軍を挟撃するため街を出た精鋭部隊が、守備軍が呼応しなかったため孤立するも、死力を尽くして戦い、皇帝の首を獲らんと肉迫した。兵のほとんどは戦死し、街は焼き尽くされ、生き延びたのは

その精鋭部隊の、ほんのひと握りだという。
　老将の表情が、かすかに動いた。
「その名を、帝国のかたがご記憶とは」
「熱暑の沙漠に忽然とあらわれる幻の都、水の城、うるわしのアルハン――泉水の数は百とも二百とも。碧緑の街とも呼ばれたとか。とても沙漠の中にあるとは思えない、緑ゆたかな土地でした」
「まるでご覧になったことがあるかのようだ」
　ヤエトは微笑んで返した。
「残念ながら、わたしが見たアルハンはすでに廃墟でした。ですが史官というものは、書を読んでなにもかもを知ったような気になる生き物なのです。もし失礼なことを申し上げていたら、お詫びを」
「記憶は美しくなるばかりとは、よくいったものです。そんなに褒めていただいても、この萎びた目蓋の裏によみがえる景色の方が何倍も美しい」
　眼を閉じた老人の脇から、見慣れた人影がひょいと覗いた。
「将軍、わたしの副官がなにか面倒なことをいっているのではないか？」
「とんでもない。殿下にはご退屈な昔話をしていただけです。……では、失礼を」
　老将軍は笑顔でその場を立ち去った。どうやら皇妹が手招きしていたらしい。彼女の背後には、影のようにルーギンが立っている。その向こうに薄布をかぶった人影を見て、おや、とヤエトは思った。伝達官ではないだろうか。
「昼は、悪かったな」
　皇女の声で、我に返った。なんの話かわからず途方に暮れて少女を見下ろし、首をひねる。
――なにか違和感が……。
　皇女は言葉を探すように横を向いた。首筋から開いた胸元へ、黄金の巻き毛がこぼれ落ちる。
　そこで気がついた。珍しく、姫君らしい格好をしているのだ。
　頭には青と白の花を編んだ花冠を載せ、皇妹同様、

裾を長く引く衣装だ。皇女と聞いて連想するのは勇ましい軍装ではないと、久々に実感した。
これなら皇女らしい。だが、彼が知っている皇女らしくはない。妙な感じだ。
答えないヤエトを不審そうに見上げ、彼の当惑に気づいたのだろう。皇女は顔をしかめた。
「叔母上が、どうしてもこれを着よと。せっかく持って来たのだからと、うるさくおっしゃって」
「なるほど、素晴らしい品ですね。その織りは、沙漠の街の限られた職人の手になるものです」
「布を褒めてどうする。お似合いですねとか、そういうことをいうものだろう」
「とても、お似合いです」
「そんなことは、どうでもよい。尋ねたいことがあるのだ」
いわせておいて、皇女はさっさと話題を変えた。苦笑を見せないように、真面目な声で問い返す。
「なんでしょうか」
「思いだしたのだ。教える約束があったはずだ」
ヤエトは眼をしばたたいた。今度こそ、なんの話かほんとうにわからない。
「なにをでしょう。歴史ですか？」
「違う！　怖いものだ」
「ああ、それですか」
ようやく合点がいった。すっかり忘れていたが、皇女が復調したら教えると、そういえば約束した。
皇女は真剣だ。絶対に聞き出すつもりらしい。
「たいしたことではありません。ご無事にお戻りになったら、お教えしましょう」
「……引っ張るな」
「出立前に教えておけなど、まるで戻っておいでになるおつもりがないようで困ります」
「わたしがいなくなっても、困らぬだろう」
「困りますよ。ご無事でお戻りいただきませんと、間違いなく首が飛びますし」
「わかった、わたしが死んでもそなたを罰しないよ

う、陛下にお願いしておこう」
「おやめください。そんな特権、かなえられたらどうなさるおつもりです。わたしが太守を害したてまつっても、責めを負わないことになるのですよ？」
　皇女はくちびるを尖らせた。頬が赤いのに気づいて、おや、とヤエトは眉をひそめた。誰だか知らないが、こんな子どもに酒を呑ませたのか。
「そなたはくどい。うるさい。面倒くさい」
「申しわけありません」
「さっさと教えよ！　何日たったと思っている」
「太守、あまり声を荒げられますと、……皆さん、こちらをご覧になっておいでです」
　皇女の顔がますます赤くなった。ヤエトの手を握ると、ぐいぐいと引っ張って物陰に連れ込む。
　変な噂になって皇帝に伝わったらどうするのだ。それこそ皇女はともかく、ヤエトは困る。助けを求めて視線を泳がせていると、袖が重くなった。
　——またか。
　もう絶対にこの官服というのはなにかの陰謀だ。彼の袖を握りしめた小さな手の持ち主を見下ろすと、真剣な眼差しで見返された。せっかくの花冠が傾いでしまい、今にも落ちそうだ。
「なら、交換しよう」
「交換？」
　声をひそめて、皇女は告げた。
「そなたも、わたしになにか尋ねればよい。なんでも答える」
「……ですから、そうたやすく言質（げんち）を与えては」
「ヤエト」
　唸られて、ヤエトは肩をすくめた。ごまかせそうもない。しかたなく身を屈め、声を低めた。
「わたしから先に教えていただいても？」
「許す。訊け」
「太守が怖いと思われるものは、なんでしょう」
　皇女は返事に詰まった。さらりと嘘をつけるような性格ではない。ものすごい形相でヤエトを見上げ、

おのれ、とかすれた声でささやいた。
「そんなことを知ってどうする」
「等価交換という言葉をご存じでしょうか。わたしも太守の怖いものを教えていただいて、それで釣り合いがとれるというもの」
「……暗いのが怖い」
「は？」
素で問い返してしまったが、皇女はうつむいて、くちびるを噛んでいる。
――本気か。
皇女の性格なら、自分が情けないと感じているに違いない。かなり不本意な弱味だろう。
「では、この宴もあまりお楽しみではないですね」
「叔母上の、ちょっとした意地悪なのだ。わたしが暗いのは苦手なことをご存じなのに」
「手燭をお持ちではないようですが」
「……そんなもの、持っていたら弱虫みたいに見えるではないか。つまり……叔母上に、もう暗いのは平気なのかと訊かれたので、昔からずっと平気ですとお答えしたから……」
少し気の毒になって、ヤエトは皇女の手をとった。彼の角灯の持ち手を、その手に握らせる。
「わたしも暗いのは苦手です。もとより弱虫ですし、躊躇なく角灯を持参したのですが、重くて閉口していたのです。太守にさしあげます」
沙漠の向こうから持って来た角灯は、昨今では手に入らない逸品だ。少し惜しいが、皇女に献上しても恥じる品ではない。
皇女は咳払いをして、ヤエトを見上げた。
「いいわけはよい。そなたの番だぞ」
その眼差しは、おそろしいほどまっすぐだ。
「わたしも、暗闇が怖いのです」
「また、そのような」
皇女は鼻で笑ったが、ヤエトは首をふった。
「事実です。……以前もお話ししたように、我が一族に与えられた恩寵は薄れ、訓練や維持の方法も失

われました。わたしを教え導いてくれる者もなく、困り果てた父は、最後にして最大の恩寵を与えられた者がいたと伝わる塔に、わたしを連れて行ったのです。わたしが過去を視れば、……わかるかと」

ヤエトはもう少女を見てはいなかった。

真っ暗な螺旋階段が、今にも目の前にあらわれそうだ。闇の奥でむせび泣く声がする。風の音だとわかっているのに、信じきれない。

「わたしは過去を幻視し、熱をだして何日も生死の境をさまよいました。そのときに視たものが、今も夢に出てくるのです」

「……なにが怖かったのか、わからぬのだが」

「わたしの祖先は、過去を視る力のために幽閉されていたのです」

つぶやく自分の声が、遠く聞こえた。この事実を口にするのは、はじめてだ。

親にも話せなかった。彼のあまりの怯えように、両親は過去を探るのをやめ、すべてを隠すことにした。彼に恩寵の力があることは、妹すら知らない。

「眼を潰されていました。幻視の力には不要だったからです。鎖に繋がれ、恩寵の力を高める薬を焚いて、夢うつつの状態で過去を読まされていました」

語りながら、自分が危険を冒していることを自覚した。皇女が望めば、彼をどこかに監禁し、薬漬けにするのは容易なことだ。

皇女は、珍しく少しためらってから尋ねた。

「だが、過去を視てどうする。未来ならともかく」

「未来は変えられません。明日死ぬとわかれば、死ぬだけです。過去も変えられませんが、知識は有効です。わたしが視たのは、依頼主の暗殺をたくらんだ者は誰か、と詰問される先祖の姿でした」

「幽閉したのは、権力者だったのだな」

ヤエトは上の空でうなずいた。

あまりにも反芻し過ぎて、逆に今では夢のように感じるが、実際に、彼は視たのだ。

「暗殺者が返り討ちにされるところから始めて、時

を遡っていくのです。殺された男が、平然と食事をしている。寝る。歩いている。金を受け取り、その金を持って来た男はまた別の人物と会い――そうやって、すべての嘘が暴かれていくのを視ました。以来、わたしはくり返し塔の階段を上り、厳重に鎖された小部屋を夢の中で訪れるのです。蒸溜された薬草の香気、湿った空気、錆びた金具の匂い……わたしはそれが恐ろしい……いえ」

ヤエトは言葉を切った。

怖いのは夢ではない。夢が示す、不吉なものだ。

「わたしは、自分に与えられた恩寵が怖いのです」

皇女は暫く黙っていたが、やがて、ぽつりとつぶやいた。

「おもしろい話ではなかったな」

「申しわけありません」

「そなたが悪いわけではなかろう」

「いえ、ご不快にさせてしまったのですから」

皇女は口をつぐんでしまった。

まずかったな、とヤエトは思っていた。恩寵にかかわることで嘘をつけないとはいえ、暗殺者の例はまずい。皇女は狙われる側なのだ。

「わたしが暗殺されたら、そなたはそれを指図した者を捜すのだろうか」

やはり、皇女の想いはそちらにさまよっている。

「首謀者がわかった理由を説明できなければ、きっと信じていただけないでしょうが」

「陛下なら……恩寵のことを知れば、そなたを利用しようと思われるであろうな」

「御意」

「そしてそなたは祖先と同じ道を辿る。そなたにとって、死より恐ろしい運命なのだな、それは」

肯定も否定もできず、ヤエトは皇女を見下ろした。彼が手渡した角灯は、虚(むな)しく膝のあたりを照らしている。その光を受けて浮かび上がる、雲をまとう竜の古典的な地模様は、達人の手によるものだ。

もう、これを織れる職人はいない。隊商都市とと



もに燃えたのだ。技術も道具も、皇帝が燃やした。

ぼんやり考えていると、その光が揺れた。

「わたしは絶対に、そなたを幽閉したりはせぬ」

少女らしい潔癖な宣言に、ヤエトはたじろいだ。そんなことをいって、約束を守りきれなかったときに傷つくのは皇女自身ではないか。

「太守、絶対というようなお言葉を、かるがるしく口にされては――」

「うるさい。わたしが絶対にといったら絶対だ！」

両手を握りしめて主張されては、微笑んでうなずくしかない。

「ありがとうございます。……落とされましたよ」

皇女の癇癪に耐えかねたように落ちた花冠を、屈んで拾い上げる。だが、膝をついたまま差し出した花冠を受け取る手は、なかった。

いぶかしく思って顔を上げると、視線が合った。黄昏の空の色をした双眸が、今は暗く冷えている。

「そなたは、わたしを信じておらぬ。それでも、わたしはそなたを裏切らぬ。少なくともこのことでだけは、絶対に」

それだけいうと、皇女は踵を返して歩み去った。

花冠を手にしたまま、彼はぼんやりと考えた。皇女を信じているか？　信じているような気がする。だが、恩寵の前ではどんな約束も意味を失う。

――真実は、人には重過ぎる。

真実とは、神に属する力だ。人がそれを得ることは、恵みではない。

呪いなのだ。

第



章

1

地味な毎日って素晴らしい――と、いうのが最近のヤエトの実感である。

大声魔王のセルクがいなくなり、まず、日々が静かになった。たったひとりで大違いだ。

すごい、と素直に思う。

竜気を発散しまくりの皇妹がいないのも、気が楽でよい。扱いづらい上官や、過去のあれこれが面倒くさい貴族の若様も留守だ。

――人生、捨てたものでもないな。

そんなことまで思ってしまう。

皇妹の供回りも、北嶺からの帰路を護る騎士を残し、おおかたの女官や侍従は麓に下りた。今頃は隣郡の太守と部下たちが、高貴な客人がゆっくりしに来ると聞いて、接待の準備に奔走しているだろう。

静かになった城の中庭で、あるじの帰りを待つ老将の昔話を聞くのが、昨今の楽しみである。気分はもう隠居だ。理想が現実になったといってもいい。

十日限りと決まっている、理想の生活だ。

「このまま、こんな風に暮らしたいものです」

真情を吐露すると、ジェイサルドは感心しないという風に首をふった。

「お若いかたが、いけませんな」

だが、眼は笑っている。ヤエトは笑みを返し、膝の上に広げた書きつけに視線を落とした。

老将から聞いた、在りし日のアルハンの姿だ。聞いてどうするのですと半信半疑だったジェイサルドも、話してみればなつかしく感じたのだろう。問いに答えるばかりでなく、いろいろ教えてくれた。

アルハンは沙漠の主要な隊商都市のひとつで、東寄りに位置する。

おどろくべきか当然というべきか、沙漠の街には《化鳥の騎士団》の昔語りが残されていた。

「太古の昔は、竜を駆る一族だったと伝わります。国の名も、そこから来ていたとか」
「なんという名だったのです？」
老将は唸り、眉根を寄せた。
「申しわけない、思いだせませんな」
「いえ、お気になさらず」
また竜が出た、とヤエトは思う。天地を裂いたという邪竜と、なにか関係があるのだろうか。
「昔はあの隊商路を《太陽の道》と呼び、その東の起点には、太陽神ターンの神殿があったそうです」
「太陽神ターン？」
どこかで読んだ覚えがある神名だ。
「ああ、帝国のかたがたは、神はひとつとお考えのことは存じておりますが」
「お気遣いなく。神はひとつ、しかしその御力の数だけ御名が伝わるもの。ターンという神も、大いなるひとつ神の御名のひとつに過ぎぬと存じます」
ジェイサルドはうなずいた。
「いかにも。理にかなった教えです。……ともあれ、そのターンの神殿を滅ぼしたのが《化鳥の騎士団》だったといわれておりますな」
「傭兵団だったそうですが、どこの依頼で？」
「さあ……昔話では、ターンを奉ずる人々には滅びの預言がくだされていて、その運命を他国へ転嫁しようと策を弄した結果、却って滅ぼされたという筋だったかな。たしか、滅びの運命を背負った姫を、《化鳥の騎士団》の王に与えたのですよ。それが露見し、王の怒りを買って攻められたと」
「悪いことをたくらむと報いがあるよ、という」
「そうですな。そういう話でした」
ただ、とジェイサルドは話をつづけた。
「そのまま、《化鳥の騎士団》も崩壊したのです」
「なぜです？」
「南方の覇王が攻め入ったのです。そこで、王は竜と化してこれを迎え撃った。そのために大地は割れ、城は砕け落ち、民は住処を失って離散したと。結局

は、みずから滅びたといえるのでしょうな……覇王にくだるよりは滅びると、王は告げたといいます」
「竜、ですか……」
今までに聞いたことがある話と、少し違う。ヤエトは顎をしごいて考えこんだ。そういう展開なら、邪竜を封じたのは南方の覇王でした、という物語が伝わっていてもよさそうなものだが。
「かの王はよほど嫌われていたらしい。北方もそうやって滅びたとか」
「北方……とは、この北嶺より北の？」
「左様。覇王の軍勢を追い返すため、雪と氷に鎖されて、一時は人も住めなかったといいます」
聳える《天の槍》を眺めつつ、考える——《化鳥の騎士団》滅亡の原因を探るには、周辺諸国の事情を無視できない。しかし、ただでさえ北嶺と折り合いが悪く、一族の血をひいた者でないと受け入れないという北方蛮族の説話など、集められるのか。
「南方が勢力を伸長していた時期だったのですね」
「覇王が魔王と契約をかわして以来ですな」
「覇王の話なら、都で少しは聞きました」
「本場ですからな。ラングールは覇王の街です」
「統一されていたのは、覇王から三代まで？」
記憶を辿りながら確認すると、ジェイサルドは、重々しくうなずいた。
「沙漠の民にとっては悪夢の時代です。もともと、南方はあやしげな闇の神を奉ずる、胡乱な存在ではあったのです。ただ、各地を治める藩王たちには、協力の気配もなければ統一の機運もなかった。それが不意に覇王があらわれて全土を統一、あちこちに攻めこんだのですから」
「沙漠にも？」
「無論。ターン神殿も、《化鳥の騎士団》にやられていなければ、覇王に潰されていたでしょう。滅びの預言自体、覇王が奉ずる闇の神がもたらしたものだという伝えもあるくらいで」
「闇の神とは、どんな神なのです？」

「邪竜が産み落とした神だといわれていましたね」
沙漠にも、邪竜の伝説はあるらしい。
「邪竜というのは、あの《天の槍》につらぬかれたという竜ですか？」
「さあ……《天の槍》の話は寡聞にして存じません。覚えているのはこんな話です。神々に擬して天界に住もうとした竜の正体が露見し、稲妻とともに地に撃ち落とされた……そのときに焦げ、砕けた大地が沙漠となり、その底には邪竜の屍が眠る、と」
「死んだ邪竜の子が、闇の神なのですか？」
「骸から生まれた神は生よりも死を愛し、いつも失われた母を求め、母を殺した天を恨んでいるそうです。壮絶な美貌の持ち主で、誘惑者でもあるとか。覇王はその闇の神の顕現といわれるほどの美男子で、彼に名を呼ばれると魂を抜かれたとも申しますな」
沙漠に伝わる物語は、今までにヤエトが聞きかじって来た昔話のどれより具体的だ。
――沙漠の物語も、既に多くが失われた。
沙漠の隊商都市が姿を消したのは十数年前。その記憶が、いつまで保つだろう。百年後、アルハンの名は残っているだろうか。
――残したいものだ。
そのために、史官がいるのだ。ヤエトはジェイサルドの言葉に耳をかたむけた。
「南方では今でもそうですが、名告るということが大きな意味をもっていましてな。闇の神に仕える呪師どもが、名前を邪術に使うからですが。へたな相手に名告れば、あやつり人形にされてしまうとか」
それはヤエトも聞いたことがあった。都では今も呪師が看板を出し、それなりに稼いでいる。
「自分で名告らなければよいのですか？」
「そうとも限りませんが、どこまで真実かは……」
「呪師以外が相手でも、南方人は名告りたがりませんね、そういえば」
「君臣の誓いにあたって、臣下が主と仰ぐかたに名告るのは、身命を捧げてお仕えする意味だとか」

「なるほど」
名前の呪術は沙漠の西にもあったのかもしれない、とヤエトは考える。ほとんどの場合、竜種の名を呼ぶことは禁じられているし、名が公知されることもない。皇帝や皇子の名はもちろん、直接の上官である皇女の名すら彼は知らない。
皇妹の名が隠されていないのは、彼女は皇家を出た人間だからだ。といって、《黒狼公》の家を継ぐわけでもない。皇妹の立場は曖昧だ。
ヤエトが考えこんでいるあいだに、ジェイサルドは呪術に関する知識をさらっていたらしい。
「たしか、呪師は名前を入れ替える術を使うとか。儂と尚書官殿の名を入れ替えれば、この萎びた身体を尚書官殿に明け渡し、儂は尚書官殿の若い身体を手に入れるという寸法ですかな」
たしかにジェイサルドよりは若いが、虚弱過ぎて交換する価値はなさそうだ。
「あまり賢い交換ではないですね」
「いやいや……子どものころは、こんな話を聞くと怖かったものですが。砂の山が崩れた下から、竜の骸が出て来やしないかと怯えたこともありましたな。今、こうして話してみると、まさに子ども騙しという感じで……お恥ずかしい」
「いえ、とても興味深いお話です。ありがたい」
ヤエトは断言した。ここでやめられては困る。
「さほどにおもしろい話でもないでしょう」
「とんでもない。覇王の話も、都のあたりでは美化された物語になっていますが、やはりアルハンでは違う風に伝わっているのがおもしろいですね」
「敵か味方かの違いでしょう。三代に亘って狂える王が支配したとはいえ、南方の人々にとっては自分たちが覇者だった時代ですからな」
「しかし、アルハンは屈しなかったのでしょう?」
ジェイサルドの眼が遠い空をさまよう。
「……だが、今はもうない。ふと思うことがあります、国とはなんだったのかと。あれほどの犠牲を払

っても、守るべきものだったのか。膝を屈して帝国の支配下に入っていればよかったのではないかと」

アルハンは塵芥と化した。炎の中に街は消えた。今、老将の悪夢の中で、沙漠の下から出てくるのは邪竜の骸などではないだろう。かつてはともに暮らし、笑いあった同朋や家族の骨に違いない。

彼の横顔は、古びた彫像のようだった。

教えてやったら、どうするだろうか——膝を屈しても無駄だっただろう、と。

皇帝に、沙漠の街を滅ぼす以外の考えはなかった。長く厳しい沙漠越えに、後衛からの補給はない。次の都市に可能な限り迅速に到達し、最大限の効率で略奪し、水源に毒を入れてまた次へ向かう。

攻める側にも、退路はなかった。待つのは死の沙漠と、自分たちが毒を入れた水だけ。万が一にも戻れたとして、無慈悲な裁きがくだされるのは確実だった。かれらはすでに叛逆者なのだから。

ジェイサルドが救われたのは、アルハンが沙漠の東端に近かったからだろう。でなければ、彼も彼の部下も皆殺しにされていたはずだ。

長い沈黙に耐えかねて、ヤエトは口を開いた。

「わたしの祖先は、そう考えたのでしょうね」

老将は眼をしばたたき、そこにヤエトがいたことを今まで忘れていたという風に彼を見た。

「古王国というのでしたか」

「ええ。降伏し、すべての支配権を帝国に委ね、すみやかに同化しました。昔のことです」

「尚書局には、あなたと同じ古王国を出自にもつかたが、多いのですかな？」

「尚書局の機構自体、古王国が起源です。文化に優った古王国の、支配のための枠組みごと帝国に呑みこませた……と、その末裔には伝わっていますが」

「何処も同じ、ですな」

心覚えにと今日聞いた話の要旨を書きつけながら、ええ、とヤエトはうなずいた。

「本来、それではいけないと思うのですけどね」

「どういう意味ですかな」
「つまり……歴史を残していくのは、勝者の仕事です。どうしても自分たちに有利に書き残したくなる。ですが、そこを堪えて公平に事実を書き残すのが、史官の本来あるべき姿だと思うのです」
「だから儂のような者に、滅びた国の話を聞く？」
「ご期待を裏切って申しわけありませんが、これは個人的な趣味です。買いかぶられても困ります」
苦笑して顔を上げると、老将は笑っていた。
「欲のないかただ」
「そうでもないですよ。欲望まみれです」
「ほう、どんな欲をお持ちなのですかな？」
「隠居欲ですね」
「隠居……」
ジェイサルドはなんともいいがたい表情をした。
「帝国の文化と融合して変質してしまう前に、せめて土地の神話や伝説を集めておきたくても、この城をはなれることもできません。なまじ、赴任当初に夢を抱いてしまったので、騙された気分です」
「夢、ですか」
「辺境の、閑職に回されたはずだったのです。職を返上しなくても好きなように時間を使えると期待していたら、すぐに太守が赴任なさって、その副官に任命されてしまった。ひどい話でしょう」
少し間を置いて、ジェイサルドは笑いだした。
「是非、隠居仲間になってください。いくらでも昔話をいたしますぞ」
「それは嬉しいお約束をいただきました。張り切って隠居したいと思います」
「お早めに願いたいものです、残された時間がどれだけあるか、わかりませんからな」
「それはご同様。……さて、日も傾いて参りました、中に入りましょうか」
腰を上げたところで、通廊の柱に寄り添って立つ人影を認め、思わず動きを止めてしまう。
ジェイサルドはすでに気づいていたらしい。

「最近、よく歩きまわっておいでのようだ」
「皇妹殿下からのおたよりは？」
「毎晩、定時に。伝達官を通じてお言葉を賜(たまわ)っております。とても楽しんでおいでのようです」
　規格外の竜種である皇妹は、兄の言葉のみを運ぶはずの伝達官に、自分の言葉を語らせるように調整していった。危急のときは伝達官を通じて伝言を寄越すようにといわれ、ヤエトは面食らったものだ。
　ジェイサルドは慣れているらしく、よくあることだと説明してくれたが、しかし。
　――伝達官が心を繋(つな)ぐ先を自在に変更できるなど、あり得ない能力だ。
「異常はないか」
　ジェイサルドが呼びかけたのは、彼の部下だ。伝達官が皇妹の保護下にある以上、その警護も皇妹の騎士団の任務である。
「ありません」
　いつものように薄布をかぶって立つ姿は、鮮明な白昼夢のようだ。伝達官の周囲では、事物は輪郭を失い、すべて溶け消えてしまいそうに思える。
「部屋にお連れしよう。じきに暗くなる、もう外へはお出ししないように」
「はい、閣下」
　伝達官の身体が少し揺れた。思わず、ヤエトは声をかけていた。
「どうなさいました」
　伝達官の視線がヤエトに向いた。
　青い眼が、はっきりと彼の顔に焦点を結んだ。
「どこかに行かれたいのですか」
　伝達官のくちびるが、迷うように開き、閉じた。それからまた開いて、ようやく言葉をこぼした。
「鳥に」
　ヤエトはジェイサルドを見、老将はうなずいた。
「かまわんでしょう」
「厩舎(きゅうしゃ)へお連れしましょう。こちらです」
　手をさしのべると、伝達官は戸惑うようにそれを

見て、それから、不意にひとりで歩きはじめた。ちゃんと厩舎の方に向かっている。
後を追いながら、ヤエトは声をひそめてジェイサルドに尋ねた。
「これも、よくあることなのですか？」
「いや、そもそもこんなに経験の浅い伝達官が公務を与えられるなど、前例がありませんな」
伝達官のたよりない足どりに不安を覚え、ヤエトは足を速めて横に並んだ。
すると伝達官の手が動き、彼の袖を摑んだ。
伝達官にも、少しだけ竜気を感じた。皇妹にはもちろん及ばないが、それでも空気がふるえ、事物の輪郭が歪むような印象がある。皇妹のせいで、竜気に慣れるどころか敏感になっている気がする。
厩舎に着くと、ジェイサルドの部下が命じた。
「伝達官殿が、鳥をご覧になりたいそうだ」
厩舎長は面倒くさそうな顔をしたが、ヤエトの姿を認めるとうなずいて、厩舎の中に戻った。同行してよかった、とひそかに安堵の息を吐く。
と、伝達官がヤエトの袖をはなした。
とっさに摑んだ薄布だけを彼の手の中に残し、伝達官は飛ぶように厩舎に駆け込んだ。
「なにをしている、行け！」
部下を叱咤すると同時に、ジェイサルドが厩舎に飛びこんだ。中から人の叫び声が聞こえる。
ヤエトは騎士たちの後について厩舎に入りかけたが、猛り狂う鳥の声と厩舎長の罵声に怖じ気づいて、その場に踏み留まった。鳥たちは、心を繋ぐことのできない人間を許容しない。絶対に、だ。
あっという間に、厩舎の中は凄まじい騒ぎになった。羽撃きに鳴き声、鳥たちは興奮し、怒っている。
この騒動に負けない大声を出すのは、ヤエトには荷が重かった。
「ジェイサルド殿、外へお出になってください！厩舎長、その……皆、外へ！」
あまりの騒ぎに人垣ができたが、厩舎から出て来

た老将の一喝で、吹き飛ぶように消えた。
「絶対に入るなと、あれほどいっとるのに」
厩舎長が文句をいいながら伝達官を外に押し出し、ヤエトを睨んだ。
「申しわけありません」
「それで、この娘はどうしたんだね」
「よくわからないのです、急に走りだして――」
「そうじゃない。これはウィーシャだ」
伝達官の白い顔に嵌めこまれた双眸は、奇跡のように青い――どこかの能天気な詩人が、北嶺の民を歌った詩句そのものだ。
嫌な予感で、背筋が寒くなった。
「人払いを」
「ご安心めされよ。手配してあります」
ジェイサルドの機転に感謝しながら、ヤエトは厩舎長に向き直った。
「知り人ですか」
「この娘は、ダニウの従妹だ」
ああそうですか、ではさようなら、と喉もとまで出かかった。この一件にはかかわりたくない。ダニウが誰だったかを思いだしたところで、忌避感の原因がわかった。朝議で揉めたとき、頭が悪くてどうしようもなかった男だ。
「北嶺の出身なのですか？」
伝達官は黙っている。答えたのは厩舎長だ。
「セルクと同じ帝国かぶれでね、家出しちまったのさ。首尾よく帝国のお抱えになったのか？　魂でも抜かれてるのかね？」
「皇帝陛下の伝達官に登用されたようですね。名誉な仕事です」
「すっかり面変わりしちまって……」
つくづくと伝達官を眺める厩舎長に、ヤエトは念を押した。
「間違いないのですか？　その、ウィーシャという人だということに」
「鳥が覚えてるからな。ここには、最初の持ち主が

飼えなくなった鳥が何羽かいるんだ。ウィーシャの鳥もいるから、そいつを見ればわかる。出すか？」
「いや、そこまでしていただかなくても結構です」
ヤエトが鳥を見ても謎が深まるだけだ。
「従妹がこんなだと知ったら、ダニウの奴、どうするかな……」
「報せた方がよいと思われますか？」
気乗りしない口調を聞き取ったのだろう、厩舎長はぐるりと目玉を回して見せた。
「訊かれなければ教えんよ。その方がいいだろう」
「助かります」
「今まで誰も気がつかなかったのかね？」
ヤエトはジェイサルドと顔を見合わせた。
肉親ならなにか通じるものがあるかもしれないが、祭りの後、ダニウは登城していないはずだ。
「おそらく、ですが。伝達官は滅多に人前に出ませんし、常時、この布をかけていましたから――」
はじめてこの布の下の顔を見たのはいつだったかと記憶を探り、ヤエトは眉根を寄せた。到着直後のことだ。誰も気づいた素振りは見せていなかった。
「ふむ……まあ、鳥がいなければ、俺もわからなかったかもしれん」
言外に、この変わりようでは、と告げている。ジェイサルドが、宥めるように声をかけた。
「伝達官も、慣れればふつうに暮らせる。皇帝の言葉を届けるとき以外、常人と変わらん。家出したというのは何年ほど前なのかね」
「さてね……五、六年ほど前だと思うが」
「よほど才能があるのだろう。伝達官になるのは容易なことではない。家族に伝えたいかどうかは、正気に戻ってから本人の存念を確認すればよかろう」
ジェイサルドはヤエトを見、ヤエトは厩舎長を見た。老人は肩をすくめ、頭をかいた。
「親は心配しとるだろうな。だが、これを見て安心もせんだろう。教えるにしても、治ってからだ。……いずれ正気になるんだな？」

「なる」
「じゃ、あんたにまかせた」
親しげに背中を叩かれ、ヤエトは顔をしかめた。
「時期を見て、厩舎長が話をしてくださった方が」
「あの村の奴らとは疎遠なんだ」
「……理由を訊いてもよろしいですか」
「あいつらは鳥の扱いが荒い。好かん」
予想通り過ぎる回答だったが、つづきがあった。
「だが、ウィーシャは違った。いつも鳥の身になって、痛がって……それもあって、家を飛び出したんだろうよ。預かっている鳥も、この子が自分で連れて来た。とても家族には預けられないので、お願いしますとな。だから、この子が鳥のことを忘れとらんで、会いにきても不思議はない」
そういって、厩舎長は伝達官の手をとった。鳥を扱うときのように、やさしい仕草だった。
伝達官はその手を見下ろし、開いたくちびるから言葉をこぼした。
「元気でした」
「ああ、元気だとも。しっかり世話してやったぞ。よかったら、また見に来なさい」
「いいえ……」
つぶやいて、伝達官はヤエトを見た。手にしたままだった薄布を、彼は伝達官の頭にそっとかけた。北嶺の出身であることを誰かに見破られ、いらぬ騒ぎになるのは困る。
「ダニウ以外に、気づきそうな者はいますか」
「親族以外でということか？　……セルクは親しかったと思う。帝国かぶれで話が合ったからな」
よりによって、常駐しているセルクが要注意か。
こうして心労の種が増えていくのだ、と憂鬱な気分でヤエトは伝達官に声をかけた。
「今日のところは、お部屋にお戻り願えますか」
伝達官は答えない。ぼんやりしたままだ。
少し考えて、ヤエトは言葉を補足した。
「厩舎にお顔を出されるときは、わたしをお呼びく

ださい。お供します」
ジェイサルドの方を見ると、老将は彼の発言を認めるようにうなずいた。責任者の了解もとれた、これで安心だ——と思いながら、またいらぬ仕事を引き受けてしまったことに、苦笑せざるを得ない。
不意に、伝達官が口を開いた。
「あなたは、誰？」
二語文を喋ったことにおどろきながら答えた。
「太守の副官で、ヤエトと申します」
少し間を置いて、伝達官は答えた。
「はい」
これで顔と名前を記憶されたのだろうか。なんともいえない気分で、彼は相手を眺めた。薄布の向こうにある美貌は、硬質ではあるがこわれやすくも見えた。今にも砕けてしまいそうだ。
——北嶺の民が、伝達官になっていた……。
それも異例の早さで。よほど才能があるのだろうとジェイサルドは評した。そうだろう、皇家の恩寵と、北嶺の民に脈々と伝わる鳥との交感の力は、親和性が高いのだから。
——すでに皇帝は気づいているのか。
だから皇女を北嶺に寄越したのか。貴重な手駒である皇妹を派遣し、確証を得るつもりなのか。
——なんのために？
なぜか、背中が寒くなった。

2

太守とその叔母が帰還すると、城はまた一時的に混雑した。出迎えから再度の送り出しまで、ヤエトは忙殺されることになった。
無事に戻ってくれたのはありがたいが、心の片隅にひっかかりがあった。
——なにか不自然だ。
どこがどうと具体的にはいえないが、皇女の表情がおかしい。

門前で出迎えたときから、違和感は強かった。

皇女は顔色が冴えず、門をくぐると挨拶も早々に部屋へ引っ込んでしまった。ヤエトは留守中異常無しの報告を簡略に済ませたが、皇女はそれにもうなずいただけで、彼の顔も見なかったほどだ。

後から戻って来た皇妹の方は、相変わらず凄まじい竜気を発し、ヤエトの視界をくらませていた。視線を合わせたあらゆる人々を魅了しながら、彼女もまた五層へと去った。伝達官の面倒をみる必要があるからと、ジェイサルドを引き連れて。

もちろんルーギンも、まるで彼女が引いている裳裾のように後をついて行ってしまった。

ルーギンの副官であるエイギルが、とくに事件もなく恙なく視察を終えることができましたと報告に来た後、セルクが頭痛を誘発するような大声で帰着の挨拶に来たが、どちらもヤエトが感じた異常を説明してはくれなかった。

それ以上悩む暇もなく、次々と持ち込まれる些細な問題に忙殺されるあいだに夜になり、皆疲れているから会食もないと聞かされれば、同席の機会が少なくなってよかったとしか思いつかない。

皇妹は城には一泊しかしない。麓までは、ルーギン以下皇女の騎士団から数名が護衛として従うようにという命令がくだった。久しぶりに馬に騎乗した騎士たちとともに門前に並び、ヤエトは太守の名代として皇妹を見送ることになった。

皇女は姿を見せなかった。体調不良、と知らされただけだ。皇妹との別れは私室で済ませたという。

――やはり、おかしい。

ヤエトの後ろに並んで膝をついているセルクは、すっかり皇妹の虜になってしまったようだ。うっとりと、城の者たちに声をかける姿を眺めている。

そのセルクにも、皇妹は親しげに声をかけた。

「そなたにも、世話になりましたね。一族の者たちに、よしなに伝えておくれ」

「はっ。皇妹殿下も、どうかご健勝で」

皇妹は次にヤエトを見た。どっと汗が吹き出すのを覚えながら、彼は恭しく一礼した。
「このたびは北の辺地へわざわざお運びいただき、太守以下、望外の栄に浴した思いです。都に帰られても北嶺のことを思い出していただくよすがに……慎ましいものですが、殿下にお渡しするようにと、太守より承って参りました」
北嶺のお守りを盆に乗せて差し出した。白い指がそれをすくい上げる。
「かわいらしいこと」
「視察中、殿下をお乗せした鳥の羽毛を用いました。ご無事のご道中をお祈り申し上げます、と太守より言づかっております」
「あの子らしいわ。ありがとう、とても気に入ったわ、とお伝えしてね」
「御意」
「これからも姪を……いえ、太守をたのみます」
一瞬、視線が合った。
皇妹が眼をほそめ、その表情が少しずつ笑みに変わったと思う暇もなく、彼女はあざやかに裾をさばいて向きを変え、黄金竜の徽章をつけた馬車に乗りこんだ。扉が閉まるとジェイサルドが号令をかけ、一行は動きはじめた。
正直なところ、皇妹が去ってくれて喜んでいるのは自分だけかもしれない、とヤエトは思う。なにしろ、百人いたら九十九人までは崇拝者にしてしまうという人物だ。太守着任で人が増えたといっても、夏の城にいる官吏の数は百人にほど遠いし、ヤエトを除いた皆が皇妹の信奉者でも、計算は合う。
城内には気が抜けた雰囲気がただよい、セルクでさえ空を眺めては嘆息しているのだから呆れる。
見送りの挨拶を終えた報告をしに行くと、例によってナオに門前払いを食わされた。さすがにナオはナオのままだと思うと、逆に安心したほどだ。
「お待ちください、ナオ殿」
扉を閉めようとするのを呼び止めると、女官はい

かにも鬱陶しげな顔をした。
「なんでしょう」
「あなたにしか訊けないのです、お願いします」
「ですから、なんでしょう？」
「視察中、なにかあったのですか」
「あなたにお伝えするようなことは、なにも」
ナオの表情は固い。少し迷って、ヤエトはもう一歩だけ踏みこんだ。
「太守と皇妹殿下のあいだに、なにか諍いが？」
扉の隙間に見えるナオの顔は、いつもより疲れていた。この女官は、鳥にも乗れないのに無理を押して同行したのだ。北嶺人の鳥に同乗すると主張して譲らなかった上に、往復をこなしたのは天晴れだが、体力の限界が来ていてもおかしくない。
「……なぜ、左様なことを」
「太守のご様子がおかしいと思うからです」
「下種な勘繰りはおやめなさい」
「気のせいなら、よいのです」
「もちろん、気のせいに決まっています」
「わかりました。それから、ナオ殿」
「まだ、なにかあるのですか」
「どうぞ、ご自愛ください。ナオ殿がお倒れになっては、太守もお心安んじてはいられないでしょう」
「……あなたもですよ、尚書官殿」
閉じた扉に向かって一礼し、ヤエトは自室へ向かった。やはり、おかしい。それは確実だ。
――ナオは原因を知っている。だが、喋らない。セルクはたよりにならない。ルーギンから聞きだせなかったら、お手上げだ。
そのルーギンが、南麓鎮の視察と監督もこなしてから城に戻って来たのは、三日後のことだった。
「おかしいとは思うけどね……実は、わからない」
それが彼の返事だった。
さすがに疲れた表情で、椅子にもたれている。ものの役に立つ雰囲気ではない。荷物をそのへんに放り投げてあるので、部屋はいつも以上に乱雑だ。

扉の前に立っていた警護の兵が、一旦はヤエトの来訪を断ったほどだ。とにかく取り次ぎだけでもと粘ったところ、こうして招じ入れられたのだが、引き下がるべきだったかも、と思った。

勧められた椅子はヤエトの部屋にあるものと同じ、皇妹からの土産の品だ。立っているわけにもいかず腰を下ろしたが、なんとなく居心地が悪い。

勝手にやりますよと断って、騎士は酒杯をかたむけた。

ルーギンは酒に強い。学舎の若者たちは無茶な呑みかたをするもので、酔っぱらいの介抱をさせられたり、汚物の始末をしたりと良い思い出がないのだが、ルーギンがつぶれたのは見たことがない。

湯浴みをしてきたらしく、濡れて肌に貼りつく金髪を鬱陶しげにかき上げながら、騎士はあっという間に杯を空にし、中身を注ぎ足した。

「セルクの家でもらいました。彼は、いい奴だ」

「地酒ですか」

「そう。北嶺に乾杯」

「あまり一気に呑まない方が」

忠告を無視して、ルーギンはまた杯を干した。

「城に戻る二日前くらいかな……空気がとげとげしくなって、いつも通りの会話なのに、怖いんですよ。原因がなんだかわからないし、遠回しに訊いてもどちらも教えてくれないし、疲れました……」

「お疲れさまでした」

「だから嫌だったんですよ、お子様のお供は。なんで一緒に来てくれないんですか」

ルーギンの方が、よほど駄々っ子のようだ。

「太守とセルクは子ども同士ですから、うまくいったでしょう？」

ルーギンは少し動きを止めた。なにか微妙な表情で答える。

「セルクはちょっと暴走し過ぎと思いますが……先生がいないとすごいですね、あれ」

「どれですか。いや、暴走とはなにが？」

「いい奴なんだけどな。酒をくれるのは善人だ」
ここでまた、おもむろに酒杯を干す。ヤエトは卓上の酒瓶を手にとってみた。思ったより軽い。
「注いでくれるんですか」
「そんなにうまい酒なら、貰って帰ろうかと」
「いいですよ、どうぞ。わたしは厨房からもっと強くてまずくて最低な酒を取って来ますから」
「そんなことをいわれたら貰えません。これは置いていきます。でも、これ一本で終わりですよ」
ルーギンは苦笑した。
「やっぱり先生だ」
「質問に答えられる程度に素面でいてほしいだけです。疑問が解消されたら、あとはお好きに」
「冷たいな」
微笑に翳りがあった。皇妹との別離が堪えているのは一目瞭然だ。
「明日、出直しましょうか？」
「その必要はないですね。お教えできることは、ありません。はじめは順調だったんです。会話もはずんでいたし、景色も良いし、天候にも恵まれて……道はちょっと大変だったかな。あと、セルクがうるさかった。そんな感じで、異常はなかった」
ルーギンの眼は色が淡い。だから、灯火を映すと琥珀色に染まって見える。
「でも、なにかあったのでしょう」
「でしょうね」
なにがあったかは、わからない。
表向きは、伝達官とジェイサルドを通じて伝わっていた話と変わらないのだ。都から招き寄せた医師も、控えめながら実直な仕事ぶりで悪くなかったそうだし、一行はセルクの村では大歓迎を受け、次の村も、まずまず友好的に迎えてくれたという。
皇妹は遠くに仰ぎ見るように、皇女は手をとって暮らしぶりを見てくださいといわんばかりに親しまれ、どちらも民心を摑んだといっていい。
ルーギンが見ていた限り、とくに事件はない。ふ

と気づくと、雰囲気がおかしかった。それだけだ。
「あれ、と思ったのは姫様の表情ですね。ラキニー様は、いつも通りだったから」
「皇妹殿下のご様子は、まったくお変わりなく？」
「あのかたを変えることは、誰にもできません。いつも美しくて、残酷だ」
参ったなと思う。ルーギンが自分自身のことで手一杯なのを、理解しておくべきだった。
ヤエトが立ち上がると、ルーギンはすがるような眼で彼を見上げた。
「行かないでくださいよ」
「お邪魔でしょう。素面の人間が、酔っぱらいの妄言を聞くのは、いろいろ都合が悪いんです」
「なぜです？　うんざりしますか」
「それもありますが、聞くべきでないことを聞いて、しかも酔って忘れるわけにもいかないのが困るんですよ。太守のことは、こちらでなんとかします」
「だから、わたしも自分のことを自分でなんとかしろ、と？　そうやって、逃げるんですね」
苦笑するしかなかった。
「逃げているのはわたしではないでしょう。あなたが抱えているのは、あなたの問題です」
「ひどいな。友人だと思っていたのに」
「それは光栄なことですが、……友人としてふるまってよいなら、酒瓶を取り上げて当番兵を呼び、あなたを寝台に叩きこんで朝まで起き上がらせないようにと命じますね。よろしいですか？」
「そうしてください。もし出て行くなら」
「お安いご用です。では、夢のない眠りと爽(さわ)やかな目覚めの君にあらんことを」
ヤエトはぼんやりと彼を見送るルーギンの前で扉を閉めると、自分が口にした通りのことを扉の前に立っていた兵士に命じ、これは太守副官としての正式な命令であるから、ルーギンがなんといってもかならず寝かせるように、と念を押した。
兵士は敬礼して、部屋に飛び込んで行った。



――これはこれでよし、と。

ほんとうに実行するなんてとルーギンに苦情をいわれるだろうが、そんなのは屁でもない。

困るのは、皇女の不機嫌の理由がわからないことだ。なにが逆鱗にふれるかわからないというのは、ヤエトにとって歓迎すべき状況ではない。

自分の部屋に向かっていると、別の兵士に声をかけられた。ルーギンが抗議のために送って寄越したのかと思えば、伝達官が呼んでいるという。

「わたしをですか？」

「お名前を呼んでおいでです」

なるほど、それではあのとき、伝達官は彼の名前を覚えたのだ。

「わかりました。すぐ参ります」

先導の兵が手にする灯火が、ゆらゆらと壁や床の輪郭を歪めていく。

暗くなってから城の中を歩き回るのは苦手だ、とヤエトは思った。自分は、けっして皇女のことを笑えない。暗いのは、今でも怖い。

「副官殿を、お連れしました」

扉を開けてくれたのはナオだったが、今日は珍しく睨まれなかった。疲れがとれていないようで、すぐにも寝かせてやった方がよさそうな顔色だ。

中に入ると同時に、皇女に問われた。

「どういうことだ」

「……は？」

「なぜ、陛下の伝達官がそなたの名を呼ぶ？」

声が尖っている。あらためて、いつもの皇女ではないと思った。別人を相手にしていると考えた方がよい。気を引きしめて、ヤエトは答えた。

「お留守中に、伝達官殿が護衛をふりきって駆け出してしまわれたことがあったのです。そのとき、どこか行きたいところがおありでしたら呼んでくださいと、わたしの名をお教えしておきました」

「まことか」

「お疑いであれば、厩舎長にお尋ねください」

「わたしの許可なく伝達官を連れ歩いているのか」
「いえ、呼ばれるのははじめてです」
皇女は椅子に座ったままヤエトを見ていた。いつもは立ち上がったり、窓枠に座ったりと、おそらく無意識に少しでも頭を高い位置にしようとするのに、今日は違う。
ヤエトが見返すと、皇女は視線を逸らした。まるで、後ろめたいことがあるのは皇女の方だと示しているようではないか。
「詳しくご報告したかったのですが、体調不良でお目通りがかないませんでしたので」
事実を告げただけだが、これでは責めているようだ。案の定、皇女の肩に力が入った。
これはまずい、と口を開いたが、なにをいえばいいのか。迷っていると、皇女が先に喋った。
「それで、どこへ連れて行くのだ」
「伝達官殿がお行きになりたいところへですが……今宵はもう遅過ぎます。明日にでも、と申し上げてもよろしいでしょうか？」
「許す」
皇女は顎をしゃくった。脇にある小部屋に行け、ということだ。
倒れたときに寝かされていた部屋なので、妙に見覚えがあった。伝達官はヤエトの姿を見ると立ち上がり、近寄って来た。薄布をかけていない。
「ヤエト殿」
いきなり敬称つきで呼びかけられ、ヤエトはたじろいだ。こちらも皇女同様、今までと同じ相手と思ってはいけないのだろう。
「お呼びと聞いて参上しました。鳥ですか？」
「はい」
不安げな表情が灯火に浮かび上がった。今ならば、人形には見えない。
「厩舎を訪ねるには夜が更けました。明日、太守のお許しをいただいて、あらためてお連れします」
「呼ばれている」

ヤエトは面食らったが、すぐに理解した。鳥に、呼ばれていると感じているのだろう。

——伝達官が、おのれのあるじ以外と心を繋ぐのは、まずいんじゃないか？

そもそも、北嶺の民が伝達官にとりたてられると自体、おそらく前例がない。この娘が今後どういう運命を辿るか、誰にも予測がつかないはずだ。

ヤエトとしては、より安全そうな方へ手綱をとっておきたい。

「鳥の声に、耳をふさぐことはできませんか？」

伝達官の表情が強張った。

「いいえ……」

「ウィーシャ殿」

名を呼ぶと、伝達官は身体をふるわせた。

どう言葉をつづけるべきか、少しだけ、迷った。自分をとり戻しつつある今、伝達官は無防備で傷つきやすい存在に見える。

だが、相手は皇帝の伝達官なのだ。大役に抜擢されたその実力と資質を信じて扱うべきだろう。

「あなたが耳を澄まし、心を繋ぐべきは皇帝陛下の竜声に対して、ではありませんか？　厩舎長にまかせておけば、鳥たちは安全なはず。あなたも彼を信じて鳥を預けたのでしょう？」

伝達官のくちびるがふるえ、まずいな、とヤエトは思った。泣かれるかもしれない。

返答までの沈黙は、ほとんど拷問のようだった。

「はい」

ようやく聞こえた声は小さく、今にも消え入りそうだ。安心させようと、ヤエトは微笑んで見せた。

「厩舎には、お連れします。明日にでも。ですが、あなたの心はもう鳥のものではない。陛下にお捧げすべきものなのです。おわかりですか」

「はい」

ふるえる声で答え、伝達官は後ずさった。

自分は悪人だな、と思う。いつでも呼べといっておいて、呼ばれたら結局、断ち切るのだ。彼女が昔

の自分に戻るよすがを、あっさりと。
　――しかし、そうしておくべきだ。
　鳥との交流は、伝達官がその職務を果たす上で支障を来す原因になりかねない。
　哀れではあるが、こうするしかない。
「厩舎長とも、お話しになった方がよいでしょう。とにかく、明日です。今宵はお休みください」
　返事を待たず、一礼して部屋を出た。
　皇女はさっきと同じ姿勢で椅子に座ったまま、ぼんやりとしていた。疲れているはずだ、あらためて見れば、顔色もよくない。
　それでもヤエトの気配にはすぐ気づいたようで、顔を向けずに声だけかけてきた。
「用は済んだのか」
「はい。夜も遅いですからと申し上げて、納得していただきました」
　皇女は手を叩いた。珍しくナオ以外の女官が姿をあらわし、皇女は眉根を寄せた。
「ナオは？」
「少しだけとお願いして、お休みいただきました。お疲れのご様子だったので」
「そうか。それを置いて、そなたも休め。他の者もだ。邪魔されたくない」
「かしこまりました」
　それ、と皇女が示したのは、宴でヤエトが手渡した角灯だった。火が入れてある。
「……あの者は、どこへ行きたいと？」
　伝達官が北嶺の出身であることを、皇女は知っているのだろうか？　どちらにせよ、留守中のできごとは報告すべきだ。しかし、今ではない。
　ヤエトは皇女との距離を詰め、膝をついた。
「厩舎です。失礼ながら、お顔の色がすぐれないようにお見受けします。明日にでもあらためてご報告いたします。今宵はもうお休みになってください」
　皇女はゆっくりと口を開いた。
「そなたに顔色のことをいわれるのは、はじめてで

はないな」
「はい、以前は祭りのときに」
「脈をとられたな」
投げやりな口調だった。皇女がこんな喋りかたをするのを、はじめて聞いた。
不安が背筋を這い上がる。皇女はたちの悪い病にでもかかっているのではないか。いや、まさか。
「案ずるな、病ではない」
ヤエトの心中を読んだように告げて、皇女は少しだけ身体を動かした。ようやく、視線が合う。帰着したときにも口にした言葉を、あらためて告げた。
「ご無事のお帰り、なによりです」
皇女はほんの少しだけ笑みを見せた。
「その角灯も無事に持ち帰ったぞ。そなたに返す。どうだ、なにも心配することはなかっただろう」
それはない、とヤエトは心中で即答した。心配の種なら、山ほど持ち帰ってくれた。原因不明の不機嫌が、その最たるものだ。
「今は太守のお身体をご心配申し上げております」
皇女の顔が歪んだ。小さく息を吐いたのは、笑ったつもりか。声にはならないまま視線を逸らした。
ヤエトは当惑するしかなかった。別人ではないかと思うほど、覇気が感じられない。
原因を問い質してもよいものかと悩んでいると、皇女が視線を戻し、口を開いた。
「……うるさい奴め。わかった、明日は休む。伝達官は、そなたの裁量で連れ歩いてよい。女官たちにも申しつけておく。それでよいな？」
「はい、どうかゆっくりお休みください」
一礼したものの、すぐには立ち去りがたかった。あの表情はなんだろう。怒っているのではない。
「そなたもな。それを持って早く部屋へ戻れ」
出て行け、と命じられたに等しい。しかたなく、ヤエトは皇女のもとを辞した。
気になった表情の正体に気づいたのは、自分の部屋に戻り、寝台に横たわってからだった。

――あれは、見破ってほしいときの顔だ。

妹が、自分がしでかした失敗を隠して、でも早く見破ってほしくてまとわりついて来たときと同じ。

皇女は彼になにかを隠している。それを、後ろめたく思っているのだ――でも自分からは口にできなくて、苛立っている。

うまく話せるように仕向けねばならないのだ。

理屈はわかったが、問題はさっぱり解決しない。原因は皇妹との不和なのか。竜種同士の諍いなど、巻きこまれたくもないが、いつまでも、蜂の巣を後ろ手に隠した皇女につきあわされるのは御免だ。

――面倒くさい。

どうして、こんなことになったのか。

彼は伝達官を呪い、自分を太守副官に任じた皇帝を、太守の地位を欲した皇女を、役立たずのルーギンとセルクを呪った。そしてもちろん、彼を左遷して大抜擢にみちびいた同僚を念入りに呪った。

理想の隠居生活からどれほど遠いところにいるかを考えると、呪いの言葉は嘆息に変わった。

3

十日が過ぎた。皇女の体調は戻ったが、表情は相変わらずすぐれない。

――太守の表情を読むのは、仕事の内なのか？

副官の職務の幅をどこまでと認識するか次第だろう。個人的には最小幅でいきたいところだが、放置できる性格ではない。といって対処もできない。

正直なところ、手も足も出ない状態だった。

頼みの綱のルーギンは、未だに腑抜けている。皇女の警護もほとんど部下に委ねてしまい、そろそろ注意が必要かと、却って悩みの種になっている。

「皇祖様が平らげた国の名を挙げてください」

皇女がおとなしくなったおかげで、歴史の講義だけは進むが、歓迎してよいものか微妙なところだ。

「教主国、西王国、……なにか変な名前の国があっ

たはずだ。デイナ？　ダイナ？」
　ヤエトは準備した地図の写しを広げ、皇女が挙げた国の都があった場所に丸をつけていった。
「都の場所をご記憶いただければ結構です。デイナには、古王国と同じほどの歴史がありました」
「ああ、古王国も皇祖様が平定なさったはずだ」
「その通りです。これで四つですね」
「あといくつだ？」
「三つ、残っております」
　皇女は黙って地図を眺めた。
　沈黙は長く、部屋の空気は重い。
「……太守、お訊きしてもよろしいでしょうか」
「なんだ」
「どうして歴史がお嫌いなのです？」
「覚えるのが面倒だ。おもしろくないしな」
　即答である。ヤエトの方を見もせず、ぼんやりと地図の上っ面を眺めている。
「それだけですか？」
　皇女は無言だ。雑談で心をほぐす戦法は、あっさり空振りだ。しかたなく、ヤエトは話をつづけた。
「残りは港湾王国のゼカリス、諸島連合、北の関門アーダストです」
「それぞれに、王がいたのだろうな」
「諸島連合では議長と呼んでいたそうですが」
　そうか、と小さくつぶやいて会話は途切れた。
　重苦しくて、やっていられない。
「はじめて皇帝を自称したのは、皇祖様よりずっと昔の人物です。さらにそれより前、女皇エイギアという人物がいたと伝えられ、これが皇帝という呼称の語源になっているものと思われます」
「女皇？」
　ようやく反応を引き出せた。
「神の聖音から生まれた虹の王国の支配者で、風と光をあやつり、あらゆる宝玉を産する鉱石の谷に住まったと伝わります」
「夢物語のような話だな」

「神話の時代の人物ですね。ですが、エイギアの子孫を自称する者たちは今も存在します」
「どうせ宝石職人なのだろう」
「いえ、島嶼部に住む、風雨をあやつるという呪術師たちのことです」
「そのきらきらした国はどうして滅びたのだ」
「傭兵団の指揮官がよからぬ野望を抱き、裏切ったのです。女皇は身の汚れに耐えられず、現身を失って地上を去り、同時に、彼女の国も崩壊したとか」
ふん、と皇女はつまらなそうにうなずいた。
「やはり、夢物語だな」
「この世とは、神のご覧になる夢にほかならぬ、と申す者もおります」
「そなたはどう思うのだ。この世は夢か」
「たとえこの世が神の夢なのだとしても、自分は人であると答えるしかありません」
ヤエトの答をどう思ったものか、皇女は長いため息をついて、こう評した。
「生きるというのは、面倒なことよの」
同意しそうになったが、なんとか堪えた。
「面倒だと思えるのも、生きていればこそです」
「死にたがりにいわれても、説得力がないな」
ヤエトは微笑んで、皇女に一礼した。
「一本とられました。おめでとうございます」
「……なにがだ？」
「口論で、わたしに勝ちをおさめられました」
「ああ、なるほど」
うなずいてから、皇女は少し考えるように口をつぐみ、そして眉根を寄せた。
「ちっとも楽しくない」
「それは申しわけありません」
「そなたはおかしいぞ。負けたところで爽やかに『おめでとうございます』は、ないだろう。それではちっとも勝った気がせぬではないか」
「そういうものでしたか。気をつけます」
「……もうよい。考えてみれば、そなたが勝ち負け

にこだわっても気もち悪いだけだ」
適切な答を探すあいだに、皇女は立ち上がった。
「放念せよ。そなたは、そなたらしくしておればよい。今日はもう疲れた、ここまでにしよう」
「御意」
「しかし、風はその呪術師どもが受け継いだとして、光はどうなったのだ？」
「数百年後に皇帝を自称した者が、別名を《光の守護者》と申しました。かつて女皇の身がほどけたときに地上から消え去ったとされる三つの光を、神との契約で地上に呼び戻したと」
「その光とは？」
「嘘ですよ、太守。その男は詐欺師だったのです」
「なんだと？」
「神との契約などなかったのです。彼は《人皇》とも呼ばれます。神の力を借りず、人の身のみで国を興した男を、英雄と讃える者もおります」
皇女は声をあげて笑った。
ちょうど顔を出した女官がその笑い声にたじろいで竦んでいるのに気づき、ヤエトは声をかけた。
「なにか？」
「伝達官様が、尚書官様をお呼びです」
一礼して女官が引っ込むと、皇女はつぶやいた。
「はじめの皇帝が、詐欺師とはな。最高だ。なにもかも、くだらぬ」
そう断じ、部屋を立ち去ってしまった。控えていたナオが後を追う前に足を止め、ヤエトを見た。
この女官は、皇女が赤子の頃から仕えているのだという。沙漠の民だが、父親が商いの本拠を沙漠の外に置いていたのが幸いして、生き延びたそうだ。
ナオ自身から聞いたわけではない。彼女はヤエトになにも語らない——だからナオが口を開いたとき、ヤエトは少々おどろいた。
「姫様のお気もちを少しもわかっておいでない」
それだけ告げて、ナオは皇女の後を追った。
——わからないから、困っているのに。

意味深長な非難をするより、正解を教えてくれようとは思わないのか。

ヤエトは教材をかたづけると、伝達官がいる小部屋へ向かった。

「お呼びでしょうか」

「鳥に、会いたい」

今日は、白い頬に血がかよって淡く色づき、眼に光が見える。

「昨日もお連れしましたが」

「繋ぐ、しない」

――必死なのだ。

こういう一途さは苦手だが、これもうっかり引き受けてしまった役目のひとつだ。しかたがない。

「わかりました。後刻、お迎えにあがります」

ヤエトは主塔を出ると、厨房に寄って昼食を貰い、自分の部屋に戻った。これで半日が終わった、残り半分をやり過ごせば眠れる……と考えながら。

昼食は、決まって例の包み焼きだ。祭りのとき無理に食べさせられて以来、毎日作らせている。

北嶺産の穀物を小麦の粉に混ぜこんだ皮には独特の風味があるが、味よりも手摑みで食べられるのが手軽で気に入っている。今も片手に持って食べながら、麓から上がってきた報告を眺めた。報告書の作成者は、騎士団付きの尚書官だ。

やはり、郡境の住民の経済的な破綻は、隣接する踏野郡の郡太守も認める施策らしい。北嶺の民の無知をよいことに、悪辣非道な儲けぶりだ。

手を打たねばならないのは明白だが、相手の野望と知恵のまわり具合を確認するのが先決だ。そのための尚書官の派遣であり、報告である。

土豪出身の太守は、帝国の中で成り上がる願望より、自分の所領への執着が強い人物のようだ。配置替えをちらつかせれば、脅せるだろう。

しかし、隣郡の太守が都の大貴族と繋がっていれば、そんな脅しに効果はない。

――都にも情報源が欲しいな。

そこまで考えてから、自分に苦笑する。
思いつきで余計な仕事を増やしても、手が回りきらず、すべて半端に終わるだけだ。
「楽して隠居、だ」
つぶやいたところで、扉を叩かれた。
「お入りなさい」
入って来たのは厨房と厩舎で助手をつとめる少年たちだ。ふたりに読み書きと計算を教えるのが、ヤエトの昼食後の日課である。狡猾な商売人に騙されないよう、教材は請求書や取り引きの明細だ。
厩舎の助手はセルクの、厨房の助手はイスヤームの親戚だというが、とくに仲が悪くもない。
じきに、今度は兵士が呼びに来る。
ヤエトは少年たちをそれぞれの持ち場に帰らせ、自分も部屋を出る。今度の任務は、太守の見送りだ。遠乗りに出る時間なのだ。
鬱陶しいというのが自分に対するヤエトの評価だと聞けば、セルクはどう思うだろう。だが、鬱陶しい奴だからこその使いどころはあるものだ。
太守のご健康に良いから毎日でも遠乗りにお誘いしてはどうか、とセルクに提案したのはヤエトだ。
重大な役目をまかされたと思ったらしい。以来、セルクは一日も休まず皇女を遠乗りに誘った。
ヤエトが門に着くと、皇女とセルク、それに護衛の騎士三名が、厩舎の方から来るところだった。
行ってきますと手をふるセルクの無邪気さに、辟易するより救われた気分になるのだから、自分も疲れているのだろう。
皇女は小さくうなずいただけだ。
北嶺の短い夏は終わりが近いと見えて、昨夕は雪混じりの雨が降った。このまま冬に突入するのは避けたいが、相変わらず、突破口は見えない。
皇女の不機嫌は、長過ぎる。
「尚書官殿」
顔を上げると、ルーギンの副官エイギルがいた。
「階段の下まで、お連れしております」

「かたじけない」
毎日のことなので、慣れてしまった。厩舎につづく道の手前で伝達官と護衛のふたりに合流する。
「ヤエト殿」
彼の顔を見ると、伝達官はほっとしたように肩の力を抜く。一気に人間らしい表情を取り戻すのだ。
職務第一であれと教え諭したときは、これで嫌われるだろうと予測したのだが、きっぱり外れた。
外れる予測しか立てられないようでは、無駄に歳を食ったというしかない。
伝達官が北嶺の出身であることについては、皇女に報告してあった。伝達官が望めばヤエトの判断でどこへでも連れて行けというのは皇女の命令だ。まずは正気を取り戻してもらわねば話にならん、というのである。たしかに、それも一理ある。いつまでも、ふらふらされてはたまらない。
伝達官が望む行き先は厩舎だけなので、ほとんど毎日、ヤエトと護衛は厩舎に行くことになる。厩舎長に伝達官の身を預けると、あとは待つだけだ。
ここ十日ほどのあいだに、厩舎の前庭がヤエトの定位置になってしまった感がある。椅子もあるし、厨房から飲み物や軽食が運ばれることもある。手配しているのはエイギルだ。こまかいことに気がつくのは、さすがルーギンの副官といったところか。
エイギルは話好きでもあり、今ではヤエトは彼の年齢は二十九歳、下級貴族の出身で四人の子持ちということまで知っている。子どもは上から男、男、男、女。末娘のかわいらしさを力説する彼を見ていると、皇帝親馬鹿説に非常な説得力を感じる。
「伝達官殿を見ていると、せつなくなるんですよ」
いかつい見た目とは裏腹に、乙女な発言が多い。
「せつないですか？」
「ええ。娘がもし、家出をしたらと思うと！」
そして、うんざりするほど親馬鹿だ。
「今でも一緒に住んでおられないのに？」
「思いださせないでくださいよ！　都にいるときに

はできるだけ顔を合わせるようにしていますが、もう忘れられてしまったかもしれない。父上のお顔はどんなだったかしら、なんて具合に」

「それだけ慈しんでおられるなら、勝手に家を出られるようなご心配はご無用なのでは？」

「そう思うのですが……どうせ適当におっしゃってるだけですよね、尚書官殿は」

当たりだ。そこはふれずに、話を逸らす。

「奥方にまかせておかれれば大丈夫でしょう」

「奥が浮気をしたら死にます」

本気の目だが、なんで話がそうなるのか。

「あの……それは奥方に失礼なのでは？」

「あれにその気がなくても、うようよと変なのがつきまとうんです。団長みたいなもので……まわりが放っておかないというか」

なるほど、と思わずうなずいてしまったから、エイギルの妄想は止まらない。娘も今にどこの馬の骨ともわからぬ輩に云々と突っ走るので、暫く好き放題喋らせてから、頃合いを見て口を挟んだ。

「ご家族は、それほど想われて幸せだ」

「いえ、幸せなのはわたしです」

「早く都にお戻りになれるといいですね」

エイギルは照れたように笑ったが、すぐに真顔に戻った。

「尚書官殿も、ご結婚なさってお子をもうけられるべきですよ。人生、変わります」

「そんな酔狂な女性はいないでしょう」

「この人はまた、自覚がない……。都から来た女官のあいだでは、団長と人気を二分しているのに！」

これを聞かされるのも、何回目か。

比較対象の問題だ。ルーギンほどの大貴族では腰が引けても無理はない。一方ヤエトは北嶺ではなぜか重要人物風なのに、家督などの問題もなさそうで、話題にするにも気楽なのだろう……と説明すると、尚書官殿の心は氷ですか、乙女の純愛を打算扱いですかと詰め寄られる。怖いので、二度といわない。

「華の騎士と人気を分け合うとは、畏れ多い」
「団長も、いつまで独り身のおつもりなのか……」
答えづらい問いをヤエトは微笑で受け流し、ふと浮かんだ疑問をそのまま口にした。
「北嶺の前は、どちらに？　都ですか」
「東方です。海沿いの沿岸諸都市を、あちこち。海賊の害がひどいので、遊撃隊として転戦しました」
エイギルの話によれば、包囲を破って都市を救ったこともあったらしい。ああ見えて、ルーギンはかなり戦場経験があるようだ。
「てっきり、都に駐留なさっていたのかと」
「とんでもない。たまに休んでまた出撃ですよ」
皇女の騎士団が、都に落ち着く暇もないとは。ルーギンと皇妹の件が尾を引いているのだろうか？
「ずいぶん戦功もたてられたのでしょうね」
「さほどでもないですよ。団長がほら……出世にご興味がないかたなので、手柄をさらわれたことも多くて。南方時代は、もう少しやる気があったのに」
困ったことです、といいたげな口調だ。だが、若干は誇らしげでもある。
「南方へも行かれたのですか？」
「ええ。あのあたりの太守は土豪出身ですが、隙を見ては断りなく私法を施行し、民から税を二重三重に絞り上げ、挙げ句境界を巡って紛争もあり……」
詳しく聞けば、一連の流れは帝国が仕組んだ展開のようだった。手綱を緩めて土豪に放埒な領地経営をさせ、帝国が善、地元の権力者が悪という図式を作り、反乱や一揆の勢力と手を組むのだ。
豪族を滅ぼした後を皇家の天領とし、領守として皇子たちが赴任する。
皇女が、領地が欲しいと皇帝に訴えたのには、そういう背景があったのだろう。自分の騎士団が平定に力を貸した土地を、なぜ兄たちが持っていくのかという苛立ちもあったはずだ。
ふつうの姫君ならともかく、あの皇女殿下なら間違いない。どうして、と眉根を寄せるはずだ。

とにかく、皇女の騎士団が都で席を暖める時間はほとんどなかったようだ。ルーギンに結婚する暇がなかったことより、エイギルが四人も子どもをもうけていることの方が、びっくりだ。

それにしても、あちらもこちらも火種だらけだ。これだけの領土をいきなり統一したこと自体が、なにかの奇跡なのだろうし、そのまま維持して子孫に伝えられたら、神業といっていいだろう。

――他人事じゃなくなったわけだが。

その子孫の副官は、傍観者ではいられない。

暗い気分を払いたくて、ヤエトは厩舎を眺めた。中からは、鳥たちの声と羽音が聞こえてくる。

ヤエトの視線を追って、エイギルがつぶやいた。

「ここは、平和ですね」

「ええ」

今のところは、と心の中で言葉をつづける。いつまで保つかは、わからない。

「次の任地が北嶺だと聞かされたときは、それはどこだ、って思いましたが」

「実をいうと、自分も名前しか知りませんでした」

「名前だけでもご存じなら、えらいもんですよ！……今では、ここに来られてよかったと思います」

理由を、エイギルは口にしなかった。ヤエトも敢えて問わず、ただぼんやりと景色を眺めていた。

午後の日差しに身体をあたためられ、居眠りしそうな雰囲気になってきたとき、不意に足音が近づいて来た。せわしない、武装した兵士のたてる音だ。

エイギルが素早く反応した。

「何用か」

「団長が、急ぎお報せするようにと。殿下のお姿が、見えなくなりました」

一瞬、兵士の言葉が理解できなかった。

問い質そうと口を開いたとき、さらに騒がしい物音が聞こえて来た。セルクだ。鳥に乗ったままだ。

「尚書官殿！」

蒼白な顔を見上げ、ではこれは事実なのだ、とヤ

エトは思った。皇女が姿を消した。セルクにも、みつけられなかった。そういうことだ。
「騒ぐな」
まず、釘を刺したが、セルクの耳には届かない。
「姫様が……俺のせいだ、俺がちゃんと姫様について行かなかったから！」
ヤエトは眉を上げた。動悸が激しい。動揺している場合ではないのに、心臓が勝手に跳ね回る。
「落ち着け。なにがあったか、順を追って話せ」
セルクは口を閉じ、なぜかほっとしたような表情でヤエトを見下ろした。
「すまない……すぐ頭に血がのぼってしまって」
ヤエトは腕を組んだ。背後から、さらに多くの人が駆けつけてくる音がする。内密にしておくという選択肢はもう存在しない。
「次からは、もう少し静かに帰城してください。全員に知らせる必要があるかどうかを決めるために」
「だが、姫様が」
「まず鳥から降りて。太守が姿を消されたということは、わかります。前後の状況を説明できる者がほかにいるなら、その者を寄越してください」
「いや……俺のせいだから」
「では、冷静になってもらわねば困りますね。もう一回、命じねばなりませんか？　鳥から降りなさい。前にも同じようなことがあったはずだ」
セルクはむっとしたような顔をしたが、それでもすぐに鳥の背からすべり降りた。厩舎長が手綱を取りに来るのも見ず、ヤエトの肩を摑む。馬鹿力め、手加減しろ、と思うが今の状態では無理だろう。
「なかなか戻って来ないから、おかしいと思って探したんだが、みつからない。ひとりでは無理だ」
「護衛がついていたでしょう」
「護衛は……まいたんだ」
目眩（めまい）がした。セルクに摑まれていなければ、ふらついていただろう。
「なぜですか」

「話しづらいだろうと思ったから」
いろいろ間違っている。方法も、優先順位も。
「ご自分でお戻りになるのでは？」
「もういい、帰らぬ、とおっしゃった」
「なんでまた、そんな話に……」
思わず、素の感想を口走ってしまう。セルクは苦しそうに顔を歪めたが、視線がふっと動いた。見れば、ルーギンがすぐそこに立っていた。
怒っている。
「姫様を置いて戻って来るなど、正気か！」
「ルーギン殿、落ち着いてください」
あわてて、ヤエトはルーギンの腕を摑んだ。剣の柄に手をかけていたからだ。
「あなたはなんで落ち着いているんですか」
「いや、べつに落ち着いてはいませんが……とにかく、太守が行方をくらまされた場所と、時刻と、どの方向に向かわれたのかを整理しないと」
「今から追っても、間に合わない」
セルクの声は、地の底から響くように暗い。
「だから、戻って来るはずがないと仮定するような、なにがあったんです。……話しづらいなら、場所を変えましょうか？」
「わたしも聞かせてもらう」
いつになく強硬に、ルーギンが割り込んだ。結局、セルクは彼にしては小さい声で話しだした。
「最近、姫様の調子がおかしかったから……なにがあったのかと訊いてみた」
――気がついていたのか！
ヤエトの驚愕をよそに、ルーギンは一刀両断した。
「僭越だな」
「黙っていたらわからないじゃないか。だから、話してくれたら力になるから、と」
「それで、教えてくださったのですか？」
「男にはわからないといわれて、口論に……。結局、話してもらえなかった。男に生まれたことの幸運を考えもせず気楽でよいなとか、女に生まれ変わるの

は嫌だろうとかいわれただけで……」
ヤエトはルーギンと視線を合わせた。
――機嫌が悪くなった原因は、これか。
女に生まれたことを呪うなど、今さらである。だが、かりそめの領地に部下、すべては皇帝が与えてくれた玩具に過ぎず、いずれ取り上げられてしまうことには、気づかざるを得ないだろう。
叔母の存在は、皇女の悩みを深めたかもしれない。力があっても、女ではどうにもならぬ……と。
セルクの声は、徐々に大きくなっていく。
「それで、女に生まれてもかまわないと答えたら、野蛮人の暮らしは男も女も関係ないか、と笑われて……ついでに、北嶺の女に生まれるのは嫌だとまでいわれて、つい、……そんな風に北嶺を馬鹿にして理解しようとしない太守なんて、いらない、と！」
ルーギンが踵を返した。後ろで身の置き所がない風にしていた護衛の騎士たちに、皇女が姿を消した場所を問い質している。
セルクを叱るのは、同じ尚書官のヤエトの役目ということだ。だが、どうせこの男は逃げたりしない。小言をいうのは後でも間に合う。
「姫様は、自分もこんな土地にいるものかと……」
「いいですから、その話は。発見したら、わたしがお説教します」
セルクは眼をしばたたいた。
「説教？　姫様に？」
「貴殿はこのまま投獄したいところですが、余分な人手はありません。捜索隊に入りなさい。ルーギン殿のところへ行って、捜索に手を貸すよう、わたしに命じられたとおっしゃい」
そのまま走りだしかけて、セルクは動きを止めた。
「捜索なら、鳥が使える」
「もちろんですが……？」
「そうじゃない。……《雪鳩（ゆきばと）》が使える」
聞いたことのない名前だ。
セルクの表情はふざけている風ではない。そもそ

も、こういう場面でふざけられる男ではないのだ。
「どういうことです？」
セルクの目線を追ってふり返ると、厩舎長が白い鳥が入った籠を手に立っていた。
「厩舎に戻って来るよう訓練したのが十二羽いる」
そういう話を聞いたことはある。鳥に飼育小屋の場所を覚えさせ、遠くで放しても帰ってこられるように訓練するのだ。通信のためである。
セルクができるといい、厩舎長がそれを裏付けるなら、北嶺にはその技術があるのだろう。
帝国にはない技術だ。遠隔地への通信は皇家に独占されている。それが帝国の権力の基盤だからだ。
――知らされていなくても、無理はない。
自分が北嶺の民でも、他所者には明かさない。
それよりも今、こうして明かしていることに感心すべきだろう。皇女が愛されている証拠だ。
セルクが少し躊躇して、厩舎長を見た。老人がうなずくと、セルクはさらに声を低めて告げた。
「……何人かは《雪鳩》と心を繋げられる。鳥が見たものを見られるし、聞いたものを聞けるんだ。ただ、……これは内密にしてほしい」
「なるほど。わかります」
うなずいたのは、頭の中を整理する時間を稼ぐためだ。通信用の鳥がいる。結構。その鳥と心を繋げる？　乗用の《地走り》だけではないのか。
あとで考えよう、とヤエトは思った。今は時が惜しい。使えるものなら、なんでも使うべきだ。
「……その《雪鳩》を使える者を集め、空から捜索させることができますか？　厩舎に戻るよう訓練された鳥とは別に、何羽かいるのですか？」
厩舎長がうなずいた。
「そうだ」
「では、厩舎に戻るよう訓練された方は、ルーギン殿に預けましょう。なにか発見したら飛ばすよう、持たせればいい。夜でも飛べますか？」
「飛べるが、夜目は効かない。精度は悪くなる。猛

禽に襲われたりもするし、絶対ではない」
「わかりました。セルク、さあ行って使い手を集めなさい。早く。目立たないように！」
うなずいて駆け出したセルクを見送って、ヤエトは厩舎長の腕を摑んだ。
「《雪鳩》の使いかたの説明は、あなたがしてください。実際は北嶺出身者にやらせるにしても、捜索隊の者たちに、基本的なことを教えておいた方がよいでしょう。そうだ、伝達官殿はまだ中ですか？お部屋に戻っていただかなければ」
厩舎長は少し呆れたようにヤエトを見た。
「まず、ウィーシャを連れて来よう。しかし、なんであんたはそんなに落ち着いてるんだね」
ヤエトは苦笑した。傍目に落ち着いて見えるなら、便利だ。もちろん彼だって動揺しているのだが。
「慌ててもしかたがないからでしょうね。……ルーギン殿、ちょっと聞いてください」

4

時間の流れがおかしかった。
引き延ばされたようにいつまでも進まないかと思えば、はっとすると一気に過ぎ去っている。
捜索隊を送り出すと、もうやることがない。
いざとなれば、伝達官を通じて皇帝に連絡をとることはできる。皇妹と連絡がつけば皇女を捜せるだろうが、間違いなく太守の職は取り上げられてしまう。連絡は時期尚早だと、ルーギンと同意した。
いつの間にか、山の向こうに日は落ちて、あたりはみるみる暗くなっていく。
乗用の《地走り》はともかく、《雪鳩》は夜目が効かない。偵察の任は果たせなくなる。
厩舎を覗いてみると、厩舎長が渋い顔で首をふった。みつからないらしい。
奥では、《雪鳩》と心を繋いだ男たちが、捜索をつづけていた。厩舎の中には北嶺の民しか入れない

から、目立たず集まるには好都合だ。表向き、セルクはヤエトに謹慎を命じられたことになっている。

当のセルクは、ヤエトが来たことに気づきもしない。それだけ集中しているのだ。

「そろそろ、呼び戻してもかまわんかね。役に立たん上に、危険なだけだ。貴重な鳥なんだ……無駄に失うことはできん」

「今夜中にみつからなければ、払暁と同時にまた飛んでもらいます。今夜はもう鳥も人も休ませましょう。厨房に、食事の支度をさせておきます」

ヤエトは厩舎長に後をまかせ、厨房へ向かうと、セルクたちに食事を出すようたのんだ。

また、やることがなくなってしまった。

無意識に部屋へ戻り、角灯に火を入れた。灯火を手に城内をうろついてもしかたがないと思いながら、ヤエトは持ち手の環に指をからめた。

――そなたは、わたしを信じておらぬ。

信じて自由にさせたらこれですかと、文句のひとつもいいたいところだ。

否、と心の底で声がする。そうではない。

信じたのではなかった。面倒で、放っておいただけだ。無責任にも、そういうことは不得手だとわかりきっているセルクに事態を丸投げした。

その結果、セルクはしくじり、責任を感じている。北嶺の秘密を明かすほど、追いつめられて。

胸の奥に重たいかたまりがつかえているようだった。これは、自分の落ち度だ。

ヤエトは視線を落とした。角灯が照らしていた、雲を巻く竜の文様を思いだした。沙漠の街と失われた匠の技術について、ぼんやりと考えた。

つい昨日までそこにあったものが、いかに容易に失われるかを、自分は知っていると思っていた。

「……そうでもなかったようだな」

つぶやくと、角灯を手に厩舎へ戻った。誰もいない。食事をとりに行ったのだろう。

がらんとした囲いの中に、シロバが残っていた。

たぶん連れ出されてはいないだろうと思っていたが、見慣れた灰色の羽をみつけて、ほっとした。
「つきあってくれないか。静かにね」
シロバは首をかしげてヤエトを見た。慣れない手つきで彼が手綱をつけ、鞍を乗せるのを待って、命じられずに足を折り、彼が乗ると立ち上がった。
「門へ行こう」
厩舎長の教えに忠実に、話しかけながら進む。門衛が声をかけてきた。
「どちらへ？」
「近場だけでも見回って来ます。案外、城の近くにいらして、帰りづらいだけかもしれませんし」
門衛はうなずいた。よく見ると、グランダクだ。相手がいれば、皇女を連れ帰るのが誰かで賭けをしているところだろうが、ひとりのようだ。
「暗いですし、お気をつけて」
捜索隊も、そろそろ引き上げてくるだろう。あらためて、夜を徹して探す部隊を派遣するかどうかは、ルーギンの裁量次第だ。
「たのむよ。ゆっくり行ってくれ。ゆっくりね」
ヤエトは角灯の環を握りしめ、眼を閉じた。足下は、シロバにまかせておけばよい。
――お手を。
記憶の底の底から、封じこめていた情景がたちのぼる。枷をつけた、白い手が見える。
――視える限りのものを、ご覧にいれましょう。
視せてくれ、とヤエトは答えた。
――さあ、視せてくれ。
視界の隅がぼうっと明るくなりはじめたとき、吐き気に襲われた。目眩もひどい。
だが、ヤエトは堪えた。鳥から落ちなければよい。落ちても、シロバがなんとかしてくれる。
光はやがてヤエトの視界全体に満ちた。
あたりは明るい。昼過ぎくらいの日差しだ。
セルクが手をふって、前に向き直る。皇女の顔が、思ったより間近を通り過ぎた。幻視を避けてもしか

たがないのに、無意識に身体がのけぞる。護衛がヤエトとシロバを突き抜けた。
そのあいだにも、騎影はどんどん遠ざかる。
――間に合わない。
あわてて追おうとして、気がつく。
これは幻影なのだ。無理に急ぐ必要はない、彼が行くまで止めておけばよいだけだ。
できる。
ヤエトが追いつくと、景色はまた動きだす。
セルクが皇女に言葉をかけた。
「気もちのいい風ですね」
皇女は答えない。小さな背中が遠ざかり――ヤエトはまたそこで幻視を止め、追いついた。
こんなに近い過去を視るのは、久しぶりだ。
早い時期に親に禁じられたのだ。家族や友人の秘密を見破るのは心ないことだ、誰も安心しておまえと住めなくなる、と母に諭された。
相手も傷つくし、自分もつらくなるだけだ。
――昨日に戻ってどうするの？　やり直すことはできません。それよりも、後悔しない毎日を生きなさい。何年もたって、おまえと同じ力の持ち主が、今のおまえを覗き見たらどう思うでしょう？　自分を誇れますか、ヤエト。
無理そうです、と彼は記憶に残る母に答えた。
自分自身を突き放して見る癖がつき、良心は安売りしないと覚悟を決めても、愚かさまでは帳消しにできない。
皇女とセルクは進む。ヤエトは追いつく。
セルクは何度も皇女に話しかけている。気安い口調で、あるいはおどけて。皇女はまともな返事をしない。これでは、いくらセルクでも様子がおかしいと気づく。
シロバを急がせた。ヤエトには道が見えている。大丈夫、と声をかけてやる。
こんなに自信をもって、手綱を取ったことがあっただろうか。幻視の光景に導かれて進むのは、不思

議な気分だった。シロバが足を踏み外せば危ないことはわかっている。なのに、止まらない。

皇女とセルクは稜線を越えて進む。泉で水を汲んで来いと護衛を追い払い、セルクが不意に叫ぶ。

「競争ですよ！」

弾かれたように駆け出すセルクを、一瞬遅れて皇女が追う。

冬には凍りつくという谷川を越え、渓谷沿いに鳥を進める。北嶺は、木が少ない。灌木がまばらに生えている程度で、姿を隠すのは難しい。護衛をまくために、足場の悪い洞窟まで使ったようだ。ヤエトには入りこめない場所だ。

身じろぎしたシロバの首の後ろを無意識に撫でながら、ヤエトは意識を集中した。

ヤエトには、自分がいるのがどこなのかもわからない。過去を見失えば、そのまま遭難できそうだ。ルーギンが怒るだろうな、と思う。

彼は幻視の中の時間を進めた。

正しい方法を、ヤエトの中にある恩寵の力自体が知っている。力も知識も、ずっと彼の中に眠っていたことを、はじめて自覚した。少しでも制御を失えば暴走することも、わかっている。

やがて、洞窟を出て来たセルクの姿が見えた。つづいて、皇女も。追いかけっこで少し気分が変わったのだろう、皇女の表情は明るかったが、それもセルクが言葉を発するまでのことだった。

「最近、どうなさったんです」

「なんのことだ」

「おかしいでしょう。笑わないし、喜ばないし。皆、困ってますよ」

ヤエトはシロバを進ませた。足だけで鳥を御すことができるようになるとは思いもよらなかったが、今はそれができた。

近寄ると、皇女の表情が鮮明になる。

少女が憔悴していることに気づき、愕然とした。この数日、自分はなにをしていたのか。まともに顔

も見ていなかったのか。
「そなたには関係のないことだ」
「関係ある。姫様は、俺たちの主君だろう！」
「たわけ。そなたらの主君は、真上皇帝陛下にあらせられるのだぞ。わたしではない」
セルクが少女の腕を摑む。
「姫様だから、俺たちはお仕えしてるんだ。遠くの皇帝なんか知るものか」
「わかっておらぬのは、そなたの方だ。わたしが北嶺を治めるのも、もう長くはない。遠からず、あらたな太守が赴任するであろう」
「そんなの認めるものか」
皇女はセルクの腕をふり払った。
「喜べ、次は男の太守が来るだろうからな」
「なんで喜ばなきゃいけないんだ。そんなの――」
「皆、わたしを小娘とあなどっていたくせに」
「そんなの、はじめだけだ。今は違う！」
真顔で断言されて、皇女は眼をほそめた。
「そなたは考えてみたことがあるのか、自分が女として生まれていたらどんな人生を送ったか？　男ではなく、女に生まれたいと思ったことはあるか？」
善意と忠誠を否定されて、セルクは当惑するばかりだ。もちろん、彼には皇女の問いも理解できない。正直に思ったままを答える。
「女に生まれても、俺は俺だ」
だが、その愚直なまでの誠実さは皇女には通じない。少女は傷ついている。胸が痛い。我知らず、ヤエトは着衣の胸元を押さえていた。苦しい。
――この痛みは、皇女が感じたものだ。
「そなたとは、話すだけ無駄だ」
「誰になら話せるんです？」
皇女の顔が歪んだ。
「誰にもだ。話してどうする。どうにもならぬ」
「……女に生まれたことの、なにが悪いんです？」
「北嶺では男女の別がないというのか？　馬鹿な野蛮人め、わかりもせずに口をはさむな」

「野蛮人でも、主君は選びますがね」
「わたしには民を選ぶ権利はないようだがな」
セルクが躊躇を見せる。こちらを向いていないから表情は見えないが、想像はつく。きっと、弱りきったという顔をしているだろう。
「姫様、どうしたんです。おかしいですよ」
「わたしは北嶺を選んではいない。自分で選べなかったから、ここにいるのだ」
辛辣な言葉に、セルクの感情が一気に沸騰する。
「俺たちだって、……だけど、今は違う。皆、姫様を敬ってる。わからないはずが、ないだろう?」
「わかるはずがなかろう! そなたらのような野蛮人の考えることなど、知るものか。同じ女でも、せめて北嶺に生まれなかったことを幸運に思うぞ」
「ああもう結構、そんなに嫌ならさっさと太守を辞めて、この野蛮な土地から逃げだせばいい!」
「そなたの言葉通りにするとも。もうよい、わたしは戻らぬ」
皇女は手綱を鳴らし、鳥は駆け去った。残されたセルクがつぶやく。
「さっぱりわからん……なにを考えてるんだ」
ヤエトは駆け去った皇女の方に意識を伸ばした。遠ざかる皇女の背に、陽光をはじいてかがやく黄金の髪に、必死で追いすがり、その場に留める。
「シロバ、谷のあちら側に渡らせてくれ、おまえなら道がわかるだろう?」
そこからは、体力勝負だった。皇女の姿を追い、暗闇で道を探す。危険な場所も多く、遠回りをするあいだに皇女を見失いそうになることもあった。
不安に追い立てられながら、鳥を進めた。皇女はかなり先行しているのだ。追いつけないかもしれない。自分とシロバの体力が尽きるのも時間の問題だ。
それでも、追いつづけるしかない。
どれほどたった頃か——さすがに疲れたのだろう、肩を落とし、ろくに周囲を見もせずに鳥を進めていた皇女の幻が、ふっと消えた。

思わず息を呑み、あたりを見回す。角灯のたよりない光に照らし出されているのは、断崖だ。

ヤエトはシロバの背を降りた。ふらつく足で、なんとか地面を踏み締める。

落ち着いて、よく視るんだ。もう一回だ。

視界は以前ほど明るくならない。それでも、もう馴染みのものとなった吐き気と目眩を引き連れて、幻視は彼のもとを訪れた。

うなだれていた皇女がはっと顔を上げる。引き絞った手綱は一瞬遅く、間に合わない。鳥も疲れていたのか反応が遅れ、とっさに開いた翼が風をはらむ。

ヤエトは角灯を手に、崖に駆け寄った。

「太守……」

叫んだつもりが、かすれた声しか出ない。ヤエトは自分を励まし、さらに声をあげた。

「太守、ご無事でしたらお返事を。太守？」

おぼろな光の輪の中に、動くものはない。ここにいないなら移動したのだと思いながら、心臓が口から飛び出しそうだ。なぜか笑いだしたくなった。

――無事なはずだ。

ここから先を視ることができないなんて、自分は馬鹿だ。なにが怖いのか。

息が詰まり、ささやくような声しか出ない。

「太守」

そのとき、ヤエトの背後でシロバが啼いた。すると、崖下から応える声があった。《地走り》だ。

「太守、そこにおいでなのですか」

角灯を掲げると、光の輪の向こうから声が返った。今度は、人の声だ。

「ヤエトか？」

割れた石のあいだを、皇女が登ってくる。

少しずつ光の中に入ってくるその姿を、ヤエトはぼんやりと眺めていた。これは今ここにある現実だと実感するまで、少しかかった。

こちらを見上げる皇女は、いつにも増して幼く見えた。崩れた街にとり残された孤児のようだ。

不意に、ヤエトは自分がいるのがどこであるかに気がついた。旧城址だ。

——どれだけ無駄に走り回ったんだ……。

整備された道こそないが、まっすぐ来ればすぐなのだ。土地の民には忌避されて、滅多に話題にものぼらないというだけだ。

——それで、みつからなかったのか。

おそらく、《雪鳩》をあやつるセルクたちも、捜索隊の道案内に立つ北嶺の男たちも、無意識に城址を避けてしまっていたに違いない。

愕然とするヤエトに、皇女が尋ねた。

「なぜ、そなたがここに？」

馬鹿笑いしたいという衝動をなんとか抑えこむと、ヤエトは角灯を掲げて見せた。

「暗くなったので、灯りをお持ちしました。お渡ししたいのですが、上がっておいでになれますか？」

「鳥を置いては行けぬ」

郡太守が姿をくらまして城に戻らない理由としては、かなりまずいだろうと思う。そのために、皆が彼女を捜しまわっているのだ。

叱りとばしたいところを、ぐっと堪えた。

「鳥が、怪我でもしましたか」

「足を石に挟んで捻ったようだ。立ち上がれぬ」

「暗くなってから、こんな場所へおいでになるからです。旧城址を見物なさりたいのでしたら、いつでもご案内しましたのに」

「べつに、……」

反論しかけて、皇女は口をつぐんだ。

「太守のわがままで鳥が傷ついたのです」

「……わかっている」

「皆、太守をお探しして北嶺中を駆け回っております。誰かがこうして穴に落ちたり、怪我をしたりするかもしれません。早くお戻りください」

皇女は口を引き結んだ。

これは難しい、とヤエトは思った。容易には帰ってくれそうもない。

「鳥の面倒は、わたしがみます。太守はわたしが乗って来た鳥をお使いください」
「無理だ。そなたでは鳥が安心せぬ。朝まで、わたしがついている」
「しかし、太守――」
言葉が途切れた。皇女を発見したらどうするかまでは考えていなかったことに、今さら気がついた。
ひとりで城へ戻らせて、大丈夫なのか？
また、姿をくらまされるだけではないのか。城へ向かう途上、暗殺者に出会ったら？
危険過ぎる。
皇女を置いて自分だけ城に戻るという案も、浮かぶと同時に捨てた。せっかくみつけた皇女から目を離すなど、一瞬たりとできない。
――次善だな。
最善は、皇女がヤエトと一緒に城へ戻ってくれることだ。だが、傷ついた鳥を置いて帰るよう、説得できるとは思えない。といって、力ずくでというわけにもいかない。どう考えても彼が負ける。
第一、問題はなにもかたづいていないのだ。このままでは、一件が起きる前と状況は同じだ。
しかたない。持ち歩いていた帳面を破って伝言を書き付け、ヤエトはそれをシロバの手綱に結んだ。
「厩舎へ戻ってくれないか。疲れただろうが、戻れば水も食べ物もある」
低い声で話しかけると、シロバはヤエトをじっと見た。心を繋ぐのが無理でも、せめて言葉が通じたら、と思う。シロバなら信頼できるのに、複雑な指示ができないのが残念だ。
「シロバ、厩舎だ」
手綱を引いてシロバの頭を城の方へ向けると、ヤエト自身は鳥の背後へ移動した。シロバはくるりと頭を回し、ヤエトを凝視した。
ヤエトは静かに、しかし断固としてくり返した。
「暗いのにすまないな。行ってくれ」
声もあげず、巨鳥は静かに山道を歩きはじめた。

遠ざかる鳥の背を眺め、ほんとうにこれでよかったのかと考えていると、崖の下から声がした。
「ヤエト？」
「はい。今、参ります」
「……そなた、帰ったのではないのか？」
「太守をおひとりにはできません。どうやら、崖の下までお届けせねばならないようですし」
ヤエトは角灯を掲げて見せると、さて、と崖を見下ろした。少しずつ這いずり降りれば、なんとかなるだろう……たぶん。
「待て、危険だ」
慌てた声を聞き流して、ヤエトは最初の足がかりに移動した。
「暫くお待ちください、できればお静かに。大声をあげるのは、わたしが落下してからのお楽しみに」
「それは脅しだぞ！」
皇女は叫んだ口を押さえた。案外、素直だ。
下まで降りたときには、ヤエトは手も足もがくがくの状態だった。階段の上り下りで多少は足腰が鍛えられたと思っていたが、気のせいだったようだ。
安堵の息を吐いたとたん、袖が重くなった。
「たわけが！　上にいれば危険はなかろう」
もちろん、皇女のしわざだ。ヤエトは苦笑して、角灯をさし出した。
「少し休ませていただけますか。それから、鳥のところへご一緒します」
皇女は角灯を受け取り、ヤエトを見上げた。
「脈でもとるつもりか？」
「脈？　ああ、鳥のですか。いえ、暖をとらせてもらうのです。冷えこむでしょうから」
俯いて、皇女はつぶやいた。
「そなたが落ちたらと思うと、怖かった」
「わたしもです」
皇女は少しむっとしたようにヤエトを横目で見た。
「そなたの慌てた顔というのを見てみたいものだ」
「今、ご覧になっておいでですよ」

「いつもと変わらぬぞ」
皇女の行方不明を知ってから一瞬たりと落ち着いた覚えなどないのだが、誰も信じてくれない。
ヤエトはもたれていた岩から背を離した。
「もう歩けるのか？」
「ここで立っていても、あまり休まりませんし」
皇女は少し迷うような素振りを見せたが、無言で歩きはじめた。
衝動的にしたことだが、崖下に降りたのは正解だったかもしれない。傷付いた鳥を置き去りにできないように、ふらふらになった副官を放置することも、皇女の性格なら難しいはずだ。
「太守、あまり早く行かれると、追いつけません」
思った通り、皇女はちゃんと戻って来たばかりか、彼の腕をとって支えながら、いいわけをした。
「わたしのせいで怪我をしたとでもいわれたら、かなわぬ。しっかり歩け」
「気をつけます」
「……といいながら、転びかけているぞ」
「申しわけありません。膝に力が入らないもので」
皇女は嘆息した。
「わたしにもう少し背があれば、そなたを背負うのだがな」
「いや、それは畏れ多いとかいう範疇を超えますので、できれば遠慮させていただきたいのですが」
「案ずるな、どうせ無理だ。行くぞ」

5

鳥は羽毛をふくらませて座りこんでいた。ときどき、低く啼く。傷が痛むのだろう。
崖から落ちた後、暴れながら先へ進み、そこで足を岩のあいだに挟んだようだと皇女は説明した。冷静な口調だが、表情はつらそうだ。多少、痛みを共有しているのかもしれない——鳥と心が繋がる経験のないヤエトには、想像するしかないが。

「太守には、お怪我はないのですか」
「ない」
言葉に違わず、ヤエトよりよほど元気そうだ。
旧城址に平坦な部分はほとんどない。場所によっては、地の底までつづくかと思う亀裂が走っている。皇女がそういうところに落ちたのでなくてよかった、と今頃になって冷や汗が出てきた。
あろうことか、ヤエトは角灯ひとつをぶら提げただけで来てしまったのだが、皇女は鞍袋に食料を入れ、たっぷりと水の入った水筒も持っていた。食べ物は遠慮したが、水はありがたく分けてもらった。
――役に立たない家臣だな。
夕方からふらふらになるまでうろついて、ようやくできたことといえば、皇女を発見しただけだ。
鳥の怪我を診てやれるわけでもなく、なんのために自分はここにいるのか。
ヤエトはため息をつくと、動かない鳥を背もたれにして座りこんだ。足先は冷えてきたが、鳥のおかげで背中はあたたかい。
少しして、皇女がつぶやいた。
「叱らぬのだな」
「そのつもりでしたが、疲れました」
「そんな理由か」
「セルクが自分を責めていました。すぐに太守の後を追わなかったせいで、見失ったと」
「あの者が悪いわけではない」
「本人にそうおっしゃってください」
灯火に照らされた皇女の横顔は、古びた絵画のようだ。すぐそこにいるのに、手が届かない。失われた時の彼方にたゆたう、なつかしい情景。長い睫毛が頬に影を落とし、頬を覆う巻き毛は琥珀のかがやきを帯びて、皇女の胸や背に広がっている。
「……もっとも、セルクは少し叱っておくべきだと思いますが。太守に向かって、辞めろなど。ちょっと首を刎ねた方がいいかもしれません」
「そういうことを淡々と口にするな。ちょっと、と

はなんだ。首は刎ねたらそれでしまいだぞ」
「申しわけありません」
皇女はむっとしたようにヤエトを見た。
「そなたのその台詞が好かん。反省の響きがない。口先だけだ。今だけではないぞ、いつもだ。悪いと思っておらぬだろう」
少し考えてから、答えた。
「誤解です」
「なにが誤解か」
「先ほどから、ずっと誤解なさっておいでです。太守のお姿が消えたと知らされてから、一瞬たりと心安んじたりはしていません。こんなことになるのを防げなかった自分に対して怒っていますし……至らぬ副官で申しわけないと思っています。ここ何年かで、こんなに動揺したことはありません」
「そんな顔で、なにをいうか」
「お気に召さないようですが、これが、わたしが狼狽しているときの顔ですよ。珍しいものをご覧になれてよかったですね」
「……だから、いつもと変わらぬが？」
「表情にあらわれづらいのでしょう」
皇女はまじまじとヤエトの顔を見、やがて諦めた。
「つまらぬ」
「申しわけありません」
「もうよい、そなたが動じぬのはわかった」
機嫌を損じた声に、思わず嘆息が漏れた。
「……ご勘弁ください、太守。動揺していなかったら、後先考えずに城を出たりしません。おかげで、太守のご無事を城に報せるにも手段に窮する始末です。誰かひとりでも同行させればとか、せめて食べ物や飲み物を持参すればとか、綱とか毛布とか……すべて後知恵で、事態に追いついていません」
今もそうだ。これからどうすればいいのか、実はまったくわからない。
皇女が抱えているらしき悩みを吐き出させて、解決は無理でもせめて軽減させねばとは思うのだが、

その方法はさっぱりだ。セルクと大差ない。
ヤエトは光の輪が届かない深い闇の奥を見た。衝動に身を委ねてここにいることの是非が、自分でもよくわからなくなっている。
「わたしは愚かです。太守のお姿を見失った不安を解消するためだけに、ここまで来てしまいました。この先どうすればよいかも、わからずに」
「……さぞ不安だったろうな、わたしが戻らねば首が飛ぶとあっては」
「そういえば、それも考えつきませんでした」
笑いながら答えると、皇女は不審そうに尋ねた。
「笑うようなことか？」
「おかしいですよ。太守がご無事にお戻りにならなければ命がないだろうという当然の予測にすら、辿り着いていなかったのですから。自分には、そこまでゆとりがなかったのかと」
皇女は消え入りそうな声でささやいた。
「……すまぬ」
「臣を哀れに思し召すなら、お教えください。皇妹殿下から、なにかお言葉があったのですか。北嶺の太守でいるのも、そう長くはないなどと……ますます動揺させられました」
皇女と、視線が合った。不安げな顔だ、と思う。この少女にも、わからないのだろう。なにを、どうすればよいのか。
「セルクに聞いたのか」
「いいえ、太守のお口から」
「そなたには話した覚えがない」
「話してくだされればよかったと思います。でも、そうはなさらなかった。だから、勝手に聞きました」
からかわれていると思ったのか、不機嫌な顔をして、それから不意に思いついたように尋ねた。
「まさか、後をついて来たとか？」
「城を出たのは夕刻です。……子どものころ、母に叱られました。半日前の過去を視るなと」
皇女は、はっとして顔を上げた。

「恩寵の力か」
「誰もおまえの視線から逃れられぬのでは、心安んじることはできぬ、と。人には秘密が必要で、それを無慈悲に暴くのは心ないことだと諭されました」
皇女の表情がゆっくりと変化した。おどろきと、理解。そして好奇心。怯えでなく好奇心が先に立つところが、いかにもこの少女らしい。
「そなたの恩寵の力は、そんな風にも使えるのか」
「そうです。わたしにはわかりました、菓子を盗み食いしたのが兄弟の内の誰かということが――わたしの力は、覗き見や盗み聞きの手段なのです」
自制できなければ大変なことになる。厳しく禁じてくれた母には、感謝せねばならないと思う。
「神には秘密など必要ありません。真実があればよい。だから、全智の神が与えたもう恩寵は、すべて真実に近づくための手段に過ぎない」
その真実が誰かを傷つけるとしても、神は顧慮しないだろう。
ヤエトが明かした事実について少し考えてから、皇女は首をかしげた。
「……しかし、それなら叔母上がわたしにおっしゃったことも、いくらでも探り出せるだろう？」
「わたしの力は、場所に縛られるのです。その場に行かねば視えません。それに……ご存じでしょう、わたしは恩寵の力を使うと消耗するのです」
急に皇女は身を引き、あらためてヤエトを頭から足の先まで眺めた。
「大丈夫なのか？」
「体調のことでしたら、いつも通りです。遠い過去を視るよりは、負担が少ないようです」
「そうか。考えてみたこともなかったな……それは凄いことではないのか？　遠い昔の話だけだと、思いこんでいたが……」
少しずつ、言葉を探しながらという風だ。
「意図して使ったのは、二十数年ぶりでしょうか」
「よく成功したな」

「自分でもおどろいています」
「だが、無茶はするな。そなたが死ぬと困る」
「わたしが死んでも、誰も困りません。副官については、あらたな尚書官が後任をつとめるだけです」
「馬鹿をいうな。わたしは困る」
「そう思われるのであれば、もう、こういうことはないようにお願いします。わたしも、恩寵の力は使いたくありませんし……ですから、お教え願えませんか。なぜ、このようなことに？」
皇女は黙ってしまった。自分の膝を眺めている。
ヤエトは待った。
どれくらいたっただろうか、不意に皇女が口を開いた。
「わたしは、男に生まれたかったのだ」
それは見ていればわかる、と口にするべきか。迷った末、ヤエトは黙っていることにした。
ルーギンと、そんな話をした記憶がある。皇女は男に生まれたかったと思っているに違いないと。
「皇家に生まれた女は、帝国の利益になる相手と妻合せるためにだけ、育てられるのだ。竜種の血を引いていさえすればよい。見目がよいかどうかすら、二の次だ。子どもが産めれば上出来、頭は単純な方がよい。皇帝の命令に従う忠義があれば、なおよいが、それだって大して期待はされぬ。わかるか？」
皇女は疑わしいという眼差しでヤエトを見たが、彼は大真面目に返した。
「わかりますよ。姉が、そんなことをいっていましたから」
「……そなたの姉？」
「わたしの家は、それなりに名家だったのです。古王国の血胤を重んじる人々にとっては、価値のある『血』が流れる『胎』だった、と申せばよろしいですか？　無論、皇家ほどの重みはありませんが」
皇女の顔が少し歪んだ。
「そうか……。わたしは少しもわかっていないな」
「なにをです？」

「叔母上がな……叔母上とて、陛下の有利になるようご結婚なされた。皆、そうして来た。不幸なのは自分ばかりと思うな、自分だけが特別と思うなと」

皇妹は、兄の片腕とまでいわれた人物に嫁いだ。陰働きの家柄といわれていた《黒狼公》の社会的な地位を底上げするために、その縁組みが大いに力になったことは確かだ。

同様に、皇女も皇家に役立つ、家格が劣って見くびられている者のもとへ嫁するのかもしれない。あるいは、しっかり縁を結んで抑止しておきたい実力者との婚姻が期待されているのかもしれない。叛逆者を宥めるため、あらたな同盟の証文に添えて――可能性はいくらでもある。

「心に決めた男性がおいでなのですか？」

皇女はきょとんとした。

「なんのことだ」

「つまり、……いや、すみません。わかりました」

これだからルーギンに子ども扱いされるのだ。

女として、好ましい相手がいる……というなら話は単純だったのだが、とヤエトは思う。一時的にでも、想いをかなえさせるという手段がとれる。

だが、男に生まれたかったといわれても困る。

性別は変えられない。皇女は周囲に認められたいのだ。かわいい末娘としてだけでなく、政略結婚の駒としてだけでなく。皇女自身の価値を。

――難しいな。

本人がみつけて、納得するしかない。

「このまま、お姿をくらませてしまわれるおつもりでしたか？」

皇女は肩をすくめて空を見上げた。雲が多いらしく、星は見えない。闇夜だ。

「……わたしは弱いな。そこまでは、思いきれぬ。もう、あまり時はないのに。年が明ければ十五だし、結局、叔母上にも知られてしまった。ナオが、あんなに苦労していたのに」

「知られた？　なにをです」

「月のものが来たことだ」
どう答えていいかわからず、ヤエトは曖昧な声を漏らした。
「ああ……なるほど」
ヤエトの方を見て、皇女は意地悪く笑った。
「少しは動じたような顔をしたな。そなたも気づいているのではないかと思っていたぞ。違ったのか」
「いえ、まったく……」
「脈をとるとか、顔色が悪いとか。肝が冷えた」
なるほど、とヤエトは思った。そうだったのか……あのときか。
「それで、ナオ殿がおひとりでお世話を」
「そういうことだ。わたしも、なんといったかな……そうだ、価値のある『血』が流れる『胎』をそなえていることが、明確になったわけだ」
「……もう少し、言葉をお選びください」
「そなたがいったのだぞ」
「軽率でした」
皇女は笑った。胸が痛くなるような笑みだった。
「事実だ。飾っても、しかたがない」
「お逃げになりたいお気もちは、わかります。ご決意なされたのでしたら……」
このまま皇女が姿を隠しても、積極的に追わないとは約束できるが、彼にできるのはその程度だ。
一瞬、皇女は表情を強張らせた。だが、すぐに眼を伏せて、つぶやいた。
「ずっと皇女として生きてきたのだ。それ以外の生きかたは知らぬ」
「北嶺では、太守として生きておいでではありませんか。どんな境遇にも馴染むものです」
ヤエトの言葉に、皇女はまた小さく笑った。
「そういえば、そなたはわたしを姫と呼ばぬな」
「竜種の姫君をお預かりしていると思うと、身も竦みますので。お気にさわりましたか？」
「いや。ありがたいと思っている」
これには、ヤエトの方がおどろかされた。

皇女は彼を見て、かるく肩をすくめた。
「皇女だからと特別扱いを期待してはならぬと肝が座ったのは、そなたのおかげ。……やはり、逃げるわけにはいかぬ。太守としても」
「そういう逃げかただけではないですよ」
皇女は不審げに眼をほそめた。
「どういう意味だ」
「いささか不敬な話ではありますが……よろしいでしょうか」
「よい。許す」
こういうときの皇女は、迷いがない。
――逆に、こちらに迷いがあるときは、どうすればいいのかな。
困るな、とヤエトは思うが、もう後戻りができない。皇女に相対するときは、いつもこんな感じだ。
「沙漠の西で旧帝国を治めていたのは、真上陛下の兄上におわします」
「それくらいは知っておる」
「ご兄弟のみならず係累のすべて、皇家の女性の嫁ぎ先まで、ご自分を害して帝位を窺うものと決めつけ、端から誅戮なさいました。ご存じですか？」
「大雑把なところは、聞いたことがある」
「真上陛下は、その虐殺からお逃げになったのです。沙漠越えという手段で」
執拗に弟を亡き者にしようとする兄皇帝の手を逃れるために、彼は壮烈な逃避行をやってのけた。帝国の威光になびかぬ隊商都市群を討伐する――たしかに討伐はした。だが、それは兄が追ってくる経路を遮断するためのものだった。
陥落した都市の水源には毒を流し、隊商路の中継点としての機能を失わせてから、次に進んだ。
脇目もふらぬ殺戮と強奪。退路のない地獄――それが沙漠越えだ。皇帝の強靭な意志と統率力あればこその成功である。
西の皇帝は狂っていた。帝位への執着と妄念を血族に投影し、その暗い影を消すために殺した。

皇帝は——当時の皇弟は、姿をくらますだけでは済まないことを、身に染みて知っていた。

命ある限り、追手は来る。捕らえられれば冤罪を着せられ、妻子もろとも処刑されるだけだ。

だから、全力で逃げた。

武勇伝やら、建国にまつわる華々しい逸話やらをとり除けてみれば、ことの本質は逃走だ。皇弟という高貴な立場にあった人物が、持てる限りの権力と財力、知力、人脈をすべて懸けたというだけで。

「沙漠を渡ってでも……とは申しませんが、知恵を絞ればなんらかの方法はみつかるはず。帝国の統率力は、未だ全土に満ちているとは申せません。土地を選び時宜を得れば、地盤を持って独立することもおできになりましょう」

皇女は眉をひそめて考えていたが、やがて大きく息を吐いた。

「だが、小領主となってどうする。帝国には抗しがたい。結局、自由など得られぬのではないか」

「皇家におられるのと変わりませんね」

素直に認めて、ヤエトは皇女の不機嫌な視線を受け止めた。

「そなたは、わたしにどうさせたいのだ」

「太守がなさりたいように。わたしは無責任に、思いつきをお話ししているだけです」

「気楽でよいな」

「はい」

「……少しは悪びれたらどうだ」

「申しわけありません」

くちびるを尖らせて、皇女はヤエトを睨んだ。それから、不意に破顔した。

「そなたは憎めぬ」

「ありがたいお言葉です」

「しかし、面倒なものだな。帝国を支配する家系に生まれても不自由、そこを飛び出して小領主となっても不自由。どこにあるのだ、自由というものは」

「さあ……どこにもないのではありませんか」

「また無責任なことを申すな」
「あそこにある、ここにあると申し上げれば嘘になります。強いて申さば、心の中に」
「心の中では意味がない」
　ヤエトは微笑した。
「では、どこにあればよいと？　考え、希い、夢を描くことにこそ、何者にも束縛し得ない自由が宿るもの。それだけは、誰にも奪えません。奪わせてもなりません。もっとも尊いものです」
「だが、わたしは現実に自由になりたいのだ」
「でしたら、努力なさることです」
　皇女は肩を落とした。
「陛下のように、か」
「ああまで苛烈でなくてもよいと思いますが……まあ、そういうことです」
「わたしは逃げたい。間違いなく、それが本心だ。情けない話だがな」
「情けなくなどありません」
「どこか遠くへ、逃げられぬかな。誰もわたしを知らないような場所へ」
「西の皇帝から姿をくらますことに成功なさった竜種は、真上陛下おひとり――いえ、正確には皇子様がたと皇妹殿下もですが、ほかは残らず捕縛され、処刑されました。お血筋が尊いほど、難しい。いつ玉座を窺って挙兵するかわからぬものを、放置しておけぬのが支配者というもの。そのお血筋を利用しようとする輩からも、追われることになりましょう。みじめに逃げ落ちねばならぬ運命をくつがえせ、みずから玉座を獲得せよと、くり返し、耳もとでささやかれつづけるのです」
　皇女は微笑した。
「だから、父上は本気でお逃げになったのだな。その上、逃げた先で新たな国を興さないわけにはいかなかった――そうなのだな？」
「おそらくは、その通りかと存じます」
　皇帝とて完全に自由なわけではない。命の危険か

ら逃れ得ただけで、彼もまた人の世という巨大な網に囚われた存在だ。

「父上には、帝国にではなく父上ご自身に従う部下があった。わたしは、そうではない。違うか？」

ヤエトはうなずき、同時に嫌でも思いだした。

――そなたが仕えるのはわたしなのか、それとも陛下なのか。

はじめから、皇女は本質を突いていたのだ。ヤエトが気づかなかっただけで。

「力が欲しいな、ヤエト」

「セルクにお話しになってみては？　自分たちが皇女殿下をお守りするんだと、大騒ぎになりますよ」

「……そうやって、そなたはいつも、矛先を他者に向けるのだ」

あっさり見破られては、苦笑するしかなかった。

「いつ死ぬかわからない半病人に将来をお預けになるのは、感心しません」

皇女はヤエトをみつめた。

「死ぬなと命じたはずだ」

「申し上げたはずです、太守のようなお立場のかたは、よくよくお考えになってから命令の言葉を発された方がよろしいでしょう、と」

それでも不満げにヤエトを睨んでいた皇女は、やがて視線をはずすと、欠伸混じりに尋ねた。

「北嶺を地盤にして、勝ち目はあるか」

「そうですね……太守がおいでになるまで、北嶺は放置区と呼ばれていたくらいで、帝国にとっては旨味のない土地です。野望の糧にされる恐れは低くても、対等に渡り合うのは難しい。帝国や皇帝陛下の面子を潰さないように気をつけて、けっして相手を本気にさせなければ、負けはしませんが」

「まあ、勝つ必要はないのだからな。しかし、せめて鳥が飛べればな。ずいぶん事情は違っただろう」

――飛べなくても、いろいろあるが。

皇家の恩寵に近い力が北嶺人にもあるのが事実で、ヤエトの妄想に終わらないなら、由々しき問題だ。

北嶺の利用価値は、再評価されるかもしれない――望むと望まざるとにかかわらず。

「《化鳥の騎士団》を再興なさいますか？」

「傭兵か。それも悪くはない」

「悪くないとは申せません。親子兄弟、親友同士が敵味方に分かれて戦場で出会うこともあるのです」

「どうせ実現できぬのだ、諫めるな」

鬱陶しげに眼をほそめた皇女に、ヤエトは敢えて問いをかさねた。

「太守、かつての北嶺が傭兵として働いた理由をお考えになったことはおありですか？」

「いや……なぜだ？」

「兵しか、輸出できるものがなかったからです」

鳥は北嶺をはなれて生きられない。土地は痩せており、民を養うにたる農作物の産出も困難だ。食料を買い入れるには、なにかを売るしかない。

かれらに売ることができたのは、化鳥の機動力を最大限に利用した傭兵騎士団だけだったのだ。

皇女はまた、欠伸をした。

「そうか。……少し、疲れた」

「お休みになってください」

「さっさと眠って静かにしろ、といわんばかりだ」

「身も蓋もない表現ですと、そうなりますね」

皇女は笑った。今夜はじめて見せる、痛々しさを感じさせない笑顔だった。

「おとなしく寝てやるから、昔話でもせよ」

「昔話でしたら、得意分野です」

「だから命じている。こういう命令なら、そなたも気楽に果たせるであろう。手を握ってもよいか？」

皇女の指先が、ヤエトの手にふれた。

だが、そこで止まってしまう。

ヤエトの方から握るのもためらわれ、ふたりの手は砕けた古い石材の上に、静かに並んだ。

「……わたしが暗いのが怖いのはな、寝入りばなに嫌な夢をみることが多いからだ」

「どのような夢でしょう」

皇女はぼんやりとした声でつぶやいた。
「遠くから名を呼ばれているような……誰かがわたしを檻に入れようとしてな。眠りに落ちる隙をついて捕らえ、暗く、深い場所へ繋ぎ留めようと」
——気になるな。
ヤエト自身はあまり信じていないが、南方の呪師たちは名前の呪術を扱うというではないか。皇女の名を知る者が呪師を使っているなら……。
——皇家の誰かのしわざか。
竜種の名は秘されているのだから。
「ヤエト」
「はい」
「わたしの名は、ミムウェだ」
「は……」
返答が途中で凍りついた。
眠たげに、皇女は睫毛の下から彼を見た。
「美しいお名前ですねとか、いえぬのか」
「それは……もちろん。しかし、いや……その、そう気軽にお教えになるのはどうかと」
「誰が気軽に教えるか。自分で教えるのは、そなたがはじめてだ。光栄です、とはいえぬのか？」
「畏れ多いことです。自分などが存じ上げていてもかまわないとは思えません。つまり……あの、忘れさせていただくわけには参りませんか」
「忘れられるのか？」
無理だ。
黙っていると、皇女は微笑んだ。
「忘れられてしまうのは、哀しいな。交換したものが少し軽かったかなと思って、追加したのに」
「交換、ですか」
「わたしの怖いものとそなたの怖いもの、重さが違ったからな。最近、わかるようになったのだ。自由を失うことの方がずっと怖い——暗闇よりも」
その気もちは、よくわかった。
「ですが、お名前を明かされるなど」
「うるさいな。一回、呼んでみよ」



「太守」
「命令だ、呼べ」
しかたなく、ヤエトは教えられた名を口にした。
「ミムウェ様」
「はい」
楽しげに答える皇女とは反対に、ヤエトの表情は沈んだ。今度は、こちらが重過ぎるものを背負わされた気分だ。
「返事をしたのはな、嘘を教えたのではない証拠だ。真実の名でもないのに答えれば、それが次の名になってしまうからな」
「そういうものとは存じませんでした」
「わたしにも、そなたに教えることがあるとは、おどろいたであろう？」
「お教えにならない方が、賢明でした」
皇女はうなずいた。
「そなたは正しいのだろう。だがな、賢者ばかりでは世は動かぬ。わたしのように愚かな小娘がいてこそ、均衡がとれるというものではないか」
「ですが――」
「わたしがそなたを信じるように、そなたにも信じられるものがあればよいと思う。これは担保だ、ヤエト。そなたが少しでも安心できるように」
返す言葉がなかった。
――なにをやっているんだ、自分は。
慰めるつもりで、慰められているではないか。それも半分以下の歳の少女に。
「……感謝します。太守にも、安心のお裾分けを」
「気前がよいではないか」
「と申しましても、今宵だけですが。誰の声も届かないほどの昔へお連れしましょう」
ヤエトは意を決し、皇女の手を握った。意識を集中すると、わずか半日のあいだに親しいものになった感覚が、彼を襲った。すべてが遠ざかり、時間の波の彼方へ運ばれる。
「そなたの手は熱いな」

記憶の彼方から、声が誘った。

――視える限りのものを、ご覧にいれましょう。

気がつくと、あたりからは瓦礫が消えていた。

荒々しくはあっても自然な岩肌を見せる谷間に、深い亀裂が走っている。その底から、ひとりの男が姿をあらわした。男は手に剣を抱えていた。

――契約の剣だ。

「はるかな昔、当地の王は神と契約を結びました……その契約を保証するものは、神剣でした」

男の髪が風になびく。殷々と鳴るのは、神剣だ。鞘の中で、剣が歌っている。

「契約の剣は、凄まじい魔力を秘めておりました」

見覚えがある、と思う間もなく場面が飛んだ。あたりには鳥の声が満ちている。

ヤエトの声は低いが、かき消されはしない。過去と現在は、けっして交わることはない。そのように、さだめられているからだ。

「その契約により、北嶺の民は巨鳥を手に入れて天空の覇者となったのです。この狭い北嶺を飛び出し、はるかな草原へ、大河が海へと姿を変える河口へ、あるいは熱暑の沙漠へ、望むままに飛んだのです」

整然と城壁に並んでいた黒い鳥が、舞い上がる。陽光を受けて、黒い翼が玉虫色にかがやいていた。

人が地上をどのように区切ろうと、その境界は空にまでは及ばなかった。かれらはすべてを飛び越えた――巨鳥の翼は、自由と解放の証だった。

皇女がつぶやいた。

「美しいな……」

ええ、と答える声は言葉にならず、吐息に紛れて夜にとけた。

幻視の力が彼にもたらす眺めは、つねに美しい。どんなに呪わしい光景であろうと、関係ない。彼を現世から連れ去るその力は、美しいという以外に形容する言葉を思いつけない種類のものなのだ。

見下ろすと、皇女はすでに眠っていた。

繋いだ手をそっとはずし、ヤエトは自分の上着を

脱いで皇女にかけると、ささやいた。
「失われたものは、いつも美しいのです」
そして、この世のありとあらゆるものはすべて、いつか失われる運命なのだ。
皇女が寝入ってからも彼は昔日（せきじつ）の北嶺を、崩れ落ちる以前の城を、眺めつづけていた。

（下巻に続く）

あとがき

わたしの夢は、霞を食べても生きていける仙人のような存在になり、読みたい本がいっぱい詰まった巨大書庫で暮らすことです。

無理ですか。無理ですね。

もう少し現実的に表現すれば、隠居、でしょうか。

隠居……おお、なんと甘美な響き！

いっそストレートに自分の願望を反映させてはどうかと思い、本書の主人公にも隠居志向を植え付けてみました。

派閥争いに巻きこまれて辺境に左遷され、赴任先でまず考えることが、夢の隠居生活の実現への第一歩！　……と、かなり駄目な感じです。

残念なことに、彼は皇女殿下の副官にとりたてられてしまいます。根はまじめなので、

つい全力で働いては自分の首を絞め、隠居への道は遠く、険しくなるばかり。はたして彼の夢はかなうのか!?　楽隠居を巡る冒険、以下次号！

説明していたら、なんだか主人公が気の毒になって参りましたが……下巻の原稿はもう書き上がっておりまして、上巻の翌月刊行の予定です。もちろん下巻でも、主人公は正統派隠居を目指して頑張ります。どうか応援してやってください。

そんな隠居願望満々の怠慢作家から原稿をもぎとった、幻冬舎コミックスの内田様の粘り強さには頭が下がります。おかげさまで、なんとか完成に漕ぎ着けました。

挿絵を引き受けてくださったとき様にも、この場を借りてお礼を申し上げます。駄目な主人公がかっこよく見えたとしたら、イラストの力です。すでに作者の目がくらまされて「実はヤエトってかっこいいんじゃないの」と勘違いしかけています。

最後になりましたが、この本を読んでくださったあなたに、感謝の想いが届きますように——この物語がお心にかなうことを、祈りつつ。

二〇〇八年十月　妹尾ゆふ子

幻狼ファンタジアノベルス

Information

この本を読んでのご意見・ご感想を
下記の住所までお寄せ下さい。

〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷4-9-7
株式会社 幻冬舎コミックス
幻狼ファンタジアノベルス編集部

幻GENROU狼
FANTASIA
NOVELS

Colophon

翼の帰る処[ところ]——上

THE HOME OF WINGS——First volume

二〇〇八年十月三十一日——第一刷発行

著者——妹尾ゆふ子 せのおゆふこ

発行人——伊藤嘉彦

発行元——株式会社 幻冬舎コミックス
〒一五一—〇〇五一
東京都渋谷区千駄ヶ谷 四—九—七
電話 〇三—五四一一—六四三四(編集)

発売元——株式会社 幻冬舎
〒一五一—〇〇五一
東京都渋谷区千駄ヶ谷 四—九—七
電話 〇三—五四一一—六二二二(営業)
振替 〇〇一二〇—八—七六七六四三

コンセプトデザイン——コードデザインスタジオ

印刷・製本所——共同印刷株式会社

検印廃止

万一、落丁乱丁のある場合は
送料当社負担でお取替致します。
幻冬舎宛にお送り下さい。
本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、
法律で認められた場合を除き、
著作権の侵害となります。

定価はカバーに表示してあります。

©SENOWO YUFUKO, GENTOSHA COMICS 2008
ISBN978-4-344-81466-0 C0293
Printed in Japan

本作品はフィクションです。実在の人物・団体・事件などには関係ありません。

幻冬舎コミックスホームページ——http://www.gentosha-comics.net

9784344814660

1920293009001

ISBN978-4-344-81466-0

C0293 ¥900E

Published by
GENTOSHA COMICS

定価：本体900円＋税
発行：幻冬舎コミックス
発売：幻冬舎

翼の帰る処——上

THE HOME OF THE WINGS——First volume

「過去を視る」力を持つ帝国の史官・ヤエト。病弱な彼は、赴任先の北嶺で地味な隠居生活を送ることを夢見ていた。しかし、政治に疎い北嶺の民に悩まされ、さらには北嶺に太守として来た勝ち気な皇女に振り回され休まる間もない。だが、北嶺を知るにつれ、ヤエトはこの地に帝国の秘密が眠ることに気づいていく…。歴史の光陰が織りなす壮大なるファンタジーロマンの扉がいま開かれる——。